茨城県教育財団文化財調査報告第21集

常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書6

木葉下遺跡Ⅰ(窯跡)

(財)茨城県教育財団調査課	
受理年月日	
受理番号	
寄贈機関	

昭和58年3月

財団法人　茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第21集

常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書6

木葉下（あぼっけ）遺跡Ⅰ（窯跡）

財団法人　茨 城 県 教 育 財 団

序

水戸市木葉下・谷津両町周辺の丘陵地帯は，古代窯業遺跡の所在地として著名であり，周辺へ須恵器・瓦を供給した遺跡として注目を集めております。県内各地で発掘調査が行われ，当地方の古代の姿が明らかにされつつあることを思えば，この古代窯業遺跡の究明は真に急務であると言っても過言ではないと言えましょう。

茨城県教育財団は，日本道路公団の委託を受け，現在建設が進められている常磐自動車道用地及び関連開発用地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。今日までに調査を終了しました遺跡は26か所を数え，その結果の一部についてはすでに報告書の刊行がなされております。

昭和56年度には，水戸市木葉下・谷津両町にまたがる高取山からの常磐自動車道建設に係る土取り工事に伴い，用地内に所在する木葉下遺跡の発掘調査を実施いたしました。その調査の概要は，概報として刊行いたしているところですが，このたび本報告書を刊行するはこびとなりました。

木葉下遺跡が古代史上に占める位置を考えますと，本書が当地方の古代史の解明と埋蔵文化財に対する一層の理解と認識を深めるに資するところ極めて大であると言わなければなりません。つきましては，本書がより多くの方々に御活用いただければ幸いに存じます。

なお，調査・整理にあたりましては，委託者の日本道路公団から多大の御協力をいただき，心から感謝申し上げます。また，茨城県教育委員会・水戸市教育委員会をはじめ関係各機関及び関係各位からいただきました御指導，御協力に対し，深甚なる謝意を表する次第であります。

昭和58年３月

財団法人　茨城県教育財団
理事長　大　金　新　一

例　　言

1　本書は，財団法人茨城県教育財団が，日本道路公団との委託契約に基づいて，昭和56年度に発掘調査を実施した茨城県水戸市に所在する木葉下遺跡の発掘調査報告書である。

2　木葉下遺跡の発掘に関する当教育財団の組織は，次のとおりである。

理事長		竹内　藤男 大金　新一	（～昭和56年11月30日） （昭和56年12月１日～）
副理事長		古橋　靖	
常務理事		川野辺四郎 綿引　一夫	（～昭和57年３月31日） （昭和57年４月１日～）
事務局長		小林　義久	
調査課長		寺内　寛	
企画管理班	班長	圷　秀雄	（班長，～昭和57年５月31日）
	〃	今村　信夫	（班長，昭和57年６月１日～）
	主事	鈴木　三郎	
	〃	海老沢一夫	
	〃	綿引　良人	
	主任調査員	加藤　雅美	（昭和56年度調査）
	調査員	根本　康弘	（昭和56年度調査，同57年度整理・執筆）

3　本調査に係る概要については，昭和56年度に概報が発行されているが，本書を以って正式な報告とする。

4　土層解説および土器の色調については，「新版標準土色帖」（農林省農林水産技術会議事務局監修，財団法人日本色彩研究所色標監修）を用い，一部記号化して表した。

5　発掘調査に際し，茨城県教育委員会・日本道路公団等関係機関の御指導・御協力を賜わった。記して謝意を表したい。また，国士館大学教授大川清氏並びに茨城県水戸教育事務所埋蔵文化財指導員伊東重敏氏には，現地で親しく御指導・御助言を賜わった。併せて謝意を表する次第である。

6　出土遺物の胎土分析については，奈良教育大学教授三辻利一氏に依頼し，分析結果の報告をいただいた。

目　　次

序

例言

目次

第1章　調査の経緯 …… 1

第1節　調査に至る経過 …… 1

第2節　調査経過 …… 3

第2章　位置と環境 …… 4

第1節　地理的環境 …… 4

第2節　歴史的環境 …… 4

第3章　遺構と遺物 …… 8

第1節　A　地　点 …… 11

1　地形 …… 11

2　遺構と遺物 …… 11

(1)　A1号窯跡 …… 11

(2)　A2号窯跡 …… 17

(3)　A3号窯跡 …… 17

(4)　A4号窯跡 …… 19

(5)　灰原 …… 25

第2節　B　地　点 …… 52

1　地形 …… 52

2　遺構と遺物 …… 53

(1)　B1号窯跡 …… 53

(2)　B2号窯跡 …… 60

(3) 灰原 …… 76
第3節 C 地 点 …… 83
1 地形 …… 83
2 遺構と遺物 …… 84
(1) C1号窯跡 …… 84
(2) C2号窯跡 …… 93
(3) C3号窯跡 …… 100
(4) C4号窯跡 …… 106
(5) C5号窯跡 …… 121
(6) 灰原 …… 152
第4節 D 地 点 …… 152
第5節 木葉下遺跡出土の瓦 …… 153
1 A地点 …… 156
2 C地点 …… 162
第4章 ま と め …… 163
第1節 遺 構 …… 163
1 構造 …… 163
2 操業 …… 165
第2節 遺 物 …… 167
1 出土遺物による，C地点の窯跡の分類 …… 167
2 坏による，B地点とC地点の比較・検討 …… 174
3 蓋・盤による，B地点とC地点の比較・検討 …… 174
4 遺物から見たB地点・C地点の変遷 …… 175
第3節 木葉下遺跡の年代観 …… 177
第4節 流 通 …… 178

第1章　調査の経緯

第1節　調査に至る経過

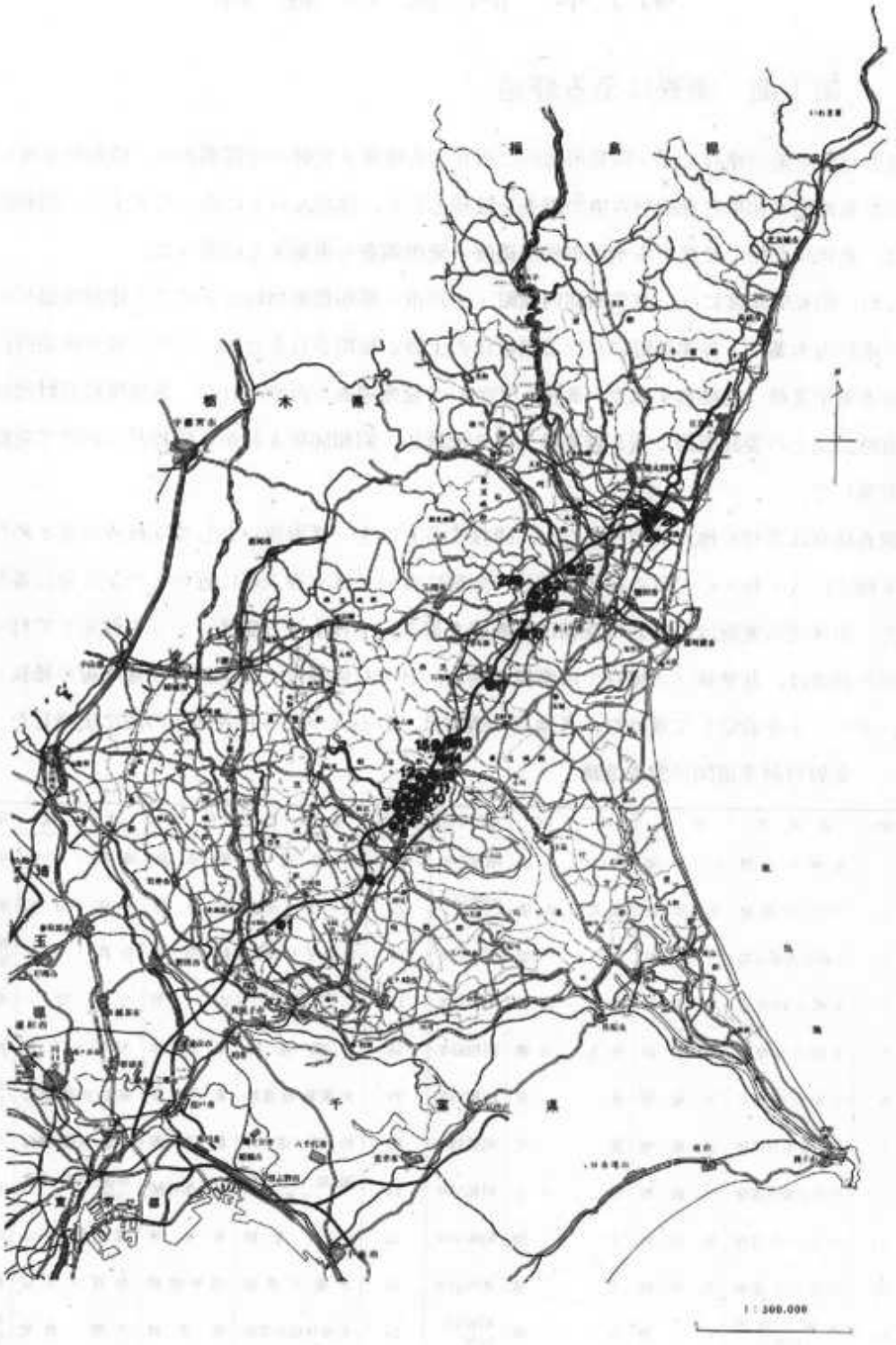
常磐自動車道の建設に伴う開発用地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査は，昭和53年度に実施された筑波郡谷和原村東楢戸古墳の調査を最初として，逐次ルートに沿って北上し，昭和55年度には，那珂川北岸に位置する水戸市砂川遺跡の発掘調査を実施するに至った。

なお，昭和56年度には，東茨城郡内原町・水戸市・那珂郡那珂町にかけての建設用盛り土として，水戸市木葉下・谷津両町にわたる高取山の土砂が使用されるため，この土取り用地内に所在する木葉下遺跡（窯跡群4地点・面積7,950㎡）の発掘調査が計画された。茨城県教育財団は，日本道路公団との委託契約に基き調査員2名を配置し，昭和56年4月から同12月にかけて発掘調査を実施した。

調査地点は当初6地点が示されたが，隣接するものを一括取扱いとして4地点にまとめた。この4地点にA・B・C・Dの記号を付し，窯跡については支谷入口に近いものから順に番号を付した。窯体内の実測は，窯底の長軸に基準線を置き，それより方眼メッシュを設定して行った。灰原の調査は，基準線（A地点では座標の南北，B・C両地点では上述した基準線の延長）を設け，グリッドを設定して進めた。各地点の調査は，D→A→C→B各地点の順に実施した。

常磐自動車道関係調査遺跡

整理No.	遺跡名	種類	時代	発掘年度	整理No.	遺跡名	種類	時代	発掘年度
1	東楢戸古墳	古墳	古墳	昭和53年	14	宮部遺跡	集落跡	縄文・中世	昭和54年
2	下広岡遺跡	集落跡	縄文・古墳	昭和53・54年	15	鹿の子A遺跡	集落跡	奈良・平安	昭和54年
3	上稲吉西原古墳	古墳	古墳	昭和53年	16	鹿の子C遺跡	集落跡	奈良・平安	昭和54・55・56年
4	上稲吉西原A	集落跡	弥生・古墳	昭和53年	17	堀原古墳群（2基）	古墳	古墳	昭和54年
5	上稲吉西原B	集落跡	弥生・古墳	昭和53年	18	湿気遺跡	集落跡	古墳・近世	昭和54年
6	上稲吉西原C	包蔵地	歴史	昭和53年	19	大塚新地遺跡	集落跡	弥生・古墳・歴史	昭和54・56年
7	中佐谷十台遺跡	包蔵地	歴史	昭和53年	20	松原遺跡	集落跡	弥生・古墳・歴史	昭和54年
8	中佐谷殿内遺跡	包蔵地	歴史	昭和55年	21	海原古墳群（2基）	墳・集落跡	奈良・平安・中世以降	昭和54年
9	中佐谷A遺跡	集落跡	古墳	昭和53年	22	砂川遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安	昭和54年
10	中佐谷B遺跡	集落跡	古墳	昭和53年	23	木葉下遺跡	須恵窯跡	奈良・平安	昭和56年
11	大城古墳群（15基）	古墳	古墳	昭和53・54年	24	石神外宿A遺跡	集落跡	古墳・歴史	昭和56・57年
12	松延古墳群（2基）	古墳	古墳	昭和54年	25	石神外宿B遺跡	集落跡	弥生・古墳	昭和57年
13	志筑遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳	昭和53・54年	26	二本松古墳	古墳	古墳	昭和56年



第1図　常磐自動車道関連用地内遺跡位置図

第2節　調　査　経　過

4月27日に調査事務所を建設し，諸準備を進めた。5月6日にはD地点で鍬入れ式を挙行し，調査を開始した。しかし，D地点においては須恵窯跡を検出できず，炭窯跡4基を調査して終了し，A地点に移った。

A地点では，6月2日に現況写真の撮影，雑木伐開を行い，5日には，すでに削除されて露呈している4基の窯跡の断面を削り出した。25日には現地にて伊東重敏氏の指導を受け（この頃から，A地点の調査と並行してC地点の調査準備を進めた），翌26日から灰原の調査に着手し，8月10日を以てA地点の調査を終了した。

C地点は7月8日に地形測量を開始し，16日から遺構確認作業に入った。21日にはC1号・C2号両窯跡を確認し，8月6日から掘り込みを始めた。その結果，予想以上の大規模な窯跡であることが判明し，直ちに拡張・露呈作業に入った。しかし，排土量が膨大であるためC1号窯跡の拡張・露呈作業が終了した時点で調査方法を再検討し，重機による表土除去を実施することとした。一方，18日から灰原の範囲を確認するため，C1号窯跡主軸延長線に沿ってトレンチを入れたところ，完形に近い円面硯が発見された。20日から重機による遺構確認，表土除去作業を実施した結果，同日中にC3号・C4号両窯跡が確認され，27日にはC3号窯跡上部斜面にC5号窯跡を確認した。C5号窯跡の最終ベースは焼成途中で天井が崩落したものと思われ，おびただしい遺物が検出された。また，焚口の壁も瓦・須恵器片を粘土で貼り付ける等の特色が見られ，調査が難行した。C地点は，10月28日を以て調査を終了した。

B地点の調査は10月2日に開始され，C地点の調査と並行して進められた。16日にB1号・B2号両窯跡を確認し，28日にB1号窯跡の調査に着手した。30日にはB2号窯跡の調査を開始し，同窯跡最終ベースからは，大形の甕片が出土した。B2号窯跡については，主軸方向に沿った窯体の2分割調査を試みた。11月14日には，150名の参加者を得て，木葉下遺跡現地説明会を実施した。本地点の調査は，12月3日を以て終了した。

以後，12月22日までC地点の補足調査・工具痕の明瞭な窯壁とベース及びB1号窯跡の有段部の取り上げ作業を実施し，翌23日には事務所移転も完了して，すべての現地調査を終えた。

第2章　位置と環境

第1節　地理的環境

水戸市は茨城県庁の所在地であり，県の中央付近に位置する。東西約20km・南北約17kmを測り，人口は221,570人（昭和58年1月1日現在）を数える。国鉄常磐線・水郡線・水戸線や国道が集中し，東京まで常磐線で2時間程の距離にある。かつては東京周辺には珍しい独立商圏を形成したが，10年程前から中央資本の進出による大型店舗の建設がみられ，商圏の変容がみられる。市街地は，水戸駅周辺の台地，低地が中心であるが，国道沿いの台地に広がりを見せている。

北部は，那珂川が西から東へ貫流し，川沿いの低地と台地面との比高は22m前後を測る。東部は，那珂川に沿った標高5m内外の低地が広がり，水田地帯を形成する。中央及び南部の台地は笠間市池野辺に源を発する桜川とその支流である沢渡川と逆川によって4分され，いずれも標高は30m内外を測る。桜川と沢渡川は合流して千波沼低地を形成し，さらに東流して那珂川に注ぐ。西部は，鶏足山塊東端部の一角を占める標高100～200mの丘陵地である。この丘陵地を，東茨城郡常北町石塚から石岡市へ至る県道石塚・石岡線が北から南へ貫き，これに沿って木葉下・谷津両集落がある。

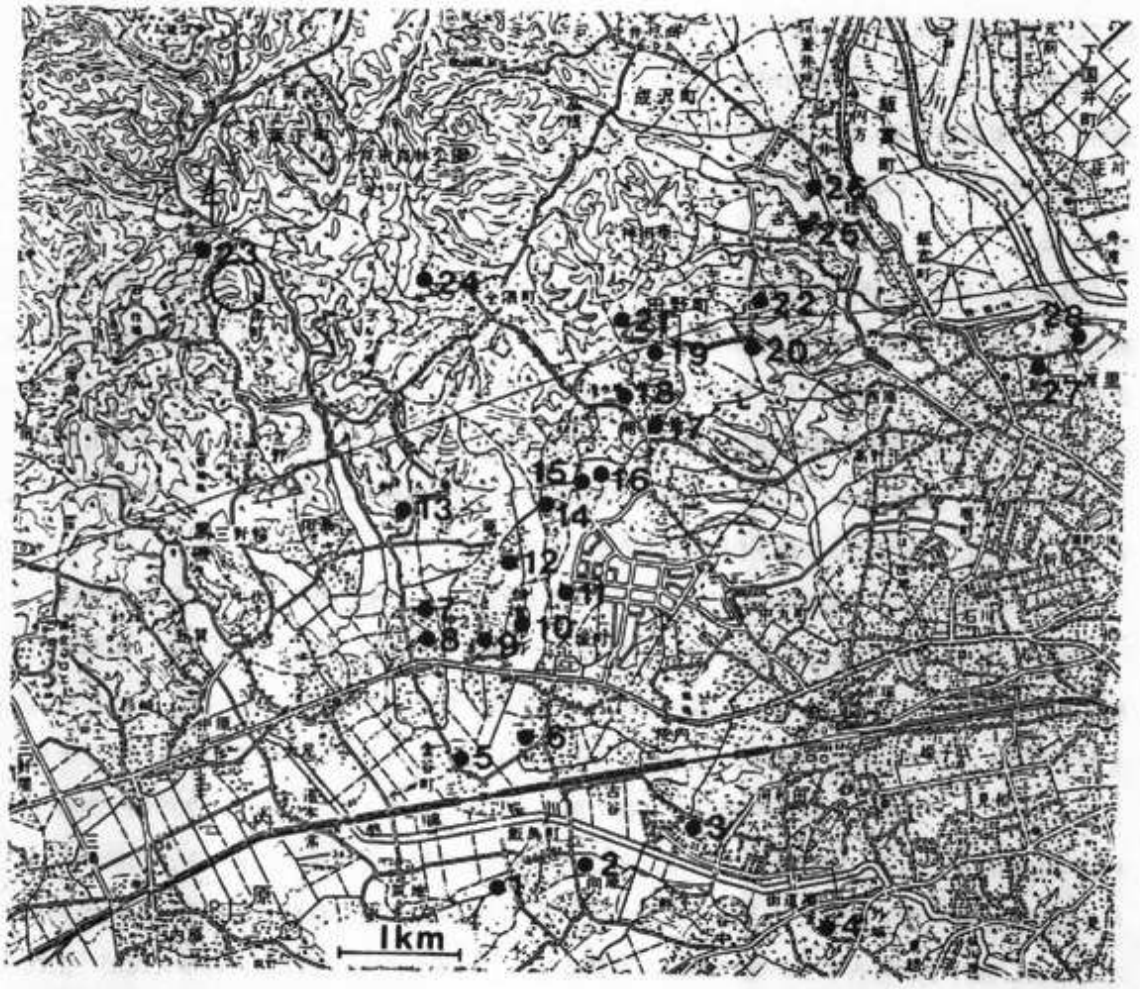
木葉下遺跡は，水戸市西部の丘陵地にある高取山（標高110.42m）裾部の，水戸市木葉下町上ノ町沢295－1外に所在する。高取山は，木葉下・谷津両集落の中間に位置し，常磐線内原駅から北へ5km，同赤塚駅から北西へ6kmを測る。桜川から水戸市と東茨城郡内原町の境界を北へ伸び谷津集落に達する支谷と，那珂川から分かれた藤井川の小支流前沢川から南へ伸びる支谷が高取山を刻んで小支谷を形成し，その小支谷に沿って各窯跡群が立地する。

第2節　歴史的環境

那珂川流域には各時代にわたって人々が居住し，数多くの遺跡が知られている。中でも東茨城郡常澄村に所在する国指定史跡大串貝塚は，「常陸國風土記」の那賀郡の条にその記述が見られる等，著名である。

水戸市内及びその周辺にあっても，先土器時代以降多くの遺跡が知られている。先土器時代の遺跡としては，昭和38年に石器が発見された十万原遺跡[1]，昭和46年の古墳群調査中に石器が発見された赤塚西団地内遺跡[2]がある。

縄文時代に入ると，各期にわたり多くの遺跡が見られ，特に丘陵沿いの台地上や沖積地に沿った台地縁辺部に集中する。早期では八幡神社境内から稲荷台式土器の小片が発見されており[3]，前



番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	飯島町遺跡（弥生・古墳時代）	15	峯山古墳（古墳時代）
2	仙光台遺跡（弥生時代）	16	寺山遺跡（縄文・古墳時代）
3	前原遺跡（弥生時代）前原古墳群	17	開江宿遺跡（古墳時代）
4	河和田城跡（中世）	18	大久保遺跡（古墳時代）
5	金谷町遺跡（古墳時代）	19	前山田遺跡（縄文・古墳時代）
6	大塚新地遺跡（古墳時代～平安時代）	20	南原古墳群（古墳時代）
7	妙徳寺付近古墳群（古墳時代）	21	後山田遺跡（縄文・古墳時代）
8	加倉井館跡（戦国時代）	22	仲根遺跡（縄文・弥生・古墳時代）
9	加倉井町遺跡(縄文･弥生･古墳時代)	23	木葉下三ヶ野窯跡群
10	松原遺跡（古墳時代～平安時代）	24	小坂遺跡（縄文時代）
11	向井原遺跡(縄文･弥生･古墳時代)	25	古土巻遺跡（縄文時代）
12	原遺跡（古墳時代）	26	馬場尻遺跡（縄文・古墳時代）
13	加倉井古墳群（古墳時代）	27	徳輪廃寺跡
14	毛勝谷原遺跡（古墳時代）	28	長者山政庁跡

○印が木葉下遺跡

第2図　木葉下周辺遺跡位置図

期では谷田貝塚が知られている。[4]

弥生時代においてもこの傾向が認められ，柳河小学校校庭弥生遺跡・東照宮境内弥生遺跡・前原遺跡・十万原遺跡[5]等からは，後期に編年される土器片が多く出土している。

古墳時代には，この地域周辺に愛宕山古墳[6]・田島古墳群[7]・牛伏古墳群[8]等の大小の古墳が築造されている。

奈良時代に入ると，市内渡里町の那珂川に面した台地上には長者山政庁跡・徳蔵廃寺跡（台渡廃寺跡）があり，木葉下付近の窯跡群との関係が注目される。このほか，水戸市加倉井町の松原遺跡[9]からは多量の須恵器の出土が報告されている。松原遺跡と同じ台地西側の畑及び谷津地区の南側に位置する東茨城郡内原町田島[10]では，かつて根菜類の栽培に際しておびただしい量の須恵器が掘り出されたと言われる。これらの地域に須恵器を供給した窯跡は，現在のところ解明されていない。しかし，いずれも木葉下付近に供給地を求めるべきであろう。

水戸市木葉下町周辺の窯跡群は古くからその所在が知られ，「水府志料」の三ヶ野村の条に，「古磁器　庄や河原井氏なるものの屋敷より得たり，此邊より磁器，破瓦の類多出す。木葉下村慶長三年検地帳に，かめやきと、云畠の字あり。（中略）村民只かめ焼どゝ覚へて，いつの世是を製す事をしらず。此地かめやきどに接す。皆近代のものにあらず。行基焼の類に似たり。」と見える。しかし，「窯跡」の所在を確認し，後の調査・研究の端緒となったのは，水戸第一高等学校史学会の活動である。昭和24年，当時同会に所属した照沼好文氏の報告に基づき，同校の名越時正教諭の指導で調査を行っている。さらに同年暮には，照沼及び同会ＯＢの佐藤次男両氏を中心として，水戸学生考古学会が発掘調査を実施した。その結果については，大森信英氏が「上代文化」第20輯に報告している。昭和37年に大川清・大森信英両氏が木葉下町三ヶ野において須恵窯跡１基を完掘したが，その報告[12]は広く行きわたらなかった。同39年には，高井悌三郎氏が台渡廃寺跡と木葉下窯跡群の関係について論じ，木葉下窯跡群で焼かれた瓦が台渡廃寺に供給されたことを指摘した。[13]同48年には，伊東重敏氏が水戸地方の古代窯業研究の動向について論ずる中で，「水戸市木葉下町一帯に濃密に分布する窯跡群」について詳しく触れている。[14]これらから，窯跡は木葉下・谷津両町一帯の丘陵地に分布すること，須恵窯跡と瓦窯跡の混在の可能性があることが明らかになって来ているが，詳細はなお不明である。

木葉下遺跡の北西約2.5kmには，「常陸國風土記」に見える「哺時臥山」に比定される朝房山（標高201.1m）がある。

引用文献

(1) 「水戸市史」上　昭和48年

(2) 金子　進「水戸市周辺発見の先土器時代石器群」茨城考古学５　昭和48年

(3) (2)に同じ。

(4) (2)に同じ。

(5) 茨城県教育委員会「茨城県遺跡地図」 昭和52年３月

(6) (5)に同じ

(7) (5)に同じ。東茨城郡内原町所在。

(8) (5)に同じ。東茨城郡内原町所在。

(9) (5)に同じ。

(10) 高井悌三郎「常陸台渡廃寺跡」 昭和39年

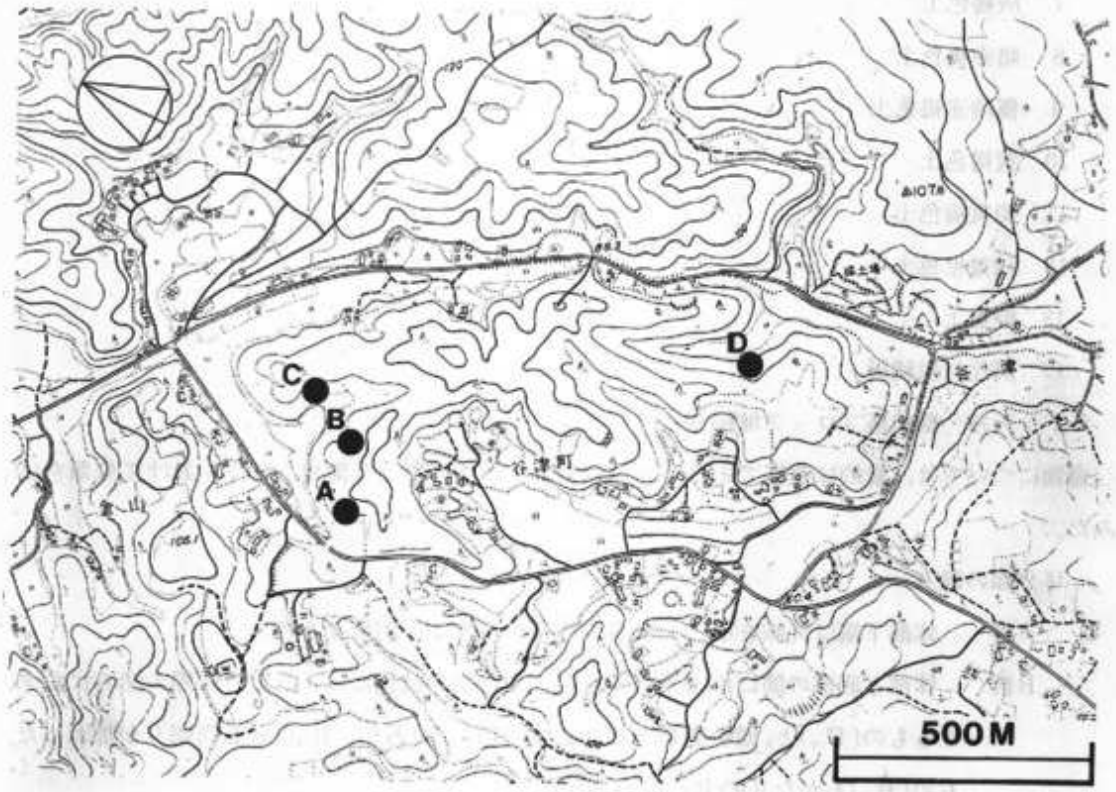
(11) (財)茨城県教育財団「茨城県教育財団文化財調査報告XI」昭和56年３月

(12) 大森信英「茨城県東茨城郡山根村の窯址群について」昭和26年

(13) 大川 清・大森信英「水戸市木葉下町三ヶ野第２号窯址発掘結果報告書」昭和37年

(14) (10)の附「(附)常陸木葉下古窯跡群」

(15) 伊東重敏「水戸地方における古代窯業の研究」常陸考古学研究所学報第15集 1973



第３図 木葉下遺跡地点配置図

第3章　遺構と遺物

木葉下遺跡で調査した須恵窯跡は，A地点4基・B地点2基・C地点5基の合計11基である。灰原は，C地点が陸田造成の際に破壊されてしまったため，A・B両地点で調査を実施した。

遺構及び灰原の土層の色調は，次のような記号・番号で表示した。

1　褐色土
2　にぶい褐色土
3　暗褐色土
4　黒褐色土
5　明褐色土
6　褐灰色土
7　灰褐色土
8　暗赤褐色土
9　極暗赤褐色土
10　黄褐色土
11　明黄褐色土
12　浅黄橙色土
13　橙色土
C　炭化材堆積層
F　天井・壁崩落ブロック堆積層

遺物については，量的に豊富である坏・蓋に対して，次のような簡単な基準を設けて分類を試みた。

坏分類の観点

A群　体部下端に丸味を有し，体部と底部の境界が不明瞭なもの。

B群　体部と底部の間に面を有するもの。この面の成因には，土とりの際の凹みに由来するもの(B_1)と，回転篦削りによるもの(B_2)があり，B_1に回転篦削りが加わったもの(B_1')もかなりの量が認められる。

C群　体部と底部の境界が明瞭なもの。底部が丸底または丸味をもつもの(C_1)と，平底のもの(C_2)がある。

I類　底部に回転篦切り痕を残すもの。

II類　回転篦切り後，底部の全部または一部に回転篦削りを施したもの。

Ⅲ類　回転篦切り後，底部の全部または一部に静止篦削りを施したもの。

蓋分類の観点

A群　内面に「かえり」を有するもの。

B群　口縁外側が「く」の字状を呈し，2段に見えるもの。

C群　口縁が端折であるもの。端折の小さいもの(C_1)と大きいもの(C_2)がある。C_2は坏蓋とは異なるものと思われる。

Ⅰ類　天井部が高く，篦削り部分の周縁に明瞭な稜が認められるもの。

Ⅱ類　Ⅰの稜を回転篦削りによって消したもの。この調整の結果，つまみ側または口縁側に新たな稜を生じている。

Ⅲ類　篦削り部分と水挽き・ヨコナデ部分との間に，稜が認められないもの。

遺物解説表で使用した記号は，次のとおりである。

法量（計測場所は「陶邑1」による）　(　)は推定値

A　口径・外堤径　B　器高　C　受部径　D　基部径　E　高台径

F　底部径・基底径　G　口縁高　H　つまみ径　I　つまみ高　J　現存高

K　胴部最大径

器形　蓋のつまみは，形によって次のように分類し，記号で表した。

a群　つまみ上部は凹みを有さず，外周部が接合部よりも大きい。

i類　つまみ上部中央が高く，いわゆる宝珠形を呈する。

ii類　外周に平坦部を有し，中央が特に高い。

iii類　外周に平坦部を有し，中央がやや高い。

iv類　全体になだらかで，いわゆるボタン状を呈する。

a'群　つまみ上部は凹みを有さず，外周部と接合部は同じ径を有する。

i類　外周に平坦部を有し，中央が高い。

ii類　上部は全体に平坦。

b群　つまみ上部が凹み，外周部が接合部よりも大きい。

i類　中央が外周よりも高い。

ii類　中央が高まるが，外周よりも低い。

iii類　中央に高まりを有さず，いわゆる皿状を呈する。

iv類　中央は平坦で，外周部と接合部の径が等しい。

b'群　つまみ上部が凹み，外周部と接合部は同じ径を有する。

i類　中央が外周よりも高い。

ii類　中央が高まるが，外周よりも低い。

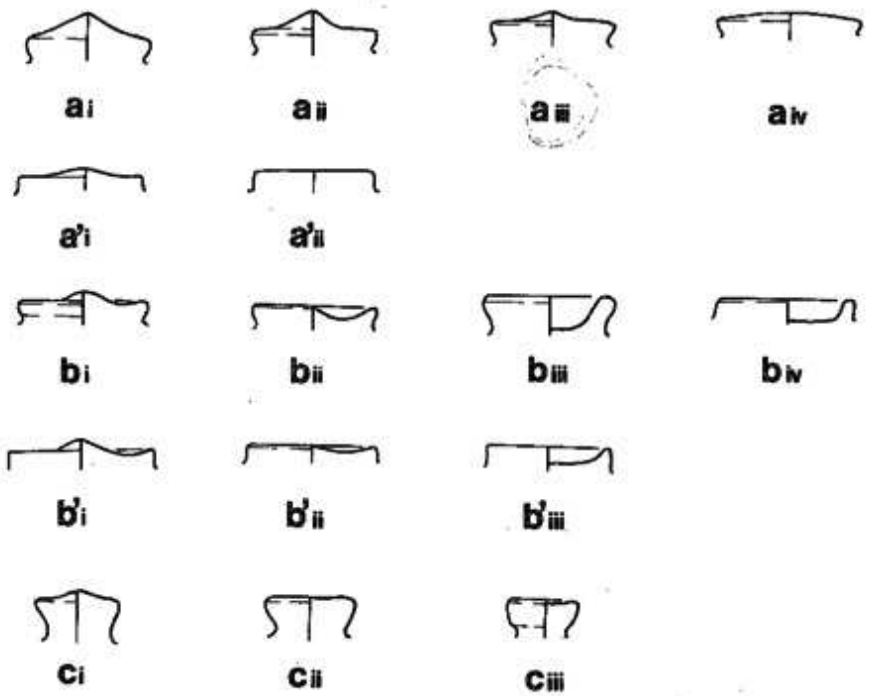
iii類　中央が皿状に凹み，高まりを有さない。

c群　つまみは全体に高く，径が小さい。外周部は接合部よりも大きい。

i類　中央が高い。

ii類　つまみ上部は，平坦であるか，やや丸味を有する。

iii類　つまみ上部に凹みを有する。



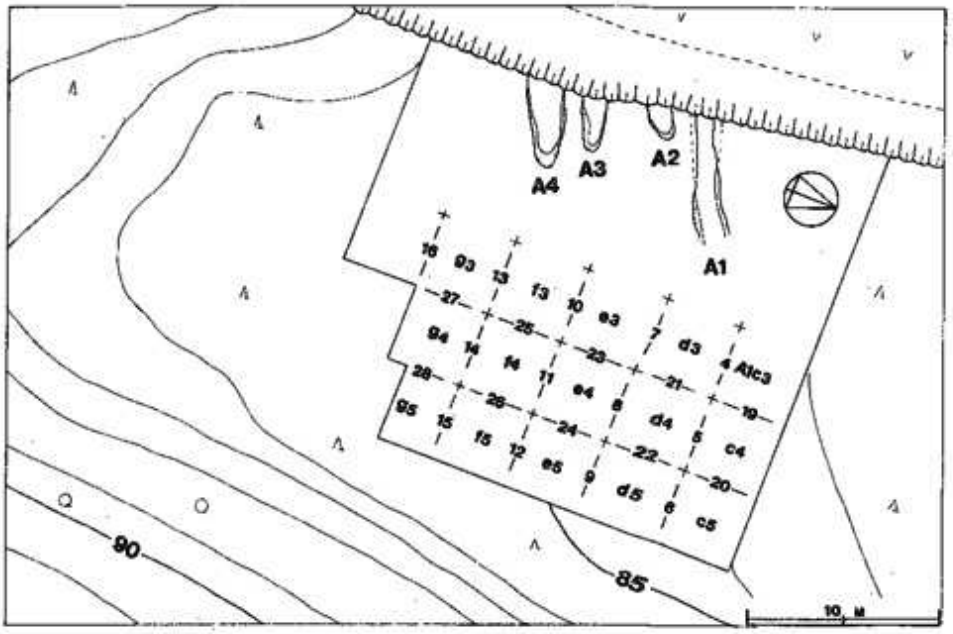
第4図　つまみの形態分類

技法　　篦ナデA　従来の篦ナデと同義。器面を平滑にすることを目的とする。

篦ナデB　篦の形態・あて方の相違により，なでた後に凹凸面を残す。

備考　　出土位置は，各ベース・グリッド・セクションベルトの別を示した。A地点の灰原では，各セクションベルトに番号を付し，土層番号と組合せて表した。17S20とは，17号セクションベルトの土層番号20の層から出土したことを示している。

第1節　A　　地　　点



第5図　A地点地形・グリッド配置図

1．地形

本地点は，高取山北西側斜面に刻まれた小支谷の下方に位置する。この小支谷は他の地点に比べ谷幅は狭く，谷底の傾斜も緩やかである。谷の両岸は，明瞭な傾斜変換点が認められる。小支谷入口部の幅は約30m，標高で82mを測る。

西側傾斜面は，傾斜変換点から上1m程を残して10年程前に行われた土取り工事によって切り取られ，その崖面に4基の須恵窯跡が認められた。本地点で調査したのはこの4基であるが，いずれも窯体の一部または大部分を切り取られており，規模・性格等を明らかにする事はできなかった。

2．遺構と遺物

(1)　A1号窯跡（付図1　PL2・6）

①　構造

半地下式無段登窯の構造を有し，主軸はN－113°－Wを示す。奥壁付近が切り取られていたため全長は不明であるが，残存長が6.4m，幅は焼成室で1.3m内外，燃焼室で1m，焚口端で2.2mを

測る。支谷の傾斜変換点から奥の部分が地下式であったものと思われる。天井は崩落し，残存しない。切断面での観察により，断面はカマボコ型に構築されていたものと判断される。

窯底は，焼成室で5°前後の傾斜を示す。開口部から５ｍの所に傾斜変換点があり，31°を測る。ベースは６枚を確認した。傾斜が緩やかである部分は堅緻ではなく，強い熱を受けた形跡は認められない。しかし，傾斜変換点から奥の方は極めて堅緻であった。５～10cmの厚さで互層を成しており，主として傾斜変換点までの床を修復したらしい。この結果，最終ベースでは急傾斜部が埋め尽され，単純なスロープになっていた。

壁は，燃焼室で赤褐色，同室奥から焼成室で青灰色を呈し，それぞれ堅緻に焼き締まっていた。切断面で見ると，窯底で10cm，壁で12cmの厚さの変色部が認められる。内側３cm内外が明灰褐色，外側７～９cmが赤褐色を呈し，内側に還元焔の影響が認められ，天井に近づくにしたがって変色部が厚くなっていた。天井付近で特に温度が上がったことが推定される。

燃焼室には多量の炭化材が堆積し，その中から蓋坏の蓋や坏身の破片・瓦片等が出土した。焼成室でも各ベース間に遺物がみられ，傾斜変換点の下及び焼成室と燃焼室の境界付近に特に多かった。この原因については，急傾斜部からの転落や掻き出しによる集積が考えられる。

② 遺物（６－１～７－５）

坏（６－１～５）

製品と思われるのは３のみである。他の４点はいずれも二次焼成を受け，焼台として使用されたものと判断される。

１・３は，ＡⅡ類に分類できる。内面底部を除き，ヨコナデにより稜を消している。１の体部は，下半がやや外反し，上半は内反気味である。

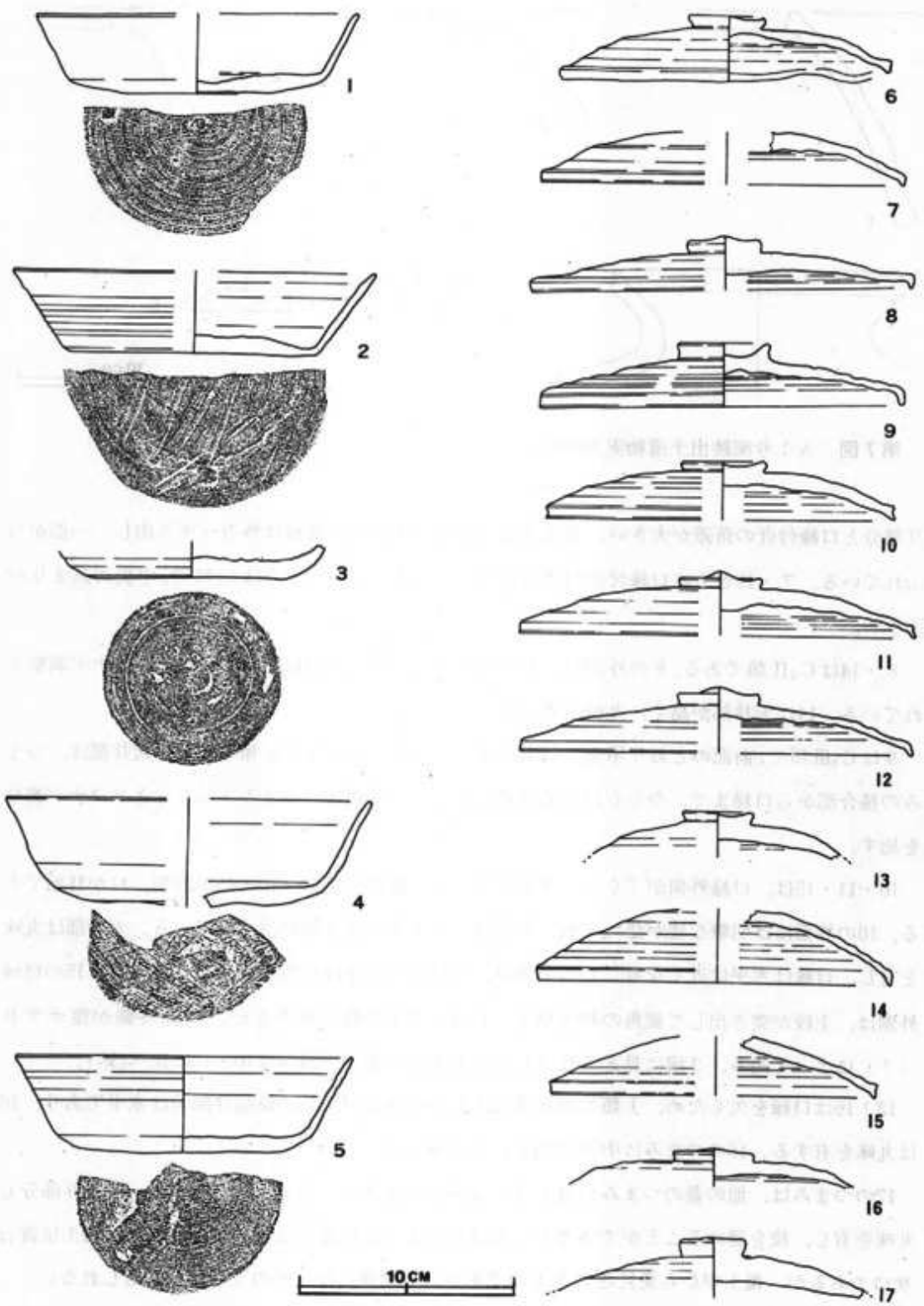
２・４は，ＡⅢ類である。２は実測図では良くわからないが，底部の一部に丸味を認めることができる。篦削り面が水挽き時の中心線に対して傾いていたため，体部下端の丸味が削り取られたものである。回転篦切り痕が認められる。体部外面は，回転篦ナデＢによって調整され横走する７条の沈線が認められる。４の内面は指でヨコナデ調整がなされている。

５はB_1Ⅱ類である。体部下端の面と底部との境界は，明瞭な稜となっている。内面は入念なヨコナデ調整がなされ，体部外面は，回転篦ナデＢ後さらにヨコナデを施している。

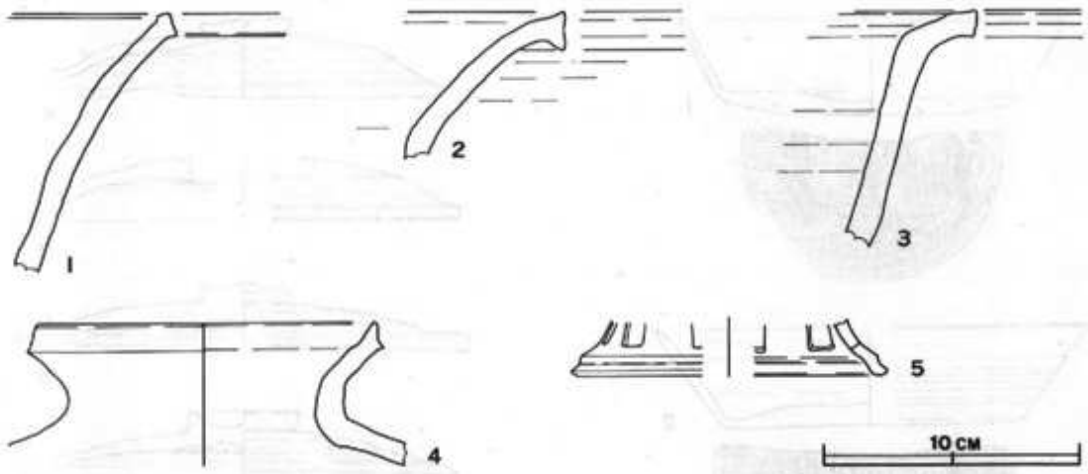
蓋（６－６～17）

12点を示した。６～８・10～16は坏蓋であるが，17はつまみの形状・器厚が他と異なり，坏蓋よりも大きなものである。９は，端折が大きく垂下し，やはり坏蓋とは異なるものと判断される。

６・７・12はC_1Ⅱ類に分類される。６は内外面ともヨコナデが施されている。天井部は，篦削



第6図　A１号竈跡出土遺物実測図(1)



第7図　A 1 号窯跡出土遺物実測図(2)

り部分と口縁付近の落差が大きい。つまみは b ii 類であるが，周縁は外方へ突き出し，一部がつぶれている。7・12ともに口縁付近は水平になっている。12のつまみは bi類で，中央の高まりが大きい。

8・14は C_1II 類である。8 の外面は，12に近似する。内面は回転篦ナデB後，ヨコナデ調整されている。14は天井部が高く，丸味を有する。

9 は C_2III類で，前記のとおり坏蓋とは異なる。つまみは大きな b iv 類である。天井部は，つまみの接合部から口縁まで，ゆるくほぼ直線的に下がる。内面は，つまみ下部を除きヨコナデ調整を施す。

10・11・15は，口縁外側が「く」の字状を呈し，B群に属する。10・15がIII類，11がII類である。10の外面には明瞭な稜が認められ，内面はヨコナデにより稜が消されている。天井部は丸味を有し，口縁は水平に近くなる。口縁外側は，上段よりも下段の方が突き出している。15の口縁外側は，上段が突き出して鋭角の稜を成し，11は，本来C群に属するが，口縁外側が篦ナデB（？）によって凹み，2段に見えるようになったものである。凹みは10・15に比べ浅い。

13・16は口縁を欠くため，I類に分けることしかできない。13の篦削り部分は水平であり，16は丸味を有する。16のつまみは中央が高く，13と異なる。

17のつまみは，他の蓋のつまみに比してつまみ径が小さく，つまみ高が大きい。篦削り部分も丸味を有し，稜を認めることができない。先述したように坏蓋ではないと思われる。出土位置は焚口であるが，覆土中から発見されたものであり，本窯跡に伴うものではないかもしれない。

A１号窯跡出土遺物解説表

図版	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
6 (1)	1	坏	A(14.8) B 3.8 F 10.4	体部は外傾し直線的に立ち上がる。 口縁はやや内反気味。	底部回転篦削り 水挽き 体部内外面ヨコナデ	良好（二次焼成） 砂礫を含む 明紫灰色を基調とする	Ⅲ 焼台 45%
〃	2	〃	A(17.0) B 3.9 F 11.6	体部は外傾し直線的に立ち上がる。 口縁部はやや外反。	底部回転篦切り後静止篦削り 水挽き・体部外面回転篦ナデB	良好（二次焼成） 砂礫を含む 暗オリーブ灰色	Ⅳ 焼台 40%
〃	3	〃	F 8.1 J 1.7	底部から体部へ丸味をもって移行。 内面は体部のみにヨコナデが施される。	底部回転篦削り 水挽き，ヨコナデ	良 砂礫を含む 灰白色	Ⅳ 30%
〃	4	〃	A(16.8) B 5.1 F (9.4)	体部は外傾し直線的に立ち上がる。 口縁部はやや外反 外面体部下半は丸味をおびる。	底部静止篦削り 水挽き・内外面ヨコナデ	良好（二次焼成） 砂礫を含む 外 暗赤灰色 内 暗赤褐色	Ⅴ 焼台 30%
〃	5	〃	A(15.5) B 4.5 F (9.4)	体部は外傾し直線的に立ち上がる。	底部回転篦削り 水挽き 外面口縁部・内面ヨコナデ	良好（二次焼成） 砂礫を含む オリーブ灰色	Ⅴ 焼台 50%
〃	6	蓋	A 14.9 B 3.1 H 3.6 I 0.6	つまみはbii類。 天井から口縁へなだらかに下がる。	天井部回転篦削り 水挽き，ヨコナデ つまみ接合	良（一部不良） 砂礫を含む 灰白色	Ⅲ 70%
〃	7	〃	A(18.7) J 2.4	天井部から丸味をもって下がり，口縁付近はなだらかになる。 端折は小さい。	天井部回転篦削り 水挽き・外面及び内面口縁付近ヨコナデ	良 砂礫を含む 外 にぶい橙色 内 緑灰色	Ⅴ 30%
〃	8	〃	A(17.3) B 2.6 H 3.4 I 0.7	つまみはbi類。 天井部は平坦に近く，なだらかに低くなって口縁付近で平坦に近くなる。	天井部回転篦削り 水挽き，ヨコナデ つまみ接合	良（二次焼成） 砂礫を含む 浅黄色を基調とする	Ⅴ 30%
〃	9	〃	A(16.6) B 3.0 H 4.2 I 0.8	大きなbiv類のつまみ。天井から口縁まで直線的に下がる。 端折部が大きい。 ロクロ目が明瞭。	天井部回転篦り 水挽きヨコナデ つまみ接合	良（二次焼成） 砂礫を含む 灰オリーブ色を基調とする	Ⅴ 50%
〃	10	〃	A(16.0) B 2.8 H 4 I 0.5	つまみはbii類。 口縁は「かえり」が退化したものと思われ二段に見える。	天井部回転篦削り 水挽き つまみ接合	良 普通 砂礫を含む 灰白色	Ⅴ 40%
〃	11	〃	A(18.2) B 3.1 H 3.7 I 0.7	つまみはbi類。 天井部から丸味をおびて下がり，口縁付近でなだらかになる。 端折肩部はやや突出する。	天井部回転篦削り 水挽き，ヨコナデ つまみ接合	良（二次焼成） 砂礫を含む 外 暗灰黄色 内 浅黄色	Ⅴ 焼台 40%
〃	12	〃	A(18.0) B 3.1 H 3.65 I 0.7	つまみはbi類。 天井部からなだらかに下がり，口縁付近で一段低くなる。 端折の角度は鋭い。	天井部回転篦削り 水挽き，ヨコナデ つまみ接合	良（二次焼成） 砂礫を含む 外 灰オリーブ色 内 灰色	Ⅴ 焼台 30%
〃	13	〃	H 3.2 I 0.6 J 2.2	つまみはbii類。 天井部は篦削り，端部から急に低くなる。	天井部回転篦削り 水挽き，ヨコナデ つまみ接合	良（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	Ⅴ 35%
〃	14	〃	A(16.1) J 3.4	天井部から口縁へゆるやかに下がる。 口縁端折部は「く」の字状を呈する。	天井部回転篦削り 水挽き内外面ヨコナデ	不良 砂礫を含む 灰白色	焼成室 40%
〃	15	〃	A(14.8) J 2.8	天井部から口縁へゆるやかに下がる。 口縁端折部はわずかに突き出す。	天井部回転篦削り	良（二次焼成） 砂礫を含む 灰白色	焼成室 50%

6 (1)	16	壺	H 3.7 I 0.6 J 1.7	つまみはaiv類。	天井部回転篦削り 水挽き内面ヨコナデ つまみ接合	不良 砂礫を含む 外 淡橙色 内 灰白色	焚口 30%
〃	17	〃	H 3.0 I 0.9 J 2.8	つまみはaiv類。 接合部周囲が凹む。	天井部回転篦削り 水挽き，ヨコナデ つまみ接合	良 砂礫を含む 灰白色	燃焼室 40%
7 (2)	1	甕	J 10.2	口縁断面，三角形状，内側口縁が張り出す。	巻き上げ ヨコナデ	良（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	II 焼台
〃	2	〃	J 5.8	折れ曲り部は中央に凹みを有する。	巻き上げ ヨコナデ	不良 砂礫を含む 灰白色	V
〃	3	〃	J 9.2	頸部は外側へ強く屈曲し，口縁に2条の凹線が見られる。整形時に縦方向の亀裂が走ったと思われ，内外面に粘土を貼って修復しようとした痕跡が認められる。	巻き上げ ヨコナデ 叩き	良（二次焼成） 砂礫を含む 外 灰色 内 灰白色	V 焼台
〃	4	〃	A 13.3 J 5.6	口縁部は整形時につまんだままの状態で1回転させており，内外面に浅い凹みが1周する。外側口縁下の角はシャープである。頸部下は接合により肥厚する。	巻き上げ ヨコナデ 叩き 頸部接合	良 砂礫を含む 灰白色	V 口縁部 80%
〃	5	円面硯	F(11.8) J 2.2	体部から基部にかけて，ゆるいS字状を呈する。 すかし窓は10ヶ所内外を数えたものと思われる。	水挽き ヨコナデ	良（二次焼成） 砂礫を含む 外 にぶい橙色 内 灰赤色	燃焼室 脚部1/4

甕・円面硯（7－1～5）

甕4点・円面硯1点を示す。後者は本窯跡では唯一の例である。

1・2は強く外傾する甕の頸部で，口縁の形態に違いが見られる。3は口縁の外反が強く，ほとんど水平になっている。甑の類かも知れない。4は小型甕の頸部である。「く」の字状に外反する。

円面硯は，脚部に窯壁片が付着していたため，これを取り除いて実測した。脚部の¼程度が残り，硯部の形状は不明。外面は，自然釉が見られる。スカシ窓は，10ヵ所内外を数える。

(2) A 2 号窯跡

① 構造

本窯跡は焚口を残して削り取られており，構造は不明である。残存長は２ｍで，最大幅は1.2ｍを測る。

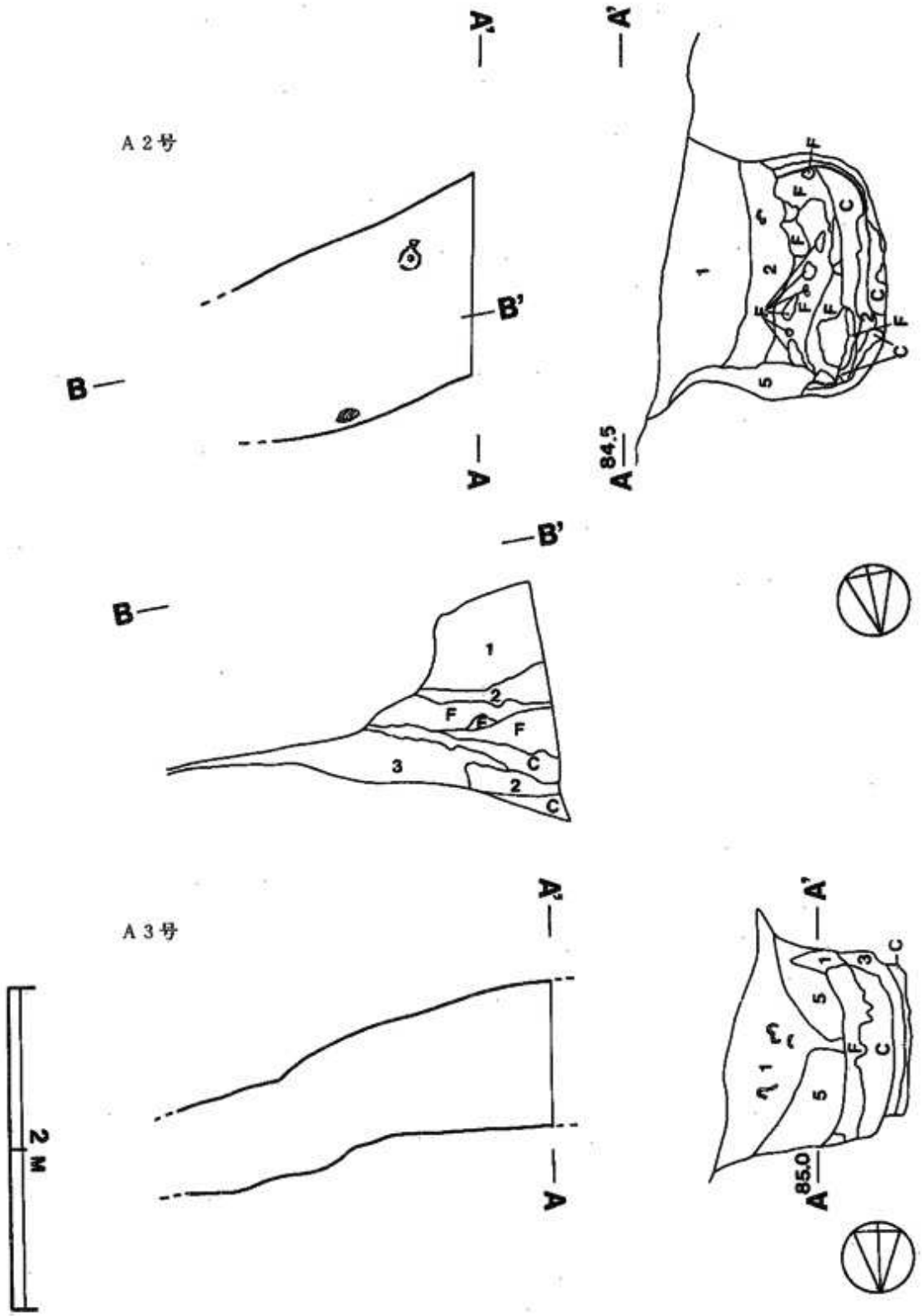
切断面は燃焼室の焚口側の部分と思われ，薄い炭化物層が認められた。また，窯底には，焚口と燃焼室を仕切るような状態で粘土が帯状に堆積しているのが認められた。壁は，切断面で５～10cmの赤変部が認められたが，それほど堅緻ではない。覆土には天井の崩落による破片が見られたが，量的には少ない。これは，切断面が本窯跡の開口部に近かったためであろう。両側壁共に変色部がオーバーハングしていたらしく，断面カマボコ型を呈する窯であったものと考えられる。

(3) A 3 号窯跡

① 構造

本窯跡は，Ａ２号窯跡と同様に焚口だけを残して削り取られており，構造の詳細は不明である。残存長は3.2ｍ，切断面で幅0.9ｍを測る。断面では窯底左右の壁に段が認められ，その肩の部分に熱による赤変部が確認できた。この段は，窯体の修復または改築によって生じたものであると思われ，土層の観察においても，段に対応する２枚の炭化材を含む層が確認された。

遺物は，覆土から少量の出土を見たのみである。



第8図　A２号・A３号窯跡実測図

(4) A４号窯跡（付図１　PL３・６）

① 構造

本窯跡は，焼成室の大部分が切り取られており，規模・性格の詳細は不明である。

第１次の築窯後，４回にわたって改築がなされており，さらに，各々に複数のベースが認められる。地下式登窯であったと推定される。

主軸は，N－107°－Wを示したものと思われる。残存長は5.2mを測る。幅は焼成室で1.5～1.7mを測り，焚口に向かって狭くなり，焚口端から３mの所で１mを測る。

燃焼室には，1.1mの厚さを有する炭化材層が認められ，その中に２cm内外の厚さの緑灰色粘土層が数枚見られた。これは，ベース修復時に使用された粘土の残りと思われ，固く焼き締まりブロック状に崩れる。この層は，焼成室のベースに直接結びつくものと，途中で切れてしまうものがあり，全てを焼成室のベースと対応させることが出来なかった。窯底は平坦であるが，両側壁下で緩やかに高くなる。各々天井や壁が崩落して使用不能になったものを，地山を削り込んで再構築したものであろう。Ⅲ～Ⅳ次ベースでは特に顕著である。一方，個々のベースを調査した時青灰色層の厚みがベースによって異なる場合があり，青灰層が厚い場合には層中からも遺物が検出された。当初は窯底中に埋めたものと考えたが，必ずしもそうではないらしい。この点については，C２号窯跡の項で触れる。

壁は，燃焼室で赤褐色に焼けており，焼成室で青灰色に堅緻に焼き締まっていた。断面で観察すると，内側が青灰色を呈しており，その外側に10～20cmの厚みを有する赤変部が認められた。天井に近づくにしたがって赤変部の厚みが増すのは，A１号窯跡で観察されたのと同様である。焚口及び燃焼室ともに左壁が緩やかな立ち上がりを見せるが，右壁は90°に近い角度で立ち上がっている。断面カマボコ型に構築されていたものと推定できる。

遺物は，各ベースから少量の出土を見ている。特に，Ⅱ次窯では重ね焼きの完形の坏が見られた。また，燃焼室の炭化材層中から円面硯の脚部片や「かえり」の見られる坏蓋の破片が出土した。

② 遺物（９－１～10－20）

坏（９－１～８）

６・８は２次焼成を受けている。１～５・７は製品であろう。これらの８点は，B_1Ⅱ類（３）B_1Ⅲ類（５）・B_2Ⅱ類（１・６・８）・C_1Ⅱ類（２・４・７）の４グループに分類できる。

３は，外傾する体部外面が回転篦ナデBで調整され，さらにヨコナデが施される。器厚は，口縁が薄い。底部の篦削り面はやや傾き，土とりによる体部下端の面は一部消滅している。

B_1Ⅲ類とした５は，底部の静止篦削りが極めて粗雑で凹凸が激しい。体部はほぼ直立するが，

一部がゆがみのため外反する。

B_2II類では，1の体部が外傾し，口縁が外反するのに対し，8は体部の外傾の度合が小さい。6の体部はほぼ直立し，口縁まで直線的に立ち上がっている。いずれも内・外面がヨコナデ調整されている。1の体部内面は，下半に回転篦ナデBが見られ，6の体部内面下端には，工具の痕と思われる沈線が見られる。

C_1II類に分類した3点は，いずれも底部が丸味を有する。特に7は，体部も丸味をもって立ち上がる。器厚は，口縁に向かって除々に薄くなる。整形は，全体に粗雑である。4は，5・7と共に重ね焼きされていたものである。体部は外傾し，直線的である点が，他の2点と異なる。整形は粗雑である。2の体部は外反しながら立ち上がり，上半は内反する。内・外面とも入念にヨコナデ調整されている。

蓋（10－1～13）

13点を示した。2～5は二次焼成を受けており，焼台として使用されたものであろう。本窯跡から出土した蓋は，A群とC群のみで，B群は無い。天井部篦削り部分は，I類とIII類が各1点のみで，他は全てII類である。

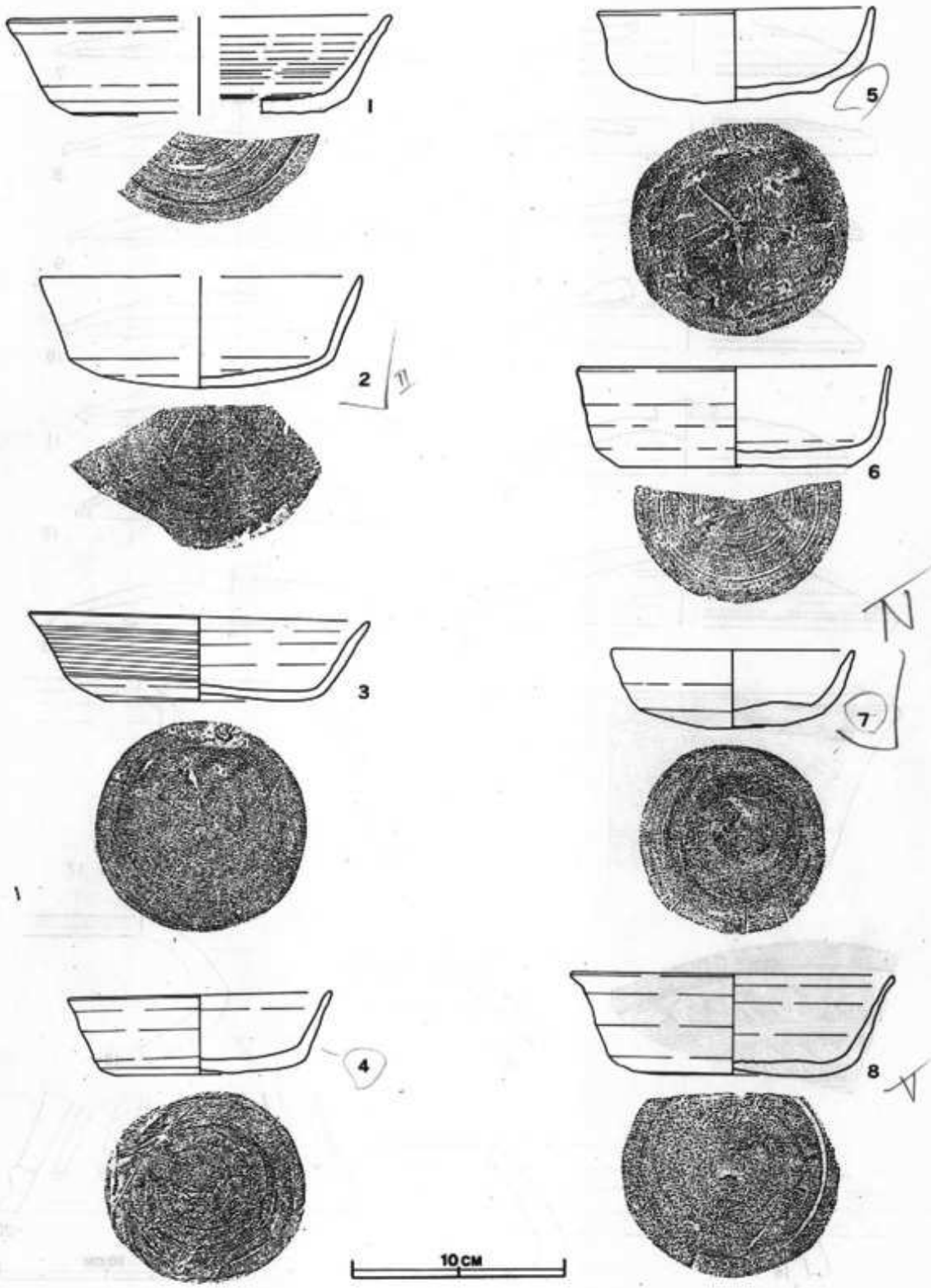
AII類では，10・11・12がある。いずれも内面に退化した「かえり」を有する。11・12の「かえり」は，両側からはさみつけるように工具をあて，整形されている。10もそうであると思われるが，明確ではない。10の天井部は，一面に緑色自然釉が付着しているため，細部にわたる観察はできない。11の篦削り部分は水平であり，大きく傾斜して下がるため，口縁上の水平部分との間は階段状をなしている。篦削り部分の周縁には，斜めに回転篦削り調整がなされ，水平部分との間及び外側の水挽き・ヨコナデ部分との間は明瞭な稜を成す。この稜は，本類に属する3点の中では最も顕著なものである。内・外面とも入念にヨコナデ調整をし，ロクロ痕を消す。12は天井部が高く，丸味をもっている。ヨコナデされているが，外面には稜が残っている。

7は，AIII類に分類された。「かえり」の形態も10～12と異なっている。篦削り部分から口縁まで斜めに直線的に下がり，口縁端はひさしのように下がりながら突き出す。

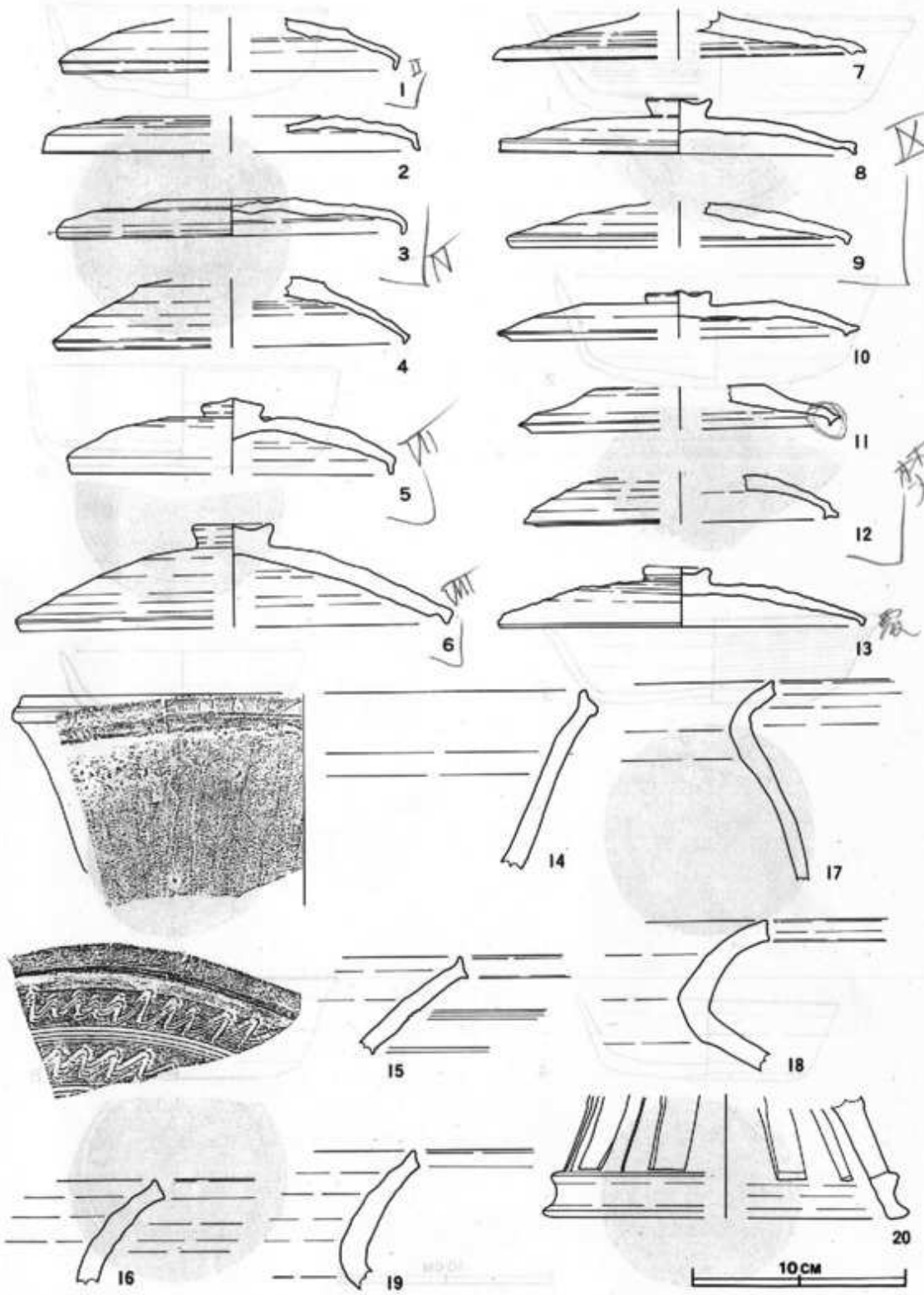
C_1I類とした4は，二次焼成を受けている。端折は小さく，断面三角形を呈する。天井部篦削り部分は，器肉が肥厚し，周縁は極めてシャープな稜を成している。内外面ともに，入念なヨコナデ調整を施し，整形されている。

C_1II類には，8と13がある。16は口縁外側に回転篦ナデBが施される。口縁内側にも工具があてられている。13の口縁内側にも工具が用いられている。天井部篦削り部分周縁の稜は弱いものである。

C_2群は多く，6点を数える。6はIII類で，他はII類である。1・3・5は端折が大きく垂下し，



第9図　A 4 号竈跡出土遺物実測図(1)



第10図　A 4 号窯跡出土遺物実測図(2)

A４号窯跡出土遺物解説表

図版	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
9 (1)	1	坏	A(18.0) B 4.6 F 11.9	体部は外傾しながら立ち上がる。	水挽き，ヨコナデ 体部内面下半に回転篦ナデB。底部，体部下端回転篦削り	不良 砂礫を含む 浅黄色	II 25%
〃	2	〃	A(15.0) B 5.3 F(12.5)	体部は外傾し外反して立ち上がり，口縁は内反する。 底部は丸味をおびる。 体部と底部の境界は明瞭な稜を有する。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良好 砂礫を含む 外 赤黒色 内 灰赤色	II Aifs 30%
〃	3	〃	A 16.1 B 4.1 F 10.7	体部は外傾しながら立ち上がる。(ゆがみにより一部口縁が外反する。)体部中段より厚味を減じて口縁に至る。	水挽き，体部外面の一部に回転篦ナデB。他はヨコナデ，底部体部下端回転篦削り	良好 砂礫を含む 灰白色	IV 95%
〃	4	〃	A 12.2 B 3.9 F 9.6	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。	水挽き 体部，底部内面周囲ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	IV 100%
〃	5	〃	A 12.8 B 4.3 F 9.0	体部はやや外傾気味に立ち上がる。 底部は切り離し時に抜け粘土を貼って修復したかのように見える。	水挽き，ヨコナデ 底部内面一部指ナデ 回転篦削り 静止篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	IV 100%
〃	6	〃	A 14.6 B 4.7 F 10.6	体部はやや外傾し直線的に立ち上がる。	水挽き 内，外面ヨコナデ 底部体部下端回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰白色	IV 焼台 30%
〃	7	〃	A 11.2 B 3.7 F 8.6	体部は外傾し，丸味をおびて立ち上がる。 底部内面の中央と周囲が凹む。	水挽き 体部ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	IV 100%
〃	8	〃	A(14.8) B 4.8 F 9.0	体部は外傾しながら立ち上がる。口縁はゆがみにより一部外反する。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り， 体部下端回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰白色	V 焼台 50%
10 (2)	1	蓋	A(15.6) J 2.5	天井から口縁へなだらかに下がる。端折の肩部は鋭い稜を成す。端折は大きい。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦り	不良 砂礫を含む 灰白色	II 20%
〃	2	〃	A(17.8) J 1.7	天井部篦削り端が最も高く，除々に口縁へ下がる。端折は大きく曲り方も緩やかである。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 明青灰色	IV 焼台 30%
〃	3	〃	A(16.0) J 1.8	天井部篦削り端が最も高く，口縁へなだらかに下がる。端折肩部はゆがんで丸味をおびる。 端折は大きい。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰白色	IV 焼台 55%
〃	4	〃	A(16.4) J 3.3	天井部の篦削り部分は半球に近く明瞭な突出部を経て口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 青灰色	VII 焼台 40%
〃	5	〃	A(15.5) B 3.6 H 3.0 I 1.0	つまみはa iii類。接合部は周囲よりもやや底くなる。篦削り端部からなだらかに口縁へ下がる。端折の肩部は明瞭な稜を成す。 端折は大きい。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰赤色 （天井部自然釉）	VII 焼台 25%
〃	6	〃	A(20.1) B 4.9 H 3.8 I 1.1	つまみはb ii類。 やや丸味のある天井部から口縁へ強い傾斜で下がる。口縁内側に１条の溝が走る。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良好 砂礫を含む 灰オリーブ色	VIII 30%
〃	7	〃	D(17.6) J 2.1	天井から口縁へなだらかに下がる。口縁は退化した「かえり」が見られる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良好 砂礫を含む 灰白色	II 25%

10 (2)	8	蓋	A(16.6) B 2.5 H 3.05 I 0.8	つまみはbII類。 天井部から口縁へなだらかに下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り 端折回転篦ナデB	良 砂礫を含む 灰白色	IX 60%
〃	9	〃	A(15.7) J 2.1	天井から口縁へなだらかに下がる。 口縁内側に一条の溝が周る。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良好 砂礫を含む 灰オリーブ色	IX 25%
〃	10	〃	D(15.7) B 2.2 H 3.1 I 0.7	つまみはbi類。 天井部は篦削り端が高く口縁へなだらかに下がる。 口縁には「かえり」が見られる。	水挽き，ヨコナデ 天井の回転篦削りは自然釉により不明瞭	良好 砂礫を含む 褐灰色 （天井部緑色自然釉）	焼口 PL.30
〃	11	〃	D(15.1) J 2.0	篦削り部は平坦で，水挽き部との境部は，明瞭な稜を成す。天井は高い。 口縁に「かえり」が見られる	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 褐灰色 （内面は緑色自然釉）	焼口(C層) 10%
〃	12	〃	D(14.5) J 2.8	天井が高く，丸味をもって口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰黄色 （内面は自然釉）	焼口(C層) 5%
〃	13	〃	A 17.2 B 2.7 H 3.2 I 0.7	つまみはbIII類。 天井部から口縁へゆるやかに下がる。 口縁内側には，端折部整形時についたと思われる傷が端折に沿って一周する。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良好 砂礫を含む 灰白色	覆土 60%
〃	14	甕	A(26.4) J 8.1	口縁外側は下方で張り出し，口唇部はやや内傾する。	巻き上げ 叩き後，外面縦方向の篦削り，内面横方向のナデ	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰白色	IV 焼台 口縁20%
〃	15	〃	J 4.6	強く外傾し，口縁下端と口唇はやや突出する。外面は波状文を配し，間に櫛状工具による三条の横線を施す。	巻き上げ 叩き後，内・外面横方向のナデ	良（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	VI
〃	16	〃	J 4.8	外反しながら立ち上がり，口唇はやや突出する。内面は凹凸が激しい。	巻き上げ 内・外面横方向ナデ	良（二次焼成） 砂礫を含む） 灰白色 外 自然釉	VI
〃	17	〃	J 9.4	頸部は「く」の字状に屈曲し，口唇はやや突出する。	巻き上げ 内・外面に叩き目 外 格子状 内 弧状	良 砂礫を含む にぶい黄褐色 内・外 自然釉	焼成窯
〃	18	〃	J 6.4	頸部は「く」の字状に強く屈曲し，接合部に叩き目を残す。	巻き上げ，横方向ナデ 肩部叩き 頸部接合	良 砂礫を含む 外 黒色 内 灰色	焼口(C層)
〃	19	〃	J 5.7	頸部は「く」の字状に屈曲し，口唇はやや突出する。	巻き上げ 横方向のナデ	不良 砂礫を含む 外 灰白色 内 灰黄色	覆土
〃	20	円面硯	F(17.2) J 5.7	2段の張り出しを設けた台上に10～12のすかし窓を切り開ける。 窓と窓の間には縦に1条の篦による筋を付す。	水挽き ヨコナデ	良好（一部・二次焼成） 砂礫を含む 橙色 褐灰色	焼口(C層) 灰原 焼台を含む

坏蓋ではない。いずれも篦削り部分の周縁に施された回転篦削りによって，つまみ側と口縁側に明瞭な稜を生じている。5は，つまみ接合部の内面が内側へ盛り上がり，頂部は静止篦削りにより調整されている。内面のヨコナデは入念ではなく，わずかに稜を残す。9とIII類の6は，口縁内側に工具があてられ，沈線を生じている。この沈線により，相対的に端折が大きくなったものであり，本来はC1群に分類されるべきものである。口縁外側には回転篦ナデBが施される。

甕・円面硯（10－14～20）

15～19は，外反する甕の口縁部。口縁の形態は，すべて単純である。19は波状文が施され，波状文の間には波状文を描く際に用いた櫛で横方向に櫛目が付される。

14は，甑に似た形と思われる。口縁の形態が他と異なり，口唇部がやや突出して内傾する。

20は，円面硯の脚部である。焚口に堆積する炭化材層から出土した破片と，灰原から出土した破片が接合されたものである。基部には2段の隆帯が見られる。スカシ窓は10～12か所あったらしい。窓の中間には，縦方向の刻みを入れている。

(5) 灰原（付図2　PL4・7）

① 灰原

本地点における灰原の範囲の確認は，A1号窯跡の下方及びA3号・A4号両窯跡間の下方に第1号・2号・3号トレンチを設定して行った。その結果，A4号窯跡下方からA1号窯跡下方まで，広い範囲に灰層が堆積しているのが認められ，最も厚い部分で0.6mを測った。灰層は谷底の斜面全体に堆積している。下方へ流れているが，調査エリアとの関係で限界を明確にできなかった。上方では，エリア外にも灰層が厚く堆積しているのが認められた。また，A4号窯跡の反対側斜面下には明褐色層の堆積が認められた。この土は，この付近では表土下に一般的に見られるもので，斜面下に見られた土層は明らかに掘り出されたものであることを意味する。このことから，斜面上方に窯跡が存在するものと判断される。

間層は1層を確認したが広がりが小さく，また，上述したように反対側斜面からの灰層の流れがあるため，灰原全域を間層によって分けることができなかった。したがって，本灰原の調査は，10cmを目安として堀り下げ，すべての遺物を実測・レベリングの後に取り上げた。

遺物は，堀り下げ毎におびただしい量の出土をみ，細片を含めて，総数で約2万点を数えた。上述したように層序が明瞭でなく，すべての遺物について編年的位置付けができないのは残念である。

② 遺物（11－1～24－6）

坏（11－1～14－9）

44点を示した。この中で底部を欠くもの（14－3～5），及び器形が他に比べて大きく異なるもの（14－2）は，今回の分類から除外した。

A I類（12－6・10，13－9）

いずれも底部の回転篦切り後，調整していないものである。2－6・3－9は，底部内面にヨコナデを施していない。体部は，いずれも入念にヨコナデ調整をしている。口縁は，やや外反す

る。

AII類(11－3・6～10, 12－4・5・7, 13－3・10・13, 14－6)

丸底状のもの(11－3・7・8・10, 12－7, 13－3)と平底状のもの(11－6・9, 12－4・5, 13－10・13, 14－6)があるが, 底部の整型に関する技法上の差は無い。13－13の底部中央に回転篦切りの痕跡を残すが, 他は底部全域に回転篦削りが施され, 切り離し技法は観察できない。体部は直線的に立ち上がるもの(11－3・6), ゆるく外反するもの(12－7, 13－3)及び口縁が外反するもの(12－4・5)がある。全体に入念にヨコナデされているが, 12－4は底部内面にはヨコナデが施されていない。13－3は体部外面の稜が顕著であり, 14－6も体部外面にわずかに稜が認められる。

AIII類(12－2, 13－2)

12－2は, 口径9.4cmと小ぶりである。体部は, やや外反する。13－2の体部は, やや内反気味で, 口縁外側に稜を有する。内面に回転篦ナデBによる沈線があるが, 全体に入念なヨコナデが行われているのは, 12－2と同じである。

底部は, いずれも多方向からの静止篦削りが行われている。

B$_1$II類(11－1・2・4・5, 12－1・11, 13－1・5・6・8・11・12)

12－1, 13－5・6はいずれも小ぶりな例である。底部内面及び体部外面は稜が認められないか極めて弱い。12－1, 13－6は内面は回転篦ナデBで調整され, 13－6はさらにヨコナデを施している。12－1, 13－5は, 底部中央に回転篦切り痕を残す。13－6は底部周囲に回転篦削りが施され, B$_2$に近い。

12－11, 13－1は体部が外反し, 他は直線的に口縁へのびている。11－1・2, 13－1は, 底部の中央に回転篦切り痕が見られる。

B$_2$II類(11－11, 12－3・8・9, 13－4, 14－1)

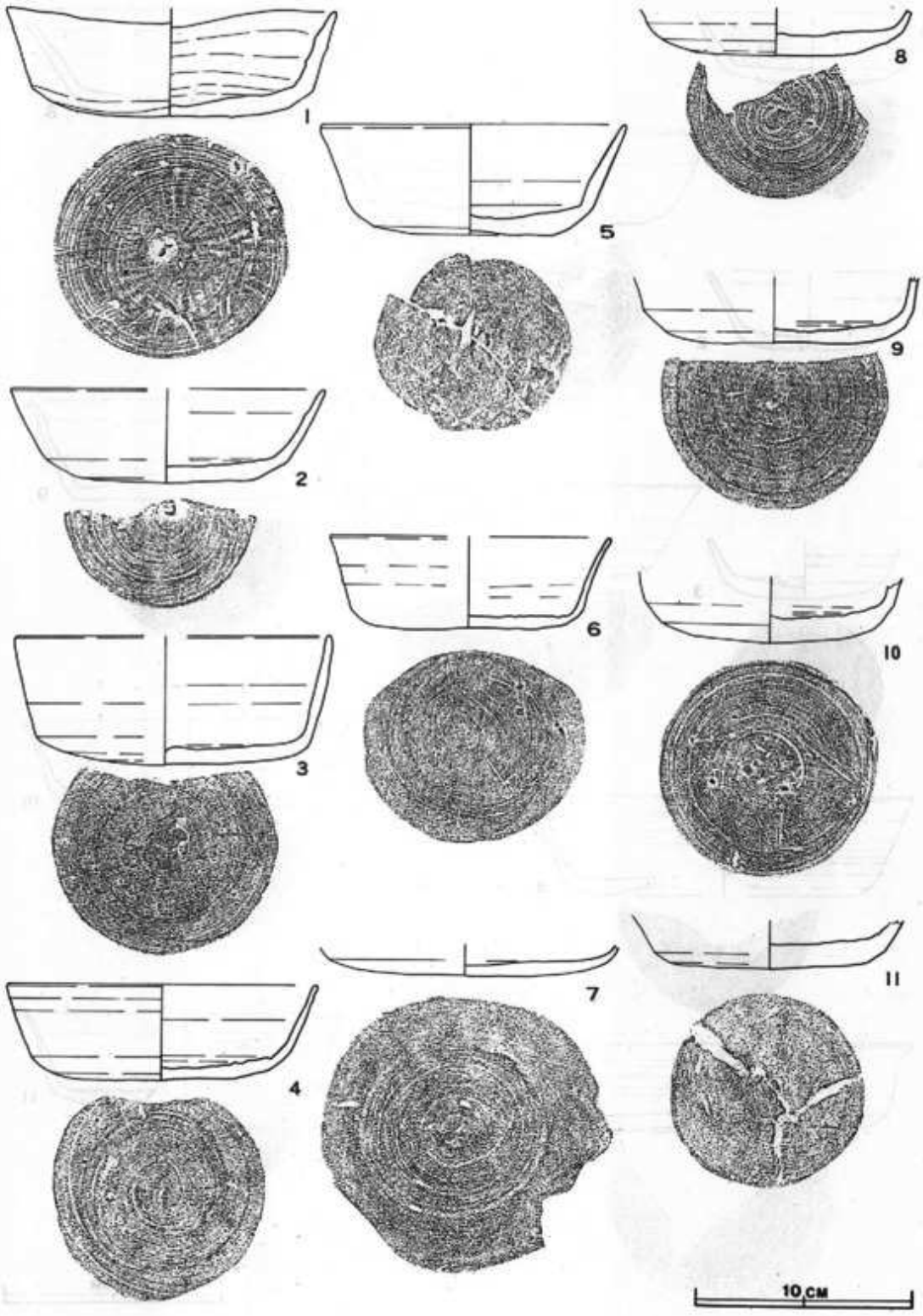
12－3は小ぶりである。底部内面の中心から$\frac{2}{3}$程度の範囲と, わずかに残る体部の外面に稜が認められ, 他は入念なヨコナデが施され, 底部の中央に回転篦切り痕を残している。

12－8・9の体部はやや外反するが, 他は内反気味の立ち上がりをしている。14－1は, 体部内面に回転篦ナデBが見られ, 沈線が3周する。13－4は, 体部内・外面の稜が明瞭であるが, 他はヨコナデにより, ほとんど稜が認められない。

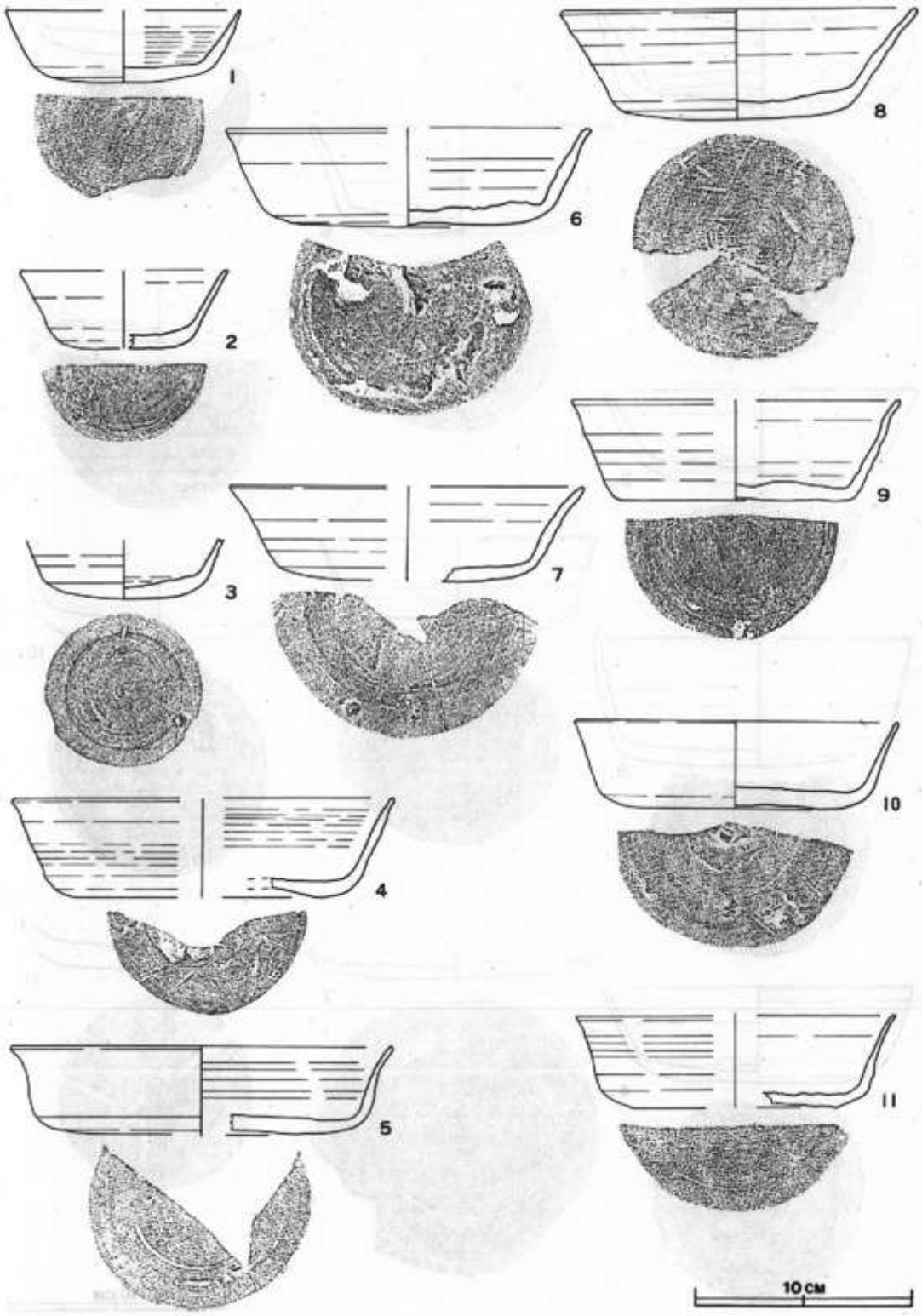
C$_2$III類(13－7, 14－8・9)

14－9の底部には, 回転篦切り痕が見られる。体部は, やや丸味をもって立ち上がり, 口縁で外反する。13－7の体部は口縁を欠くが, 残存部の特徴は14－9と一致する。両方とも, 内・外面はヨコナデによって弱い稜を残すのみである。

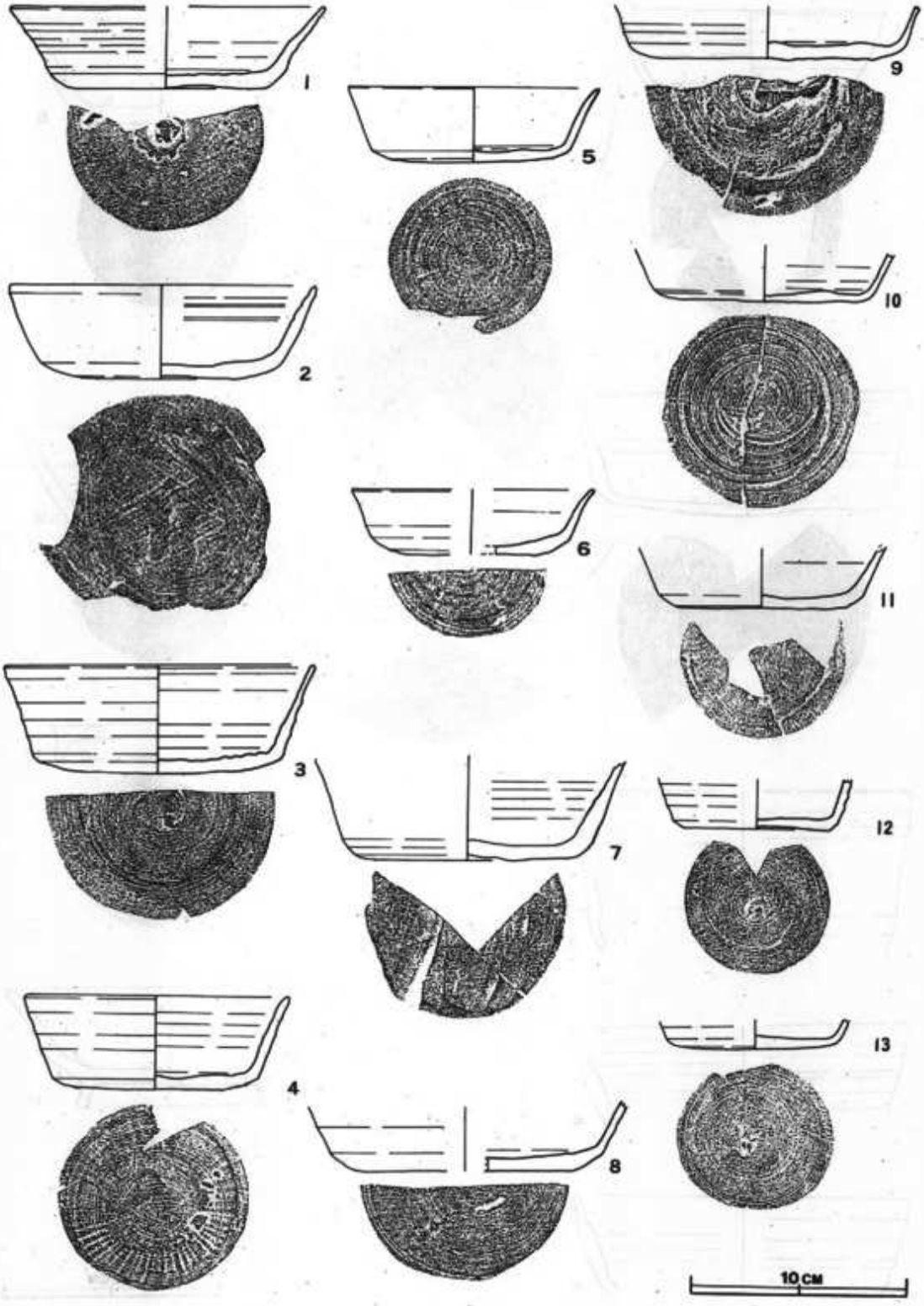
14－8は, 体部が強く外傾して立ち上がり, 口縁はやや外反する。外面の口縁上端と内面は入



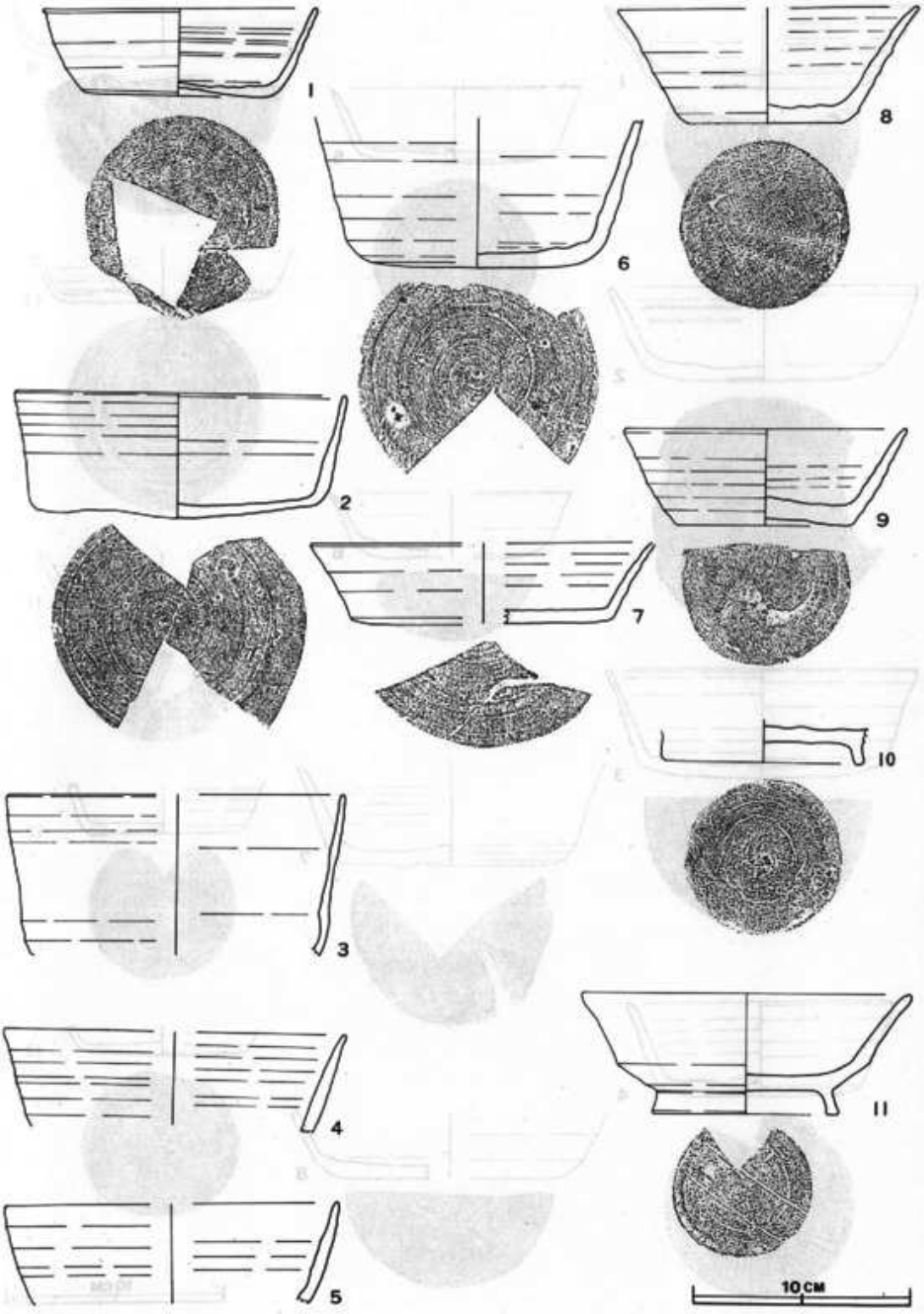
第11図　A地点灰原出土遺物実測図(1)



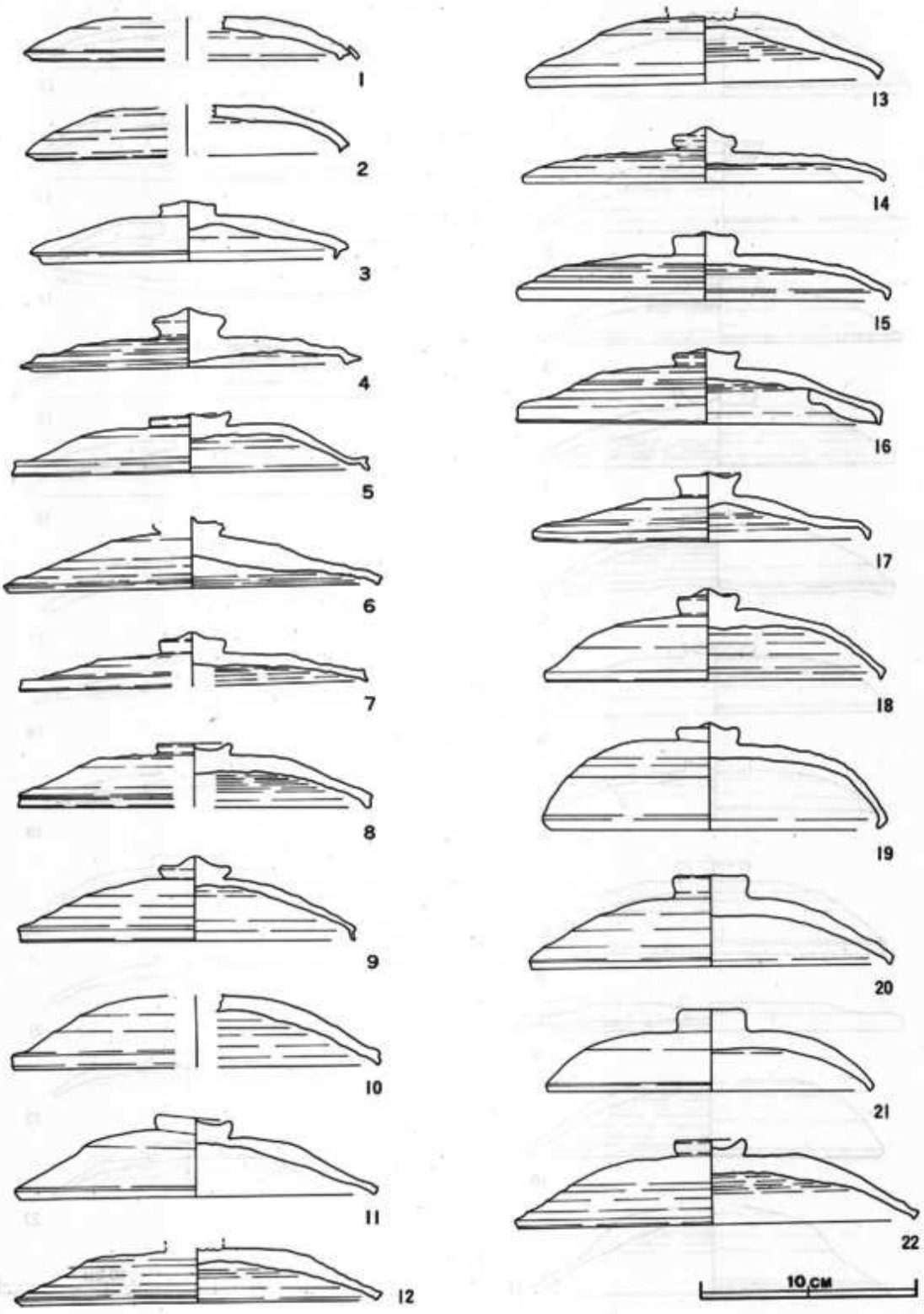
第12図　A地点灰原出土遺物実測図(2)



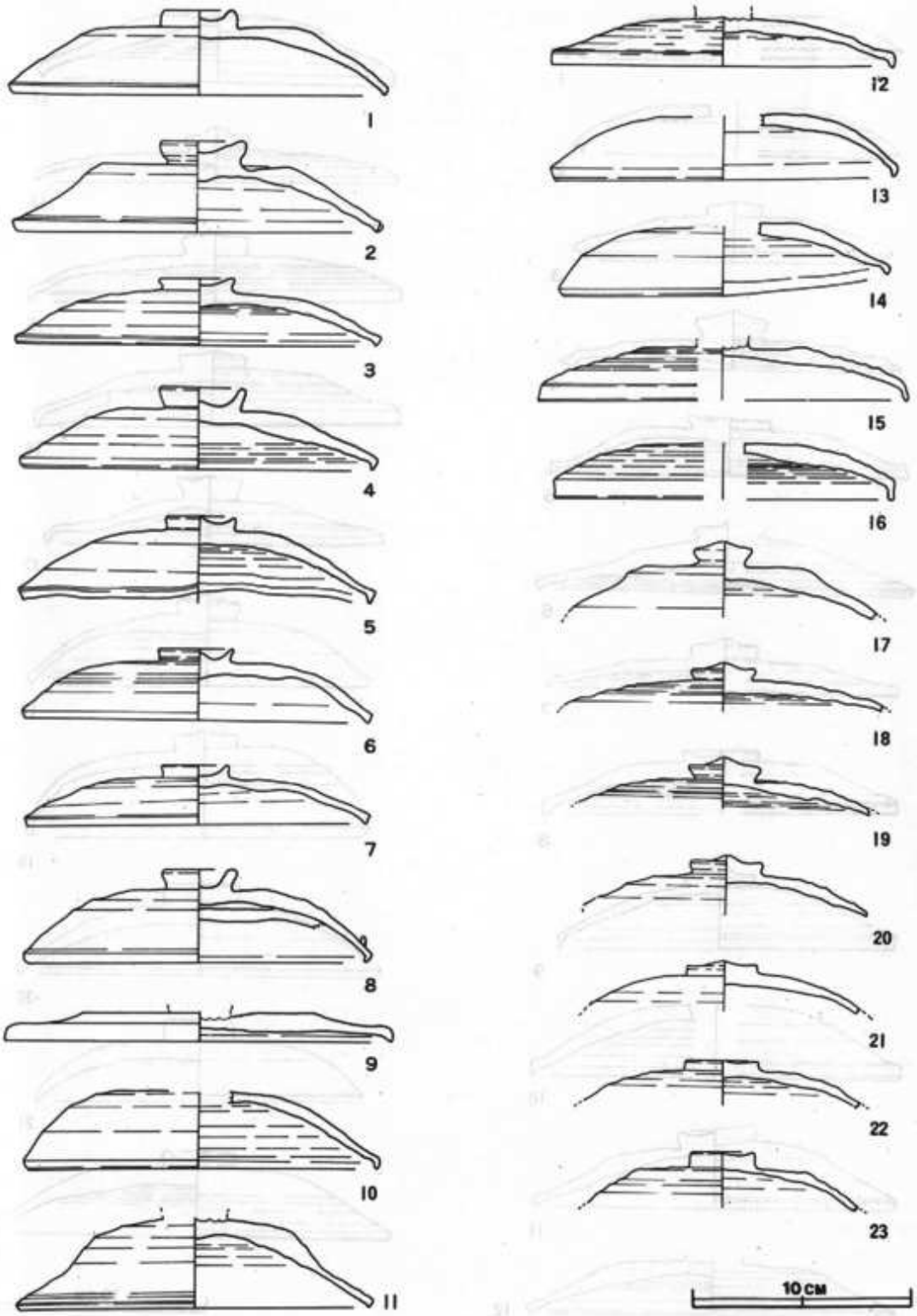
第13図　A地点灰原出土遺物実測図(3)



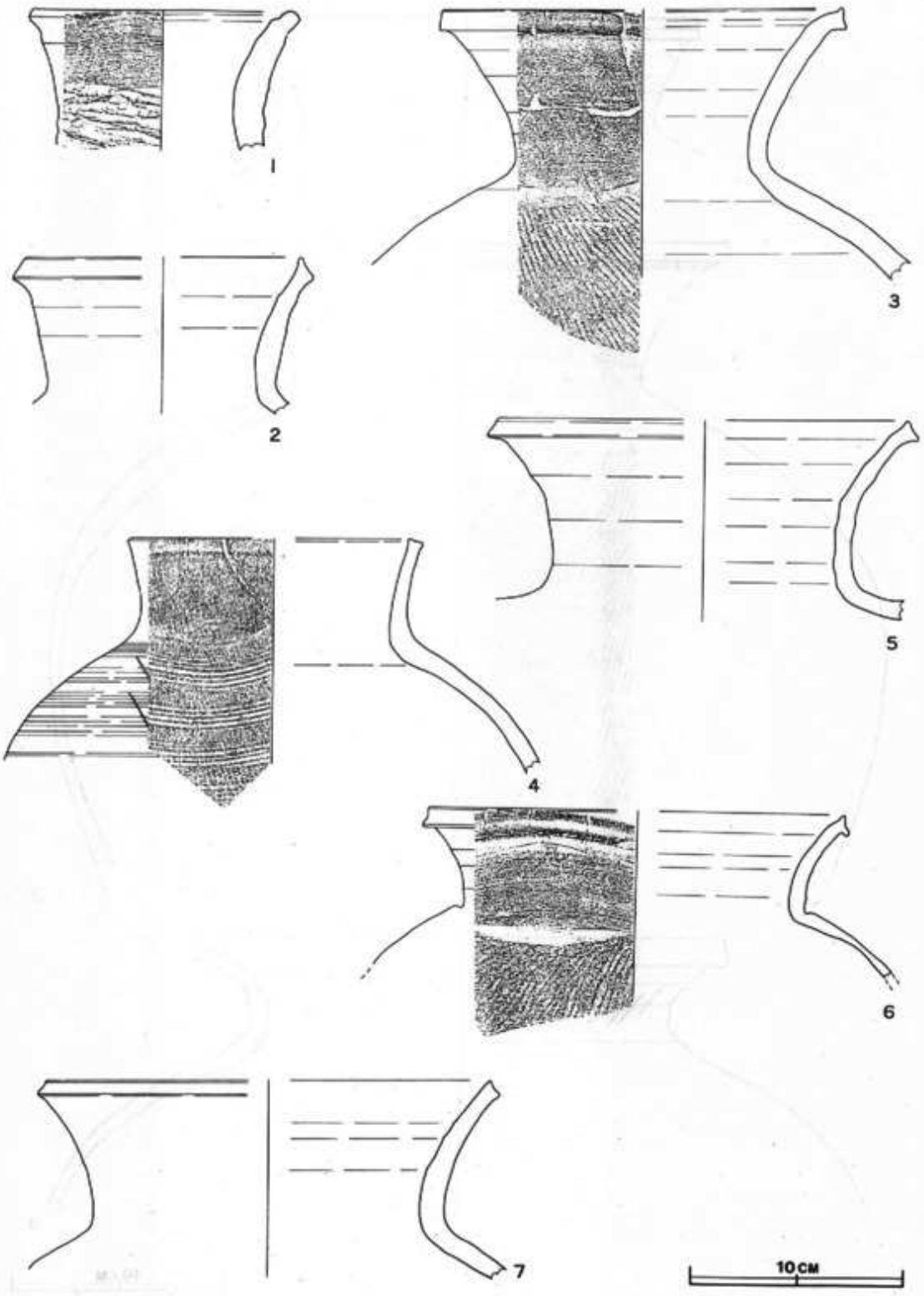
第14図　A地点灰原出土遺物実測図(4)



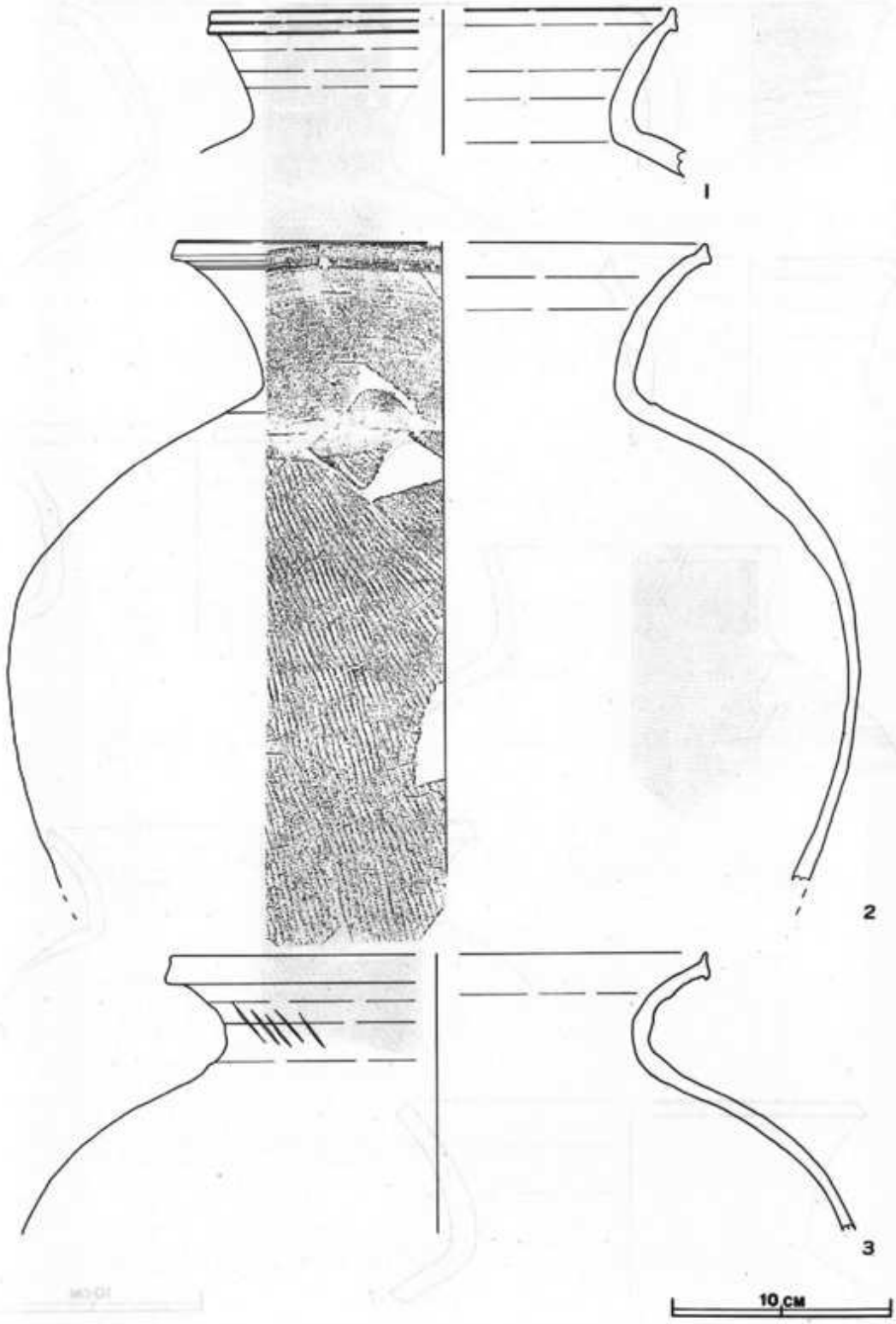
第15図　A地点灰原出土遺物実測図(5)



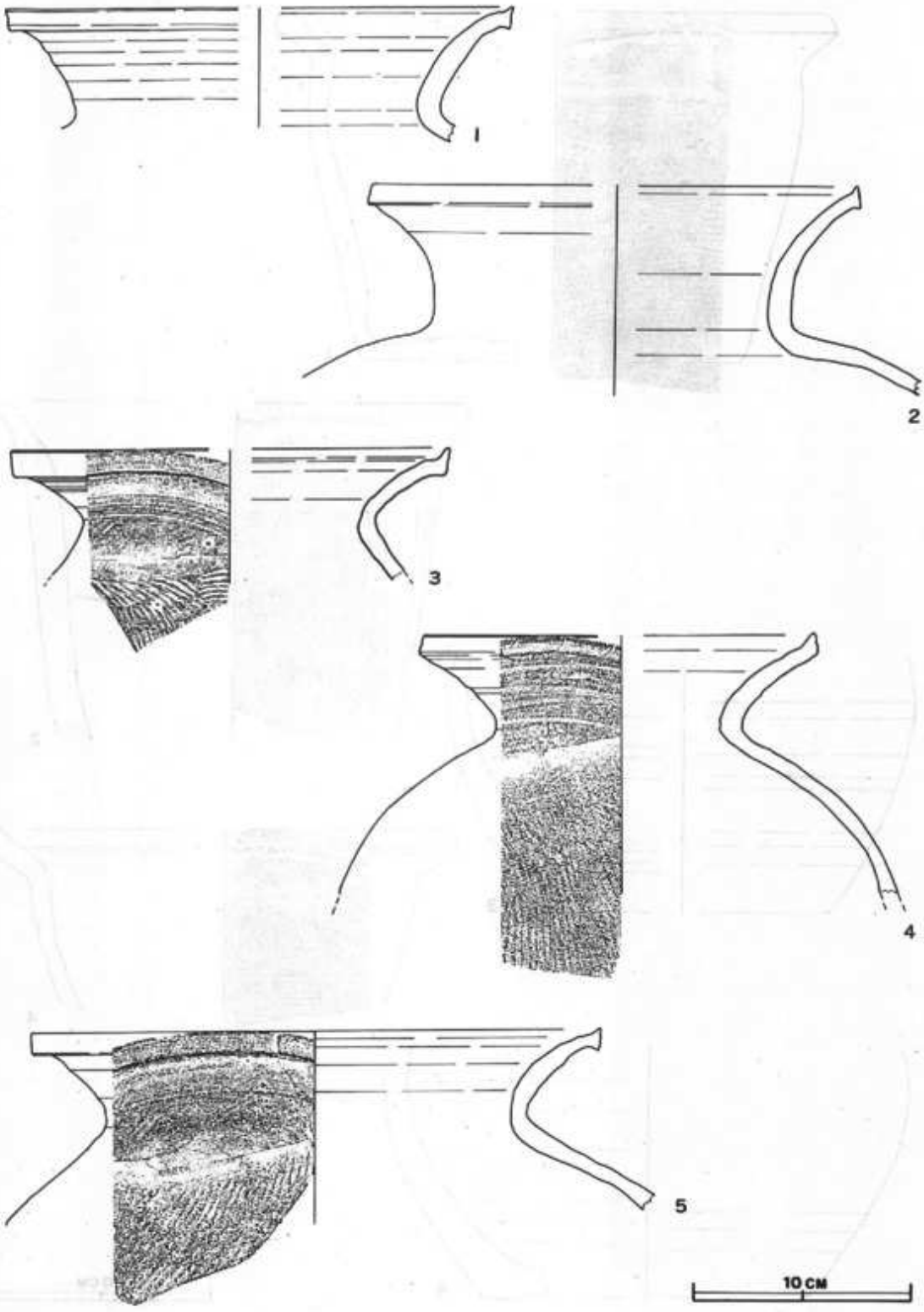
第16図　A地点灰原出土遺物実測図(6)



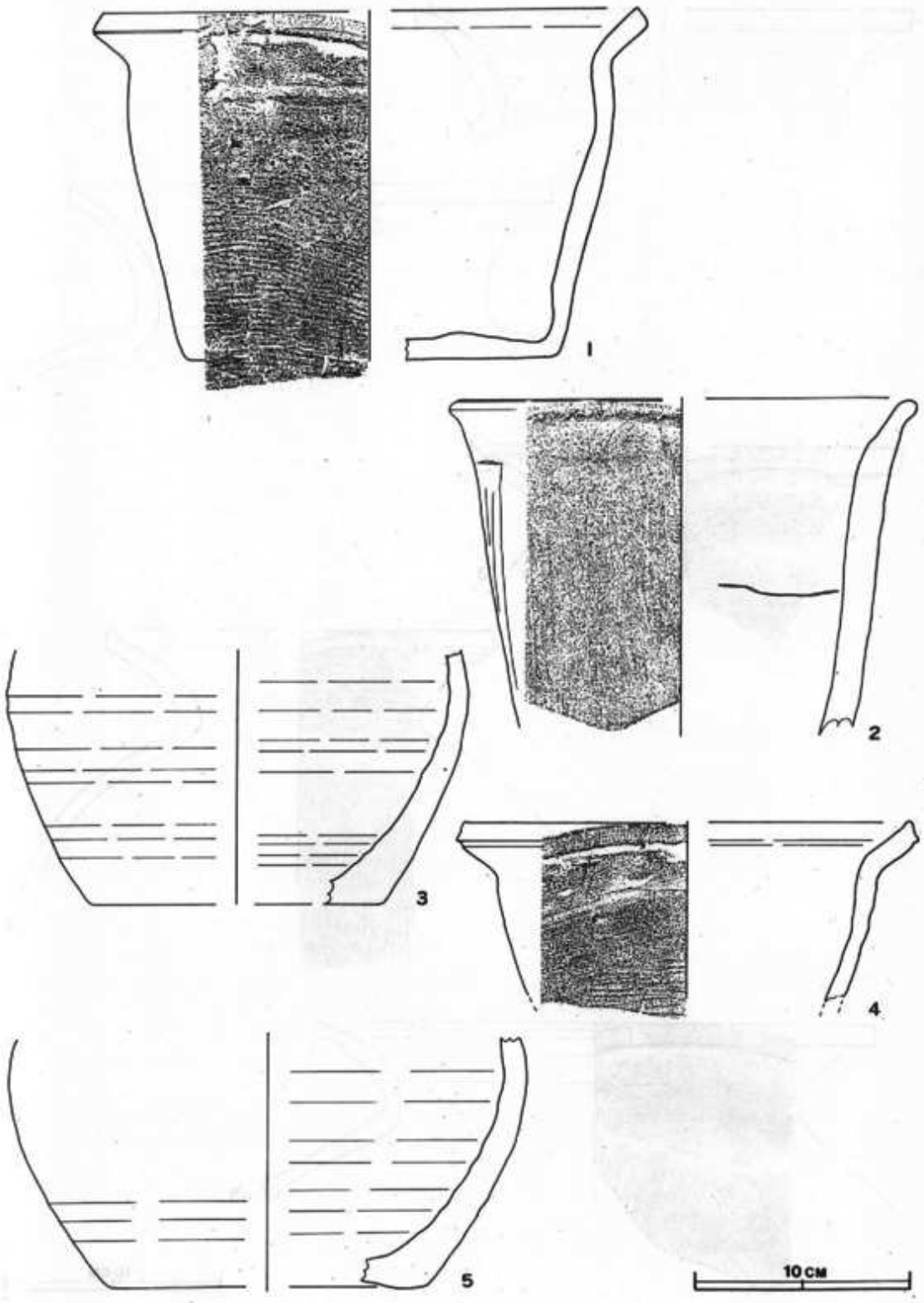
第17図　A地点灰原出土遺物実測図(7)



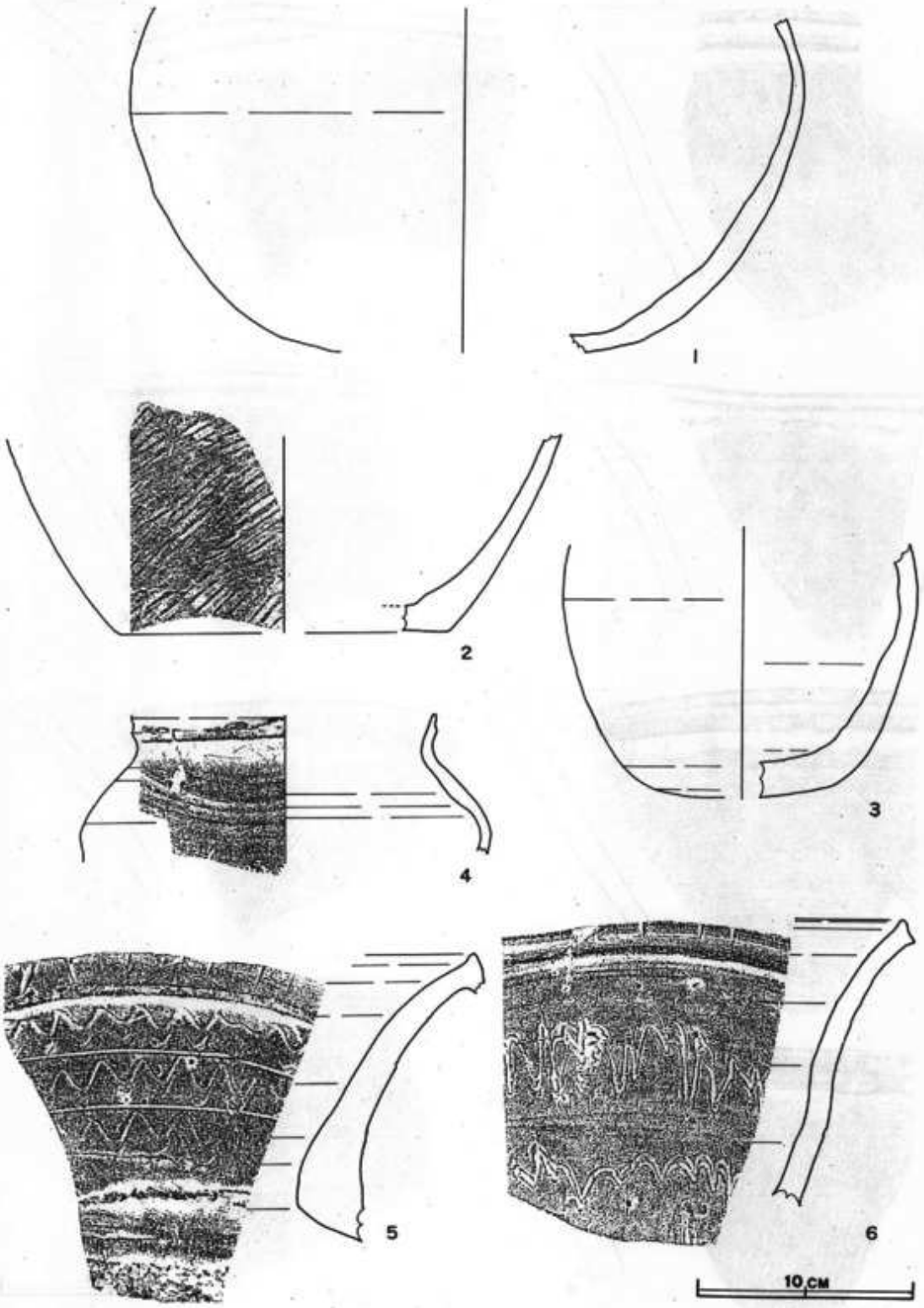
第18図　A地点灰原出土遺物実測図(8)



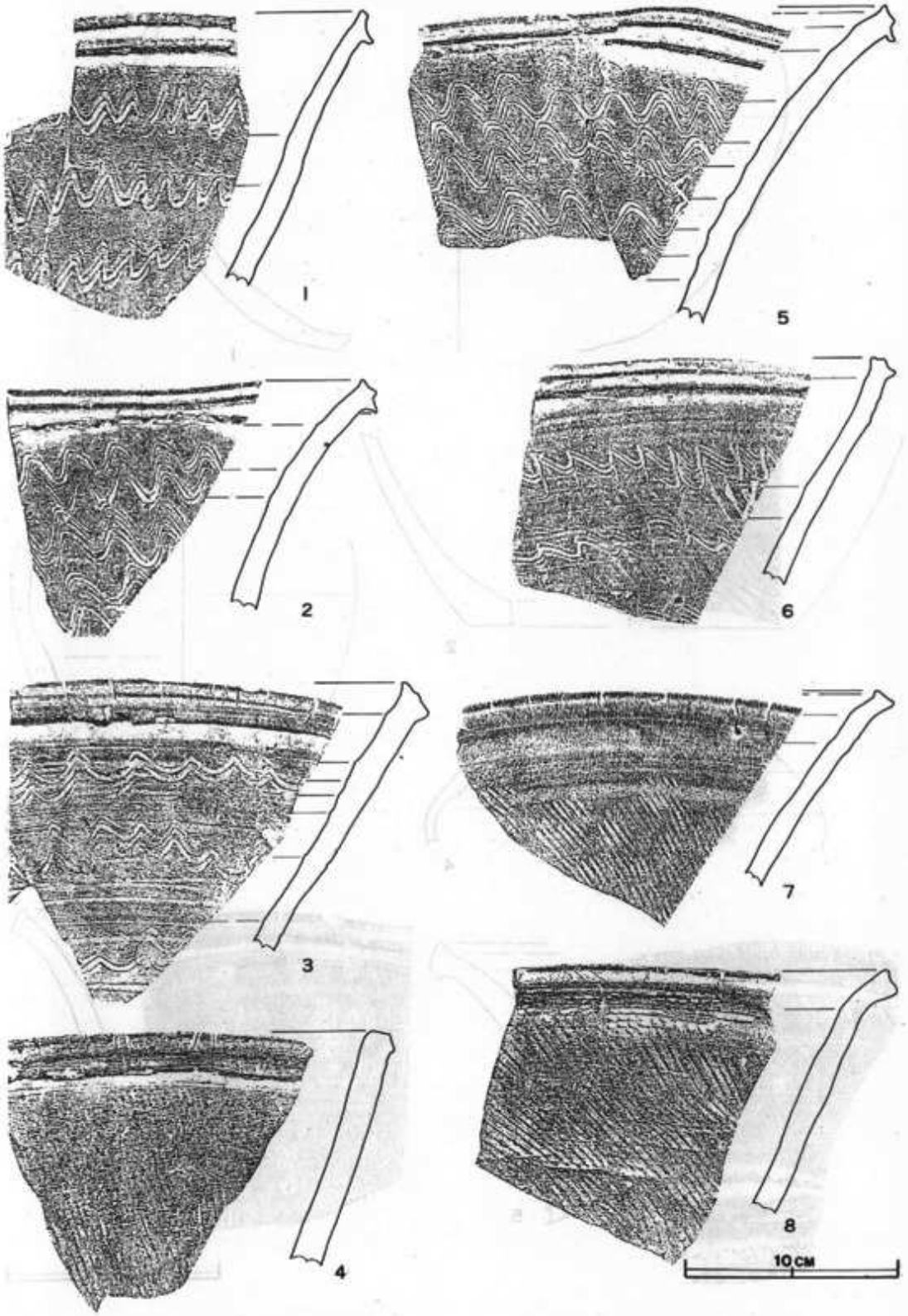
第19図　A地点灰原出土遺物実測図(9)



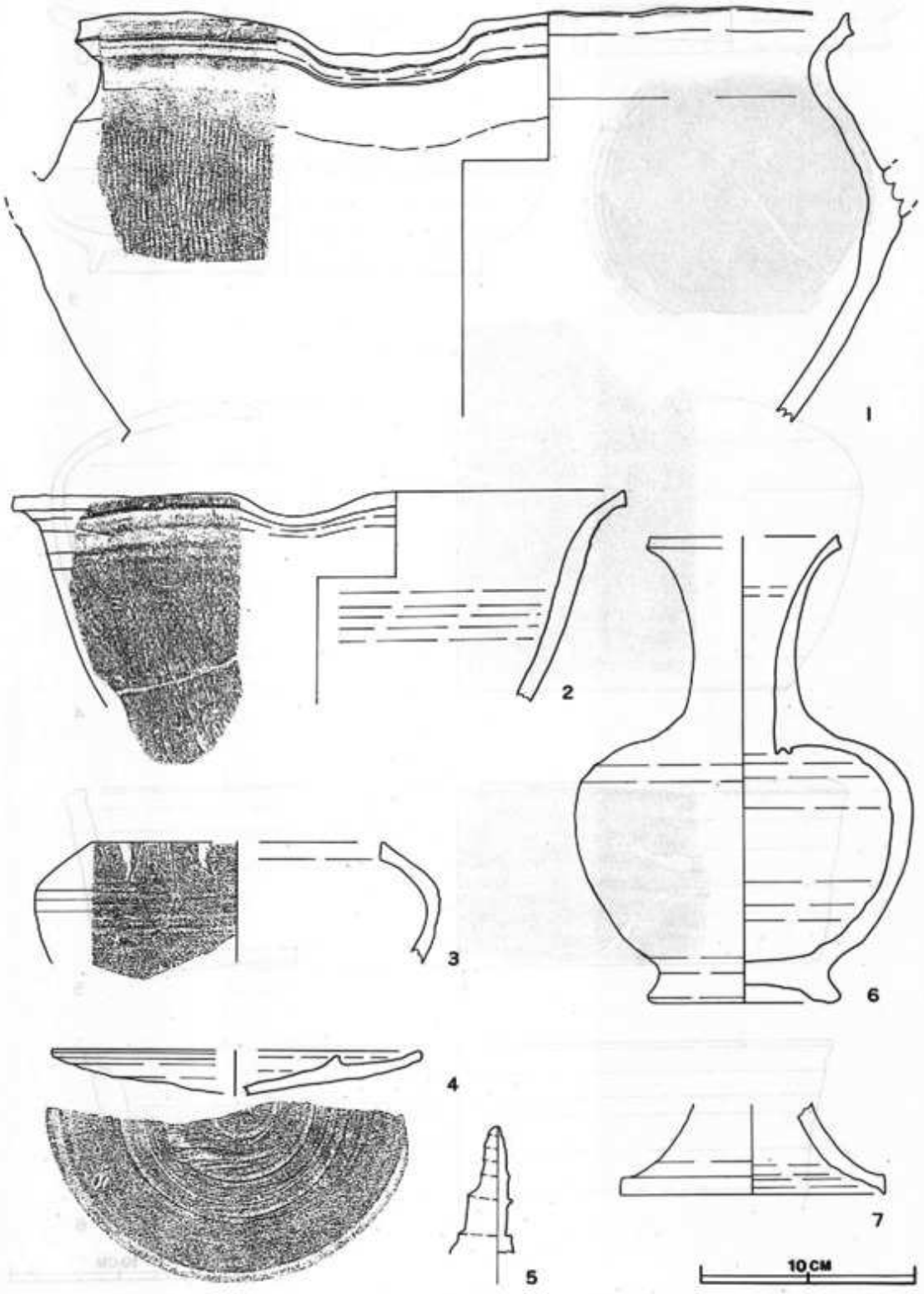
第20図　A地点灰原出土遺物実測図(10)



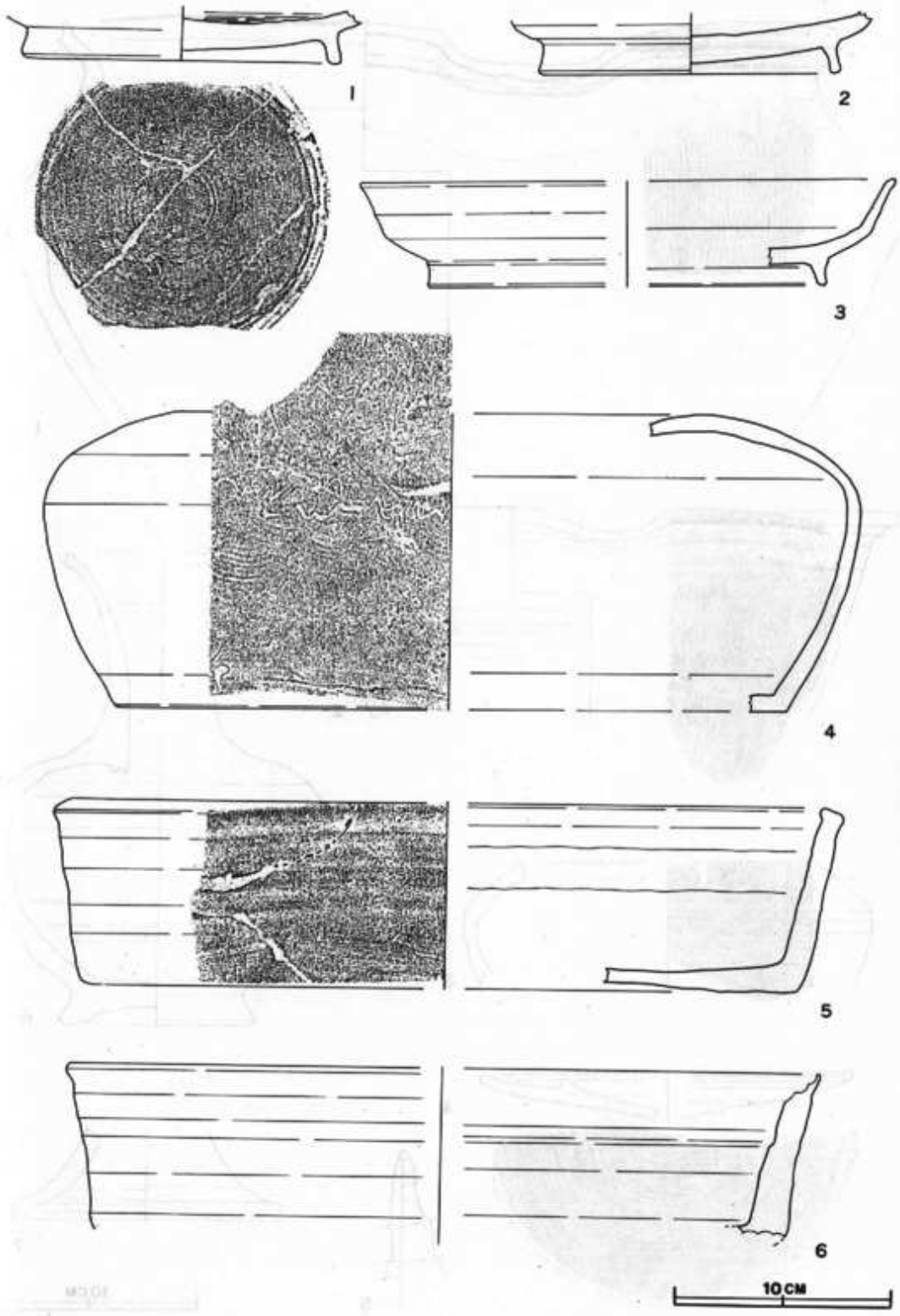
第21図　A地点灰原出土遺物実測図(1)



第22図　A地点灰原出土遺物実測図(2)



第23図　A地点灰原出土遺物実測図(3)



第24図　A地点灰原出土遺物実測図(4)

A地点灰原出土遺物解説表

図版	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
11 (1)	1	坏	A 15.2 B 5.0 F 13.0	体部は外傾し直線的に立ち上がる。やや厚手であるが，口縁は薄くなる。体部下端に稜が認められる。ゆがみが大きい。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良好 砂礫を含む 黄灰色	A 1f4 Ⅶ A 1es Ⅶ 90%
〃	2	〃	A(14.4) B 4.4 F (8.0)	体部は外傾し内反気味に立ち上がる。 体部下端は稜が見られる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	A 1c3 Ⅳ 30%
〃	3	〃	A(14.3) B 6.0 F(10.1)	体部はやや外傾して直線的に立ち上がり，口縁部はやや内反する。 底部は丸味をおびる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 外 暗灰黄色 内 にぶい黄橙色	17 S 20 35%
〃	4	〃	A(14.3) B 4.5 F 10.0	体部は外傾し直線的に立ち上がる。 体部下端は丸味をおびる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	A 1e5 Ⅶ 60%
〃	5	〃	A(13.6) B 5.15 F 9.0	体部は外傾してやや外反して立ち上がる。体部下端，外面は丸味をおびる。磨滅が著しい。	水挽き 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色 暗赤褐色	A 1c5 Ⅵ 40%
〃	6	〃	A(12.8) B 4.3 F(10.0)	体部は外傾しやや外反気味に立ち上がる。 体部下端は丸味をおびる。	水挽き 体部内外面，ヨコナデ 底部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色	A 1c4 Ⅶ 40%
〃	7	〃	F 7.9 J 1.6	体部は丸味をもって立ち上がるらしい。 体部下端は明瞭な稜を有さず底部との境界も不明瞭。底部に比して体部は薄い。磨滅が激しい。	水挽き 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	A 1d4 Ⅵ 30%
〃	8	〃	F 10.5 J 2.1	体部は薄く丸味をもって立ち上がる。 底部と体部は明瞭な境界を有さない。	水挽き，ヨコナデ 底部静止篦削り	良 砂礫を含む 灰色	A 1c4 Ⅴ 40%
〃	9	〃	F 10.2 J 3.0	体部はやや外傾して立ち上がる。体部下端に明瞭な稜が認められる。	水挽き，体部内外面 ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰黄色	A 1g3 Ⅳ 30%
〃	10	〃	F 9.7 J 3.1	体部はやや外傾して立ち上がる。体部下端には稜が見られる。底部は丸味をおびる。	水挽き，体部外面 ヨコナデ 体部下端回転篦ナデB 底部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色	A 1g1 Ⅶ 30%
〃	11	〃	F 8.9 J 2.3	体部は外傾して立ち上がるらしい。底部はやや丸味をおびる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 体部下端回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	A 1es Ⅶ 底部のみ
12 (2)	1	〃	A(10.6) B 3.55 F (7.7)	体部は外傾しやや内反気味に立ち上がる。 やや厚手で口縁は薄い。	水挽き，ヨコナデ 体部内面回転篦ナデB 底部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰色（内部白斑）	A 1f3 Ⅵ 30%
〃	2	〃	A (9.4) B 3.5 F (5.0)	体部は外傾し直線的に立ち上がる。 底部はやや丸味をおびる。	水挽き，ヨコナデ 底部静止篦削り	良好 砂礫を含む 外 灰色 内 黄灰色	A 1g4 Ⅵ 45%
〃	3	〃	F 5.4 J 2.7	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。底部はやや丸味をおびる。体部下端は篦削りにより稜が認められる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 体部下端回転篦削り	不良 砂礫を含む 外 にぶい橙色 内 明オリーブ灰色	A 1f4 Ⅶ 50%
〃	4	〃	A(17.8) B 4.6 F(12.7)	体部下部はやや突出する。口縁部は薄くなり外反気味。体部下端は丸味をおびる。	水挽き，体部内・外面口縁部，ヨコナデ 底部回転篦切り 静止篦ナデA	良 砂礫を含む 灰色	A 3c4 Ⅷ 40%

12 (2)	5	坏	A(17.6) B 4.1 F(12.8)	体部はやや外傾して立ち上がり，上半は外反する。 体部下端は丸味をおびる。	水挽き，体部外面ヨコナデ 底部回転篦削り	良 砂礫を含む 黄灰色	A lf4 Ⅷ 50%
〃	6	〃	A(16.5) B 4.6 F(10.8)	体部は外傾し口縁部はやや外反する。 体部下端は丸味をおびる。	水挽き，体部内外面ヨコナデ 底部回転篦切り	良 砂礫を含む 灰白色	A lg4 Ⅲ Ⅵ Ⅷ 50%
〃	7	〃	A(16.4) B 4.4 F (9.8)	体部は外傾して立ち上がり，上半は外反する。 体部下端は丸味をおびる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	A lf4 Ⅷ 35%
〃	8	〃	A 16.0 B 5.1 F 10.3	体部は外傾して立ち上がり，上半はやや外反する。	水挽き，内外面ヨコナデ 底部体部下端回転篦削り	不良 砂礫を含む 外 浅黄色 内 淡黄色	A lc3 Ⅳ A le4 Ⅵ Ⅷ A lf4 Ⅷ 50%
〃	9	〃	A(15.0) B 4.6 F(11.0)	体部は外傾して立ち上がる。頸部はやや内反して口縁部は外反する。 内外面付着物	水挽き，体部内外面ヨコナデ 底部回転篦削り	良 砂礫を含む 黄灰色	A le5 Ⅷ 35%
〃	10	〃	A(14.6) B 4.1 F (9.9)	体部は外傾し，外反気味に立ち上がる。厚味は口縁に近付くにしたがって薄くなる。 体部下端は丸味をおびる。	水挽き，体部内外面ヨコナデ 底部回転篦切り	不良 砂礫を含む 灰色 灰白色	A lc3 Ⅷ 35%
〃	11	〃	A(14.6) B 4.2 F (9.4)	体部は外傾し，口縁はやや外反する。 体部下端に稜が認められる。	水挽き，体部内面ナデ 外面ヨコナデ 底部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰色	A lf5 Ⅷ 30%
13 (3)	1	〃	A(14.4) B 3.8 F (9.2)	体部は外傾して立ち上がり，上半は更に外傾する。 体部は下端に稜が認められる。	水挽き，体部内外面ヨコナデ 底部回転篦削り	良（二次焼成） 砂礫を含む 灰白色	A lf5 Ⅴ 40% 焼台
〃	2	〃	A(14.2) B 4.2 F (7.6)	体部は外形し直線的に立ち上がる。 体部下端は丸味をおびる。 口縁外側に稜が認められ，内面は篦ナデBによる沈線が3周する。	水挽き，ヨコナデ 底部静止篦削り 体部内面回転篦ナデB	不良 砂礫を含む 橙色	A lg4 Ⅵ 60%
〃	3	〃	A (14.2) B 5.1 F(10.8)	体部は外傾し，やや外反気味に立ち上がる。口縁内側には凹部が一周したらしく口縁付近を内反させようとしたものと思われる。	水挽き，体部内面ヨコナデ，底部内面周囲回転篦ナデB 底部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰色	A lg4 Ⅷ 50%
〃	4	〃	A(12.0) B 4.4 F 8.4	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。 口縁部はやや外反する。体部下端には篦削りに伴う明瞭な稜が認められる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 体部下端回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色 （内部緑色自然釉）	24 S 02 A le4 Ⅵ Ⅶ e5 Ⅳ A lf4 Ⅵ70%
〃	5	〃	A 11.4 B 3.5 F 7.5	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。体部下端に稜が認められる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	A lf5 Ⅴ 70%
〃	6	〃	A(11.2) B 3.1 F (7.4)	体部は外傾し，口縁はやや外反する。 体部下端に稜が認められる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良 砂礫を含む 外 灰白色 内 灰黄色	A le4 Ⅷ 45%
〃	7	〃	F(10.2) J 4.7	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。 体部下端は丸味をおびる。	水挽き，ヨコナデ 底部静止篦削り	良 砂礫を含む 灰色	A lf4 Ⅵ Ⅷ 35%
〃	8	〃	F(10.0) J 3.3	体部は外傾して立ち上がる。 体部下端に稜が認められる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	A lg4 Ⅳ 30%
〃	9	〃	F 10.0 J 2.4	体部は薄く外傾する。 やや外反するらしい。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り	不良 砂礫を含む 灰白色	A lf4 Ⅷ 底部¾

13 (3)	10	坏	F (6.6) J 2.3	体部は外傾して立ち上がる。 体部下端は丸味をおびる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰色	A 1e4 Ⅵ 35%
〃	11	〃	F 7.8 J 2.8	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。 体部下端に稜が認められる。	水挽き，体部内面 ヨコナデ 底部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色（内部緑色自然釉）	A 1e4 Ⅶ A 1f5 Ⅷ 30%
〃	12	〃	F 6.75 J 2.3	体部はやや外傾し，直線的に立ち上がる。 体部下端に稜が認められる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部回転篦削り	良 砂礫を含む にぶい赤褐色	A 1g4 Ⅵ，Ⅶ 40%
〃	13	〃	F 7.0 J 1.2	体部は外傾して立ち上がる。 体部下端は丸味をおびる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 外 灰赤色 内 灰色	A 1f4 Ⅴ A 1f5 Ⅴ 30%
14 (4)	1	〃	A 12.5 B 4.1 F 8.8	体部は外傾し，内反気味に立ち上がる。 体部下端はやや丸味をおびる。	水挽き，ヨコナデ 体部内面回転篦ナデB 底部回転篦削り	良好 砂礫を含む 外 オリーブ黒色 内 灰色	A 1e4 Ⅶ A 1f4 Ⅵ A 1g4 Ⅵ 65%
〃	2	〃	A 15.2 B 4.8 F 13.1	体部はやや外傾し，口縁は内反気味である。 体部下半はやや肥厚し，底部は比較的薄い。	水挽き，ヨコナデ 体部内面回転篦ナデB 底部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色	17 S 20 70%
〃	3	〃	A(15.5) J 7.5	体部は内反しながら立ち上がり，上半はやや外傾し，直線的である。 口唇は丸い。	水挽き，ヨコナデ	良 砂礫を含む 外 灰白色 内 灰色	A 1e4 Ⅵ，Ⅶ 体部1/4
〃	4	〃	A(15.8) J 4.5	体部は外傾し，口縁部はやや外反する。 体部下半は肥厚するが，口縁で厚味を減ずる。	水挽き，ヨコナデ 内面回転篦ナデB	良 砂礫を含む 外 暗青灰色 内 青灰色	17 S 20 A 1g4 Ⅵ 30%
〃	5	〃	A(15.5) J 4.7	体部は外傾し，内反しながら立ち上がる。 やや厚手であるが，口縁部では，厚味を減ずる。	水挽き，ヨコナデ	良 砂礫を含む 外 灰色 内 灰白色	A 1g4 Ⅵ 30%
〃	6	〃	F 9.8 J 6.9	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。 体部下端は，丸味をおびる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良（二次焼成） 砂礫を含む 灰白色（内面緑色自然釉）	A 1e4 Ⅵ A 1d4 Ⅴ A 1e4 Ⅶ 40%
〃	7	〃	A 13.9 B 3.8 F 11.2	体部は外傾し，やや外反しながら，立ち上がる。 全体に薄手である。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色	A 1e4 Ⅶ 30%
〃	8	〃	A(13.8) B 5.3 F 7.2	体部は外傾し，上半は外反する。底部周囲には使用痕と思われる磨滅がある。	水挽き，ヨコナデ 底部静止篦削り	良 砂礫を含む 黄灰色	A 1f4 Ⅳ A 1g4 Ⅲ 60%
〃	9	〃	A(13.0) B 4.5 F (8.1)	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。 口縁部はやや外反気味。 全体に厚手。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 静止篦削り	良好 砂礫を含む 灰褐色	A 1e4 Ⅳ 40%
〃	10	高台付坏	E 9.3 J 1.2	高台はやや外へ開き，高台底には使用痕と思われる磨滅がある。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	良 砂礫を含む 灰褐色	A 1g4 Ⅴ 底部（高台部）のみ
〃	11	〃	A(15.0) B 5.6 E 8.6	体部は外傾し，やや外反する。高台はやや外へ開き高台底に使用痕と思われる磨滅がある。底部線刻号。	水挽き，ヨコナデ 底部回転削り 高台接合	良 砂礫を含む 褐灰色	A 1f5 Ⅱ，Ⅴ 60%
15 (5)	1	盤	D(14.2) J 2.0	天井から丸味をもって口縁へ下がる。 内・外面自然釉，内面付着物。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色（黄色自然釉）	14 S 2 A 1g4 Ⅲ 35%

15 (5)	2	壺	D(14.0) J 2.3	天井部回転篦削り範囲は，やや吸り上がり，丸味をもって口縁へ下がる。口縁には「かえり」が見られる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り 内面口縁に自然釉	良好（二次焼成） 砂礫を含む 外 灰白色 内 灰赤色	11S12 30%
〃	3	〃	B 2.8 D(13.5) H 2.6 I 0.7	天井部からなだらかに口縁へ下がる。 口縁には「かえり」が見られる。 つまみはa'i類。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削りは自然釉により不明瞭	良（二次焼成） 砂礫を含む 灰白色（外面黄色自然釉）	A1f4 V 50%
〃	4	〃	D(14.5) B 2.8 H 3.8 I 1.4	つまみはai類。天井部篦削り部は平坦。 口縁へ段を経て下がり，口縁はやや突出する。「かえり」が見られる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 外 灰白色 内 褐灰色	A1f4 Ⅷ 40%
〃	5	〃	A(16.6) B 2.7 H 3.2 I 0.6	つまみはbi類。天井部篦削り。端がやや張る。口縁は突出し，外方に突き出す。 端折先端と共に2段に見える。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	A1g3 Ⅳ 55%
〃	6	〃	D(17.2) B 3.3	つまみはbi類であるが，一部欠損。天井はやや高い。口縁に「かえり」の痕跡。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	A1f5 Ⅷ 70%
〃	7	〃	A(16.2) B 2.5 H 3.0 I 1.0	つまみはaii類。篦削り部は水平に近く直線的に口縁に下がる。端折の先端が外方へ突き出す。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 外 赤灰色 内 にぶい黄橙色	A1g4 Ⅵ 45%
〃	8	〃	A(16.2) B 3.0 H 3.4 I 0.6	つまみはbii類。篦削り部は平坦でなだらかに口縁へ下がる。口縁の端折は先端が外方へ傾き，2段に見える。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む オリーブ黄色	A1e4 Ⅵ 焼台 40%
〃	9	〃	A 15.4 B 3.9 H 3.3 I 1.1	つまみはaii類。天井部は丸味をおび，口縁は突出する。端折はやや大きく，先端は外方へ屈曲する。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	A1e4 Ⅶ 60%
〃	10	〃	A(16.8) J 3.4	天井部は高く，口縁へ丸味をもって下がる。口縁は端折が外方へ突き出し2段に見える。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色	A1f5 Ⅲ 45%
〃	11	〃	A 16.8 B 3.9 H 3.6 I 0.8	つまみはbii類。 天井篦削り部は丸味をおびる。篦削り端から急に低くなり，更になだらかになって口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 淡橙色	A1f4 Ⅶ 90%
〃	12	〃	A 16.6 J 2.6	つまみ欠損。天井篦削りの部分はほぼ平坦で高く，口縁へ急な傾斜で下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	A1e4 Ⅷ 90%
〃	13	〃	A 16.3 J 3.1	つまみ欠損。天井部は高い。篦削り部から急に低くなり，更になだらかに口縁へ下がる。端折は先端が外方へ屈曲する。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 外 灰色 内 浅黄色	15S17 12S12 80%
〃	14	〃	A(16.6) B 1.6 H 2.8 I 1.1	つまみはaii類。天井部からなだらかなカーブを描いて口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	A1e4 Ⅶ 50%
〃	15	〃	A(17.2) B 3.2 H 2.9 I 1.1	つまみはaiii類。天井頂部は平坦であり，なだらかに口縁へ下がる。	水挽き，内面ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色	17S20 50%
〃	16	〃	A(16.8) B 3.5 H 3.1 I 0.8	つまみはaiii類。天井篦削り部は平坦で，削り端からなだらかに口縁へ下がる。 端折はやや大きい。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	23SO4 80%
〃	17	〃	A 15.4 B 3.2 H 3.0 I 1.2	つまみはbi類。 天井部篦削りの範囲が少し高まる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰色	A1f5 Ⅳ 95%

15 (5)	18	蓋	A 15.6 B 4.3 H 2.8 I 1.2	つまみはbi類。全体に丸味をもって口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色	17S20 60%
〃	19	〃	A(15.8) B 5.0 H 2.9 I 1.0	つまみはbi類。全体に丸味をもって口縁へ下がる。端折は内側へ傾く。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 黄灰色	A lg4 Ⅷ 60%
〃	20	〃	A(16.7) B 4.3 H 3.6 I 1.2	つまみはa'ii類。 天井部篦削り端は丸味をもち，口縁部へ直線的に下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む にぶい黄橙色	A le4 Ⅷ 50%
〃	21	〃	A(15.0) B 3.8 H 3.2 I 1.0	つまみはa'ii類。 天井部から口縁へ丸味をもって下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰黄色	A lg4 Ⅵ 50%
〃	22	〃	A(18.5) B 3.9 H 3.2 I 0.8	つまみはbiii類。 篦削り端部は丸味をもち，直線的に口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 外 灰黄色 内 浅黄色	26S22 60%
16 (6)	1	〃	A 17.5 B 3.9 H 3.2 I 0.9	つまみはbii類。 平坦な天井部の篦削り端部から直線的に口縁へ下がる。表面磨滅。	水挽き， 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	A lf5 Ⅷ 90%
〃	2	〃	A 16.9 B 4.3 H 4.0 I 1.3	つまみはbiii類。天井の篦削り端部が張り大きく傾斜して口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	14S16 80%
〃	3	〃	A 16.8 B 3.2 H 3.5 I 0.7	つまみはbiii類。天井部から口縁へなだらかに下がり口縁はわずかに突出する。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	A lf4 Ⅶ，Ⅷ 90%
〃	4	〃	A 16.5 B 3.8 H 4.0 I 1.1	つまみはbii類。 篦削り端は丸味を有し，なだらかに口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色	17S20 90%
〃	5	〃	A 16.4 B 4.0 H 3.1 I 0.6	つまみはbii類。 天井部は丸味をもち口縁端折はやや大きい。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	A lf5 Ⅳ 85%
〃	6	〃	A 16.1 B 3.3 H 3.5 I 0.7	つまみはbii類。 天井部は平坦で口縁へ丸味をもって下がる。篦削り部は広い。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 外 灰黄色 内 灰黄褐色	A ld4 Ⅵ 70%
〃	7	〃	A 15.9 B 2.8 H 3.1 I 0.6	つまみはbiii類。 天井は平坦である。篦削り端部よりなだらかに口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	A ld4 Ⅷ 90%
〃	8	〃	A(16.0) B 4.3 H 3.4 I 1.0	つまみはbiii類。 天井部は高く，丸味をもって口縁へ下がる。内面坏底部付着。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色	A lg4 Ⅷ 50%
〃	9	〃	A(17.9) J 1.3	天井中央部が低く，篦削り端部が最も高い。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰色	A lf4 Ⅷ 60%
〃	10	〃	A 16.4 J 3.7	やや高い天井から丸味をもって口縁へ下がる。 端折はやや内傾気味。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色	17S20 65%
〃	11	〃	A 16.4 J 4.2	天井が高く篦削り端部が張る。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	A lf4 Ⅷ 70%

16 (6)	12	壺	A(15.8) J 2.2	つまみ欠損。天井部からなだらかに口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	A 1e4 Ⅶ 50%
〃	13	〃	A 15.9 J 3.0	やや高い天井から丸味をもって口縁へ下がる。端折はやや内傾気味。口縁付近には重ね焼きによる融着物が連なる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	A 1g1 Ⅵ，Ⅶ 50%
〃	14	〃	A 15.3 J 2.8	天井篦削り部は平坦で，丸味をもって口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色	17S20 80%
〃	15	〃	A(17.0) J 2.6	天井篦削り部は平坦であるが，端部は盛り上がる。 口縁端折が大きい。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色	A 1f4 Ⅵ 30%
〃	16	〃	A(15.6) J 2.6	天井篦削り部は平坦で，なだらかに口縁へ下がる。 端折は大きい。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 黄灰色	A 1f4 Ⅶ 30%
〃	17	〃	H 2.6 I 1.1 J 3.4	つまみはa1類。 天井部は平坦であり端部の張りに篦削りが行なわれる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色	A 1e4 Ⅴ 60%
〃	18	〃	H 2.9 I 0.8 J 2.2	つまみはa11類。 篦削り部周囲に明瞭な水挽きによる段。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	A 1e3 Ⅴ 50%
〃	19	〃	H 3.1 I 1.1 J 2.7	つまみはa11類。 天井部はつまみ接合部分がやや低く，篦削り端部は少し張りを有する。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 明オリーブ灰色	A 1e3 Ⅷ 20%
〃	20	〃	H 3.3 I 0.9 J 2.6	つまみはb1類。 天井部のロクロ目は極めて明瞭である。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	A 1d4 Ⅳ 50%
〃	21	〃	H 3.2 I 0.7 J 2.2	つまみはa'1類。 天井部は丸味をおびる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む にぶい黄橙色	A 1e4 Ⅵ 50%
〃	22	〃	H 3.4 I 0.5 J 2.2	つまみはb11類。 天井部は丸味をおびる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色	A 1d4 Ⅵ 50%
〃	23	〃	H 2.9 I 0.7 J 2.5	つまみはb11類。 天井篦削り部はほぼ平坦。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰白色を基調とする。	A 1e3 Ⅴ 60%
17 (7)	1	甕	A(12.2) J 6.5	頸部はやや外反しながら立ち上がる。頸部下半に叩き具の痕跡が残る。 口唇は丸い。	巻き上げ，ナデ 叩き 口縁外面横篦ナデ	良 砂礫を含む 灰白色を基調とする。	A 1d4 Ⅰ A 1e3 A 1f3 Ⅱ 口縁40%
〃	2	〃	A(12.8) J 7.3	口縁は外反し，口唇部は上方へ突出する。	巻き上げ，ナデ	良 砂礫を含む 灰白色	A 1f4 Ⅵ 口縁十
〃	3	〃	A(18.4) J 12.0	頸部は外傾し，口縁はさらに外反する。	巻き上げ，ヨコナデ 胴部叩き	良 砂礫を含む 灰白色	A 1e4 Ⅵ，Ⅶ A 1f4 Ⅷ 26S03 口縁¼
〃	4	〃	A(13.8) J 10.6	やや外傾する頸部と，球状にふくらむ胴部。胴部上半に，横方向の櫛目が数段入る。	巻き上げ，ナデ 胴部叩き	不良 砂礫を含む 淡黄色を基調とする	A 1c4 Ⅲ A 1d4 Ⅳ A 1e3 Ⅲ 08S04 30%

17 (7)	5	褒	A(19.0) J 9.3	頸部下半は直立し，同上半は外反する。	巻き上げ，ナデ	不良 砂礫を含む 外 黄灰色 内 灰赤色	A1f4 V A1g4 V 25S31 口縁40%
〃	6	〃	A(19.2) J 7.7	頸部は外反しながら立ち上がる。口縁は2段に見える。	巻き上げ，ヨコナデ 叩き	良 砂礫を含む 灰白色	A1e5 V A1f5 VI, VIII 30%
〃	7	〃	A(20.8) J 9.4	頸部は外傾し，外反しながら立ち上がる。	巻き上げ，ヨコナデ	不良 砂礫を含む 灰白色	A1g4 II，V，VI 口縁⅓
18 (8)	1	〃	A(21.1) J 6.4	頸部は外傾し，口縁の上下が突出する。	巻き上げ，ヨコナデ	良好 砂礫を含む 赤灰色を基調とする	A1g4 III，VI，VIII 口縁⅓
〃	2	〃	A 24.1 K 39.1 J 29.2	頸部は外反し，口縁上下がやや突出する。 胴部は球状を呈し全体に平行線叩き目が見られる。	巻き上げ 頸部ヨコナデ 胴部叩き	良（一部二次焼成） 砂礫を含む 灰白色	A1d3I A1d4V A1e5V A1e4VIII A1e5V 23S04 08.11.12 30%
〃	3	〃	A(24.6) J 12.7	頸部は強く外反し，ヨコナデ時の稜が見られる。	巻き上げ，ヨコナデ 胴部叩き	良 砂礫を含む 灰色	A1g4 IV VI VII 口縁⅓
19 (9)	1	〃	A(23.4) J 5.5	外反する頸部。 内外面とも，ヨコナデの際の稜が明瞭。	巻き上げ，ヨコナデ	良 砂礫を含む 灰白色を基調とする	A1g4 VIII 口縁⅓
〃	2	〃	A(22.2) J 8.0	外反する頸部。 口縁上下がやや突出。	巻き上げ，ヨコナデ 胴部叩き	不良 砂礫を含む 灰白色	A1g4 IV, VI 14S15 17S20 口縁⅓
〃	3	〃	A(20.2) J 6.2	頸部は強く外傾し，口縁は更に外反する。 口唇は上方に突出し，内側に浅い溝が1周する。	巻き上げ，ヨコナデ 叩き	良好 砂礫を含む オリーブ黒色	A1e4 VIII 口縁30%
〃	4	〃	A(17.9) J 12.1	球状の胴部から，頸部が強く外傾して立ち上がる。	巻き上げ 頸部ヨコナデ 胴部叩き	良 砂礫を含む 灰白色	A1e4 VIII 15%
〃	5	〃	A 26.1 J 8.9	頸部は強く外傾し，口縁はさらに外反する。 口縁上下は，突出する。	巻き上げ，ヨコナデ 胴部叩き	良 砂礫を含む 灰白色	A1e4 VI, VII A1e5 VI 口縁90%
20 10	1	〃	A(26.0) B 16.5 F(17.0) K(22.8)	胴部はやや外傾して，直線的に立ち上がる。 頸部はややくびれ，口縁は外反する。	巻き上げ ナデ 叩き	良（底部付近不良） 砂礫を含む 灰白色	A1e4 VI, VIII 50%
〃	2	〃	A(21.2) J 15.5	胴部はやや外傾し，口縁は外反する。 口唇部は丸い。	巻き上げ，ナデ 外面縦箆削り	不良 砂礫を含む 外 灰白色 内 にぶい黄橙色	A1g4 VIII 30%
〃	3	〃	F(13.6) K(21.6) J 12.0	胴部は外傾し，内反しながら立ち上がる。	水挽き，ヨコナデ	良 砂礫を含む 外 灰白色 内 褐灰色	A1e4 VI 113と同一個体か？ 10%
〃	4	〃	A(20.8) J 8.4	胴部は外傾し，内反しながら立ち上がる。 頸部は外傾する。	巻き上げ，ヨコナデ 胴部叩き	良 砂礫を含む 灰白色	A1e4 VIII 口縁⅓
〃	5	〃	F(14.8) K(24.2) J 11.8	胴部は外傾し，内反しながら立ち上がる。	水挽き，ヨコナデ	良 砂礫を含む 外 灰白色 内 灰黄色	A1d4 VI A1e4 VI 15%

21 010	1	甕	K(30.8) J 16.1	ややいびつな球状を呈する。	巻き上げ，ナデ	不良 砂礫を含む 外　明黄褐色 内　明褐灰色	A lf4 Ⅷ 胴部下半 30%
〃	2	〃	F(15.2) J 9.2	胴部は外傾し，内反しながら立ち上がる。	巻き上げ 叩き	良 砂礫を含む 明褐灰色	A le5 Ⅵ 15%
〃	3	〃	F (8.2) K(15.3) J 11.7	底部は丸味をおびる。胴部は外傾し，内反しながら立ち上がる。	巻き上げ，ナデ 叩き（？）	良 砂礫を含む 赤灰色を基調とする	A lf3 Ⅲ A lf4 Ⅷ 胴部下半 40%
〃	4	〃	K(19.0) J 6.6	肩部に接合の痕跡が見られる。	水挽き，ヨコナデ 肩部接合	良 砂礫を含む 灰色	A le4 Ⅵ 肩部½
〃	5	〃	J 14.3	頸部外面に3段の波状文とそれを隔てる横線。	巻き上げ ヨコナデ 頸部接合	良 砂礫を含む 外　緑色自然釉 内　オリーブ灰色	灰原表土中 口縁¼
〃	6	〃	J 13.3	頸部は外傾し，口縁が外反する。一部ゆがみがある。外面は波状文が2段。 口径34cm内外。	巻き上げ，ヨコナデ 内面荒ナデ	良 砂礫を含む 外　褐灰色 内　灰褐色	A le4　Ⅱ A lf4　Ⅷ A lg4　Ⅷ 11 S 12
22 012	1	〃	J 12.9	やや外反し，口縁は2段，外面に波状文。	巻き上げ，荒ナデ	良 砂礫を含む 外　灰白色 内　灰黄褐色	A lf4 Ⅵ，Ⅷ
〃	2	〃	J 10.8	外反し，口縁は3段。外面に波状文。	巻き上げ，ナデ	良 砂礫を含む 外　黄灰色 内　灰黄色	A lg4 Ⅵ 21 S 01
〃	3	〃	J 12.8	口縁は3段，頸部には波状文。	巻き上げ 荒ナデ	良好（二次焼成） 砂礫を含む 暗灰色	A le3 Ⅲ A lg4 Ⅵ 焼台
〃	4	〃	J 11.2	内反気味で，口縁は単純。	巻き上げ，ナデ 叩き	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	A le4 Ⅳ
〃	5	〃	J 14.9	外反し，口縁は3段，頸部に波状文。	巻き上げ，ナデ	良 砂礫を含む 外　黒褐色 内　黄灰色	A le4 Ⅴ A lf4 Ⅶ 14 S 15
〃	6	〃	J 10.7	口縁は3段，頸部波状文。	巻き上げ，ナデ	良好（二次焼成） 砂礫を含む 外　黄灰色 内　にぶい黄橙色	A lf5 Ⅴ
〃	7	〃	J 9.2	口縁はやや外反し，上下がやや突出する。	巻き上げ 叩き，ナデ	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰白色	A lg4 Ⅳ
〃	8	〃	J 11.5	頸部は低く外傾する。口唇上下が突出する。	巻き上げ 叩き，ナデ	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰白色	A lg4 Ⅵ
23 032	1	片　口	A(36.2) K(41cm 内外) J 19.4	胴部は把手付近が最も張る。口縁は外反し口唇は突出する。胴部外面は全面に平行線叩き目が把手の内側には指頭痕が見られる。	巻き上げ，叩き 頸部ナデ	不良 砂礫を含む 橙色を基調とする	A lg4 Ⅵ 30%
〃	2	〃	A(28.6) J 10.0	胴部は外傾し，内反しながら立ち上がる。口縁は外反し，口縁は単純。	巻き上げ，ナデ 外面縦箆削り	良 砂礫を含む 灰白色	A ld4 Ⅴ A le4 Ⅴ，Ⅷ 30%

23 03	3	無頸壺	A(13.6) K(18.9) J 5.8	肩がやや張り，口縁は篦削りにより調整	水挽き　ヨコナデ 口縁篦削り	良 砂礫を含む 灰白色	A 1f 4 Ⅳ A 1 gs Ⅴ 30%
〃	4	托	A(15.8) B 2.2 F(15.9)	底部は高台が無く，丸底状。	水挽き　ヨコナデ 底部回転篦削り 〃　一部静止篦削り	良（一部不良） 砂礫を含む 灰白色	A 1f 4 Ⅶ 50%
〃	5	異形つまみ	J 6.0	数層の塔を積したものと思われるが上下でズレが目立つ。	ナデ	良 砂粒を含む 灰白色を基調とする	A 1e4 Ⅴ
〃	6	長頸壺	A(8.8) B 22.0 E 9.0 G 8.9 K(15.6)	高台は外方へ開く。胴部は肩が張る。 口縁は外反し，口唇は上方へやや突出する	水挽き　ヨコナデ 胴部外面篦削り 高台・頸部接合	不良 砂礫を含む にぶい橙色	A 1g4 Ⅵ Ⅷ 50%
〃	7	高杯（脚部）	F(12.3) J 4.3	内傾し外反しながら立ち上がる。 脚部先端はやや突出	水挽き　ヨコナデ	良 砂礫を含む 灰色	A 1g4 Ⅴ 脚部¼
24 04	1	甕	E(14.8) J 2.4	底部はややスリバチ状。 高台は外へ開く。	水挽き　ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	良 砂礫を含む 灰色	A 1d5 Ⅳ A 1e 5 Ⅶ 40%
〃	2	〃	E 13.8 J 2.8	底部はややスリバチ状に低くなり，高台は外方へ開く。	水挽き　ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	良 砂礫を含む 明青灰色	A 1f5 Ⅲ，Ⅳ 底部¾
〃	3	〃	A(24.6) B 4.9 E(18.2)	体部は外傾し，口縁は外反する。	水挽き　ヨコナデ 底部回転篦削り	良 砂礫を含む 明オリーブ灰色	A 1e4 Ⅴ 20%
〃	4	平瓶	K(37.8) F(30.8) J 13.7	胴部は外傾して立ち上がり，肩で大きく内反する。肩部に波状文。	巻き上げ　叩き ナデ　一部篦削り	良 砂礫を含む 灰白色を基調とする	A 1c5 Ⅲ A 1e4 Ⅶ A 1e5 Ⅲ Ⅵ A 1f4 Ⅴ 30%
〃	5	不明	A(36.8) F(32.8) J 8.2	平底。体部は外傾し直線的に立ち上がる。 口縁部はやや内反。体部内面中段に張り出し(？)を設けた痕跡が見られる。	底部水挽き 体部巻き上げ，ヨコナデ，体部下端篦削り	不良 砂礫を含む 外　灰色 内　黄灰色 底部　灰白色	A 1e4 Ⅶ A 1c5 Ⅴ，Ⅵ 10%
〃	6	〃	J 7.6	24－5と同器種であろう。	巻き上げ　ヨコナデ	不良 砂礫を含む 外　灰白色 内　灰黄色	A 1e4 Ⅶ 10%

念にヨコナデが施されている。体部外面下半の稜は，かなり顕著である。口径・器高・底径の比を他の坏と比較すると，この坏が他の坏と異なる位置にある事がわかる。

14－8は底部周囲と口唇部が，13－7は底部周囲が磨滅しており，一時期実際に使用されたものであることがわかる。使用の主体者は不明であるが，興味ある事実といえよう。

高台付坏（14－10・11）

高台付坏の出土は，2点のみである。いずれも高台底に使用痕と思われる磨滅が見られる。10は，底部全体に回転篦削りが施され，高台内部には篦記号が認められる。ヨコナデは入念で，ロクロ痕による稜は全く認められない。高台はやや外傾し，下端が外側へ突き出すためやや厚味を

増す。11の高台もやや外傾するが，厚味には変化が見られず，むしろ減少する傾向にある。

蓋（15－1～16－23）

45点を示した。蓋の破片は坏よりも多量にのぼるが，実測可能なものはむしろ少なかった。A群とB群に分類されるものは少なく，C群が大部分を占める。

AII類（15－1～4・9）

「かえり」の形態は，それぞれ異なる。1の「かえり」は，やや内傾する大きなものである。2は，口縁の先端と「かえり」との間に自然釉が付着しているため，細かい形状は良くわからない。4の「かえり」は階段状を成し，扁平で低い階段状の天井部とともに，他の蓋と異なる特色となっている。9の「かえり」は不明瞭である。C_1群かとも思われたが，口縁端がやや突き出すので，本群としたものである。A地点の灰原から出土した蓋で本群に属するものは，大部分が二次焼成を受けており，焼台として使用されたものらしい。

BII類（15－5・6・8・10・12・22）

5・10・12は，大きめの端折が外方へ屈曲したものと見られるが，屈曲の原因は焼成によるゆがみとは判断し難く，整形時に意図的になされたものと見るのが妥当であろう。5・10は内側には工具があてられ，沈線状を呈している。6は口縁外側を工具で調整したもので，上段と下段の大きさはほぼ等しい。天井は高く，丸味を有する。8・22は端折上部に稜を有するもので，下段が大きい。

C_1I類（15－7，16－11）

いずれも，ゆがみのため，扁平である。篦削り面は，ほぼ水平である。15－7の口縁は，シャープな稜を成し，16－11は丸味を有する。

C_1II類（15－11・13・18，16－3・4・6・8・9・13・14）

本類の蓋は，3種類に分れる。天井部の篦削り部分が高く盛り上がり，一度急傾斜で下がってから，ややなだらかになって口縁へ達するもの（15－11・13，16－3・6）と天井部からゆるくカーブして下がり，口縁付近で水平になるもの（16－4），及び天井部が高く，篦削り部分の端から強くカーブして口縁に達するもの（15－18，16－8・9・13・14）である。16－4を除けば，器形的に大きな特徴を有していると言える。また，初めのグループが出土した層位はA1f4を中心とする灰原の下層であり，最後のグループが出土した層位（17S20及びA1g_4の下層）の下に位置する。この事実は，この2グループの新旧関係を示しているものと判断できる。

C_1III類（15－14～16・20・21，16－1・2・5・7・10・12）

本類にも，C_1II類で見られた篦削り部分が盛り上がる種類と，篦削り部分の端から強い丸味をもって口縁へ下がる種類が含まれる。前者は16－7・10であり，後者は15－15・21，16－5であ

る。前者がA1f4を中心とする灰原の下層から出土していること，後者がその周囲の中層・下層から出土していることも同様である。

C₂II類（15－17・19，16－15・16）

いずれも端折が大きく垂下し，坏蓋ではない。16－15・16は，A4号窯跡から出土したC₂II類の蓋（10－1～3・5）と同種のものである。16－15は口縁端にシャープな稜を有する。15－17の天井部は，やや盛り上がって丸味を有し，口縁付近で水平になる部分が広い。15－19の天井部は，つまみ接合部が水平で，篦削り部分の末端に弱い丸味を有している。

甕（17－1～22－8）

甕は完存率の極めて低いものが多く，器形全体を知り得る例は少ない。頸部の状況から判断して，口縁が小さく頸部があまり外反しないもの（17－1・2）と，強く外反するもの（17－3・5～19－5）がある。21－4～22－7は，大型の甕の破片で，口頸を復原することができないが，頸部の外反の度合が大きく，波状文が施されるもの（21－4～22－1・3・5・6）が多い。口縁は，波状文を有するものは折り返しや隆帯を有して3段にする例が多く，叩き目だけのもの（22－2・4・7）は概して単純である。

底部は平底（20－4・5，22－8）と丸底（21－2・3）がある。

器形に特徴があるものとしては，20－1～3がある。甕とするのは，妥当ではないかも知れない。17－4は，壺とすべきである。

本地点の灰原出土の甕類は，多くは二次焼成を受けており，焼台等として使用されたものであろう。

その他（23－1～24－6）

13点を示す。ここでは主なものについて触れる。

23－1・2は，片口である。1は大きなもので，外面には平行線の叩き目が残り，胴部の最も張る所に把手が左右1対付けられている。把手接合部はやや肥厚し，内面は指痕が認められる。把手とその接合部は篦によるナデ調整が施される。2の器形は半球状を呈したものと思われる。内面はヨコナデが施され，外面は縦方向の篦削り調整が施されている。

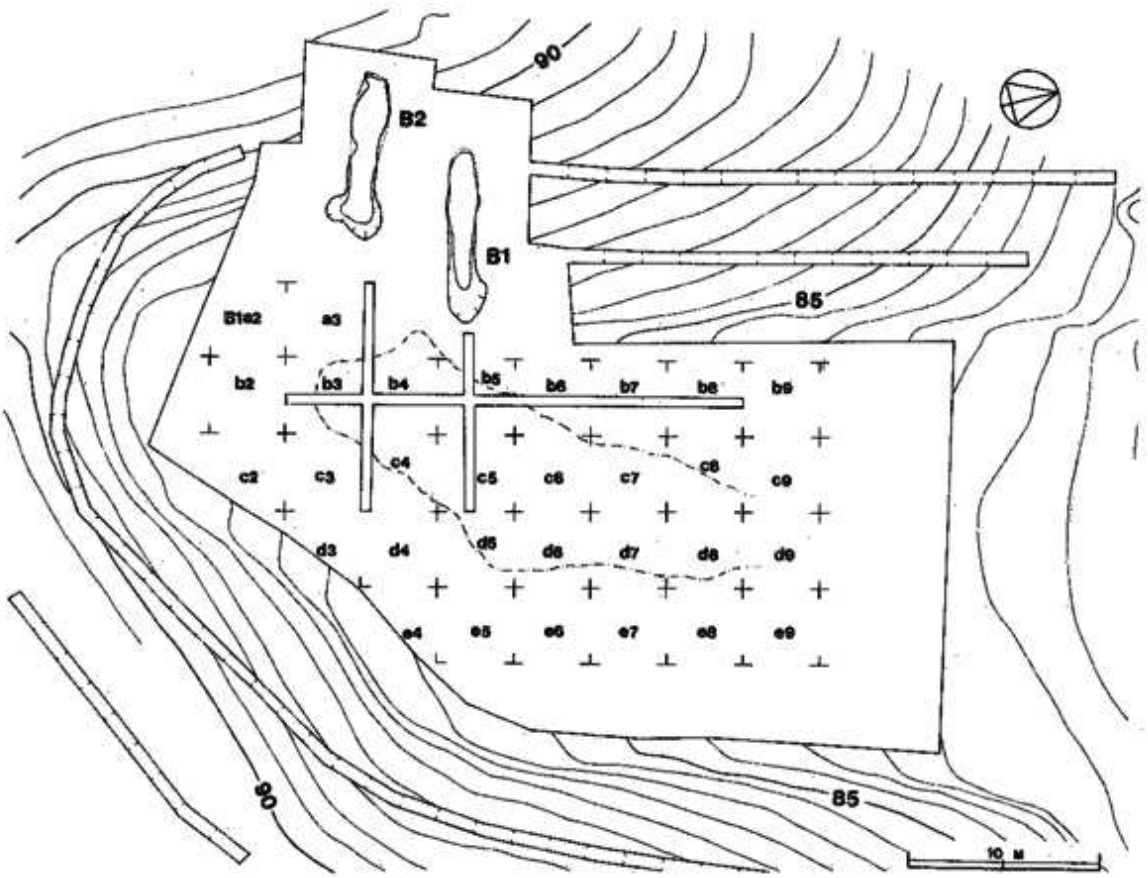
23－6は，長頸壺である。頸部と高台が接合されている。胴部外面は，横方向の篦削りで調整されている。

24－1～3は盤である。高台は，いずれもやや外傾し，3は先端が厚みを減ずる。底部は，やや丸底状を呈する。

24－4～6は，器種不明である。4は肩に波状文を有し，平瓶かと思われる。5・6は洗に似

るが，5は内面中段に接合痕が認められ，中蓋状のものを有したと思われる。6の中段にも，広い凹線が1周し，5と同様に中蓋を有したと判断される。

第2節　B　地　点



第25図　B地点地形・グリッド配置図

1　地形

本地点は，高取山北端のやや西側の所から南東に向かって入り込む大きな支谷の南側斜面に刻まれた小支谷にあり，A地点と西側の尾根を隔てている。この小支谷は，中央から奥がやや西へ曲がり，谷底の傾斜もより緩やかになる。両岸ともに明瞭な傾斜変換点が認められた。入口で幅35m・標高82m，屈曲部で幅23m・標高85m，最奥部で標高88mを測る。

この小支谷奥部の西側斜面裾部に2基の須恵窯跡を確認し，調査を実施した。

2　遺構と遺物

(1)　B１号窯跡（付図3　PL9・10・13）

①　構造

地下式有段登窯の構造を有し，主軸はN－75°－Wを示す。全長9.4m，幅は焼成室で最大1.8m，燃焼室奥で1.1mを測る。焚口から燃焼室にかけて１m弱の幅に掘られ，焼成室に入ると広がりを増し，傾斜変換点付近が最も広い。

床は平坦である。焚口端より4.7m付近からスロープ状になり，徐々に傾斜を増し，最も急な部分で38°を測る。焚口端より7.1mの所から奥が階段状になっており，8段を数える。段の肩部は崩れて丸味をおびているものが多い。最下段上面と最上段面との落差は0.73mを測り，各段の平均は約9cmとなっている。肩部から蹴込みまで約15cm，最上段で約20cm（ただし奥壁まで）を測る。全体に青灰色を呈し，堅く焼けているが崩れやすい。II次ベースは，I次ベースのスロープ部中央付近までを占める。壁や天井が部分的に崩れたため，地ならしをして再び焼成を行ったものであろう。I次ベースとの間に，崩落による天井・窯壁の破片が大きなブロックのまま15cm内外の厚さで堆積し，一部を粘土状の土を用いて整床している。III次ベースは階段部の下から3段目までを覆い，I次・II次両ベース間と同様の堆積を示している。IV次ベースは，階段部最上段の肩部までを覆っていた。本ベースに至って，窯底全体がスロープ状となる。焚口端から5mの所で傾斜が変る。焚口側で10°，奥で20°内外である。V次（最終）ベースはIV次ベースを完全に覆い，スロープ状を呈する。IV次・V次両ベースは，一部に粘土様の土を用いている。

奥壁は，セクションに見られるように断面がS字状を呈している。窯体を掘り抜いた際には内傾気味に掘られたものが，最終ベースを設ける時にさらに掘り込まれたものらしい。内面は暗青灰色を呈し，堅く焼けているが崩れやすい。

壁は，上半以上に層状剝落の痕跡が見られ，階段状に直上または内傾して立ち上がる。この層状剝落は熱による変色部内で起こるものと思われ，熱の影響だけを受けた赤褐色層と還元焰の影響による青灰色層との境界が考えられる。壁が階段状を呈する原因としては，他にベースを修復する際に削り込んだ事が考えられる。セクション図（C－C'）のIV次ベースの壁に見られる状況がこれに相当する。

天井は残存しないが，断面カマボコ型に掘られていたものと判断される。

②　遺物（26－1～28－6）

坏（26－1～11）

AII類（5・6・9・10）

体部が直線的に立ち上がり，口縁はやや外反するものが多い。10はゆがみのため，口縁が一部内反する。いずれも内・外面が入念にヨコナデ調整されている。9の内面には，ヨコナデに用いた工具によると思われる細い沈線が3周する。

B₁Ⅱ類（1・2・7・11）

大ぶりのもの（1・2・11）は，体部が直線的に立ち上がり，口縁が外反する。一方，小ぶりのもの（7）は，体部下位の所で外反し，上部は口縁まで直線的である。

B'₁Ⅱ類（8）

底部篦削り面と体部との間にある，土とりによって生じた面の一部に，回転篦削りが施されている。体部は丸味をもって立ち上がっており，A群の器形に近い。口縁は，やや外反する。内面は，体部と底部が明瞭に分かれる。工具を用いて調整したものであろう。

B₁Ⅲ類（3・4）

底部の静止篦削りの範囲は，中心付近に限られている。底部は，土とりによって生じた面からやや突出しており，この突出した部分が，土とりの際にしぼられた粘土塊に相当するものと考えられる。

蓋（27－1～13）

C₁Ⅱ類（1～3・5・6・8～10・12・13）

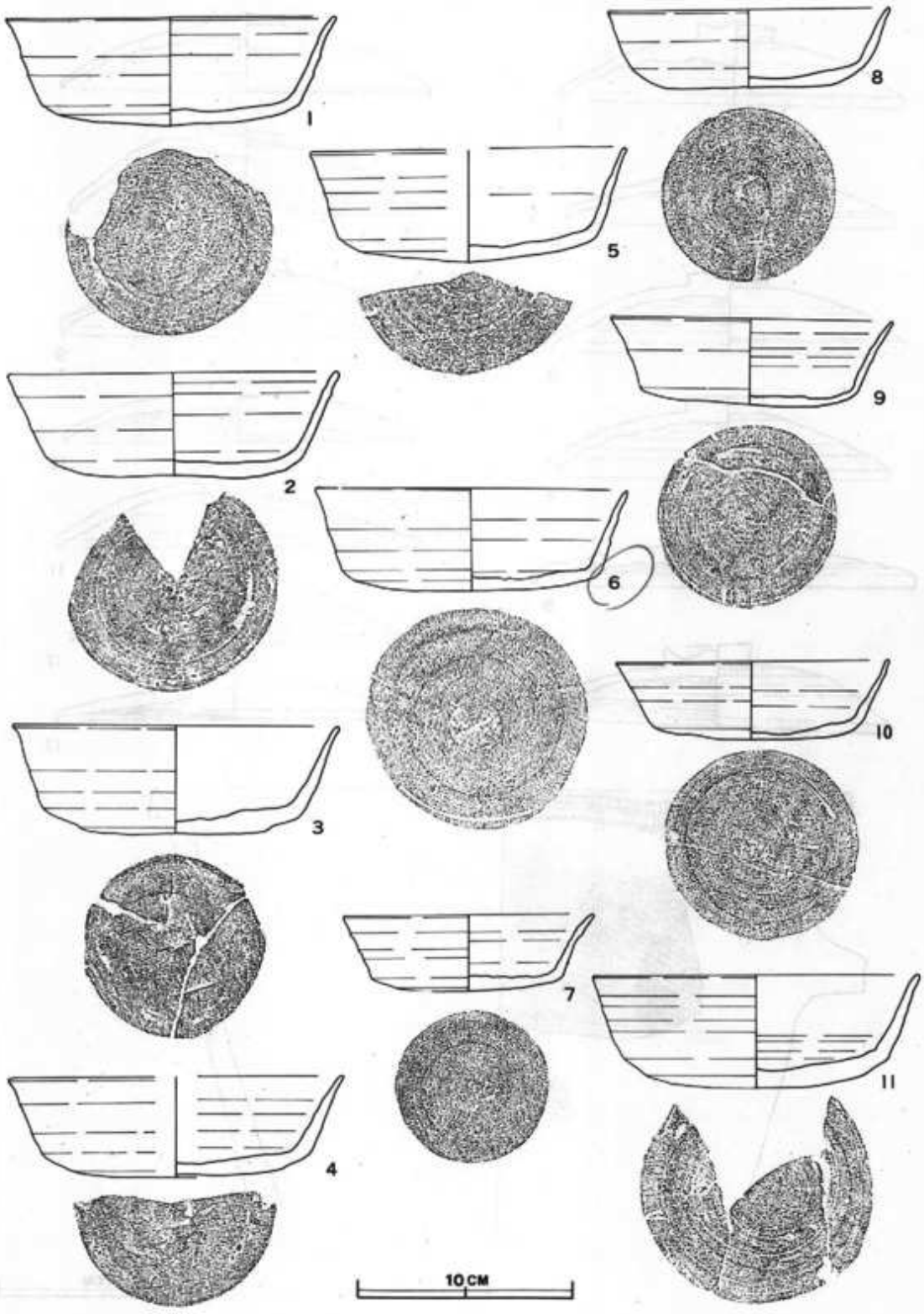
厚手で端折がやや大きめのもの（1～3・5・6・9・12）と，小さめのもの（8・10・13）がある。前者は，いずれも端折内側を工具で調整しており，1・3・9では沈線状を呈している。後者は，天井部内面に回転篦ナデBが施されている。しかし10では端折内側に限られており，この点は前者に近い。外面のヨコナデ調整は入念で，3点とも稜は篦削り部分周囲以外には，明瞭には認められない。一方，内面では外面のような入念さを欠き，回転篦ナデB（8・13）やロクロ痕（3・5・6・10・12）による稜が明瞭に認められる

C₁Ⅲ類（4・7・11）

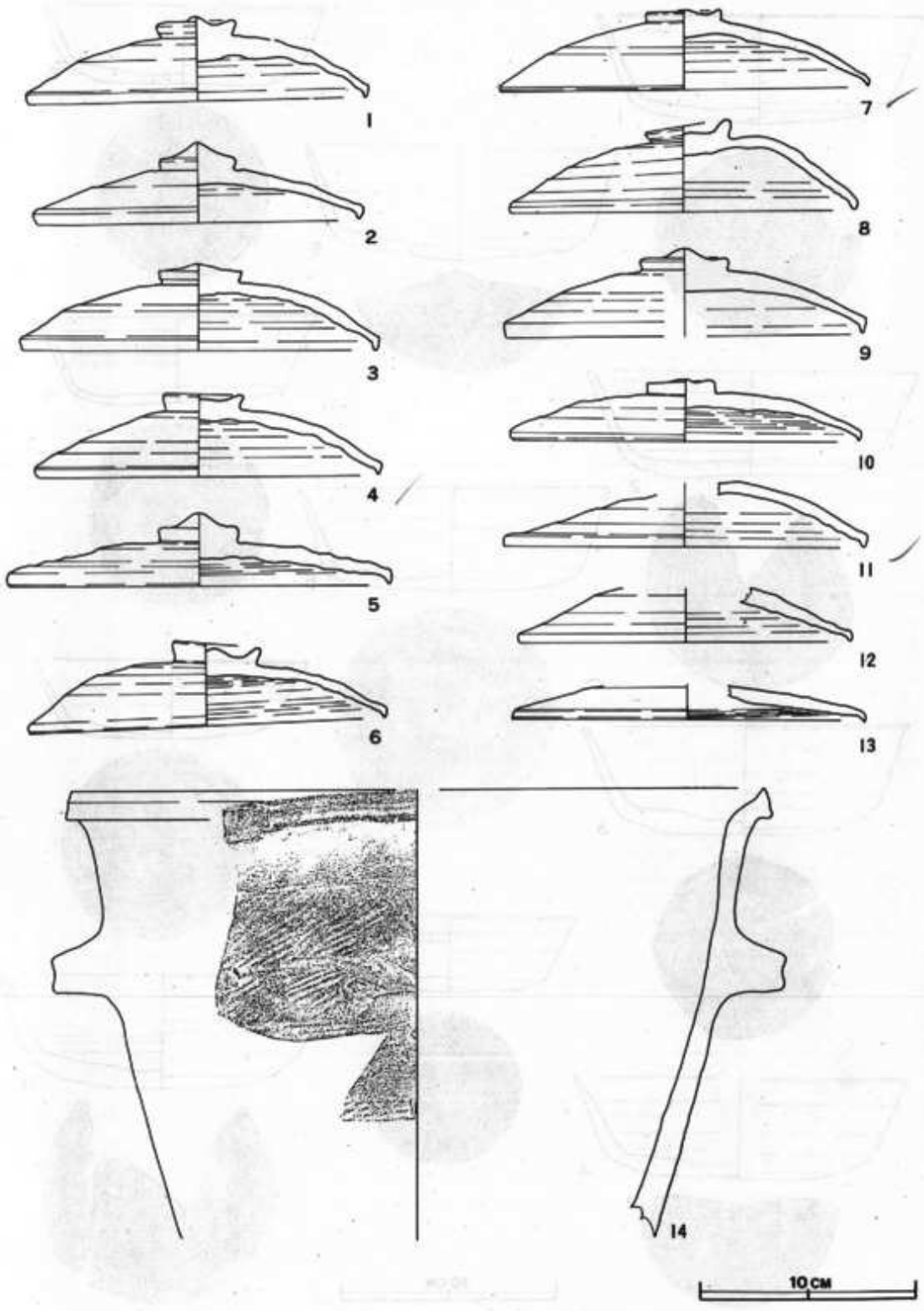
口縁に丸味を有するもの（7・11）と，稜を有するもの（4）がある。4は外面に稜が残る。内面は，いずれも稜が顕著である。

甕（28－3～6）

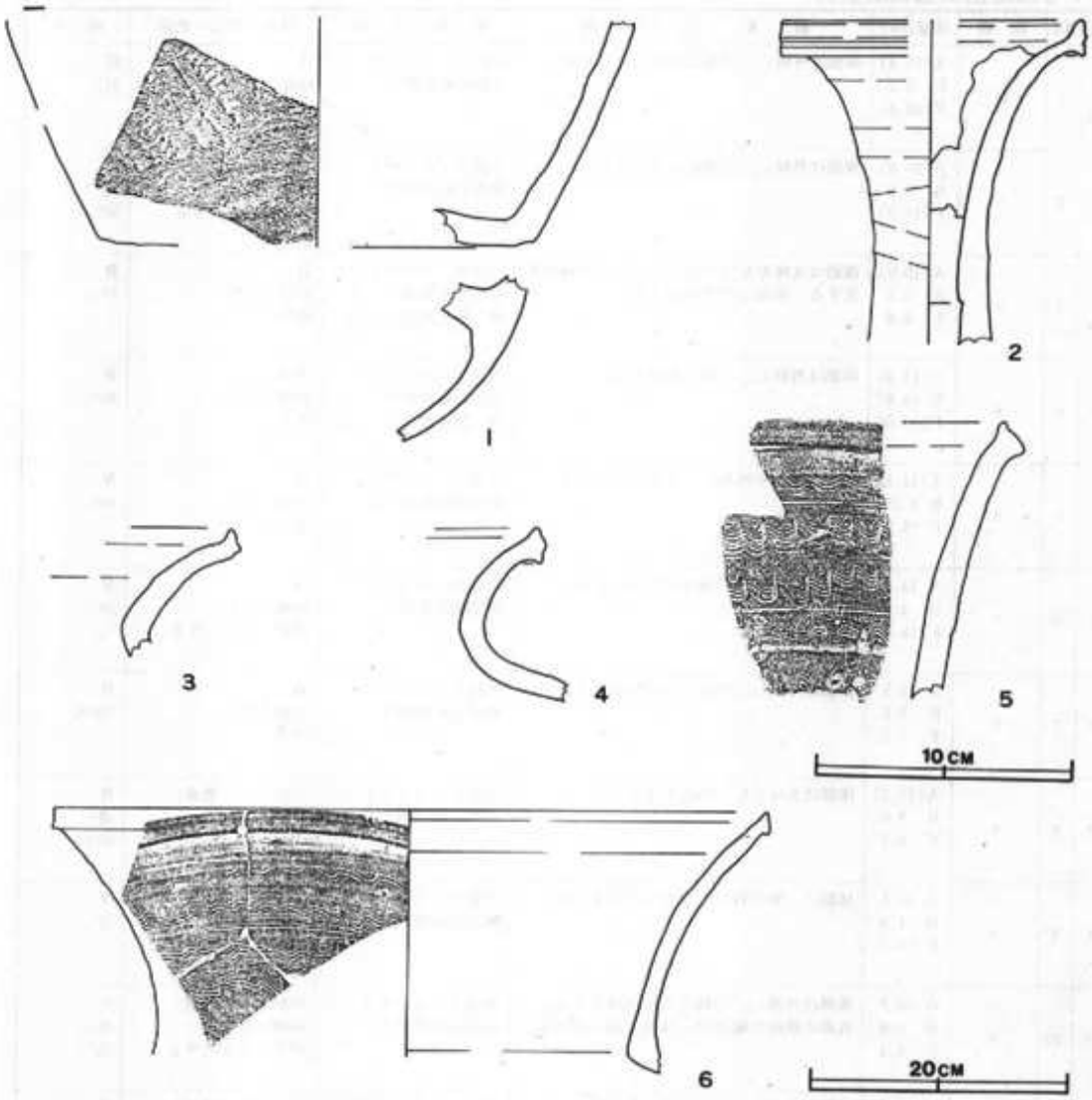
3・4は，強く外反する甕の口縁で，いずれも巻き上げ整形後，ヨコナデまたはナデ調整を施す。口縁は，比較的単純である。5・6は，大型甕の口縁である。口唇の形状は，いずれも折り返し状で，単純なものである。6は，頸部外面に5段の波状文が配され，波状文の間には篦状工具で横方向に筋が付される。5も6と同様の波状文帯とそれを上下に分ける筋が認められる。



第26図　B１号窯跡出土遺物実測図(1)



第27図　B１号窯跡出土遺物実測図(2)



第28図　B１号窯跡出土遺物実測図(3)

その他（27－14，28－１・２）

27－14と28－１は甑である。27－14の胴部外面には平行線叩き目が見られ，内面はナデ調整が施される。口縁付近は，ナデ後篦で調整する。把手は磨滅により丸味をおびるが，基部では指・篦によるナデが施されている。28－１は底部で，27－14と同一個体と思われるが，部位が違うらしく，接合できなかった。胴部外面は平行線の叩き目を篦ナデで磨削しており，胴部下端はヨコナデされている。

28－２は，長頸壺の頸部である。中段で稜の方向が逆になっている。形もややいびつである。

B 1 号竪跡出土遺物解説表

図版	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
26 (1)	1	坏	A(15.3) B 5.1 F(10.4)	体部は外傾し、口縁はやや、外反する。	水挽き、ヨコナデ 底部回転箆削り	良 砂礫を含む 灰色	III 55%
〃	2	〃	A(15.2) B 5.0 F(10.2)	体部は外傾し、直線的に立ち上がる。	水挽き、ヨコナデ 底部回転箆削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色を基調とする	III 焼台 50%
〃	3	〃	A(15.0) B 5.1 F 8.8	体部は丸味をもって立ち上がり、口縁は外反する。底部はやや突出する。	水挽き、ヨコナデ 底部回転箆削り 後 静止箆削り	良 砂礫を含む 灰色	IV 75%
〃	4	〃	A(15.6) B (4.6) F(10.0)	体部は外傾し、口縁は外反する。	水挽き、ヨコナデ 底部回転箆削り 後 静止箆削り	不良 砂礫を含む 灰色	IV 45%
〃	5	〃	A(14.4) B 5.25 F (9.2)	体部は、やや外傾し、上半は外反する。	水挽き、ヨコナデ 底部回転箆削り	良 砂礫を含む 灰白色	IV 40%
〃	6	〃	A 14.4 B 4.8 F 10.6	体部は外傾し、口縁はやや外反する。	水挽き、ヨコナデ 底部回転箆削り	良 砂礫を含む 灰色を基調とする	IV 99%
〃	7	〃	A 11.5 B 3.6 F 7.2	体部は外傾し、外反しながら立ち上がる。	水挽き、ヨコナデ 底部回転箆削り	良 砂礫を含む 灰色	IV 100%
〃	8	〃	A(13.0) B 3.6 F 8.1	体部は丸味をもって立ち上がる。	水挽き、ヨコナデ 底部回転箆削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰白色	IV 焼台 60%
〃	9	〃	A 13.1 B 4.0 F 10.1	体部は、やや外反しながら立ち上がる。	水挽き、ヨコナデ 底部回転箆削り	不良 砂礫を含む 灰白色を基調とする	V 80%
〃	10	〃	A 12.7 B 3.8 F 9.4	体部は外傾し、口縁は内反気味である。底部の箆削り範囲は、体部下端に達する。	水挽き、ヨコナデ 底部回転箆削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色を基調とする	V 焼台 90%
〃	11	〃	A(15.1) B 5.3 F 10.1	体部は外傾し、口縁はやや外反気味。	水挽き、ヨコナデ 底部回転箆削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	V 焼台 70%
27 (2)	1	蓋	A 16.0 B 3.9 H 3.6 I 0.9	つまみはb i類。 天井は高く、丸身をもって口縁へ下がる。	水挽き、ヨコナデ 天井部回転箆削り	良 砂礫を含む 外 灰色 内 黄灰色	III 90%
〃	2	〃	A(15.4) B 3.7 H 3.6 I 1.3	つまみはa i類。 天井から口縁へなだらかに下がる。	水挽き、ヨコナデ 天井部回転箆削り	良 砂礫を含む 灰色	IV 50%
〃	3	〃	A 16.5 B 4.0 H 4.9 I 1.0	つまみはa ii類。 天井から口縁へ丸味をもって下がる。	水挽き、ヨコナデ 天井部回転箆削り	良好（二次焼成） 外 灰黄褐色 内 灰色	IV 焼台 99%
〃	4	〃	A 15.2 B 3.9 H 3.8 I 0.7	つまみはb ii類。 天井から口縁へ丸味をもって下がる。	水挽き、ヨコナデ 天井部回転箆削り	良 砂礫を含む 灰色を基調とする	IV 90%

27 (2)	5	蓋	A 17.9 B 3.4 H 3.7 I 1.4	つまみはaii類。天井部は平坦で，なだらかに口縁へ下がる，ゆがみがある。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 外 灰白色 内 明褐灰色	V 55%
〃	6	〃	A 16.6 B 3.4 H 3.5 I 0.9	つまみはbi類で，径が大きい。天井がやや高く丸味をもって口縁へ下がる。 ゆがみがある。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色	V 70%
〃	7	〃	A 17.5 B 3.7 H 3.4 I 0.6	つまみはbii類。天井がやや高くなだらかに口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色	V 60%
〃	8	〃	A 16.2 B 5.0 H 3.9 I 0.8	つまみはbii類。天井部は本来は高かったと思われる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り 天井内面回転篦ナデB	良 砂礫を含む 灰色	V 70%
〃	9	〃	A(16.8) B 4.1 H 4.1 I 1.1	つまみはbi類で，径が大きい。 端部はやや大きい。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰オリーブ色	V 50%
〃	10	〃	A 16.5 B 2.9 H 3.1 I 0.6	つまみはbi類。天井部から口縁へやや丸味をもって下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	V 90%
〃	11	〃	A 17.0 J 3.0	天井は高く，丸味をもって口縁へ下がったものと思われる。ゆがみがある。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良（二次焼成） 砂礫を含む 灰白色	V 70%
〃	12	〃	A 15.6 J 2.5	天井はやや高く，なだらかに口縁へ下がる	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰色	V 50%
〃	13	〃	A 15.7 J 1.5	天井が吸く直線的に口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り 天井内面回転篦ナデB	良 砂礫を含む 灰白色	V 70%
〃	14	甕	A(32.2) J 20.8	胴部はやや外傾し，内反しながら立ち上がる。口縁は外反し，口唇は上方へやや突出する。	巻き上げ，叩き 内面ナデ	不良 砂礫を含む にぶい橙色	V 20%
28 (3)	1	〃	F(16.6) J 8.8	胴部は外傾し内反気味に立ち上がる。 底部は大きく2穴が穿孔されていたものと思われる。	巻き上げ，叩き 外面篦削り 内面底部指ナデ	不良 砂礫を含む 底部 浅黄橙色 胴部 灰褐色	V 底部20%
〃	2	長頸壺	A(11.6) J 12.7	頸部は大きく外反し，口縁は折返し風。 口唇は上方へ突出する。	水挽き，口縁付近ヨコナデ。 頸部下半で接合	良 砂礫を含む 灰白色を基調とする	覆土 頸部のみ
〃	3	甕	J 5.1	頸部は強く外反し口唇は上方へ突出し，口縁を内反させたように見せている。	巻き上げ，ヨコナデ	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	I 焼台
〃	4	〃	J 6.8	頸部は外反し，口縁は上下が突出する。	巻き上げ，ヨコナデ	良好（二次焼成） 砂礫を含む 外 黒 内 浅黄色	V 焼台
〃	5	〃	J 10.9	やや外反する口縁。口唇がやや突出。 外面は三段の筋を配し，波状文を施す。	巻き上げ，ナデ	良 砂礫を含む 外 黒色 内 にぶい黄橙色	II
〃	6	〃	A 55.3 J 20.7	頸部は大きく外反し，口縁は上下が突出。 頸部外面に波状文。	巻き上げ，ナデ	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	I 頸部以

(2) B２号窯跡（付図３　PL９・11～13）

①構造

地下式有段登窯の構造を有し，主軸はＮ－68°－Ｗを示す。全長8.2m，幅は焼成室で最大1.8m，焚口・燃焼室が狭く0.8～1.3mを測る。焚口左側に張り出しがあるが，設置理由は不明である。

床は明瞭な傾斜変換点を有さず，徐々に傾斜を増す。焚口端から６ｍ前後の所で33°を測る。その奥が階段状になっており，６段を数える。肩は崩れて丸みをおびる。蹴込みまで20cm前後を測る段が多いが，２段目は30cmを測り，他よりも少し広い。中央付近に大きなスリバチ状の凹みが三か所認められる。これは大甕を焼成する際に設けられたもので，置台に代わるものである。Ⅱ次ベースは，階段の１段目までを覆う。Ⅲ次ベースは，最上段の肩部までを覆う。しかし，中央付近から手前では判然としない。Ⅳ次ベースは，階段を完全に覆っている。ベース端から１ｍ程は10°内外，奥では25°内外の傾斜を有する。

煙道は崩れて明瞭ではないが，中央でややくびれ，上へ広がるらしい。１ｍ前後の高さを有するが，元来はもう少し高かったものと思われる。

壁は，Ｂ１号窯跡と同様に層状剥落またはベース修復の際の削り込みの痕跡が見られる。全体に青灰色を呈し，堅いが崩れやすい。

天井は，焚口のやや奥の部分で比較的良く残っていた。Ⅳ次(最終)ベースからの高さは60cm内外あったものと思われるが，内側の青灰色層が剥落し，正確にはわからない。現状では70cm内外を測る。右側壁上部がえぐられているが，断面はカマボコ型を呈している。

遺物は，窯体中央付近より手前側に完形の坏が３～５個体ずつまとまって出土している。これは，本来重ね焼きがなされたものが中途で放棄され，転落したものであろう。他に大型甕の破片が３個体分ある。最終ベースで焼かれたらしく，覆土中に重なるようにして出土した。

② 遺物（29－１～37－１）

坏（29－１～33－３）

本窯跡から出土した坏は，小ぶりのもの（29－３～30－11，33－２）と，大ぶりのもの（29－１・２，31－１～33－１，３）に大別できる。小ぶりのものは，33－２を除いて，２～５個体ずつ重ね焼きの状態で発見されたものであり，完存率も極めて高い。この21個体の坏は，以下に記すように４群に分類されたが，底部を除けば技法的にはほとんど差が認められない。

Ｂ１Ⅰ類（29－３）

底部は回転篦切りのままで，何ら調整していない。体部内外面及び内面の底部周縁は，入念なヨコナデが施される。

B_1II類（29，4～12，31－1～3・5・8，32－3・4，33－1・2）

29－4～12，33－2は，小ぶりな坏である。体部が外傾し，直線的であるもの（29－4・6・9・11），口縁付近がやや外反するもの（29－5・12），体部中段で外反するもの（29－8，33－2）及び体部下位で外反するもの（29－7・10）がある。29－5の体部外面に稜が認められる以外は，すべて入念なヨコナデによって稜が消されている。29－6の底部に回転篦切り痕が認められるが，他は回転篦削りによって，切り離しの痕跡が失われている。

31－1～3・5・8，32－3・4，33－1は大ぶりな坏である。31－2・3，32－3・4は2次焼成を受けており，焼台として利用されたものと思われる。他の4点は，製品であろう。31－1，33－1は体部がやや外反し，31－5・8は直線的に立ち上がっている。ヨコナデは，体部外面が特に入念であり，内面には稜を認めることができる。33－1は表面が磨滅しており，明確にはできないが，内・外面とも稜を消している。

B'_1II類（30－1～6・8・11）

本類は，すべて小ぶりな坏である。B_1II類と同様に，体部が外傾し，直線的であるもの（2・6・11），口縁がやや外反するもの（8），体部中段で外反するもの（1・5）及び体部下位で外反するもの（3・4）がある。ヨコナデは，いずれも入念に行われており，稜は2・6の一部に認められるだけである。

土とりによって生じた面に対する部分的な回転篦削りは，一部だけのもの（5）と大部分に及ぶもの（8）があり，坏によって割合が異なる。これは，部分的な回転篦削りが，偶然の理由によって必要性を生じたために施されたものであることを物語っていると思われる。いずれにせよ，このグループは，B_1群とB_2群の中間に位置すると考えられる。

B_2II類（30－7・9・10）

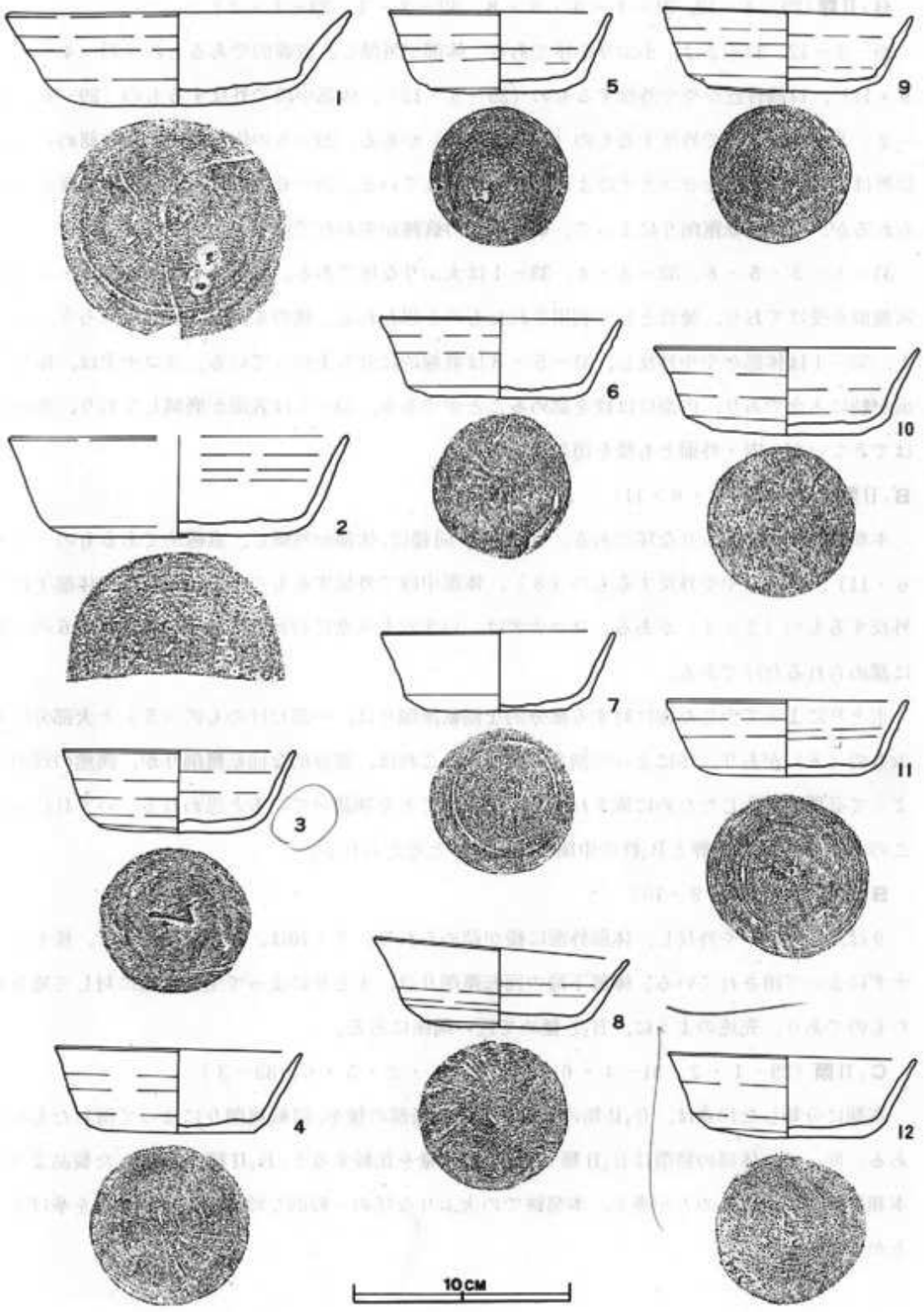
9は，口縁がやや外反し，体部外面に稜が認められる。7・10は，体部は直線的で，稜もヨコナデによって消されている。体部下端の回転篦削りは，土とりによって生じた面に対して施されたものであり，先述のように，B'_1と極めて近い関係にある。

C_1II類（29－1・2，31－4・6・7，32－1・2・5・6，33－3）

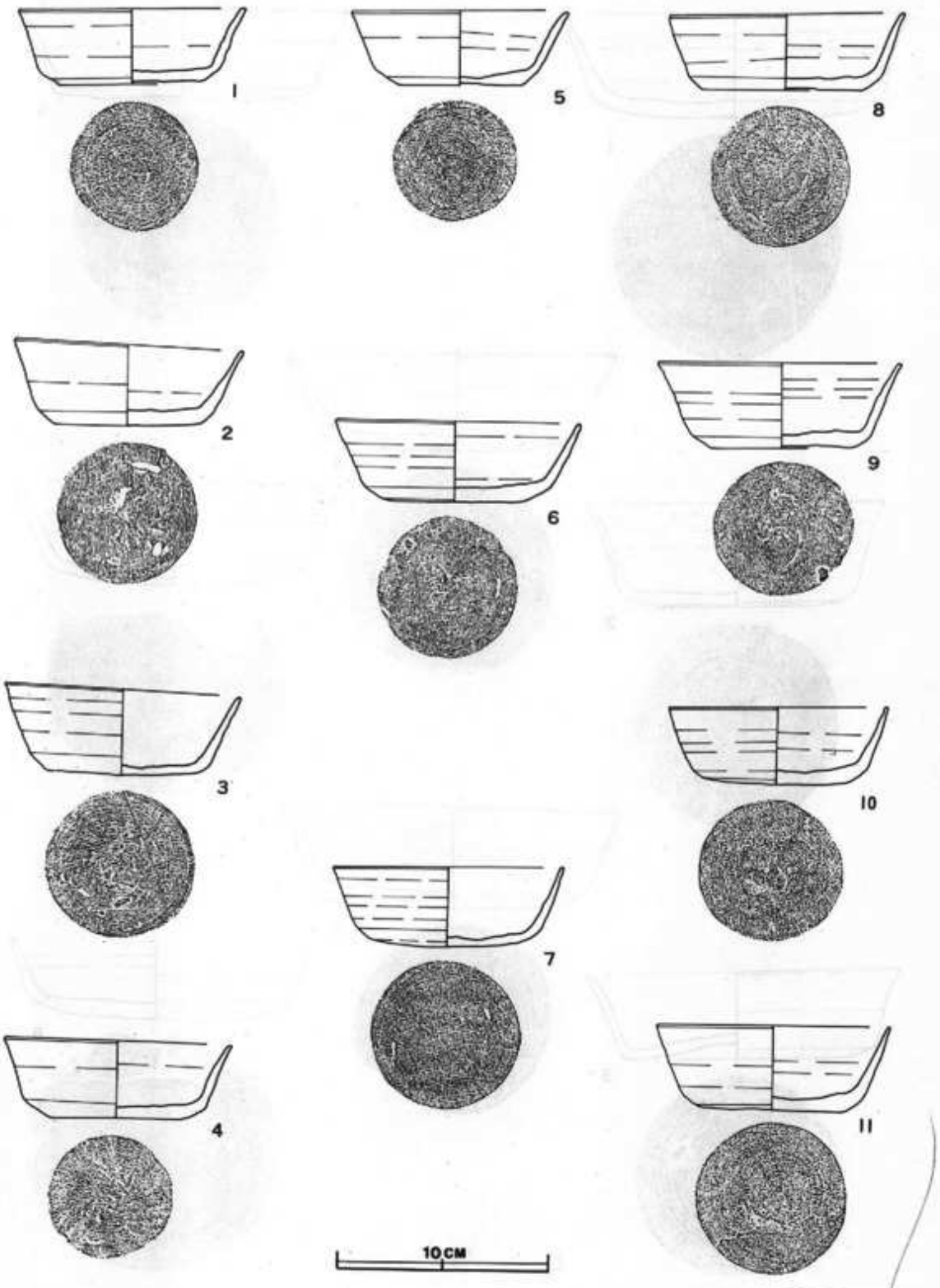
本類に分類した10点は，B_1II類の大ぶりな坏の底部の稜を，回転篦削りによって消したものである。従って，体部の特徴はB_1II類と差が無い。量を比較すると，B_1II類に含まれた製品よりも，本類に含まれる製品の方が多く，本窯跡での大ぶりな坏の一般的な傾向として，本類を挙げることができる。

蓋（33－4～34－18）

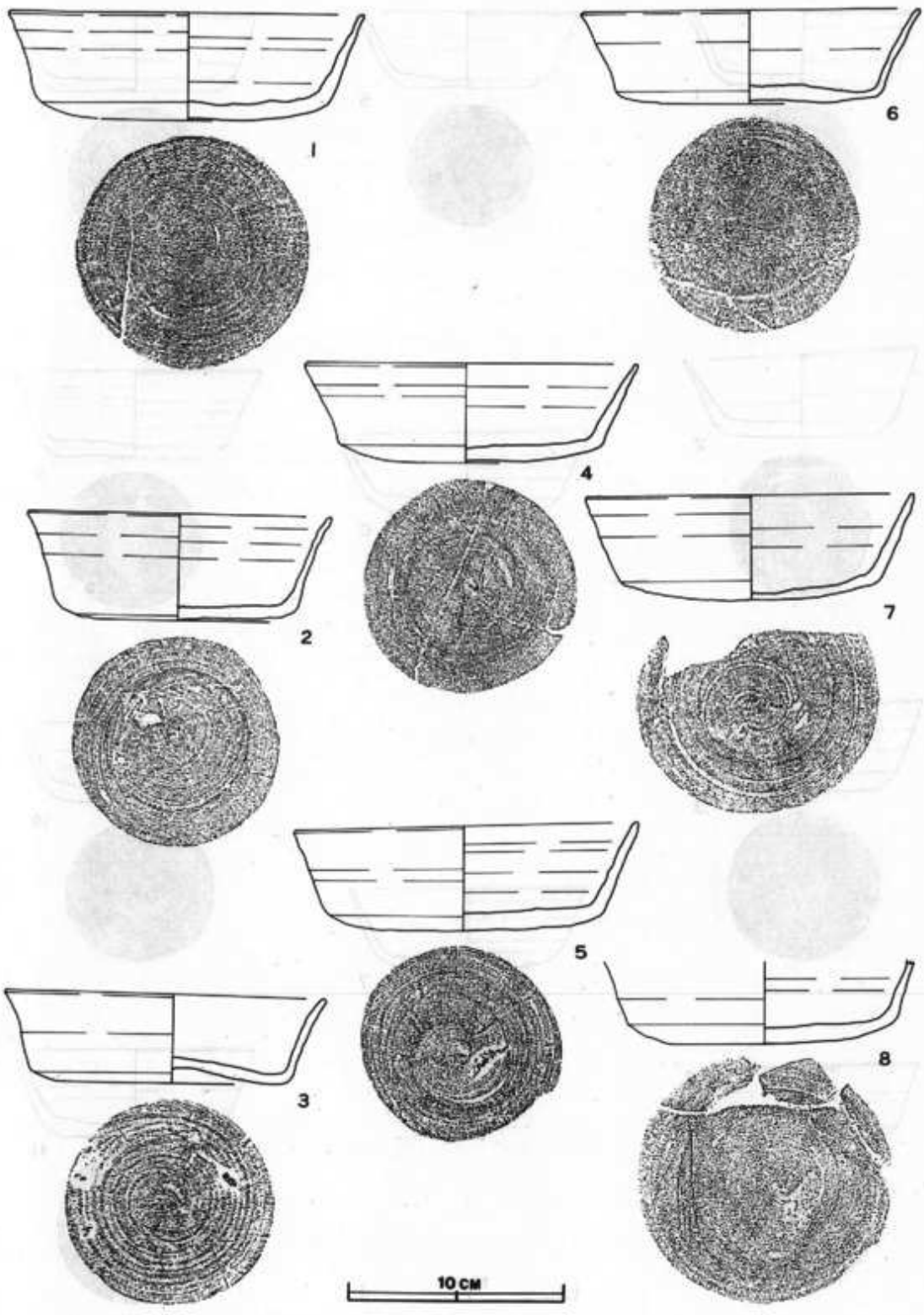
33－7，34－3・5は，ゆがみや磨滅が著しく，分類から除外した。



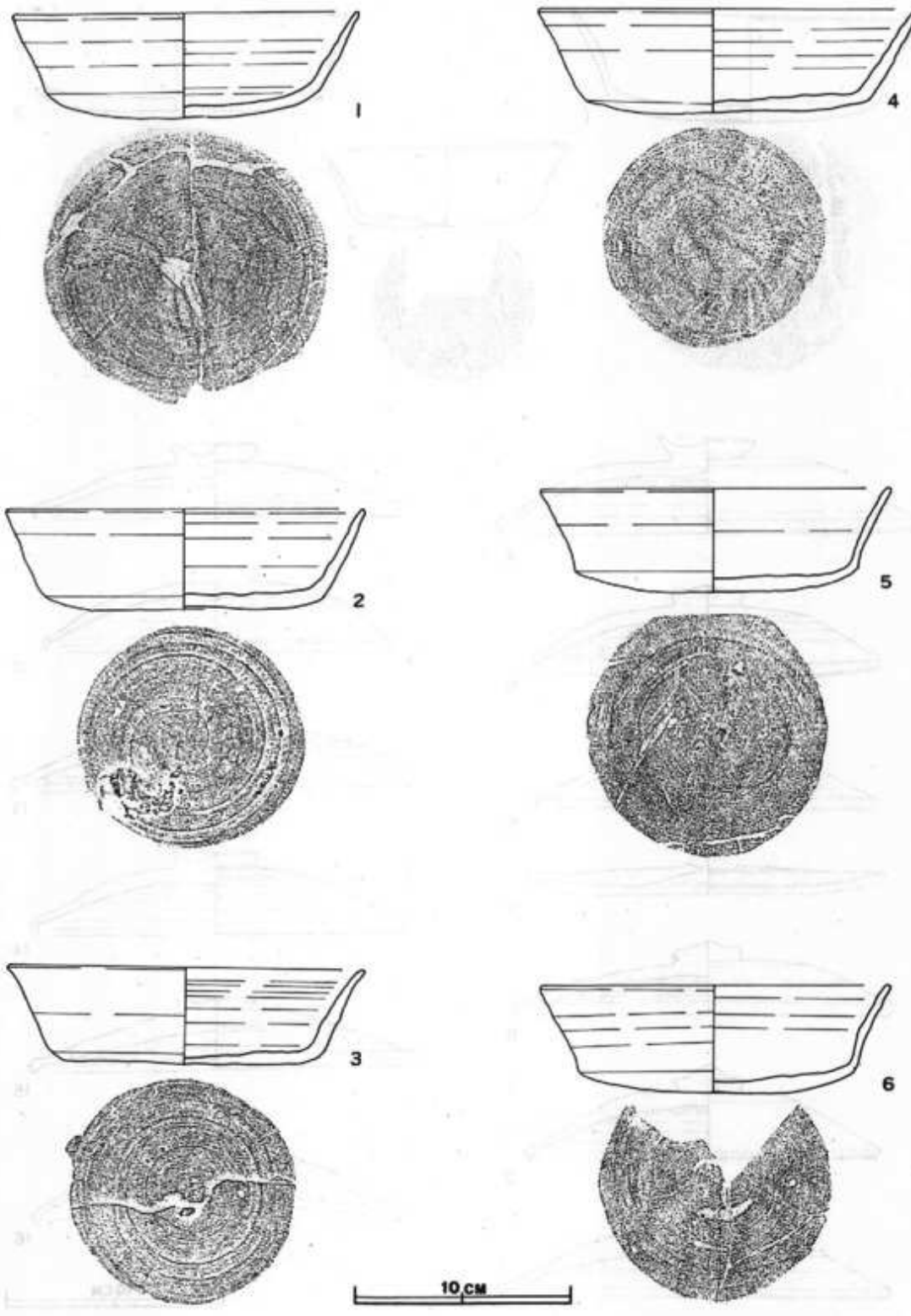
第29図　B２号窯跡出土遺物実測図(1)



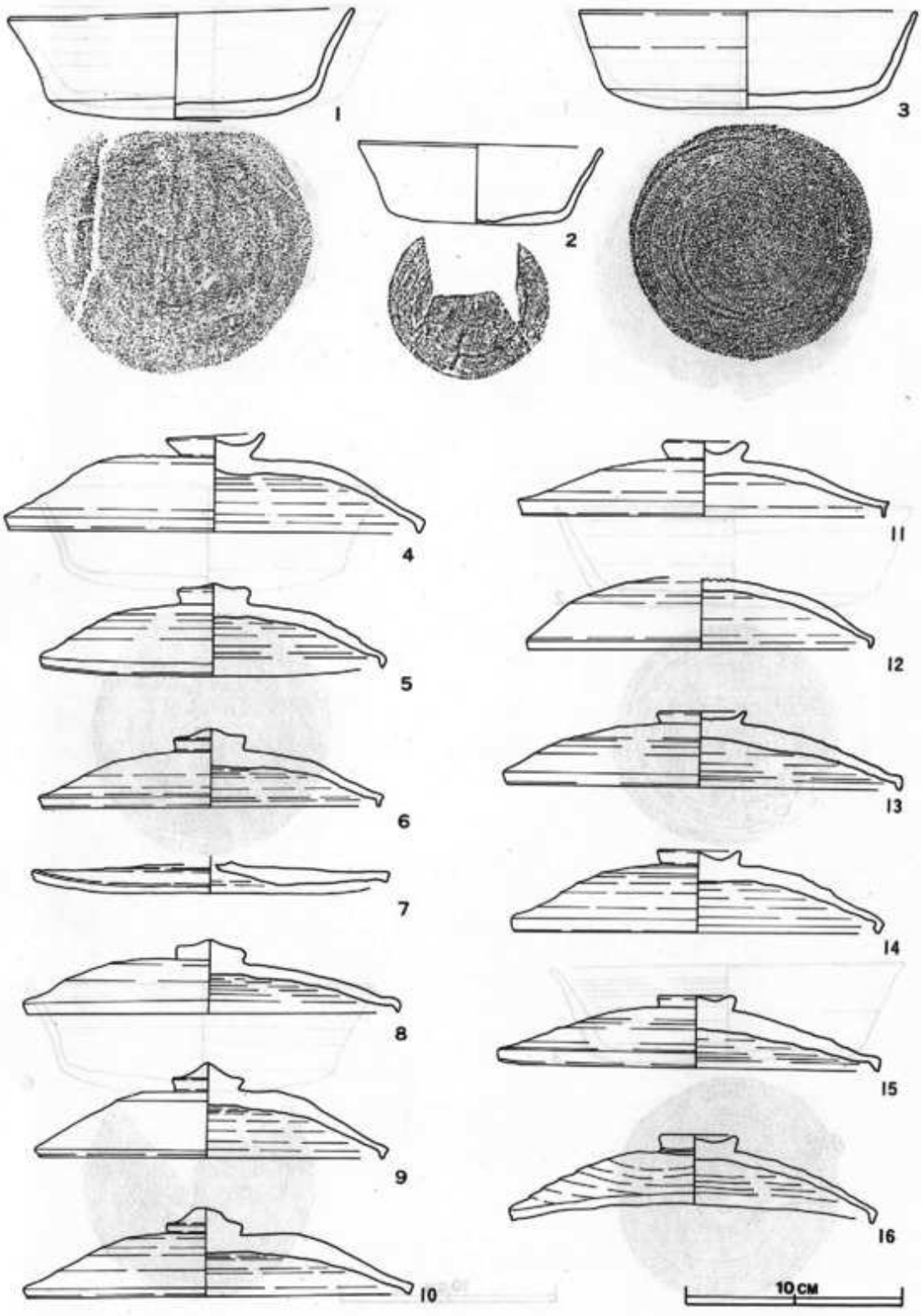
第30図　B２号竈跡出土遺物実測図(2)



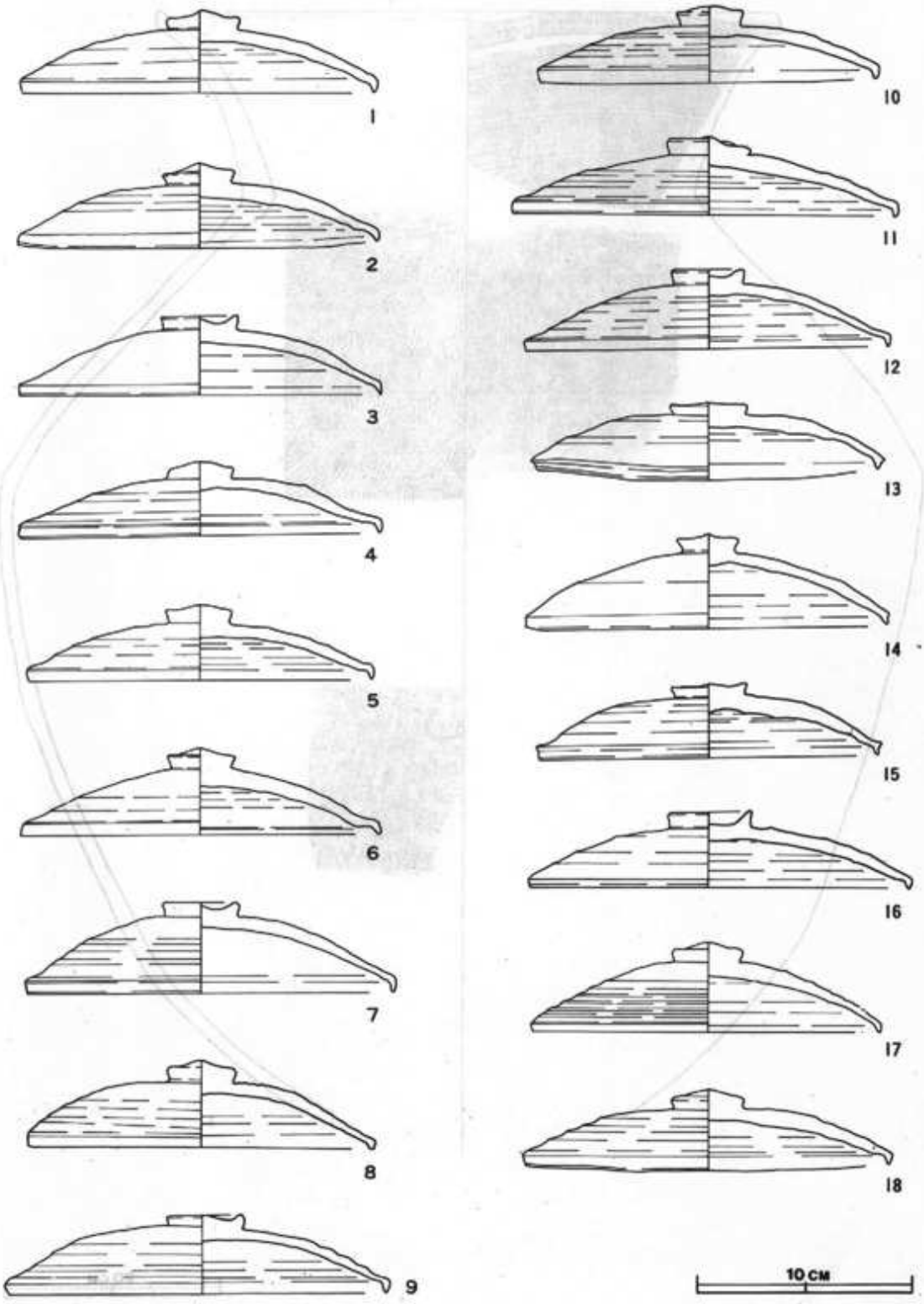
第31図　B 2 号窯跡出土遺物実測図(3)



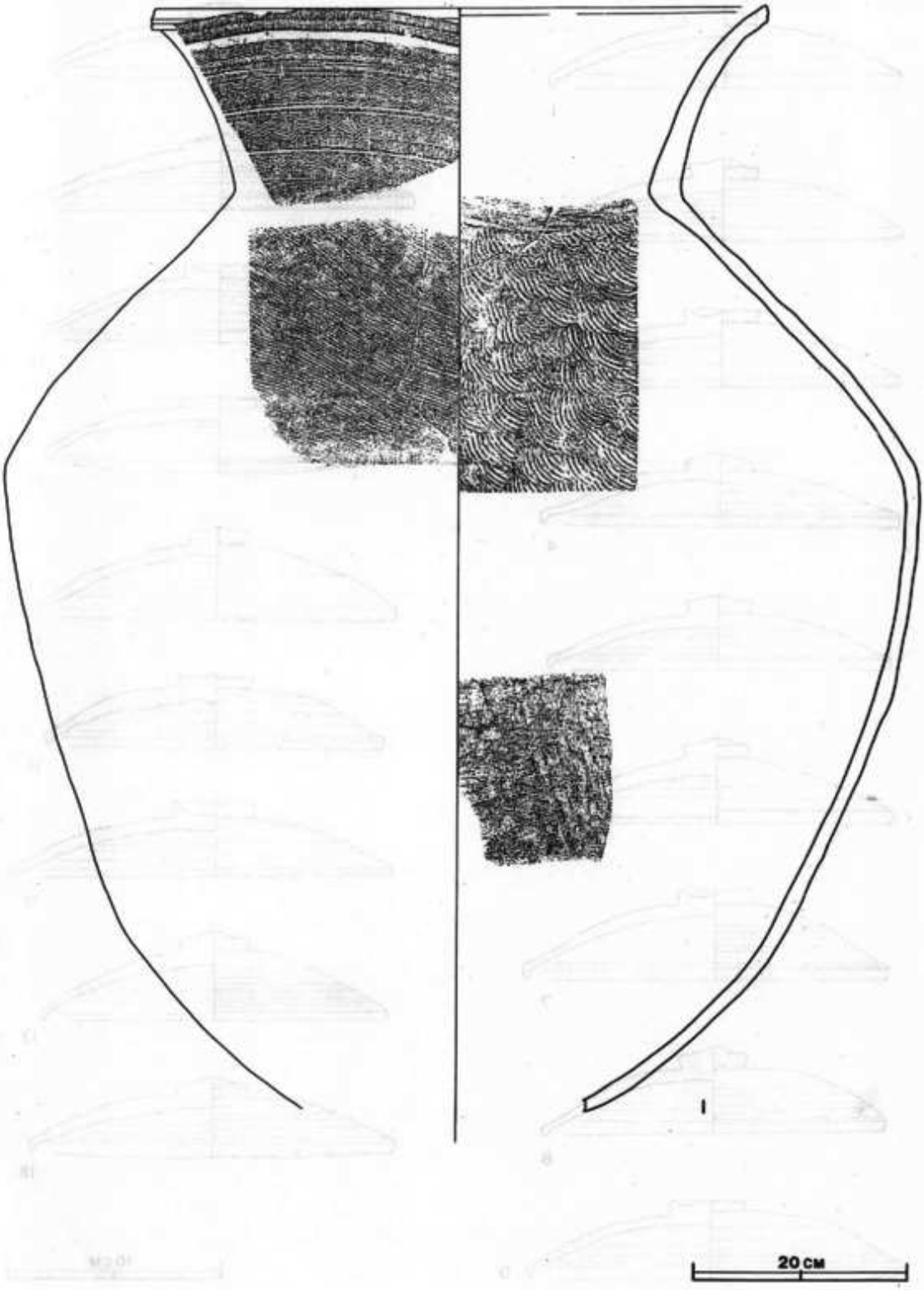
第32図　B 2 号窯跡出土遺物実測図(4)



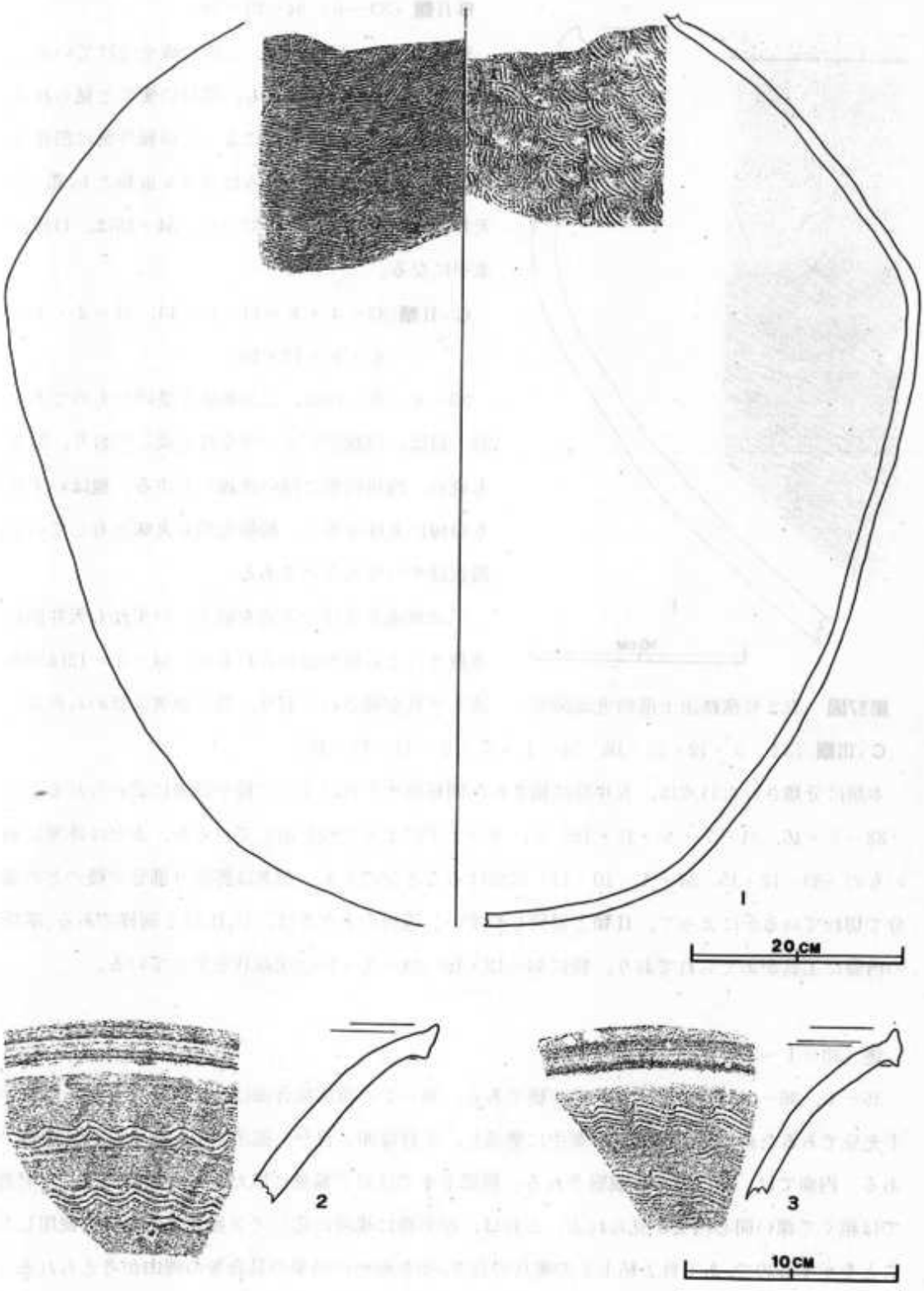
第33図　B２号窯跡出土遺物実測図(5)



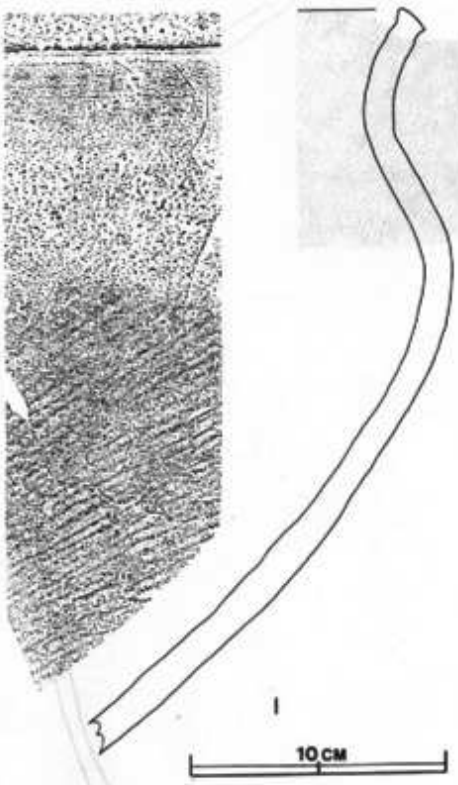
第34図　B 2 号窯跡出土遺物実測図(6)



第35図　B２号廃跡出土遺物実測図(7)



第36図　B２号窯跡出土遺物実測図(8)



第37図　B２号窯跡出土遺物実測図(9)

B II類（33－６，34－13～15）

33－６，34－13・15は，二次焼成を受けている。33－６，34－13はいずれも，端折の変形と見られる。34－14・15は，篦ナデBによって口縁外側に凹線を設けたものである。つまみは各々a iii類とbi類で，天井部は丸味を有する。33－６，34－15は，口縁が水平になる。

C_1II類(33－４・８～11・13・14，34－２・４・６・８・12・16)

33－４・８～10は，二次焼成を受けたものである。33－11は，口縁がシャープな稜を成しており，端折も鋭い。端折内側に浅い沈線を有する。他はいずれも口縁に丸味を有し，端折先端も丸味を有している。端折はすべて大きめである。

二次焼成を受けた４点を除き，いずれも天井部に水挽きによる稜が認められるが，34－４・12は回転篦ナデBが施されており，特に顕著に認められる。

C_1III類（33－５・12・15・16，34－１・７・９～11・17・18）

本類に分類された11点は，天井部に施された回転篦ナデBによって稜が顕著に認められるもの（33－５・16，34－７・９・17・18）と，ヨコナデによって稜を消しているか，または非常に弱いもの（33－12・15，34－１・10・11）に分けることができる。前者は篦削り部分が稜のどの部分で切れているかによって，II類と混同しやすい。端折の大きさは，C_1II類と同様である。端折の内側に工具があてられており，特に33－12・16，34－７・10は沈線状を呈している。

甕（35－１～37－１）

35－１，36－１は，いずれも大型の甕である。35－１の頸部接合面は，肥厚している。焼成が不充分であるため，外面は接合作業中に磨滅し，平行線叩き目が一部消えてしまったのは遺憾である。内面では，同心円文が観察される。胴部下半では貝の輪脈に似た細かい同心円文が，肩部では粗くて深い同心円文が見られる。これは，整形時に場所に応じて２種類のあて具を使用したことを示すもので，あて具と粘土との離れの良さ，叩き締めの効果の具合等の理由が考えられる。

36－２・３は，甕の口縁部で，外面には波状文が見られる。37－１は胴下部までの破片で，ゆがんでいる。頸部はナデ，胴部には平行線叩き目が残っている。

B 2号竪跡出土遺物解説表

図版	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
29 (1)	1	坏	A(15.8) B 4.3 F 10.2	体部は外傾し，やや立ち上がってから外反する。器肉は体部下端で薄く，中段はやや肥厚する。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む。 緑灰色 灰白色	I 50%
〃	2	〃	A(15.6) B 4.7 F(11.4)	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰白色	I 焼台 45%
〃	3	〃	A 10.8 B 3.8 F 7.0	体部は外傾し直線的に立ち上がる。底部は切り離し面のままでやや突出する	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り △	不良 砂礫を含む にぶい橙色を基調とする	III 100%
〃	4	〃	A 11.5 B 3.8 F 7.6	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。底部は切り離し面に回転篦削りを施し，やや突出する。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む にぶい赤褐色を基調とする	III 100%
〃	5	〃	A 10.2 B 3.8 F 6.4	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。底部は切り離し面に回転篦削りを施し，やや突出する。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 外 灰赤色 内 にぶい赤褐色	III 98%
〃	6	〃	A 11.2 B 3.7 F 6.8	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。底部は切り離し面に，回転篦削りを施し，やや突出する。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 赤褐色	III 100%
〃	7	〃	A 10.9 B 3.7 F 6.8	体部は外傾し，やや外反気味に立ち上がる底部は切り離し面に回転篦削りを施し，やや突出する。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 外 浅黄橙色 内 灰白色	III 100%
〃	8	〃	A 11.7 B 3.7 F 6.9	体部は外傾して立ち上がりやや外反する。底部は切り離し面に回転篦削りを施し，やや突出する	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 外 橙色 内 灰白色	III 100%
〃	9	〃	A 11.6 B 3.7 F 6.7	体部は外傾し直線的に立ち上がる。底部は切り離し面に回転篦削りを施し，やや突出する。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	III 100%
〃	10	〃	A 12.2 B 4.1 F 7.1	体部は外傾し，やや外反する。底部は切り離し面に回転篦削りを施し，やや突出する。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	III 100%
〃	11	〃	A 11.7 B 3.5 F 6.5	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。底部は切り離し面に回転篦削りを施す。やや突出するが篦削りの中心が水挽きの中心からズれているため，½ほどの範囲で，体部下端の水挽き部が失われている。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	III 100%
〃	12	〃	A 11.4 B 5.0 F 7.2	体部は外傾し，口縁はやや外反する。底部は切り離し面に回転篦削りを施し，体部下端は½程度の範囲が回転篦削りがなされ，底部突出部を調整する。	水挽き，ヨコナデ 底部 体部下端 回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	III 100%
30 (2)	1	〃	A 10.9 B 3.6 F 6.8	体部は外傾し，やや外反気味。底部は切り離し面に回転篦削りを施し，やや突出する。体部下端は一部回転篦削りが行なわれ，整形される。	水挽き，ヨコナデ 底部 体部下端 一部 回転篦削り	不良 砂礫を含む 外 灰白色 内 暗灰色	III 100%
〃	2	〃	A 10.9 B 4.1 F 7.0	体部は外傾し直線的に立ち上がる。体部下端½ほどの範囲に回転篦削り。	水挽き，ヨコナデ 底部 体部下端 回転篦削り	不良 砂礫を含む 明赤褐色を基調とする	III 100%
〃	3	〃	A 11.3 B 4.1 F 7.4	体部は外傾し，口縁はやや外反。体部下端½ほどの範囲に回転篦削り。	水挽き，ヨコナデ 底部 体部下端 回転篦削り	不良 砂礫を含む 赤褐色を基調とする	III 100%

30 (2)	4	坏	A 10.7 B 3.8 F 6.3	体部は外傾し，上半は厚みを減じてやや外反気味。底部は切り離し面に回転篦削りを施し，体部下端は篦削りによって底部の突出部を調整。	水挽き，ヨコナデ 底部 体部下端 } 回転篦削り	不良 砂礫を含む 外 にぶい赤褐色 内 橙色	Ⅲ 100%
〃	5	〃	A 10.3 B 3.5 F 5.7	体部は外傾し，やや外反気味。底部は切り離し面に回転篦削りを施し，一部篦ナデを行なう。体部下端は回転篦削りによって底部の突出部を調整する。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 回転篦ナデA 体部下端回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色を基調とする	Ⅲ 98%
〃	6	〃	A 11.5 B 4.0 F 6.8	体部は外傾する。底部は切り離し面に回転篦削りを施し，更に体部下端部に篦削りを行って底部突出部を調整する。	水挽き，ヨコナデ 底部 体部下端 } 回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	Ⅲ 100%
〃	7	〃	A 10.9 B 4.8 F 7.3	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。	水挽き，ヨコナデ 底部 体部下端 } 回転篦削り	不良 砂礫を含む。 灰白色を基調とする	Ⅲ 100%
〃	8	〃	A 10.2 B 3.7 F 7.5	体部は外傾し，口縁はやや外反する。	水挽き，ヨコナデ 底部 体部下端 } 回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色を基調とする	Ⅲ 98%
〃	9	〃	A 11.5 B 4.2 F 6.6	体部は外傾し，口縁はやや外反する。	水挽き，ヨコナデ 底部 体部下端 } 回転篦削り	不良 砂礫を含む 外 赤褐色 内 橙色	Ⅲ 98%
〃	10	〃	A 10.3 B 3.8 F 7.0	体部は外傾し，内反気味に立ち上がる。	水挽き，ヨコナデ 底部 体部下端 } 回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	Ⅲ 100%
〃	11	〃	A 11.0 B 4.0 F 7.1	体部はやや外傾し，直線的に立ち上がる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 回転篦削り 体部下端回転篦削り	不良 砂礫を含む 体部 灰白色 底部 淡黄色	Ⅲ 100%
31 (3)	1	〃	A 16.3 B 5.0 F 11.0	体部は外傾し，外反しながら立ち上がる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良 砂礫を含む オリーブ黒色	Ⅲ 95%
〃	2	〃	A(14.1) B 5.0 F 9.6	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 青灰色を基調とする	Ⅲ 60%
〃	3	〃	A 14.8 B 4.2 F 9.6	体部は外傾し，外反しながら立ち上がる。底部は中央が上がる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	Ⅲ 焼古 75%
〃	4	〃	A 15.3 B 4.7 F 9.7	体部は外傾し，やや外反する。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 浅黄橙色	Ⅳ 85%
〃	5	〃	A 15.8 B 4.9 F 10.6	体部は外傾する。底部には重ね焼きによる付着物が見られる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む オリーブ黒色	Ⅳ 90%
〃	6	〃	A(15.5) B 4.4 F(10.5)	体部は外傾し，やや立ち上がってから外反する。磨滅が激しい。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	Ⅳ 55%
〃	7	〃	A(15.0) B 4.9 F(11.4)	体部は外傾し直線的に立ち上がる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色	Ⅳ 55%
〃	8	〃	F 9.2 J 3.8	体部は外傾する。全体に磨滅が著しい。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 明褐灰色	Ⅳ 70%

32 (4)	1	坏	A 15.8 B 4.9 F 10.4	体部は外反気味に立ち上がる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 淡黄色	Ⅳ 90%
〃	2	〃	A 16.3 B 4.7 F 10.5	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む オリーブ黒色	Ⅳ 焼台 90%
〃	3	〃	A(16.3) B 4.5 F 10.9	体部は外傾し口縁は外反する。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰色	Ⅳ 70%
〃	4	〃	A 17.3 B 4.8 F 11.6	体部は外傾し，直線的に立ち上がる	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	Ⅳ 焼台 80%
〃	5	〃	A 15.9 B 4.9 F 10.2	体部はやや外傾し，やや立ち上がってから外反する。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	Ⅳ 95%
〃	6	〃	A 15.6 B 5.0 F 10.6	体部は外傾し，外反しながら立ち上がる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 浅黄橙色	Ⅳ 70%
33 (5)	1	〃	A 15.9 B 4.9 F 9.8	体部は外傾し，外反しながら立ち上がる。磨滅が著しく，表面が良く見えない。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	焚口 70%
〃	2	〃	A 11.1 B 3.8 F 7.4	体部は外傾し外反気味に立ち上がる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 明褐灰色	焚口 65%
〃	3	〃	A 15.4 B 4.5 F 10.0	体部は外傾しやや外反気味。磨滅が著しい。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 淡黄色	焚口 85%
〃	4	蓋	A 19.1 B 4.7 H 4.6 I 1.1	つまみはb ii 類であるが，両端が大きく外上方へ突出す。本来は篦削り端が張り丸味をもって口縁へ下がったものであろう。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 赤灰色	I 50%
〃	5	〃	A(15.8) B 4.3 H 3.4 I 0.9	つまみはa iii 類，天井が高い。 擬宝珠状である。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 褐灰色	I 50%
〃	6	〃	A(15.6) B 3.6 H 3.3 I 1.0	つまみはa ii 類。天井はやや高い。口縁端は突出し，端折は内傾し先端が外傾する。（かえりの名残りか？）	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 外 灰色 内 赤灰色	I 50%
〃	7	〃	A(16.4) J 1.4	ゆがみにより全体に扁平。口縁内側には1条の凹みが認められる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む にぶい橙色	I 50%
〃	8	〃	A 17.2 B 3.6 H 3.2 I 0.9	つまみはa iii 類。天井から口縁へなだらかに下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 外 灰色 内 暗赤灰色	II 90%
〃	9	〃	A 15.8 B 4.4 H 3.2 I 1.3	つまみはa ii 類。天井が高く，大きく傾斜して，口縁へ下がる。端折は口縁端よりやや内側へ入る。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰色	II 95%
〃	10	〃	A 17.7 B 4.1 H 3.4 I 1.2	つまみはa ii 類で頂部が少しつぶれている。天井は高くやや大きな傾斜で口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰色	II 80%

33 (5)	11	蓋	A (16.8) B 3.5 H 3.9 F 0.9	つまみはｂⅱ類。 天井から口縁へなだらかに下がり口縁端は鋭く突出する。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	Ⅱ 60%
〃	12	〃	A 15.9 J 3.4	全体にやや丸味を有し縫折は小さくやや内傾する。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 褐灰色	Ⅲ 55%
〃	13	〃	A 18.1 B 3.6 H 4.1 I 0.6	つまみはｂⅲ類で一部がつぶれている。内面には粘土を貼って上をナデた跡及び篦ナデAが見られる（整形時の亀裂を補修したものか？）	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り 内面一部篦ナデA	不良 砂礫を含む 外 にぶい橙色 内 にぶい褐色	Ⅳ 90%
〃	14	〃	A 16.9 B 4.0 H 3.8 I 0.7	つまみはｂⅱ類。天井はやや高い。ヨコナデは口縁付近と内面。縫折内側は篦状のもので調整され，内側へ凹む。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 淡黄色	Ⅳ 95%
〃	15	〃	A 17.6 B 3.4 H 3.6 I 0.7	つまみはｂⅱ類。天井から口縁へなだらかに下がる。稜が明瞭である。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 浅黄橙色	Ⅳ 97%
〃	16	〃	A 17 B 4.1 H 3.5 I 0.9	つまみはｂⅱ類。天井部は篦削り範囲を除き篦ナデBにより明瞭な段が見られる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り 天井部回転篦ナデB	不良 砂礫を含む 赤褐色	Ⅳ 90%
34 (6)	1	〃	A 16.6 B 3.0 H 3.2 I 0.9	つまみはａⅱ類。天井から口縁へなだらかに下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 浅黄橙色	Ⅳ 90%
〃	2	〃	A 16.6 B 3.9 H 3.3 I 1.0	つまみはａⅱ類。天井から丸味をもって口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 淡橙色	Ⅳ 85%
〃	3	〃	A 16.7 B 3.7 H 3.5 I 0.6	つまみはｂⅱ類。器滅が著しい。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 淡黄色	Ⅳ 80%
〃	4	〃	A 16.7 B 3.5 H 3.0 I 0.9	つまみはａⅳ類。天井から口縁へなだらかに下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	Ⅳ 85%
〃	5	〃	A 15.9 B 3.5 H 3.0 I 0.8	つまみはａⅲ類。天井から丸味をもって口縁へ下がる。口縁はやや起き上がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 浅黄橙色	Ⅳ 85%
〃	6	〃	A 16.8 B 4.1 H 3.1 I 1.0	つまみはａⅱ類。天井が高く扁平な円錐形状を呈する。口縁は起き上がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む にぶい橙色	Ⅳ 85%
〃	7	〃	A 17.0 B 4.3 H 3.5 I 0.6	つまみはｂⅱ類。天井が高く丸味をもって口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰黄色	Ⅳ 80%
〃	8	〃	A 16.1 B 3.1 H 3.1 I 1.0	つまみはａⅱ類。天井はやや丸く篦削り範囲が片寄る。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 浅黄橙色	Ⅳ 80%
〃	9	〃	A 17.4 B 3.8 H 3.6 I 0.7	つまみはｂⅱ類。篦削り端から丸味をもって口縁へ下がる。天井水挽き部は篦ナデBにより稜が極めて明瞭である。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り 天井部回転篦ナデB	不良 砂礫を含む 灰白色	Ⅳ 70%
〃	10	〃	A (15.5) B 3.6 H 3.1 I 1.0	つまみはａⅱ類で，中央が丸味をおびる。天井から口縁へなだらかに下がる。篦きずあり。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 淡橙色	Ⅳ 60%

34 (6)	11	蓋	A 17.6 B 3.6 H 3.9 I 0.9	つまみはb i類で一部がつぶれる。 つまみ接合部が最も高く，なだらかに口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転糸切り	不良 砂礫を含む 灰白色	Ⅳ 60%
〃	12	〃	A(16.7) B 3.7 H 3.4 I 0.7	つまみはb ii類。天井は高くなだらかに口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転糸切り 天井部回転篦ナデB	不良 砂礫を含む 灰白色	Ⅳ 60%
〃	13	〃	A(15.7) B 3.7 H 3.6 I 0.7	つまみはa ii類。口縁端が突出する。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転糸切り	良 砂礫を含む 褐灰色	Ⅳ 50%
〃	14	〃	A 16.7 B 4.4 H 2.9 I 0.9	つまみはa iii類で径に比して高い。天井はつまみ接合部が最も高く，扁平な円錐形状を呈する。口縁は二段に見える。篦削り範囲が広い。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む にぶい橙色	Ⅳ 65%
〃	15	〃	A(15.6) B 3.4 H 3.4 I 0.6	つまみはb i類で外周が外上方へ，やや突出する。天井はやや高い。端部は外方へ屈曲し，口縁は二段に見える。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 黒褐色	Ⅳ 50%
〃	16	〃	A 17.6 B 3.6 H 3.9 I 0.8	つまみはb iii類。天井から口縁へなだらかに下がる。磨滅が著しい。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 浅黄橙色	焚口 85%
〃	17	〃	A 16.1 B 4.2 H 3.2 I 0.9	つまみはa ii類。つまみ接合部が最も高く大きく傾斜して口縁へ下がる。篦ナデBにより稜が明瞭。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り 〃 回転篦ナデB	不良 砂礫を含む にぶい橙色	焚口 98%
〃	18	〃	A 16.4 B 3.8 H 3.4 I 0.9	つまみはa i類。天井篦削り部は平坦。外面は口縁のみにヨコナデが行なわれ稜が明瞭に認められる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転糸切り	不良 砂礫を含む 浅黄橙色	焚口 55%
35 (7)	1	甕	A 57.2 J 103.8 K 85.6	頸部は強く外反し，口唇は比較的単純。胴部の張りはあまり強くない。胴部は5段の波状文と情定する浅い沈線。胴部外面は平行線叩き目，内面は同心円文。底部を欠くが，丸底である。	巻き上げ，ナデ 叩き	不良 砂礫を含む 灰白色	Ⅳ 90%
36 (8)	1	〃	J 86.0 K 85.6	胴の張りが強く，肩はやや丸味をおびる。外面は平行線叩き目，内面は同心円文。底部は丸底。	巻き上げ，叩き	不良 砂礫を含む 灰白色	Ⅳ 70%
〃	2	〃	J 7.3	強く外反する甕の口縁で，口唇は上方へやや突出。外面に波状文。	巻き上げ，ナデ	良 砂礫を含む 灰色	焚口
〃	3	〃	J 9.8	強く外反する甕の口縁で，口唇は上下に突出。頸部外面に波状文。	巻き上げ，ナデ	良 砂礫を含む 褐灰色	焚口
37 (9)	1	〃	J 25.4	頸部の外傾は比較的強く，口唇は単純。胴の張りはあまり強くない。ゆがみがある。胴部外面には平行線の叩き目。	巻き上げ，ナデ 叩き	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色を基調とする	Ⅳ

(3) 灰原（第25図　PL9）

① 灰　原

本地点における灰原の範囲の確認は，ほぼB1号・B2号両窯跡の主軸に沿った2本のトレンチと，それに直交するトレンチによって行った。

その結果，B2号窯跡下方から東へ流れる灰層を確認した。範囲は16グリットに及ぶが，灰原の末端は不明瞭である。灰層は1層のみで，B1号・B2号両窯跡は同時期に操業されたものと断定できる。灰層の厚さはA地点のそれよりも薄く，遺物の量も少ない。

以上の事から，本灰原においてはグリット毎に出土した遺物を一括して取り上げた。

②遺物（38－1～40－6）

坏（38－1～9）

AII類（8）

底部が肥厚し，体部はゆるやかに立ち上がる。口縁はやや外反している。本地点でA群に分類されたのは，これのみである。

B_1II類（3～6）

3・6の体部は，入念なヨコナデにより稜が消されている。4・5の体部では，わずかに稜が残る。体部と底部の間に位置する，土とりによって生じた面は，いずれも回転篦削り面とほぼ同じレベルにある。特に5は回転篦削りの面がやや傾いているため，図の右側では面の存在を明瞭に認め得るのに対し，左側ではC_1群と全く同じ形状を呈している。

C_1II類（1・2・7・9）

内面底部周囲と体部内・外面に入念なヨコナデが施されており，わずかに9の体部外面にごく弱い稜を認め得るに過ぎない。体部は直線的なもの（2），体部中段でやや外反するもの（7・9）及び体部中段でやや外反してから口縁でわずかに内反するもの（1）がある。

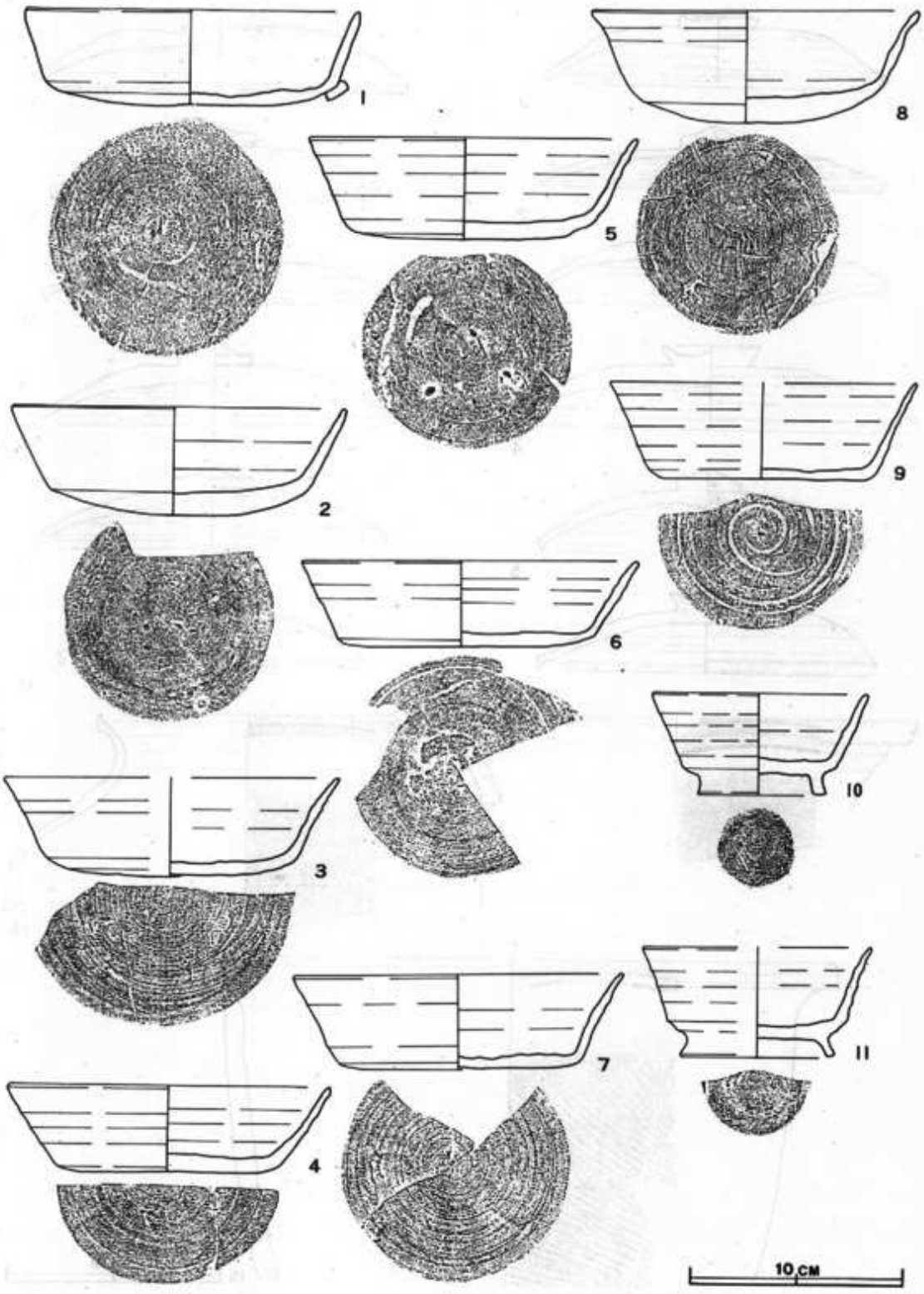
高台付坏（38－10・11）

いずれも高台底部が磨滅しており，実際に使用されていたものであることがわかる。この2点は，灰原の表土を除去する際に出土したものであり，B1・B2両窯跡と直接的に結び付くものではない。

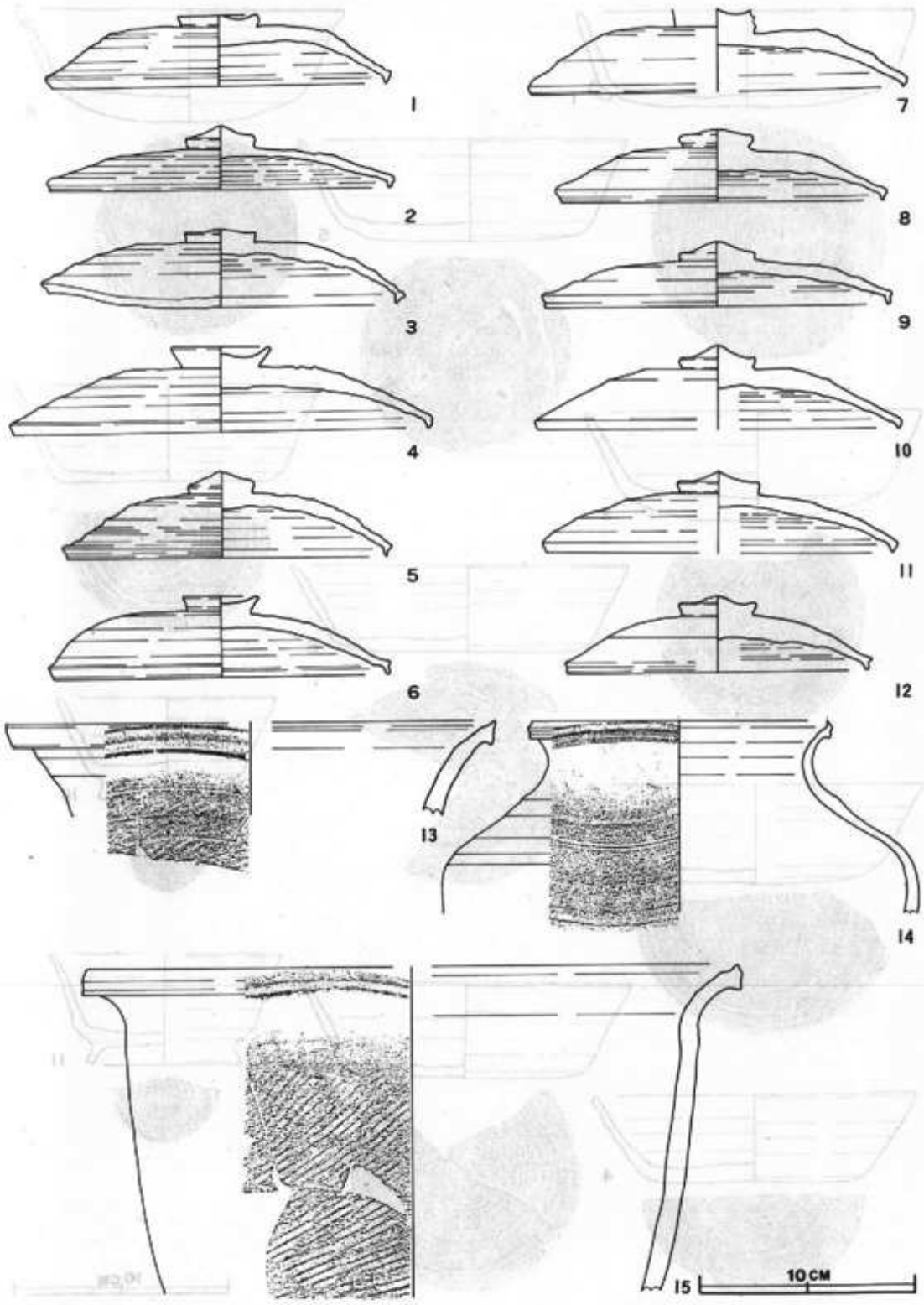
蓋（39－1～12）

BII類（3・5・9・12）

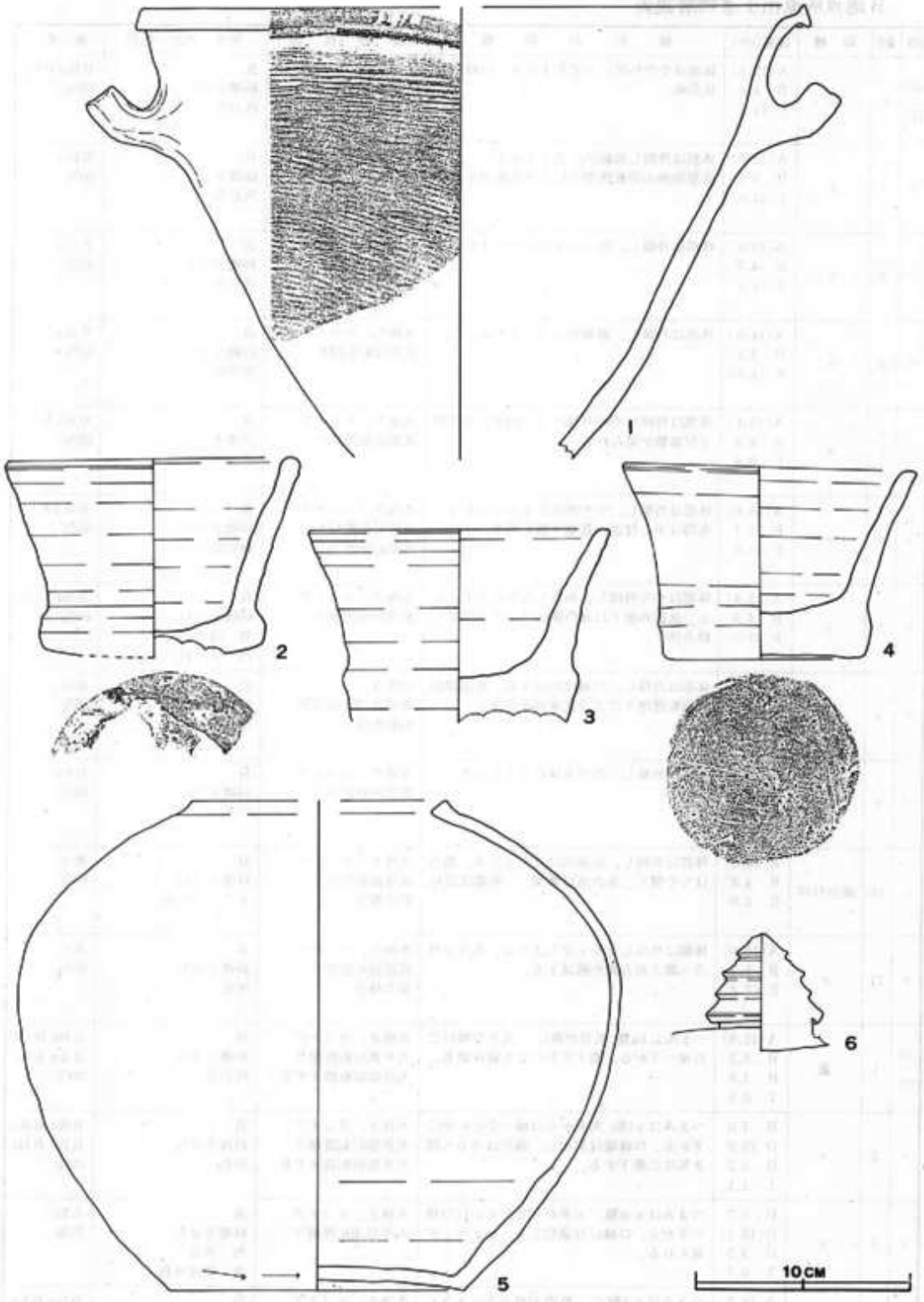
3・5・9は，口縁内側に工具があてられ，沈線状を呈する。12は端折の変形と見られ，突出



第38図　B地点灰原出土遺物実測図(1)



第39図　B地点灰原出土遺物実測図(2)



第40図　B地点灰原出土遺物実測図(3)

B地点灰原出土遺物解説表

図版	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
38 (1)	1	坏	A(15.5) B 4.6 F 11.4	体部はやや外反して立ち上がり，口縁は内反気味。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色	B1b4 B1c4 65%
〃	2	〃	A(15.5) B 5.2 F 11.6	体部は外傾し直線的に立ち上がる。底部周囲の回転篦削りにより丸底状を呈する。	水挽き，ヨコナデ 底部及び底部周囲回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色	B1b4 60%
〃	3	〃	A(15.6) B 4.7 F (9.7)	体部は外傾し，外反しながら立ち上がる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色	B1c5 35%
〃	4	〃	A(14.9) B 4.1 F (8.5)	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良 砂礫を含む 紫灰色	B1b4 50%
〃	5	〃	A(15.1) B 4.9 F 9.8	体部は外傾しやや外反する。内面に自然釉と付着物が見られる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良 砂礫を含む オリーブ灰色	B1b4 B1b5 55%
〃	6	〃	A(15.6) B 4.1 F 10.5	体部は外傾し，やや外反して立ち上がる。底部は中心付近に篦切り痕を残す。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部回転篦削り	良 砂礫を含む 緑灰色	B1b4 B1c5 50%
〃	7	〃	A(15.4) B 4.5 F 11.3	体部はやや外傾し，外反しながら立ち上がる。体部外面と口縁内側はヨコナデにより稜を消す。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良 砂礫を含む 外 暗灰色 内 灰白色	B1b4 B1b5 60%
〃	8	〃	A(15.1) B 5.3 F 10.3	体部は外傾し，口縁は外反する。底部周囲の回転篦削りにより丸底状を呈する。	水挽き，ヨコナデ 底部及び底部周囲回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色	B1b3 55%
〃	9	〃	A(14.4) B 4.6 F 9.6	体部は外傾し，外反気味に立ち上がる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰色	B1b3 40%
〃	10	高台付坏	A 10.0 B 4.8 E 6.0	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。高台はやや開く。高台底は磨滅，底部篦記号。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	良 砂礫を含む オリーブ灰色	表土 60%
〃	11	〃	A(16.0) B 5.2 E (7.2)	体部は外反しながら立ち上がる。高台は外方へ開き高台底が磨滅する。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	良 砂礫を含む 灰色	表土 35%
39 (2)	1	鉢	A(15.5) B 3.3 H 3.8 I 0.5	つまみは，bii類。天井が高く大きな傾斜で口縁へ下がる。篦ナデBにより稜が顕著。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り 天井部回転篦ナデB	良 砂礫を含む 灰白色	B1b4 B1c4 B1c5 B1c6 70%
〃	2	〃	B 3.0 D 15.9 H 3.2 I 1.1	つまみはai類。天井から口縁へなだらかに下がる。口縁端は突出し，端部は外方へ開き気味に垂下する。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り 天井部回転篦ナデB	良 砂礫を含む 灰色	B1b3 B1b4 B1b7 B1d5 70%
〃	3	〃	B 3.7 D(16.3) H 3.3 I 0.7	つまみはaiii類。天井からなだらかに口縁へ下がる。口縁には退化した「かえり」が見られる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 外 灰色 内 明褐灰色	B1b5 70%
〃	4	〃	A 19.5 B 4.0 H 4.6 I 1.1	つまみはbii類で，外周が外上方へ大きく突出する。天井から口縁へなだらかに下がる。口縁端はやや突出。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り 天井内面一部静止篦ナデA	良 砂礫を含む 灰白色	B1b4 B1c5 B1c7 60%

39 (2)	5	甕	A 15.0 B 4.1 H 3.1 I 1.1	つまみはａｉ類。天井が高い。口縁端はやや突出し、端折が外方へ開くため２段に見える。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転糸切り 〃 回転篦ナデＢ	良 砂礫を含む 明オリーブ灰色	Ｂ Ⅰb4 55%
〃	6	〃	A(15.1) B 3.9 H 3.5 I 0.9	つまみはｂⅲ類。天井はやや高い。 口縁端は突出する。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色	Ｂ Ⅰb4 50%
〃	7	〃	A(17.4) J 3.8	つまみは外面を欠くがｂⅱ類。天井は高く篦削り痕から丸味をもって口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色	Ｂ Ⅰb4 40%
〃	8	〃	B 3.4 D 15.1 H 3.4 I 0.8	つまみはａiv類。天井は高く大きな傾斜で口縁へ下がる。口縁端は突出し端折は外方へ開き気味に垂下する。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 外 浅黄色 内 灰オリーブ色	表土 50%
〃	9	〃	A(16.0) B 3.0 H 3.5 I 0.9	つまみはａⅱ類。天井からなだらかに口縁へ下がる。口縁端は突出し端折が外方へ開くので２段に見える。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰色	表土 50%
〃	10	〃	A(16.8) B 3.9 H 3.5 I 1.1	つまみはａⅱ類。天井が高く篦削り痕から大きな傾斜で口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色	表土 45%
〃	11	〃	A(16.1) B 3.8 H 3.9 I 1.1	つまみはａⅱ類。つまみ接合部が最も高く，やや丸味をもって口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 黄灰色	表土 45%
〃	12	〃	B 3.5 D(14.0) H 3.6 I 0.9	つまみはｂⅰ類。天井から口縁へ丸味をもって下がる。口縁端は突出し，端折（退化した「かえり」）は外方へ開く。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 外 黄灰色 内 浅黄色	表土 40%
〃	13	壺	A 22.9 J 4.4	頸部は外反し，口縁は上下が突出する。頸部外面に叩き目	巻き上げ，叩き ヨコナデ	不良 砂礫を含む 灰褐色	Ｂ Ⅰb4 Ｂ Ⅰd7 Ｂ Ⅰda 口縁¾
〃	14	〃	A(13.8) J 9.2 K(22.1)	口縁は上下とも鋭角に突出する。 口縁下半に回転篦ナデＢ。	水挽き，ヨコナデ 口縁下半回転篦ナデＢ	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰白色を基調とする	Ｂ Ⅰa3 口縁及び 肩¾
〃	15	〃	A(30.8) J 15.2	頸部は外反し，口縁上端は突出。口縁下端はやや外方へ開き気味に突出。外面叩き目	巻き上げ，叩き 胴部内面・頸部 ヨコナデ	不良 砂礫を含む	Ｂ Ⅰa3 口縁½
40 (3)	1	甕	A(31.7) J 21.5	口縁は外反し，口縁上下が突出。把手接合部は指・篦によるナデ	巻き上げ，叩き 内面・口縁ナデ	不良 砂礫を含む 灰黄色	Ｂ Ⅰa3 Ｂ Ⅰb7 20%
〃	2	擂鉢	A 13.1 B 9.4 F(10.4)	体部は外傾し，外反する。全体に厚手である。	水挽き，ヨコナデ	良 砂礫を含む 灰白色	Ｂ Ⅰb3 Ｂ Ⅰb4 70%
〃	3	〃	A 13.8 J 9.0	全体に厚手。体部は外反しながら立ち上がる。	水挽き，ヨコナデ	良 砂礫を含む 青灰色	Ｂ Ⅰa3 Ｂ Ⅰb4 70%
〃	4	〃	A 13.5 B 8.9 F 9.2	体部は外傾し，やや外反する。全体に厚手	水挽き，ヨコナデ 底部静止篦ナデＡ	良 砂礫を含む 明青灰色	Ｂ Ⅰb4 Ｂ Ⅰc4 Ｂ Ⅰc5 80%
〃	5	無頸壺	A(11.9) B 22.8 F 13.2 K 27.9	胴は底部から¾ほどの所が最も張る。全体に厚手で底部は上げ底風。	水挽き，ヨコナデ 胴部下端篦削り 底部静止篦削り，ナデ	良 砂礫を含む 暗灰色	灰原来端 65%

40 (3)	6	異　形 つまみ	J　5.1	四層の円錐状。下層ほど径が大きい。 最大のもので径 5.4cmを測る。	ヨコナデ 層間回転篦ナデB	不良 砂粒を含む 灰黄色	表土

するロ縁とやや外傾する端折によって，２段口縁状を呈する。５は，天井部外面に回転篦ナデBが施され，その後ヨコナデ調整されているが，稜は顕著に認められる。

BⅢ類（２）

口縁内側には工具があてられ，沈線状を呈する。天井部外面の稜が顕著で，BⅡ類の５と近似する。

C，Ⅱ類（１・４・６～８・10・11）

６・８のロ縁は，外側がやや凹む。１の天井部外面は，回転篦ナデBによる沈線が３周する。内面はヨコナデによって稜が消されるが，８は口縁付近に限定されているため，内側の稜は明瞭に認められる。

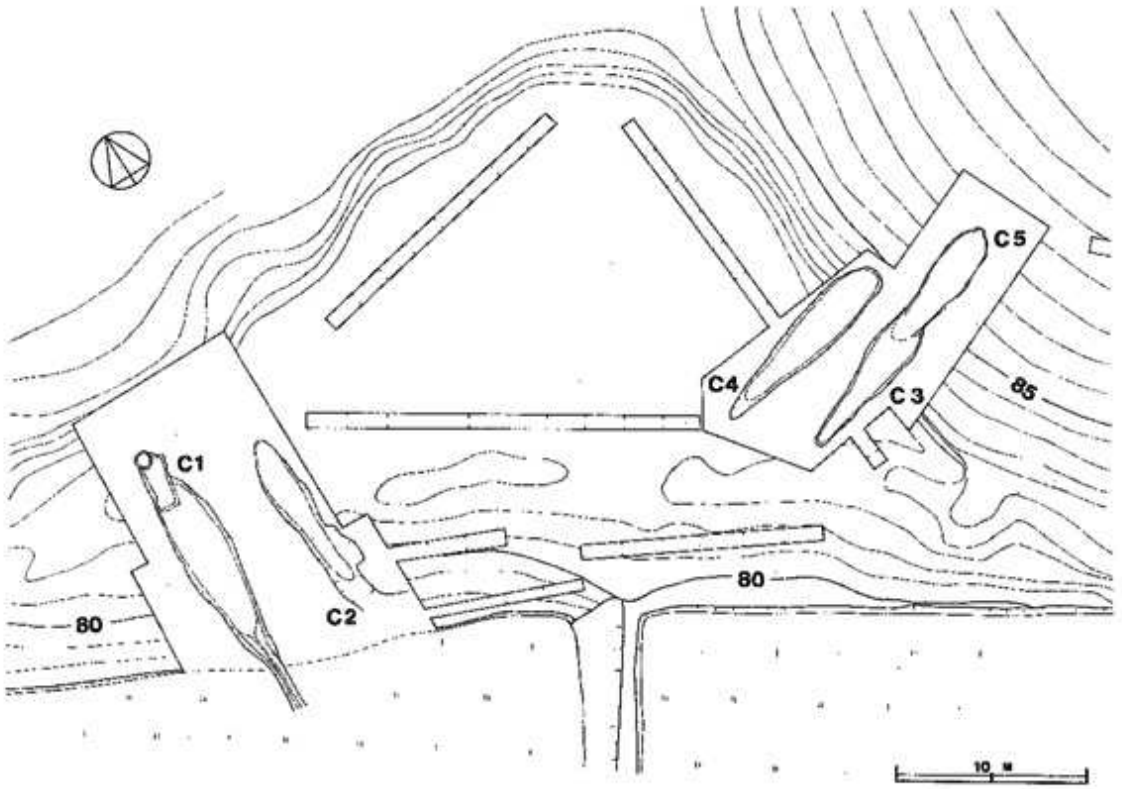
甕（39－13～15）

13は強く外反する甕の口縁部で，口唇は内側に浅い沈線があるため，上方へ突出する。15の胴部には平行線の叩き目が認められ，口縁は強く外反する。口唇のつくりは，13とほぼ同じである。14は，壺とするべきであろう。水挽きヨコナデ整形である。

その他（40－１～６）

１は，甑と思われる。外面に平行線叩き目がある。把手は指ナデ及び篦ナデAにより整形されている。２～３は，擂鉢であろう。全体に厚手で，体部外面は稜が顕著である。底部は，篦ナデAにより調整。５は，灰原の表土除去作業中に発見されたものである。全体に薄手で，水挽き整形である。本地点の遺物の時期とは異なり，B1・B2両窯跡の操業が行われなくなってから，投棄または埋設されたものであろう。６のつまみは，同形のA地点の灰原で出土したつまみ（23－５）と比較すると，はるかに精巧に作られている。４層の塔を模したものであろうか。蓋そのものは，見つかっていない。

第3節　C　　地　　点



第41図　C地点地形図

1　地　形

本地点は高取山北側の支谷東側斜面に位置し，中央付近に刻まれた小支谷を含む。小支谷は，B地点がある小支谷の対岸に位置する。須恵窯跡5基を確認したのは，この小支谷の入口付近である。

小支谷の入口付近は「古屋敷」と呼ばれ，かつて（江戸期）民家が建てられていたと伝えられる。事実この民家を建てる際に小支谷入口両側の斜面裾部及び谷底奥を削平して整地した痕跡が認められ，旧状はかなり損なわれている。現状では入口幅40mを測るが，本来は20m内外であったものと思われる。この削平によりC3号・C4号両窯跡とも，かなりの量の覆土が失われており，特にC3号窯跡が著しい。

須恵窯跡は，小支谷入口の北西側斜面下に2基（C1号・C2号窯跡），南東側斜面下に2基（C3号・C4号窯跡），中腹に1基（C5号窯跡）がある。

支谷の谷底は，小支谷入口直下まで陸田になっている。

2　遺構と遺物

(1)　C1号窯跡（付図4　PL16・17・23）

①　構　造

地下式無段登窯の構造を有する。奥壁と煙道は，後世に掘り込まれた土壙によって切られている。主軸は，N－2°－Wを示す。全長10m内外，幅は焼成室で最大2.5m，焚口で1.2mを測る。

Ⅰ次ベースは，青灰色に堅緻に焼き締まっている。焚口端から1.6mで傾斜が変わる。手前側は水平に近いが，奥は19°内外の傾斜を示す。周囲には排水溝が設けられている。右側壁下奥では甕片を壁に立てかけて溝を覆い，トンネル状にしていた。焚口側は，蓋坏の蓋や坏身を溝内に並べてある。蓋はつまみを上にし，坏身は例外なく底部を上にしている。これに対し，左側壁下では明らかに溝に伴うと判断される遺物が見られず，粘土状の土を用いて溝の上を覆い，トンネル状に構築していた。左右の溝は焚口で一つになり，卵形の浅い掘り込みを経て窯外へ長く延びている。窯外の溝は確認された長さで10m内外を測るが，湧水等のため先端を明確にすることはできなかった。Ⅱ次ベースは，左側排水溝の上を粘土・甕片を重ねて覆い，右側は砂質土で排水溝を埋めて整床していた。また，焚口近くでは部分的な修復が見られた。あるいはこれは意図的な修復ではなく，後述するように奥から青灰色層が流れ出したために生じたものかも知れない。

Ⅲ次ベースは，Ⅱ次ベース上に堆積した厚い天井・窯壁片層の上にあり，奥の半分を欠く。理由はわからない。覆土を掘り込む際に掘り過ぎたらしいが，セクションにおいても明瞭には観察されなかった。本ベースも，焚口近くで部分的に青灰色層の厚みの増加が見られる。

本窯跡付近の地山には薄い礫層や砂鉄層が見られ，特に燃焼室付近は石化して極めて堅緻である。このため，燃焼室のやや奥の天井はかなり後まで残っていたらしい。その状況から，断面はカマボコ型を呈していたものと判断される。

遺物は，各ベースから少量の出土を見ている。特徴として挙げられるのは，排水溝からの蓋と坏身である。

②　遺物（42－1～45－8）

坏（42－1～43－6）

ここに示した17点の坏は，出土位置や遺物の状況から，次の3グループに分けられる。

1．排水溝出土……42－1～8

2．焼台……42－9～11，43－2・3

3．製品……43－1・5・6

第1・第2両グループは，明らかに第3グループよりも古い。この3グループを分類し，各グル

ープの傾向について考えてみる。

B_1II類（42－2・9，43－1・6）

体部はいずれも直線的で，外面には回転篦ナデBが施される。43－1・6は，さらにヨコナデ調整されている。内面は，42－2，43－1の体部に稜が残る。

B'_1II類（43－2・5）

いずれも体部外面に回転篦ナデBが施され，2は体部内面上半にも見られる。

B_2II類（42－1・5，43－3）

いずれも，体部外面には水挽きによる稜がわずかに認められる。42－1・5は，ゆがみが著しい。

C_2II類（42－3・4・6～8・10・11）

いずれも，水挽き・ヨコナデ整形。8は，体部外面の稜が顕著である。体部は，いずれもやや丸味をもって立ち上がり，8・11は口縁が外反する。

出土位置による各類の坏個体数

グループ＼分類	B_1II	B'_1II	B_2II	C_2II
1	1	0	2	5
2	1	1	1	2
3	2	1	0	0

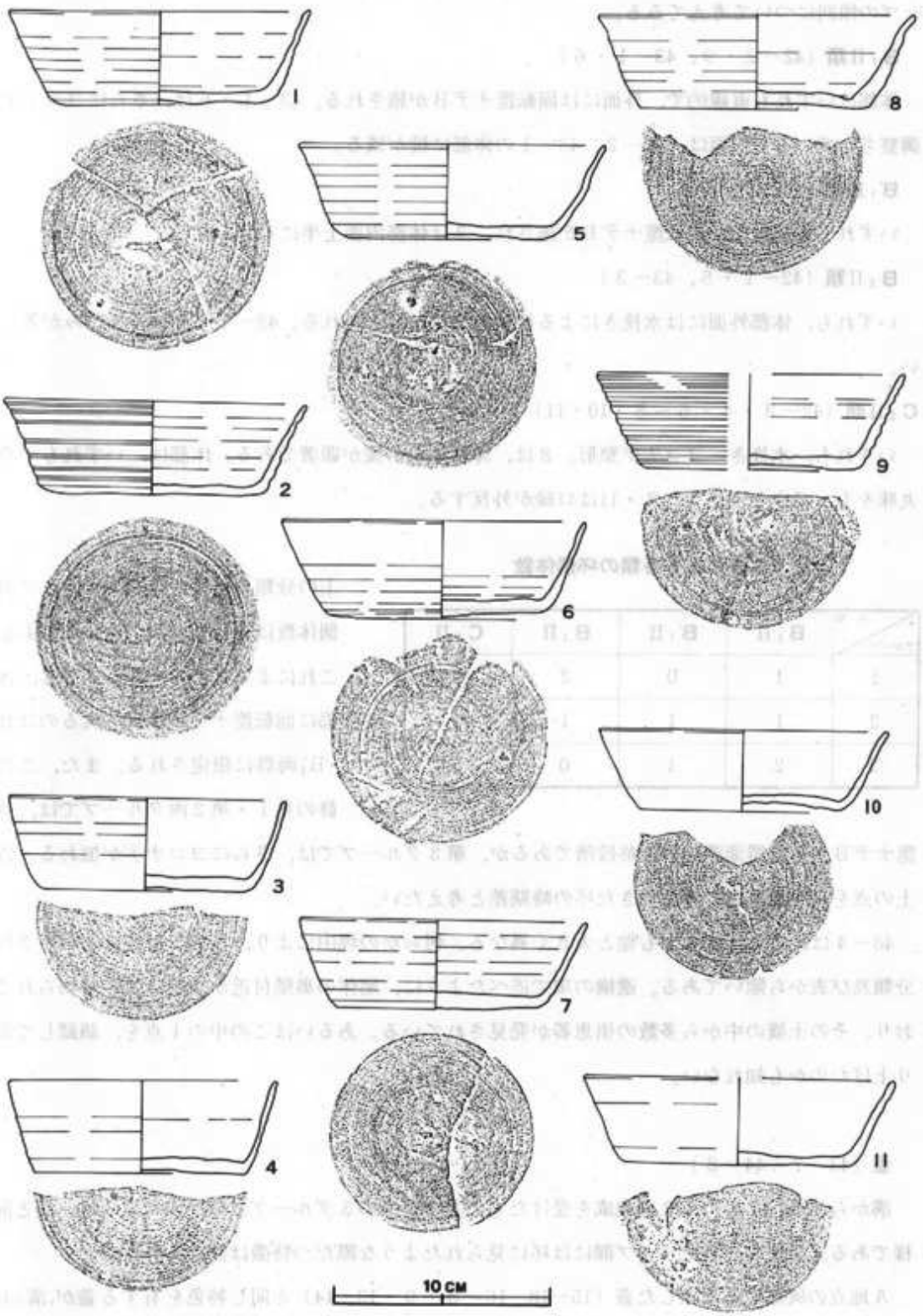
上の分類の結果を先述のグループ別個体数にしたものが，左の表である。これによるとどのグループでも，体部に回転篦ナデBが見られるのはB_1・B'_1両群に限定される。また，この群の第1・第2両グループでは，回篦ナデBが体部器面調整の最終段階であるが，第3グループでは，さらにヨコナデが加わる。以上の点を，本窯跡内で確認できた坏の時期差と考えたい。

43－4は，器形・胎土とも他と大きく異なる。何らかの理由により，混入したものと判断され，分類及び表から除いてある。遺構の項で述べたように，窯体の奥壁付近が土壙によって切られており，その土壙の中から多数の須恵器が発見されている。あるいはこの中の1点を，誤認して取り上げたのかも知れない。

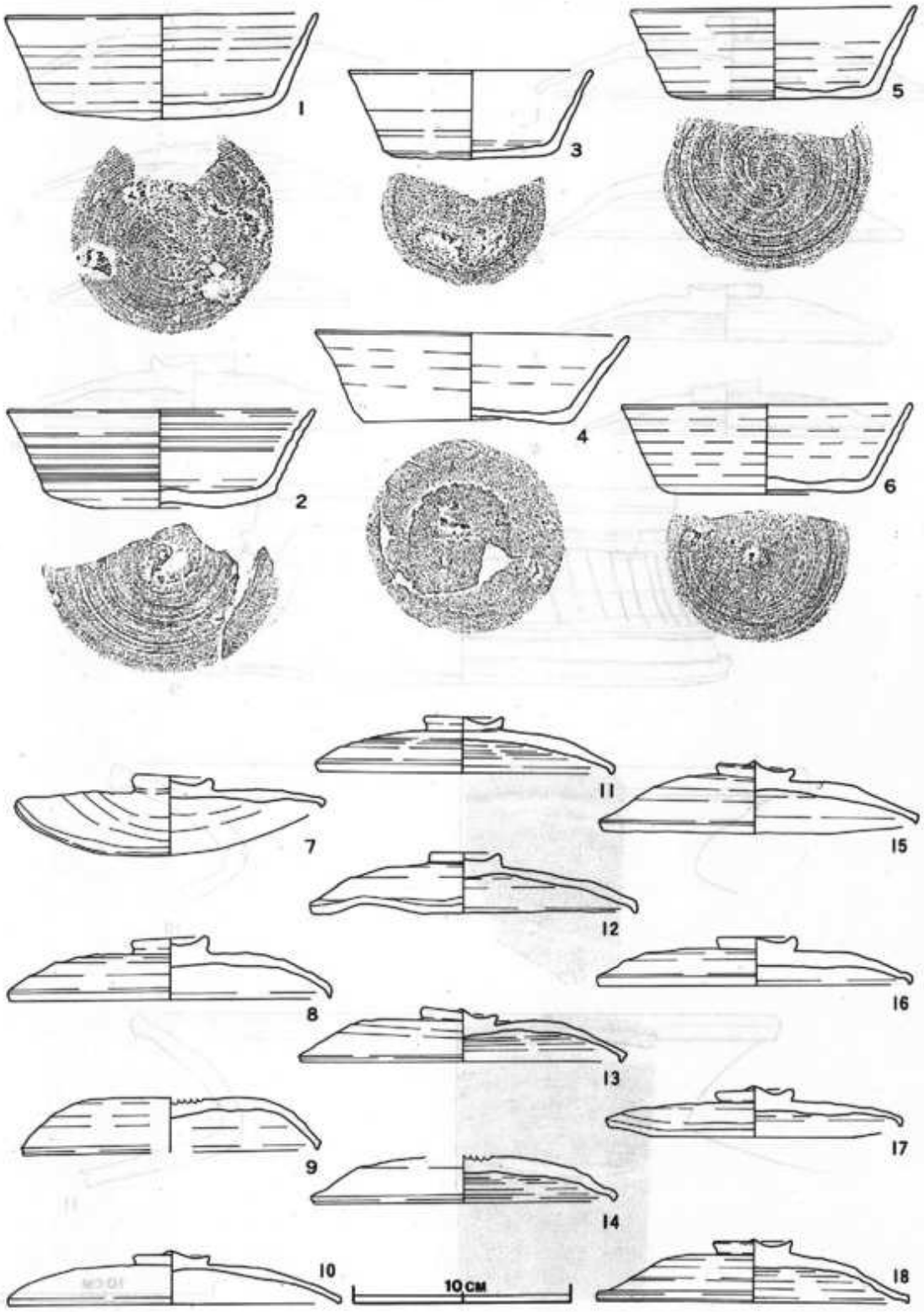
蓋（43－7～44－8）

溝から出土したもの，2次焼成を受けたもの及び製品の3グループに分けられるのは，坏と同様である。しかし，各グループ間には坏に見られたような際だつ特徴は認められない。

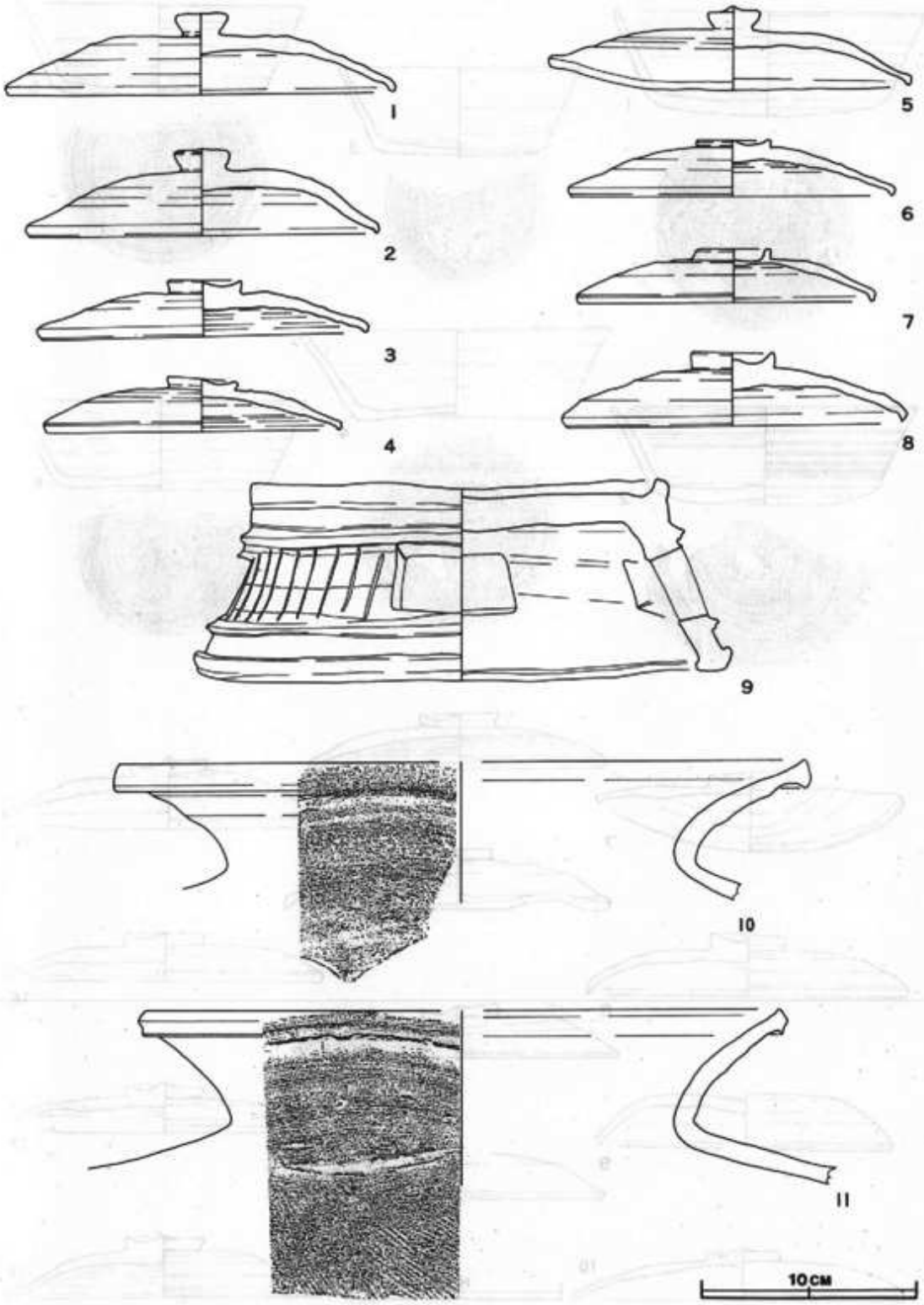
A地点の灰原から出土した蓋（15－18，16－8・9・13・14）と同じ特色を有する蓋が，溝（43－9）とベース上（43－13）から1点ずつ出土している。43－13は，やや扁平である。明らかに本窯跡に伴う，c群のつまみを有する蓋（44－1・2・5）が見られる。以上の2点が，本窯跡



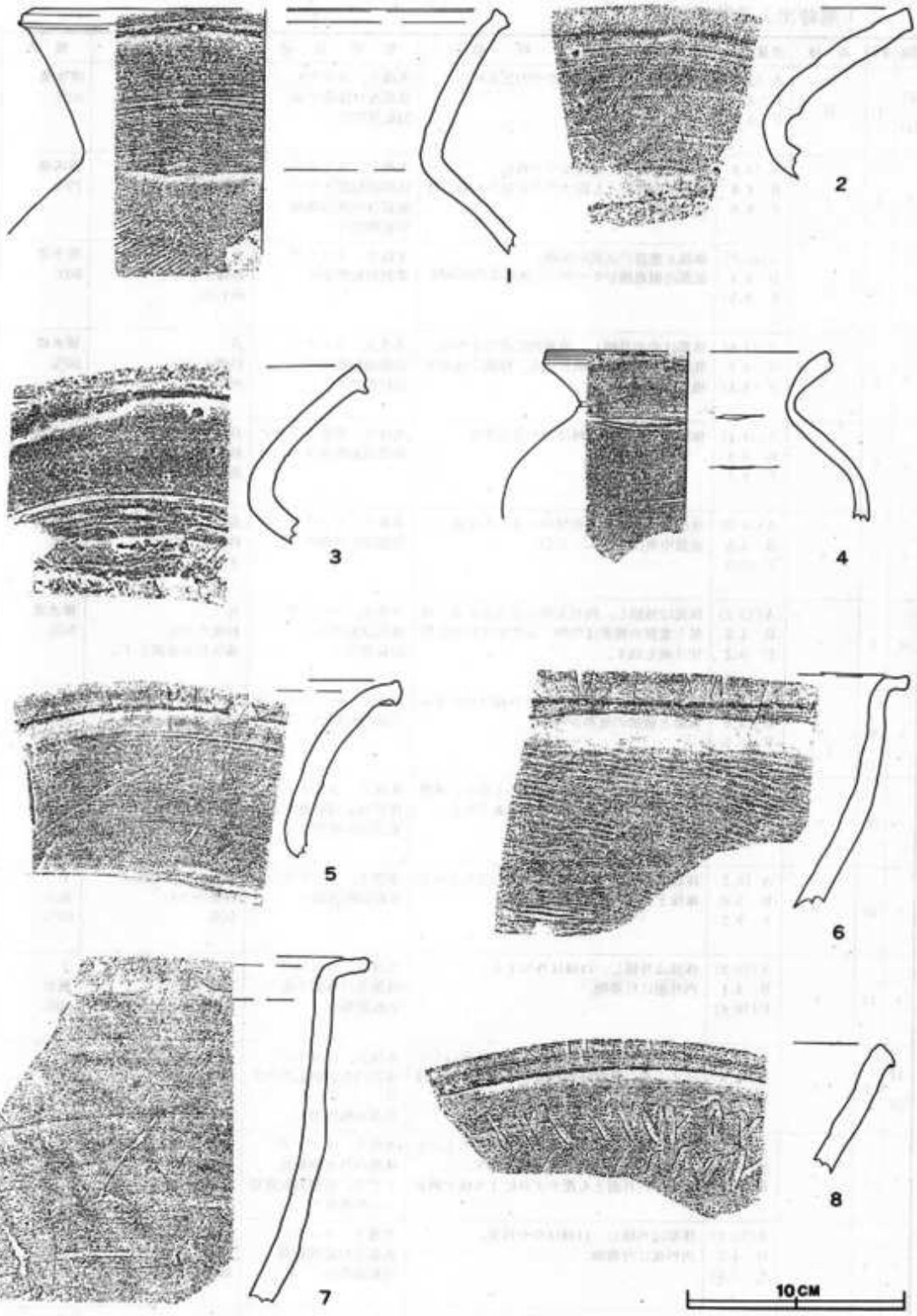
第42図　C１号窯跡出土遺物実測図(1)



第43図　C１号窯跡出土遺物実測図(2)



第44図　C１号窯跡出土遺物実測図(3)



第45図　C１号窯跡出土遺物実測図(4)

C１溝跡出土遺物解説表

図版	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
42 (1)	1	坏	A 13.7 B 4.4 F 9.3	体部は外傾し，口縁はやや内反気味。	水挽き，ヨコナデ 底部及び体部下端 回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色	排水溝 90%
〃	2	〃	A 13.8 B 4.4 F 8.8	体部は外傾し，口縁はやや外反。 体部は内外面とも篦ナデBが施され特に外面に顕著。	水挽き，ヨコナデ 体部回転篦ナデB 底部及び底部周囲 回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	排水溝 75%
〃	3	〃	A(12.7) B 4.4 F (9.5)	体部と底部の区別が明確。 底部内側周囲がやや凹む。体部は内反気味。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色	排水溝 50%
〃	4	〃	A(11.8) B 4.2 F (9.4)	体部はやや外傾し，直線的に立ち上がる。 底部中央に篦切り痕が残る。体部と底部の境界が明瞭。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色	排水溝 50%
〃	5	〃	A(14.1) B 4.4 F 9.7	体部は外傾し，口縁はやや外反する。	水挽き，内面ヨコナデ 底部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色	排水溝 70%
〃	6	〃	A(14.0) B 4.6 F 10.0	体部は外傾し，内反気味に立ち上がる。 底部中央はややふくらむ。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良 砂礫を含む オリーブ灰色	排水溝 60%
〃	7	〃	A(13.2) B 4.2 F 9.2	体部は外傾し，内反気味に立ち上がる。体部と底部の境界は明瞭，底部中央付近に篦切り痕を残す。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 回転篦削り	良 砂礫を含む 褐灰色を基調とする	排水溝 70%
〃	8	〃	A(14.5) B 4.4 F 10.5	体部は外傾して立ち上がり口縁は外反する。 体部と底部の境界が明確。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良（一部不良） 砂礫を含む 灰色	排水溝 50%
〃	9	〃	A(14.1) B 4.5 F 9.5	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。体部外面は篦ナデBにより稜が顕著である。	水挽き，ヨコナデ 体部外面回転篦ナデB 底部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 底部　灰色 体部　灰白色	I 焼台 40%
〃	10	〃	A 13.2 B 3.8 F 9.2	体部は外傾し，やや内反気味に立ち上がる。 体部と底部の境界が明確。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	I 焼台 65%
〃	11	〃	A(14.3) B 4.1 F(10.6)	体部は外傾し，口縁は外反する。 内外面に付着物。	水挽き，ヨコナデ 底部及び体部下端 回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	I 焼台 40%
43 (2)	1	〃	A(14.3) B 4.9 F 9.5	体部は外傾し，やや外反する。底部はややふくらむ。体部は内外面とも篦ナデBの後ヨコナデが施され，内面は稜が顕著。	水挽き，ヨコナデ 体部内外面回転篦ナデB 底部回転篦削り	良（一部不良） 砂礫を含む 青灰色	II 60%
〃	2	〃	A(14.1) B 4.6 F 9.4	体部は外傾し，やや外反気味に立ち上がる。 底部は中央が凹み篦切り痕を残す。 体部は内外面とも篦ナデBにより稜が顕著。	水挽き，ヨコナデ 体部内外面回転篦ナデB，底部回転篦切り回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 青灰色	III 60%
〃	3	〃	A(11.1) B 4.2 F (7.4)	体部は外傾し，口縁はやや外反。 内外面に付着物。	水挽き，ヨコナデ 底部及び底部周囲 回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 紫灰色	III 50%
〃	4	〃	A 14.5 B 4.3 F 9.5	体部は外傾し，やや外反気味に立ち上がる。 体部と底部の境界が明瞭。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り	良 砂礫を含む 暗灰黄色	III 98%

43 (2)	5	坏	A(13.2) B 4.3 F (9.4)	体部は外傾し、直線的に立ち上がる。 体部外面は稜が顕著。	水挽き，内面ヨコナデ 底部及び底部周囲 回転箆削り	不良 砂礫を含む 外 にぶい橙色 内 浅黄橙色	燃焼室 50%
〃	6	〃	A(13.5) B 4.2 F 8.5	体部は外傾し、直線的に立ち上がる。 稜が明瞭である。	水挽き，ヨコナデ 底部及び底部周囲 回転箆削り	不良 砂礫を含む 灰白色	燃焼室 50%
〃	7	蓋	A 14.3 B 3.0 H 3.6 I 0.9	つまみはbi類。 ゆがみのため天井部の傾斜は不明。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転箆削り	良 砂礫を含む 暗青灰色	排水溝 100%
〃	8	〃	A(14.6) B 3.0 H 3.6 I 0.8	つまみはbii類。 中央が低い。 天井から口縁へ丸味をもって下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転箆削り	良 砂礫を含む 灰色	排水溝 50%
〃	9	〃	A(13.5) J 2.6	つまみ接合部径3.7cm。天井が高い。箆削りの端部は丸味を有し大きな傾斜で口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転箆削り	良 砂礫を含む 灰褐色	排水溝 45%
〃	10	〃	A 15.2 B 2.5 H 3.5 I 0.7	つまみはb類。 全体に扁平。 磨滅が著しい。	水挽き （磨滅により表面観察 不可能）	不良 砂礫を含む 灰白色	排水溝 75%
〃	11	〃	A(13.6) B 2.6 H 3.5 I 0.6	つまみはbii類。 天井から口縁へやや丸味をもって下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転箆削り	良 砂礫を含む 青灰色	排水溝 70%
〃	12	〃	A(14.9) B 2.8 H 3.2 I 0.6	つまみはbII類 天井から口縁へなだらかに下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転箆削り	良 砂礫を含む オリーブ灰色	排水溝 50%
〃	13	〃	A 15.1 B 2.3 H 3.1 I 0.7	つまみはb類。天井はつまみ接合部が低く箆削りの端部が最も高い。丸味をもって口縁へ下がる。口縁端は鋭く曲がり端折内側は箆をあてたと思われ凹む。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転箆削り	良 砂礫を含む 灰色	I 90%
〃	14	〃	A 13.7 J 2.2	つまみ欠損，つまみ接合部径は3cm。天井から丸味をもって口縁へ下がり口縁は横に突出気味。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転箆削り	良 砂礫を含む 外 灰赤色 内 灰色	I 90%
〃	15	〃	A 14.6 B 3.4 H 3.6 I 1.0	つまみはb類。 天井部が高く，口縁へ下がる傾斜はやや大きい。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転箆削り	良 砂礫を含む 灰色	I 85%
〃	16	〃	A 14.4 B 3.2 H 3.6 I 0.6	つまみはbii類。 箆削り範囲が広い。 全体に扁平である。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転箆削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む オリーブ灰色	I 80%
〃	17	〃	A(13.5) B 2.4 H 3.6 I 0.6	つまみはbii類。 全体に扁平である。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転箆削り	良 砂礫を含む 灰色	I 50%
〃	18	〃	A(14.4) B 3.0 H 3.7 I 0.6	つまみはb類。 天井が高く，大きく傾斜して口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転箆削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 外 黒色 内 暗灰色	I 70%
44 (3)	1	〃	A(18.0) B 3.8 H 2.4 I 1.1	つまみはci類。天井が高く箆削り端部から直線的に口縁へ下がる。端折は小さく丸味をおびる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転箆削り	不良 砂礫を含む 灰白色	II 60%
〃	2	〃	A 16.1 B 4.0 H 2.6 I 1.1	つまみはcii類。天井が高く丸味をもって口縁へ下がる。口縁はやや水平にのびる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転箆削り	良 砂礫を含む オリーブ灰色	II 65%

44 (3)	3	壺	A 15.1 B 2.6 H 3.5 I 0.6	つまみはbii類。 つまみ接合部が凹む。 天井から口縁へなだらかに下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰色	II 70%
〃	4	〃	A 13.8 B 2.6 H 3.2 I 0.6	つまみはbii類。 天井から口縁へ丸味をもって下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰色	II 95%
〃	5	〃	A(16.7) B 3.9 H 2.4 I 1.1	つまみはci類。 天井が高く篦削り端部が丸味をおびて口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰褐色を基調とする	III 75%
〃	6	〃	A(15.0) B 2.6 H 3.4 I 0.4	つまみはbi類。 天井はやや高めで丸味をもって口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	燃焼室 60%
〃	7	〃	A(13.7) B 2.5 H 3.6 I 0.5	つまみはbiv類。 天井から口縁へ丸味をもって下がる。 器肉はつまみ接合部が薄く篦削り端付近が肥厚する。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 浅黄橙色	燃焼室 70%
〃	8	〃	A(15.6) B 3.5 H 3.8 I 0.8	つまみはbii類。 つまみ接合部が最も高く，なだらかに口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 淡黄色	窯外溝 65%
〃	9	円面硯	A 19.4 B 9.5 F 24.9	脚部上位に1条，下位に2条の隆帯が見られる。スカシ窓は4ヶ所で間に8本の刻みを入れる。外堤は断面四角形。硯部は篦ナデAによって整形される。外面に浅い溝が1周する。	水挽き，ヨコナデ 硯部・外堤・隆帯接合 スカシ窓篦切り	良 砂礫を含む 赤灰色	窯外溝 90%
〃	10	壺	A(31.8) J 6.5	頸部は強く外反し，口縁上下がやや突出する。 内面は付着物が多い。	巻き上げ，ナデ	良好（二次焼成） 砂礫を含む オリーブ黒色	排水溝 頸部¼
〃	11	〃	A(29.3) J 8.1	頸部は強く外反する。口縁は断面宝珠形に近く下部はやや垂下する。	巻き上げ，ナデ	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	排水溝 頸部¼
45 (4)	1	〃	A(21.2) J 11.3	肩部の傾斜，頸部の外反ともに弱い。口縁は上下がやや突出する。	巻き上げ，ナデ 胴部叩き	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰白色	排水溝 頸部¼
〃	2	〃	J 7.9	強く外反する頸部で口縁は単純。	巻き上げ，ナデ	良好（二次焼成） 砂礫を含む 黒褐色	排水溝
〃	3	〃	J 8.1	強く外反する頸部である。口縁下端が外方へつまみ出される形でやや突出する。 付着物が多い。	巻き上げ，ヨコナデ 頸部外面回転篦ナデB 頸部接合	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色を基調とする	排水溝
〃	4	〃	A(12.8) J 7.7	頸部は強く外反し，口縁は単純。 頸部に篦ナデBによる沈線が1周する。	巻き上げ，ヨコナデ 胴部回転篦ナデA 頸部回転篦ナデB	良 砂礫を含む 灰白色	II 胴部上半以上¼
〃	5	〃	J 8.3	口縁は外反し，口縁の上下が突出する。	巻き上げ，ナデ 外面篦削り	不良 砂礫を含む 黄灰色	III
〃	6	〃	J 10.9	口縁は強く外反し，水平に近い。胴部外面は平行線の叩き目。内面ナデ。	巻き上げ，ナデ 叩き	不良 砂礫を含む 灰白色	III

45 (3)	7	甕	J 16.1	口縁は強く外反し，水平に近い。胴部内外面とも横方向のナデ。	巻き上げ，ナデ	不良 砂礫を含む 灰白色	III
〃	8	〃	J 6.0	外傾する頸部の口縁付近。口縁は下方がやや突出する。 外面は波状文。	巻き上げ，ナデ	良 砂礫を含む 灰色	III

で出土した蓋に見られる特徴である。

C_1II類(43－7～11・13・15・17・18，44－1～4・6～8)とC_1III類（43－12・14・16，44－5）に分類されるが，両者の差異は，前述したように不明瞭である。

円面硯・甕（44－9～45－8）

44－9は，円面硯である。窯体内の溜から窯外へ延びる溝の先端で発見された。窯外の溝内には遺物はほとんど無く，先端部付近で甕の破片等と共に堆積していた。脚部の破片が，C5号窯跡を拡張した際に，木の根の下から見つかっている。

甕は10点を数えた。44－10・11，45－2・3は，いずれも頸部の外反が強く，45－1・5は弱い。45－8は，外面に粗雑な波状文を有する。45－4は小型甕で，頸部の付け根に，篦ナデBによる沈線が認められる。

45－6・7は，ゆるやかに立ち上がる胴部から，頸部が強く外反してほぼ水平になっている。45－6の外面には，平行線叩き目が見られる。

(2) C2号窯跡（付図4　PL17・18・23）

① 構　造

地下式無段登窯の構造を有し，主軸はN－3°－Eを示す。焚口付近が破壊されているため全長は不明であるが，9m内外を測ったものと推定される。幅は燃焼室で0.9～1m，焼成室で最大16mを測る。燃焼室から焼成室にかけて少しずつ幅を広め，明瞭な境界を有さない。

I次ベースは緩やかに傾斜を増し，明瞭な傾斜変換点は認められない。奥壁まで1枚のスロープ状を呈する。燃焼室側で2°，奥壁付近で20°を測る。奥壁は良好な状態で残っており，内傾して立ち上がる。鉛直方向に対して17°傾く。ベースはさらにV次まで認められた。各々20cm内外の厚みを有する。断面を観察すると，I次ベース上に天井・窯壁の崩落によるブロックが堆積し，その上に堆積する明褐色土層の上面が赤変し，ベース面付近が青灰色に変色している。以下これをくり返してV次ベース面に至る。これは，この窯跡のベースが，天井・窯壁の崩落毎に壁や天井を削り直して整形し，さらに床をならしてベースとし，焼成をくり返したことを意味するものであろう。第V次（最終）ベースは燃焼室付近で青灰色層の厚みを増す。上面の遺物を取り上げた

後，タチワリを実施したところ，この青灰色層中から薬壺の蓋と坏が重ね焼きの状態のまま埋まっているのを発見した。状況から判断して埋められたものではなく，窯出しの際に取り残されたものである。この事実は，部分的なベースの修復を想定するよりも，むしろ何らかの原因により燃焼室近くに土が堆積し，そのままベースとして焼成が行われて青灰色に変色した可能性が高いことを物語る。A４号・C１号両窯跡のベースについても，この可能性は極めて高い。この点については，C３号窯跡の項で再検討する。

焼成室の壁は階段状を呈し，上へ行く程広くなる。剥落や削り込みのため，かなり凹凸が激しい。燃焼室の壁は，やや外傾しながら立ち上がる。削り込み等の痕跡は一切認められない。

天井は奥壁の手前側が一部残っていたが，調査途中で崩れてしまった。その形状から，断面はカマボコ型を呈していたものと判断される。

窯体内には溝が認められなかったが，窯外では１条の溝が検出されている。これも末端は不明である。

遺物は各ベース面に見られ，Ⅰ次ベースでは特に多かった。

② 遺物（46－１～48－６）

坏（46－１～47－10）

小ぶりのもの（46－３・４・６・７・９・10，47－１～３・９・10）と，大ぶりのもの（46－１・２・５・８・11，47－４～８）がある。前者では46－７が２次焼成を受けており，後者では47－８が混入と考えられる。47－８は，分類から除外した。

B₁Ⅱ類（46－３・６・７・９・10）

７は，２次焼成によるゆがみのため明瞭ではないが，口縁が外反する。外面には，白斑・金属光沢を有する自然釉が見られる。

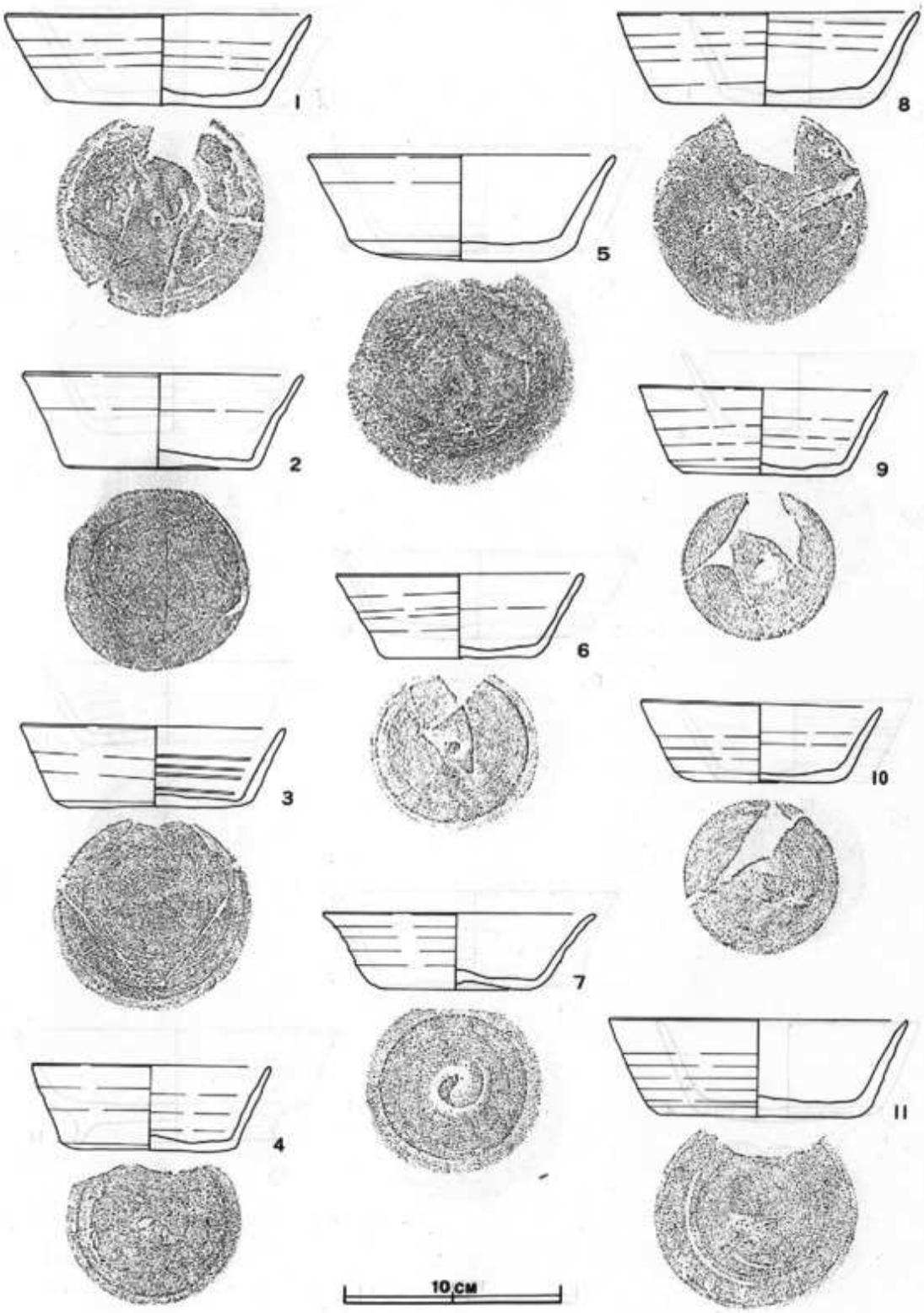
３・６・９・10は，器形・整形技法ともほぼ同一である。体部と底部の間にある面はいずれも小さく，その両側はシャープな稜を成す。３の体部内面に認められた回転篦ナデBは，ヨコナデに用いた工具によるものであろう。

B₁Ⅲ類（47－６・７・10）

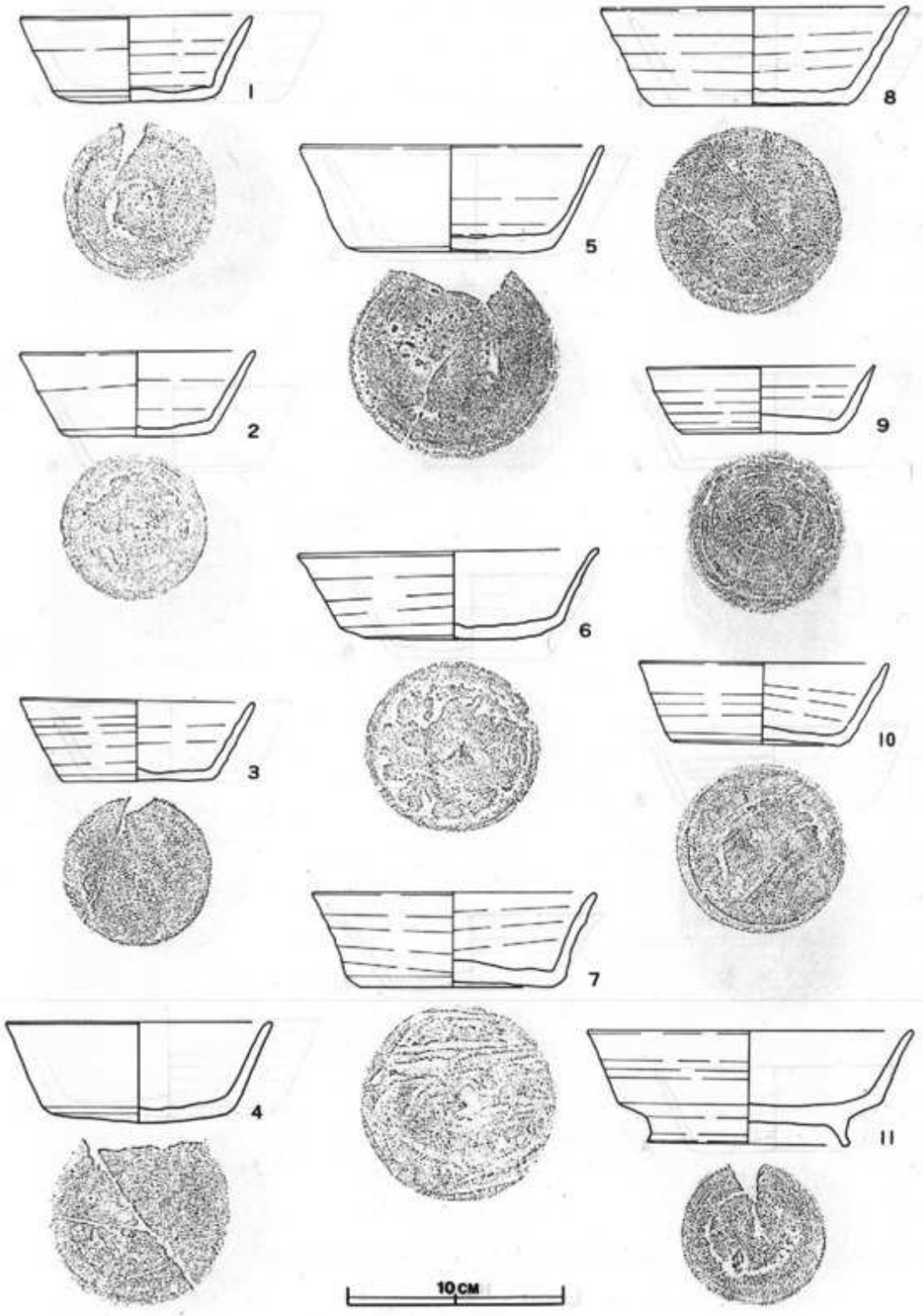
６は，回転篦切り後，一部に静止篦削りを施している。体部は口縁が外反しており，７は体部中段から外反するという違いが認められる。土とりの痕跡は，６の方が明瞭である。10は，小ぶりの坏である。静止篦削りは中心部のみである。

B₂Ⅱ類（46－４・５，47－１）

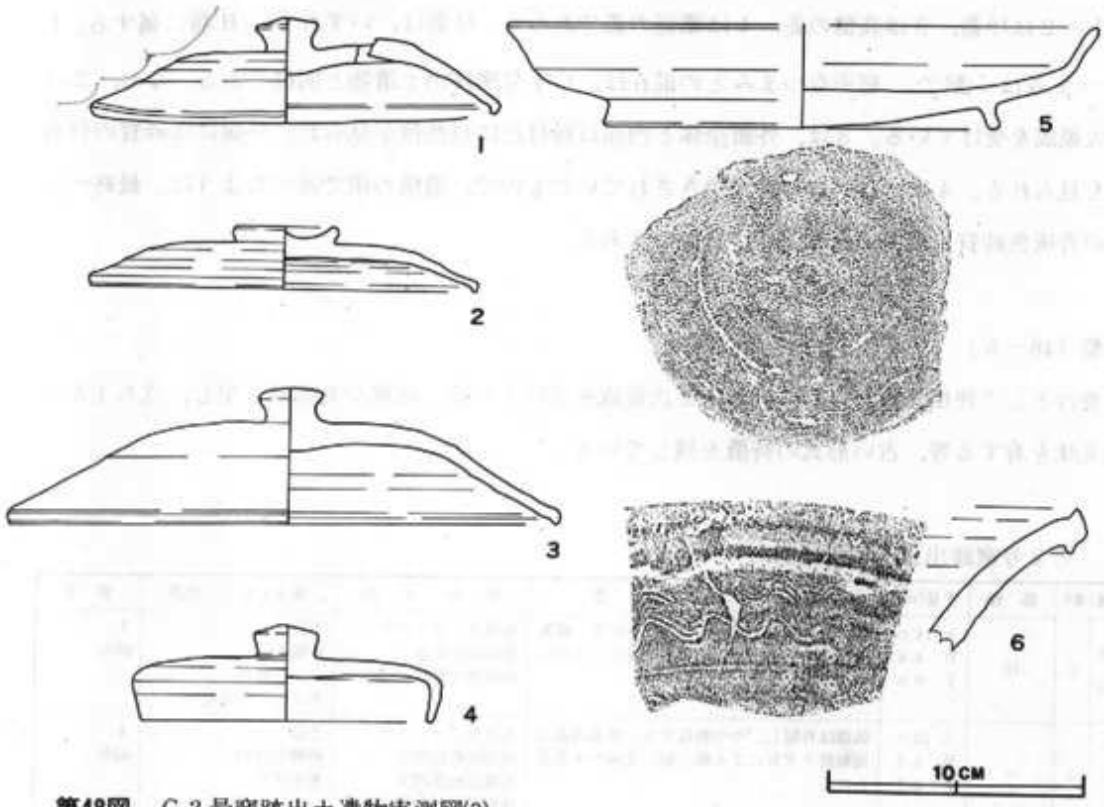
46－５は大ぶりの坏で，体部下端は外方へやや突出している。46－４，47－１ともに底部外面以外の整形技法は，B₁Ⅱ類に分類した小ぶりの坏と同じである。



第46図　C２号窯跡出土遺物実測図(1)



第47図　C２号竈跡出土遺物実測図(2)



第48図　C２号窯跡出土遺物実測図(3)

C₂II類（46－２・11，47－２～５・９）

小ぶりのもの（47－２・３・９）と大ぶりのもの（46－２・11，47－４・５）がある。小ぶりの坏の場合，体部と底部を隔てる面の有無を除けば，B₁II類・B₂II類に分類した小ぶりの坏とほとんど同じである。大ぶりの坏では，47－４が２次焼成を受け，ゆがみがある。46－２は，体部中段から外反する。47－４・５は，内面のヨコナデが底部中心に及び，46－２・11は底部中心は除かれる。

C₂II類（46－１・８）

いずれも，回転篦切り後静止篦削りを施し，さらに静止篦ナデAで調整されている。体部は，１が直線的な立ち上がりであるのに比べて，８は口縁がやや外反している。

高台付坏（47－11）

焼成は不十分であるが，２次焼成を受けている。高台底面が磨滅しており，一時期窯外で使用されていたものが，何らかの理由で，再度窯内に運び込まれたものと判断される。

蓋（48－１～４）

1・2は坏蓋，3は高盤の蓋，4は楽壺の蓋であろう。坏蓋は，いずれもC₁II類に属する。1のつまみはc類で，扁平なつまみとの混在は，C1号窯跡出土遺物と同様である。なお，2は2次焼成を受けている。3は，外面全体と内面口縁付近に自然釉が見られ，外面には砂質の付着物も見られる。4は，47−10と重ね焼きされていたもので，遺構の項で述べたように，最終ベースの青灰色砂質土層中に埋まっていたものである。

盤（48−5）

焼台として使用されていたもので，2次焼成を受けている。底部が丸底状を呈し，立ち上がりが丸味を有する等，古い形式の特徴を残している。

C2号窯跡出土遺物解説表

図版	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
46 (1)	1	坏	A 14.0 B 4.4 F 9.6	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。底部内面中央及び体部外面下半を除き，入念にヨコナデが行なわれる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部静止篦削り	不良 砂礫を含む にぶい橙色 明オリーブ灰色	I 65%
〃	2	〃	A 13.0 B 4.5 F 8.7	体部は外傾し，やや外反する。体部内面は回転篦ナデBによる幅く細い沈線が4条見られる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部回転篦削り 体部内面回転篦ナデB	不良 砂礫を含む 明褐灰色	I 65%
〃	3	〃	A 12.3 B 3.9 F 8.6	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。体部内面は，篦ナデBによる沈線が数条見られる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 体部内面回転篦ナデB	不良 砂礫を含む 灰黄色	I 85%
〃	4	〃	A 11.0 B 4.0 F 8.1	体部は外傾し直線的に立ち上がる。器肉は体部中段がやや肥厚する。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	II 80%
〃	5	〃	A(14.1) B 5.0 F 10.2	体部は外傾し，口縁はやや外反，体部下端に稜を有する。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	II 50%
〃	6	〃	A 11.4 B 4.0 F 6.9	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。体部外面は稜が明瞭。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 外 にぶい黄橙色 内 にぶい橙色	II 85%
〃	7	〃	A(12.6) B 3.6 F 6.9	体部は外傾し，口縁は外反する。ヨコナデは内面のみが入念。外面自然釉及び金属様の光沢がある自然釉。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 外 灰赤色 内 褐灰色	II 焼台 65%
〃	8	〃	A 13.6 B 4.5 F 9.6	体部は外傾し，体部下半はやや丸味をおびる。体部外面は回転篦ナデB後ヨコナデ	水挽き，ヨコナデ 底部静止篦削り 体部外面回転篦ナデB	良（二次焼成？） 砂礫を含む 褐灰色	II 70%
〃	9	〃	A 11.3 B 4.0 F 7.1	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。ヨコナデは体部外面下半及び底部内面中央を除き入念。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 外 浅黄橙色 内 灰白色	II 90%
〃	10	〃	A 11.0 B 3.8 F 7.3	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。内外面ともヨコナデが施され体部上半は特に入念。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む にぶい黄橙色	II 70%

46 (1)	11	坏	A 13.6 B 4.6 F 9.3	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。体部下端はやや丸味をおびる。体部外面下半及び底部内面中央を除き入念なヨコナデが施され稜が消される。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部回転篦削り	良 砂礫を含む オリーブ黒色	II 焼台(？) 80%
47 (2)	1	〃	A 10.8 B 4.1 F 6.8	体部は外傾する。体部中段がやや肥厚し上下は薄い，体部上半の内外面及び内面の底部周辺と体部下端付近のヨコナデは入念。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部回転篦削り 底部周囲回転篦削り	不良 砂礫を含む にぶい橙色	II 85%
〃	2	〃	A 10.8 B 4.1 F 6.7	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。ヨコナデは全体に入念。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 外 にぶい橙色 内 灰黄褐色	II 95%
〃	3	〃	A 10.7 B 4.0 F 6.9	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。体部外面上半及び底部内面周辺以上のヨコナデは入念である。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 外 黄灰色 内 にぶい橙色	II 97%
〃	4	〃	A(12.2) B 4.7 F 8.2	体部は外傾し，口縁はやや外反気味。全体にやや厚手。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰色	IV 65%
〃	5	〃	A(15.0) B 5.0 F 9.7	体部は外傾し，やや内反気味に立ち上がる。口縁直下はやや肥厚する。底部は回転篦削りの際のはみ出しが一部見られる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良 砂礫を含む 外 黄灰色 内 灰色	V 60%
〃	6	〃	A 14.0 B 4.0 F 8.4	体部は外傾し，口縁はやや外反する。底部は切り離し面がやや突出する。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り	良 砂礫を含む 灰色	V 80%
〃	7	〃	A 13.2 B 4.4 F 8.6	体部は外傾し，外反する。内面はヨコナデにより稜が消される。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 静止篦削り	良 砂礫を含む オリーブ灰色	V 100%
〃	8	〃	A 14.2 B 4.5 F 8.9	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。口縁はやや外反気味。底部篦記号。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部静止篦削り	良 砂礫を含む オリーブ灰色	覆土 98%
〃	9	〃	A(10.6) B 3.1 F 7.1	体部は外傾し，やや内反気味に立ち上がる。ヨコナデは体部上半で特に入念。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り	不良 砂礫を含む 外 灰白色 内 淡黄色	VI 50%
〃	10	〃	A 10.4 B 3.8 F 7.4	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。ヨコナデは内面全体及び体部外面上半で入念に行なわれる。 やや上げ底風。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部静止篦削り	良 砂礫を含む 外 暗オリーブ灰色 内 暗緑灰色	VI 100%
〃	11	高台付坏	A 14.8 B 5.3 E 9.3	体部は外傾し，口縁はやや外反。高台は外方へ開き先端はやや外方へ突出する。高台底及び口縁はやや磨滅。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	不良（二次焼成） 砂礫を含む にぶい橙色	II 75%
48 (3)	1	盌	A 15.8 B 4.1 H 2.4 I 1.1	つまみはci類。 天井が高く篦削り端から大きく傾斜して口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	良 砂礫を含む 灰白色	II 90%
〃	2	〃	A 15.0 B 2.5 H 4.1 I 0.7	つまみはbii類。 天井から口縁へ丸味をもって下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	良好（二次焼成） 砂礫を含む 外 暗灰色 内 灰色	IV 焼台 65%
〃	3	〃	A 21.3 B 5.4 H 2.5 I 1.4	つまみはci類。 天井が高い。口縁は丸味をおびる。緑色自然釉。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	良 砂礫を含む 灰白色	IV 60%
〃	4	〃	A 11.9 B 2.5 H 2.4 I 1.3	端折部はやや内傾する。天井はほぼ平坦で全体に篦削り，内面に篦記号(×)。 つまみはci類。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	良 砂礫を含む 灰色	VI 100%

48 (3)	5	盤	A(23.1) B 4.1 E(15.4)	高台内底部は肥厚し，下がる。高台は外方へ開く。 口縁はやや外反。	水挽き，ヨコナデ 底部回転糸削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	Ⅳ 40%
〃	6	甕	J 5.7	外傾する頸部。口唇は上方へ突出し口縁下部は折り返し風。外面波状文。	巻き上げ，ナデ	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰白色	Ⅱ 焼台

甕（48－6）

口縁は折り返し風で，口唇は上方へ突き出す。頸部外面の波状文は粗いもので，工具をあてる力が不均一であったため，一部が切れている。

(3) C３号窯跡（付図５ PL19・20・24）

① 構 造

地下式無段登窯の構造を有し，主軸はN－71°－Eを示す。奥壁・煙道はC５号窯跡によって切られている。全長9.5m内外，幅は焚口で0.6～0.7m，燃焼室で0.9～1m，焼成室で最大1.8mを測る。

Ⅰ次ベースは奥に向かって傾斜を増し，最奥部で31°を測る。青灰色層が他の窯跡のベースと比べて極めて厚く，上半が砂状を呈している。このため，同一色であっても堅緻である層と砂状の層の重なりに見える。砂状層上面には多量の遺物が見られることから，この面で焼成が行われたことは間違いない。また，砂状層中にも遺物が見られる反面，堅緻である層中には皆無である。このことから，砂状層の成因については，「ふりもの」の堆積と窯詰め・窯出しの際にベース面が崩れたものという二つの考えが成り立つ。ベース面の崩れは青灰色に堅緻な状態を呈していても，力を加えることにより容易に砂状化することに由来する。これは，この地域の土壌の耐熱性によるものと思われ，今回調査したすべての窯について言える。Ⅱ次ベースは，Ⅰ次ベース上に堆積した厚い天井・窯壁のブロック層の上に見られる。崩落後に天井・窯壁を削って整形したらしい。Ⅲ次ベースは，奥半を残すのみである。これは，先述した民家を建てる際の整地により削り取られてしまったものである。遺構確認時に，５cm内外の厚みを有する腐植土層直下に本ベースが現れている事からも明らかである。

燃焼室には多量の炭化材が堆積していたが，特に最下部には長さ１m・直径30cm程の炭化材が４本，本来の形状を保って遺存していた。この大きさの薪は，通常はゆっくりと燃焼し，急激な温度の上昇を求める時には不適当である。現在の窯焚きの理論を適用するならば，この４本の炭化材は窯焚きの初期の段階（あぶり）に使用されたものと判断できる。

壁は，奥半のスロープ部の両側が残っていただけである。Ⅰ次ベースとⅡ次ベースの幅が大きく異なる。これは，Ⅰ次ベースでの天井崩落が大規模であったため，両側の壁の整形により広がったためであると判断される。Ⅰ次ベースとⅡ次ベースの間にあるブロック層の厚さも，その事

実を裏付ける。

遺物は各ベースにまんべんなく見られ，特にⅠ次ベースに多い。

② 遺物（49－1～50－8）

坏（49－1～9）

B_1Ⅱ類（2）**B_2Ⅱ類**（3・5）

2の体部と土とりによって生じた面との境界は，丸味を有している。5の体部下端部の回転篦削りによって生じた面は，ごく狭いもので，体部側・底部側ともにシャープな稜を成す。内・外面ともヨコナデ調整されているが，体部外面に顕著な稜を残す。3は，体部外面に回転篦ナデBが施され，その後さらにヨコナデ調整されている。

C_2Ⅱ類（1・4・6～9）

本類に分類された7個体の坏は，体部外面の整形技法によって，回転篦ナデBが施されているもの（6・8）と，回転篦ナデB後さらにヨコナデを施しているもの（1・3・4・7・9）に細分できる。6は口縁が，8は体部中段が外反する。内面のヨコナデは，ともに極めて入念である。4・7は，篦ナデB痕の間隔に粗密がある。7では，体部の下半が密で，上半が粗である。4は中段が浅く密であり，上下がやや粗になる。1・9の体部は，外面を観察すると，C1号窯跡出土の坏群に見られた回転篦ナデBと非常に良く似ており，技法的に極めて近い関係にある。

蓋（49－10～17）

BⅡ類（16・17）

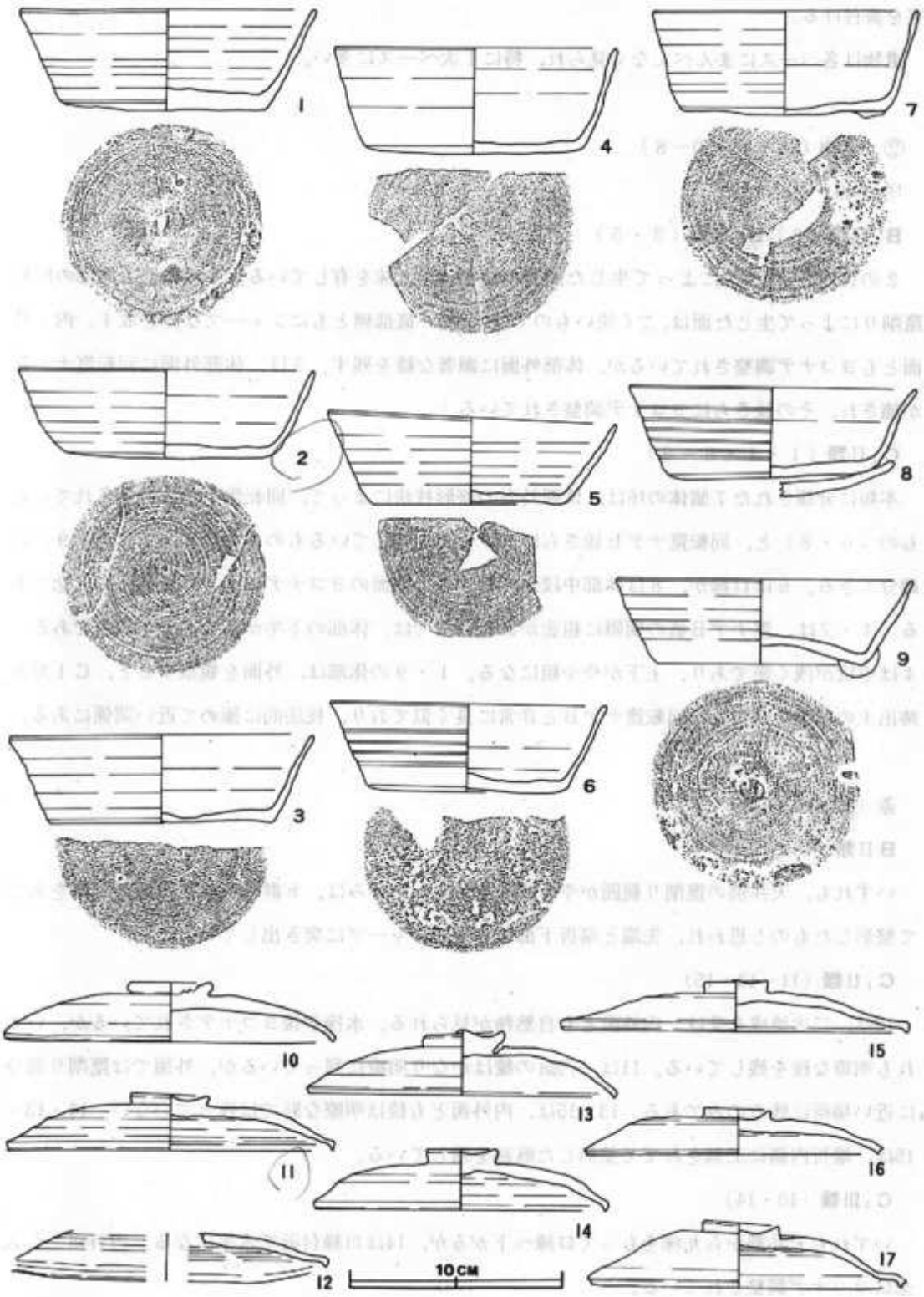
いずれも，天井部の篦削り範囲がやや盛り上がる。つまみは，b群である。口縁は工具をあてて整形したものと思われ，先端と端折下部はともにシャープに突き出している。

C_1Ⅱ類（11～13・15）

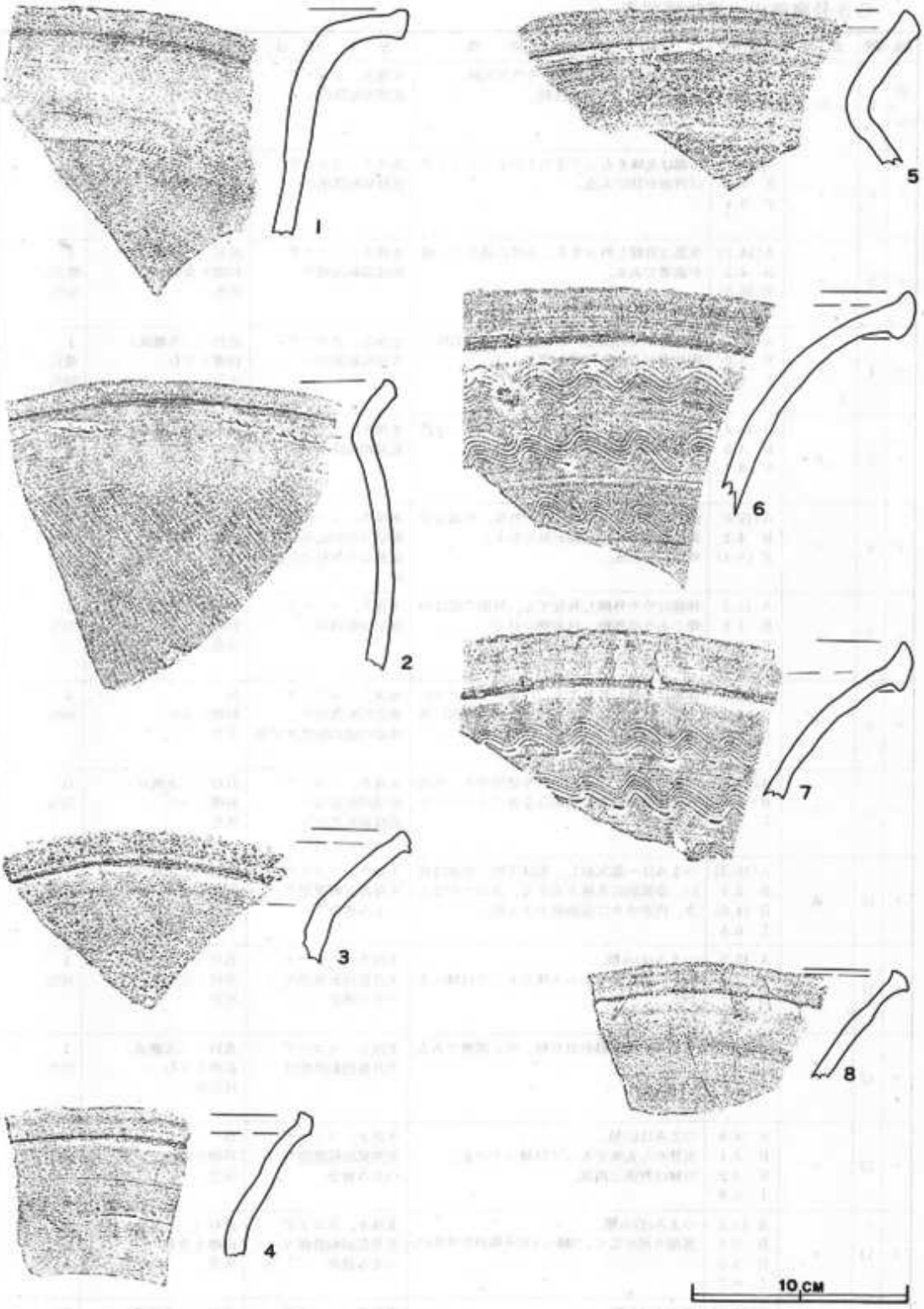
12は，二次焼成を受け，内外面とも自然釉が見られる。水挽き後ヨコナデされているが，いずれも明瞭な稜を残している。11は，内面の稜はかなり明瞭に残っているが，外面では篦削り部分に近い場所に残るのみである。13・15は，内外面とも稜は明瞭な形では残っていない。11・13・15は，端折内側に工具をあてて整形した痕跡を残している。

C_1Ⅲ類（10・14）

いずれも天井部から丸味をもって口縁へ下がるが，14は口縁付近で水平になる。内外面とも入念にヨコナデ調整されている。



第49図　C３号窯跡出土遺物実測図(1)



第50図　C３号窯跡出土遺物実測図(2)

C３号窯跡出土遺物解説表

図版	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
49 (1)	1	坏	A(13.8) B 4.8 F 9.6	体部は外傾し、口縁はやや外反気味。底部が厚い。外面自然釉。	水挽き、ヨコナデ 底部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 外 黒色 内 青灰色	I 75%
〃	2	〃	A(13.8) B 4.3 F 9.4	体部は丸味をもって立ち上がる。ヨコナデは内面が特に入念。	水挽き、ヨコナデ 底部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	I 60%
〃	3	〃	A(14.2) B 4.2 F(10.5)	体部は外傾し外反する。全体に薄手で、稜が顕著である。	水挽き、ヨコナデ 底部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	I 焼台(？) 50%
〃	4	〃	A(13.2) B 5.0 F 9.8	体部はやや外傾し、口縁はやや内反気味。内外面とも斜合に稜が顕著。全体に薄手。	水挽き、ヨコナデ 底部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	I 焼台(？) 50%
〃	5	〃	A 13.4 B 4.5 F 8.7	体部は外傾し、口縁はやや内反気味。体部外面の稜は顕著である。	水挽き、ヨコナデ 底部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰色	I 55%
〃	6	〃	A(12.0) B 4.2 F (9.4)	体部は外傾し、口縁はやや外反。外面は全体に自然釉・付着物が見られる。ゆがみがある。	水挽き、ヨコナデ 体部外面回転篦ナデB 底部は自然釉のため不明。	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	I 60%
〃	7	〃	A 12.3 B 4.9 F 9.8	体部はやや外傾し外反する。外面の稜は明瞭であり自然釉・付着物が目立つ。	水挽き、ヨコナデ 底部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	I 75%
〃	8	〃	A 13.5 B 4.4 F 9.5	体部は外傾し外反する。内面のヨコナデは入念。体部外面に同転篦ナデB、底部に叩破片が付着。	水挽き、ヨコナデ 底部回転篦削り 体部内面回転篦ナデB	良 砂礫を含む 灰色	I 60%
〃	9	〃	A(13.9) B 4.0 F 9.6	体部は外傾し、中段がやや肥厚する。体部外面は稜が顕著。内面は全体にヨコナデが入念。	水挽き、ヨコナデ 底部回転篦切り 底部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	II 70%
〃	10	蓋	A(15.3) B 2.9 H (4.0) I 0.6	つまみは一部欠損し、形状不明。周囲は高い。全体的に丸味を有する。ヨコナデは入念。内面中央に指頭痕が２ヶ所。	水挽き、ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	I 焼台(？) 50%
〃	11	〃	A 15.2 B 2.6 H 3.7 I 0.6	つまみはbii類。 天井篦削り部端から丸味をもって口縁へ下がる。	水挽き、ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	I 70%
〃	12	〃	A 14.9 J 2.3	つまみ欠損。緑色自然釉。稜が顕著である。	水挽き、ヨコナデ 天井部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰白色	I 55%
〃	13	〃	A 14.4 B 3.1 H 3.8 I 0.8	つまみはbi類。 天井から丸味をもって口縁へ下がる。口縁は断面三角状。	水挽き、ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	良 砂礫を含む 灰色	I 80%
〃	14	〃	A 13.5 B 2.9 H 3.3 I 0.7	つまみはbii類。 篦削り部が広く、口縁へ下がる傾斜が大きい。	水挽き、ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	II 50%
〃	15	〃	A(17.2) B 2.4 H 2.9 I 0.6	つまみはbiii類。 天井から口縁へなだらかに下がり、口縁はやや起き上がる。	水挽き、ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	III 70%

49 (1)	16	壺	B 2.2 D 13.6 H 3.1 I 0.4	つまみはﾎﾞﾀﾝ類。 天井から口縁へなだらかに下がる。 口縁は「く」の字状を呈し，2段に見える。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 灰白色	III 90%
〃	17	〃	H 3.2 D 14.4 H 3.6 I 0.6	つまみはﾎﾞﾀﾝ類。周囲頂部がややつぶれている。篦削り部端は丸味を有し，口縁直上から再び丸味をもって下がる，口縁は「く」の字状で2段に見える。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	やや不良 砂礫を含む 鉄灰色を基調とする	III 95%
50 (2)	1	甕	J 10.5	口縁が大きく外反する。口縁は単純で頸部がやや膨くなる。焼台に使用されたため付着物が多い。	巻き上げ，ヨコナデ	良好（二次焼成） 砂礫を含む 青灰色	I 焼台
〃	2	〃	J 13.4	内反しながら立ち上がる，胴部から「く」の字状に屈曲して頸部が立ち上がる。口縁は単純。 胴部に叩き目。	巻き上げ 頸部ヨコナデ 胴部叩き	良好（二次焼成） 砂礫を含む オリーブ灰色	I 焼台
〃	3	〃	J 6.3	外傾する頸部の破片。口縁下方に沈線が見られ，折り返し部にアクセントをつける。内外面付着物。	巻き上げ ヨコナデ	良好（二次焼成） 砂礫を含む 青黒色	I 焼台
〃	4	〃	J 7.0	外傾する頸部に断面三角形の口縁がつく，口唇部はやや内側へ突き出す。	巻き上げ，ヨコナデ	良好（二次焼成） 砂礫を含む 暗紫色	I 焼台
〃	5	〃	J 7.2	内反する胴部から「く」の字状に頸部が立ち上がる。口縁は単純。	巻き上げ，ヨコナデ	良好（二次焼成） 砂礫を含む オリーブ灰色	I 焼台
〃	6	〃	J 10.3	口縁は大きく外反し，口唇はやや突出する。折り返し風の口縁で頸部に波状文が施される。	巻き上げ，ヨコナデ	良好（二次焼成） 砂礫を含む 紫灰色	II 焼台
〃	7	〃	J 7.3	口縁は大きく外傾し，口唇は折り返し風。頸部に波状文。	巻き上げ，ヨコナデ	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰白色	II 焼台
〃	8	〃	J 5.0	外傾する口縁部の破片，頸部が薄く口縁は端端がやや突出する。	巻き上げ，ヨコナデ	やや不良 砂礫を含む 褐灰色	III

甕（50－1～8）

甕の口縁は，単純なものが多い。2の胴部には，平行線叩き目が見られる。頸部には叩き具の角が斜めにあてられているが，意図的なものであるかは不明。6・7は，いずれも頸部に波状文を配している。焼台として使用されたと思われる。同一個体であろう。

(4) C４号窯跡（付図５　PL20・24・25）

① 構　造

地下式無段登窯の構造を有し，主軸はN－76°－Eを示す。

全長は11m，幅は焚口で0.5～1m，燃焼室で1.1～1.4m，焼成室で最大２ｍを測る。焚口から焼成室まで徐々に幅を広める。

窯底は燃焼室付近が最も低く，焼成室では緩かな傾斜を示し，6°内外を測る。焚口端から7.6mの所に傾斜変換点を有し，奥では25°を測る。青灰色に焼けているが，もろく崩れやすい。Ⅱ次ベースは，Ⅰ次ベース上に堆積する厚い砂層上面にある。本窯跡の焼成室は砂層中にあり，極めて崩れやすかったため，ベース間の砂層（天井・壁の崩落と再整形を成因とする）が特に厚かったのであろう。全体に焼成は悪い。Ⅲ次ベースも同様である。奥壁の手前で，１～２㎜（目測）の厚さの青灰色砂層が認められたが，サラサラしており，当初はベースであることに気付かず掘り過ぎてしまった。

壁は，左右とも階段状を呈し，各段に各ベースが対応する。この段は天井・壁の崩落後，削り直して整形したために生じたものと思われ，上段ほど広い。つまり，新しいベースほど広いスペースを有したことになる。

遺物は各ベースから出土している。特に蓋坏のセットが見られる。

② 遺物（51－１～57－８）

坏（51－１～54－12）

52－11は磨滅が著しく，底部の調整技法に関する細かい観察ができない。53－５は，底部に砂質土が付着し，B₁群に属すること以外には判断できない。したがって，この２点については，分類から除外した。

残る43点は，焼台として使用され二次焼成を受けたもの（51－１～４・６・７・９・10，52－１～７，54－２・７）と製品（51－５・８・11，52－８～10，53－１～４・６～11，54－１・３～６・８～12）に分けることができる。それぞれに，小ぶりのものと大ぶりのものがある。焼台のグループ17点中，小ぶりのものは３点（51－２・３，54－７）のみである。これは，小ぶりの坏は焼台には不適当であったためであろう。

この43点を，グループごとに分類した結果を表にすると次のようになる。（　）の中は，それぞれの個体数の中で体部の整形に回転篦ナデBが用いられているものの数である。個体数だけで見ると，焼台・製品両グループ間には明瞭な差はない。しかし，整形技法に回転篦ナデBを加えて見ると，両者の違いが際立っていることに気付く。この技法は大ぶりのものに限定されており，

焼台のグループでは14個体中1個体（52－5）のみにそれが見られ，製品のグループではすべて

焼台・製品別に見た各類の坏個体数　（　）内は回転篦ナデB調整されているもの

		B_1I	B_1II	B'_1II	B_2II	C_2II	C_2III
焼台	大	1	10(1)	0	1	2	0
	小	0	0	0	0	1	2
製品	大	1(1)	8(8)	2(2)	1(1)	4(4)	0
	小	0	3	3	3	0	1

の個体に対して，多かれ少なかれ用いられている。この2グループ間に認められる差を，そのままC4号窯跡内で確認された時期差とすることには，なお疑問の余地を残している。体部外面に対して施された回転篦ナデBは，多分に装飾的効果をねらったものであると思われるからである。ここでは，B_1II類・C_2II類に分類された坏が特に多いということに注目したい。

蓋（55－1～56－17）

C_1II類（55－1・2・4・7～9・12～20・22～25，56－1～4・6・8・10～12・16）

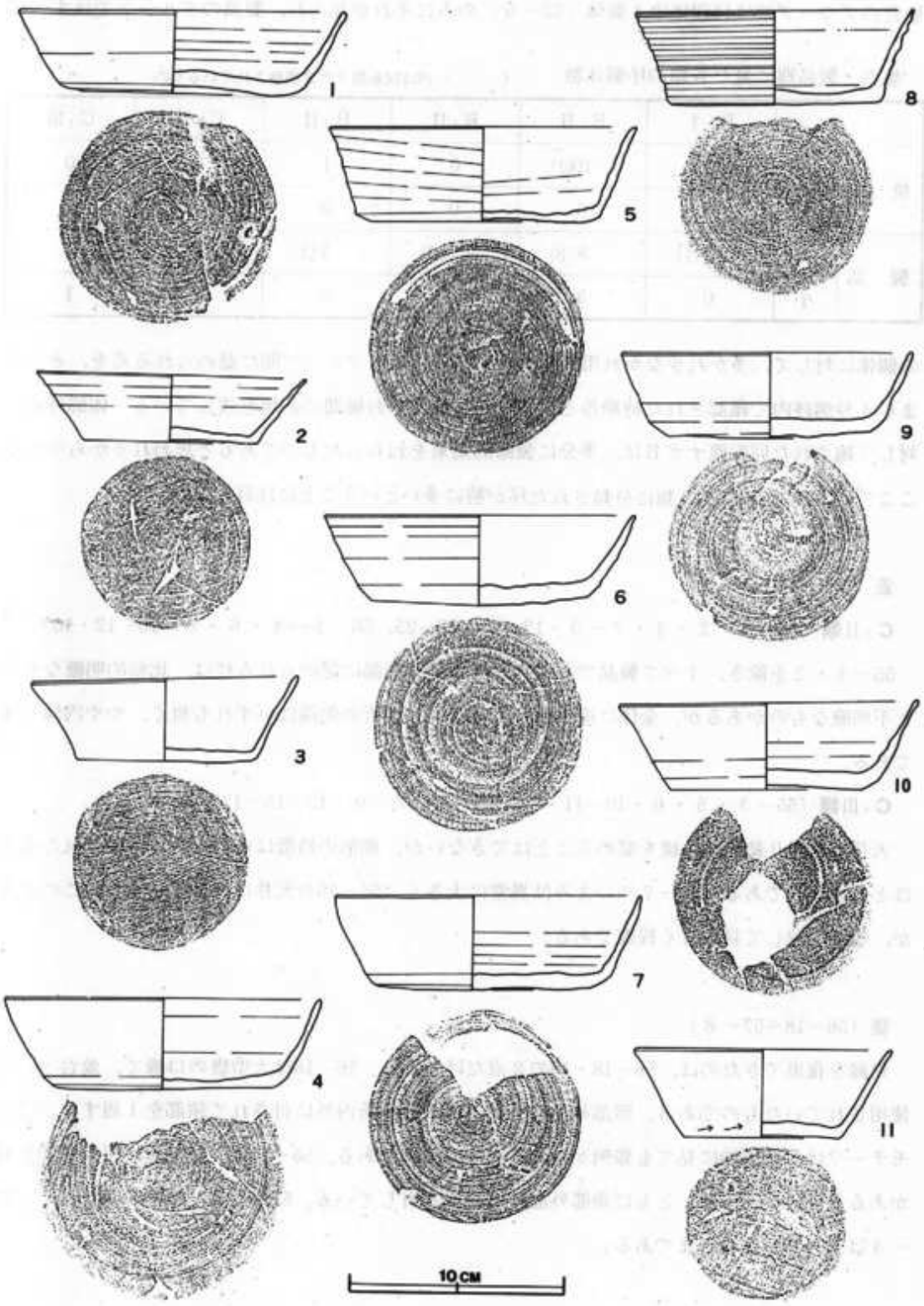
55－1・2を除き，すべて製品である。篦削り範囲端部に認められる稜は，比較的明瞭なものと不明瞭なものがあるが，全体に違いが目だたない。端折の先端はいずれも鋭く，やや内傾気味である。

C_1III類（55－3・5・6・10・11・21，56－5・7・9・13～15・17）

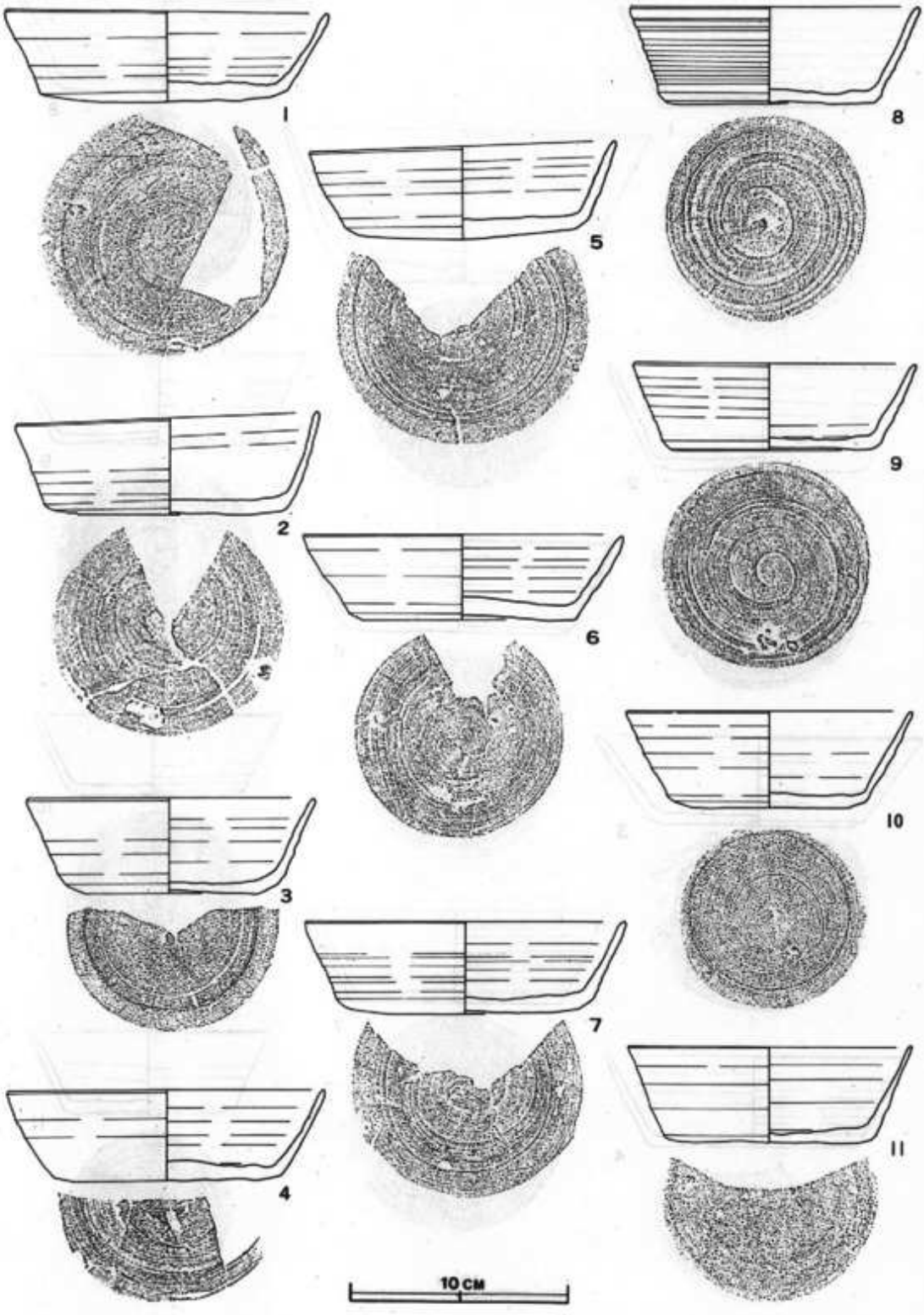
天井部篦削り範囲端に稜を認めることはできないが，細部の特徴はC_1II類に分類された蓋とほとんど同じである。56－7のつまみは異常に大きく，56－15の天井は他よりも高い。この2点が，他と比較して目に付く程度である。

甕（56－18～57－8）

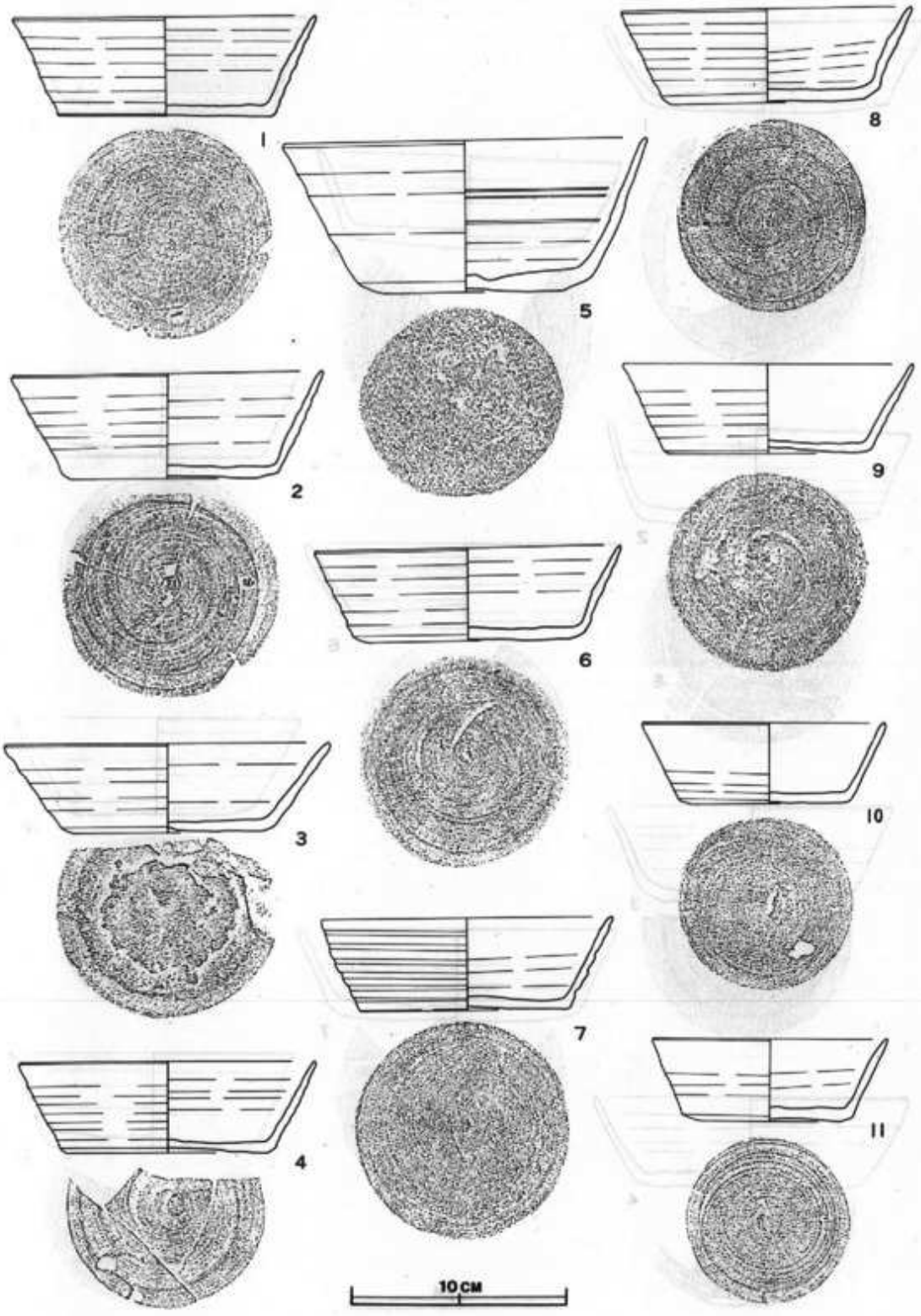
口縁を復原できたのは，56－18・19の2点だけである。56－18は大型甕の口縁で，焼台として使用されていたものである。頸部外面の草木文は，10か所内外に付されて頸部を1周する。このモチーフは，全国的に見ても類例が極めて少ないものである。56－19は，胴部肩に平行線叩き目がある。57－3・4は，ともに頸部外面に波状文を有している。57－3は，波形が横に長く，57－4は大きさがさまざまである。



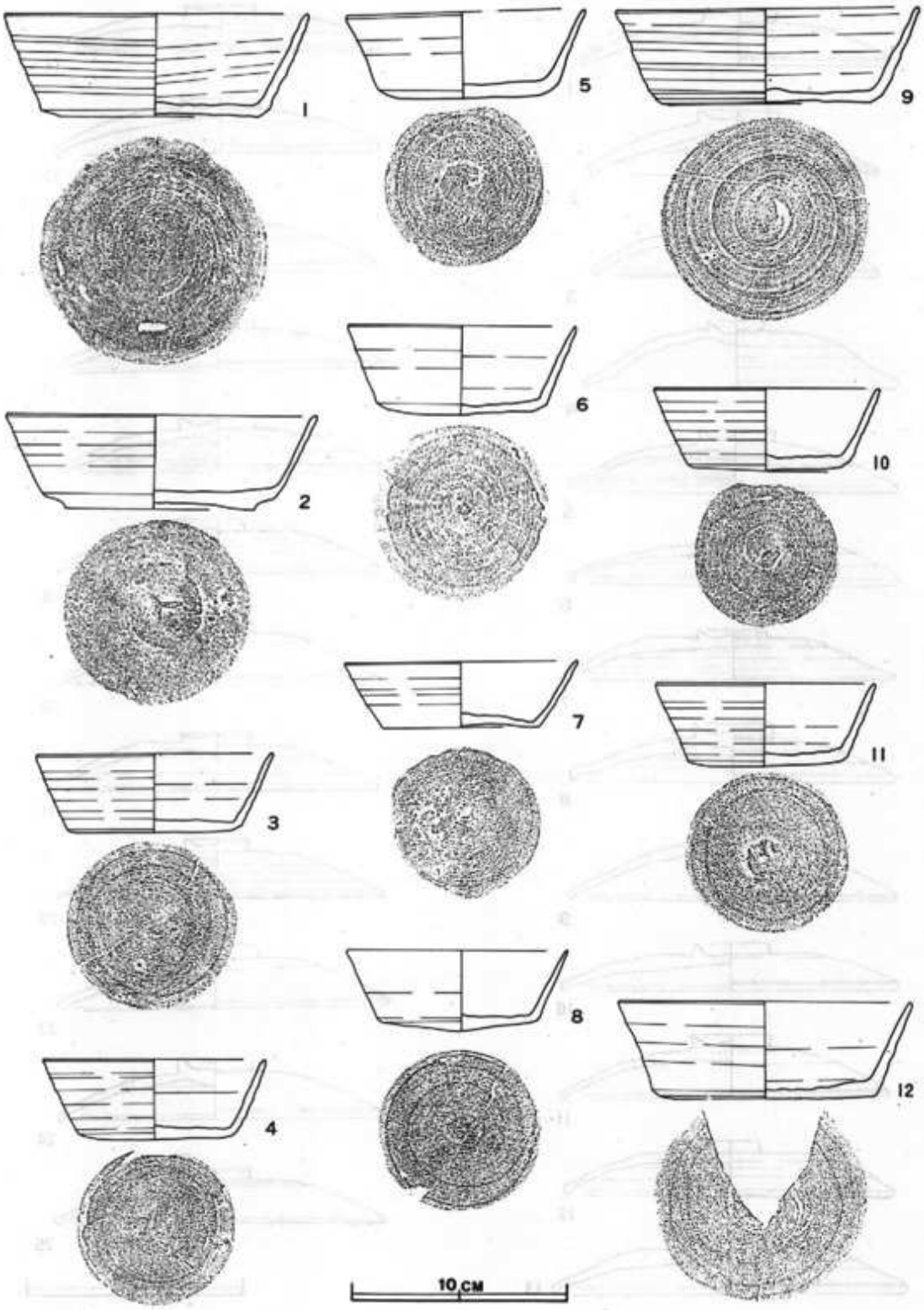
第51図　C 4 号窯跡出土遺物実測図(1)



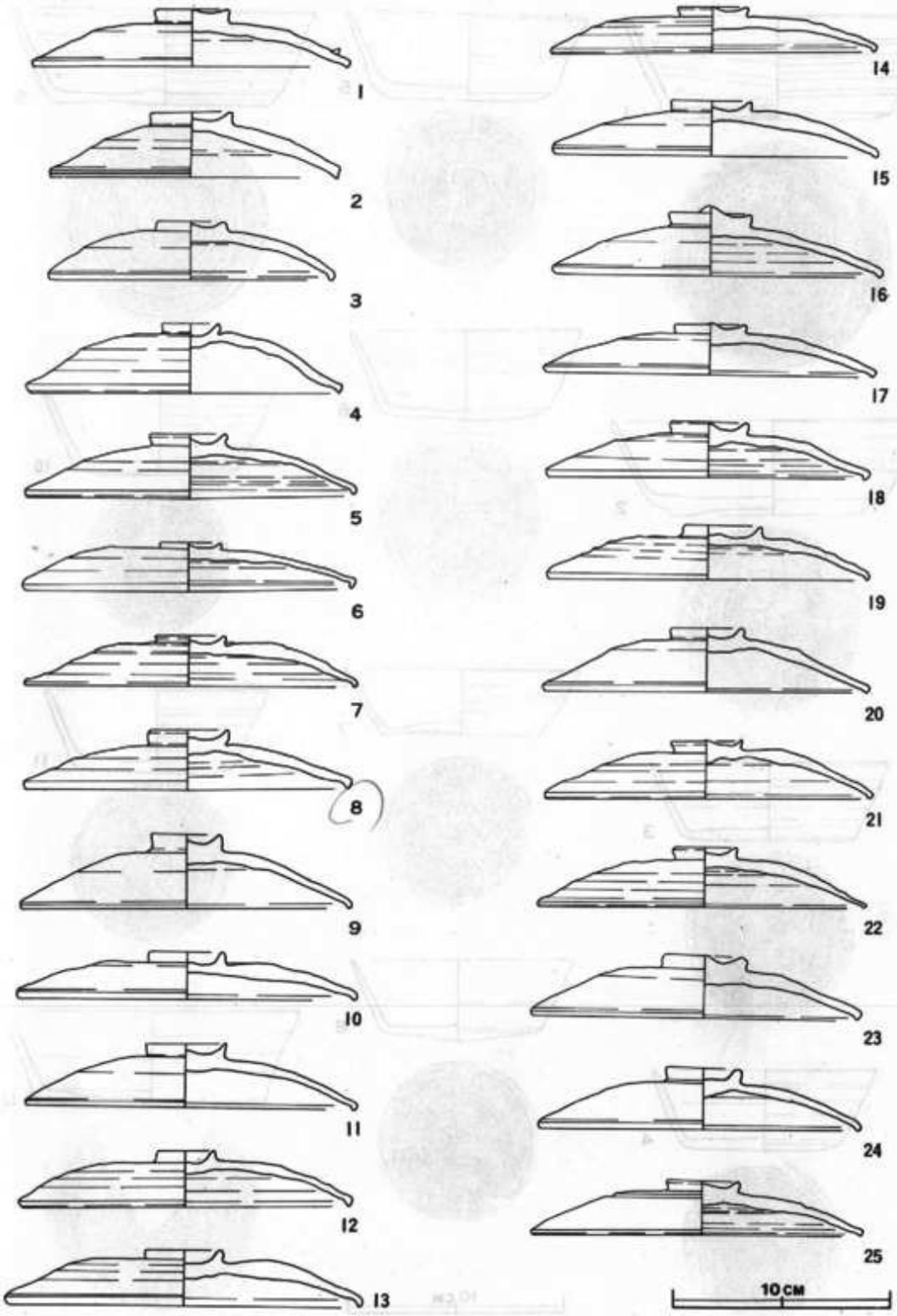
第52図　C 4 号窯跡出土遺物実測図(2)



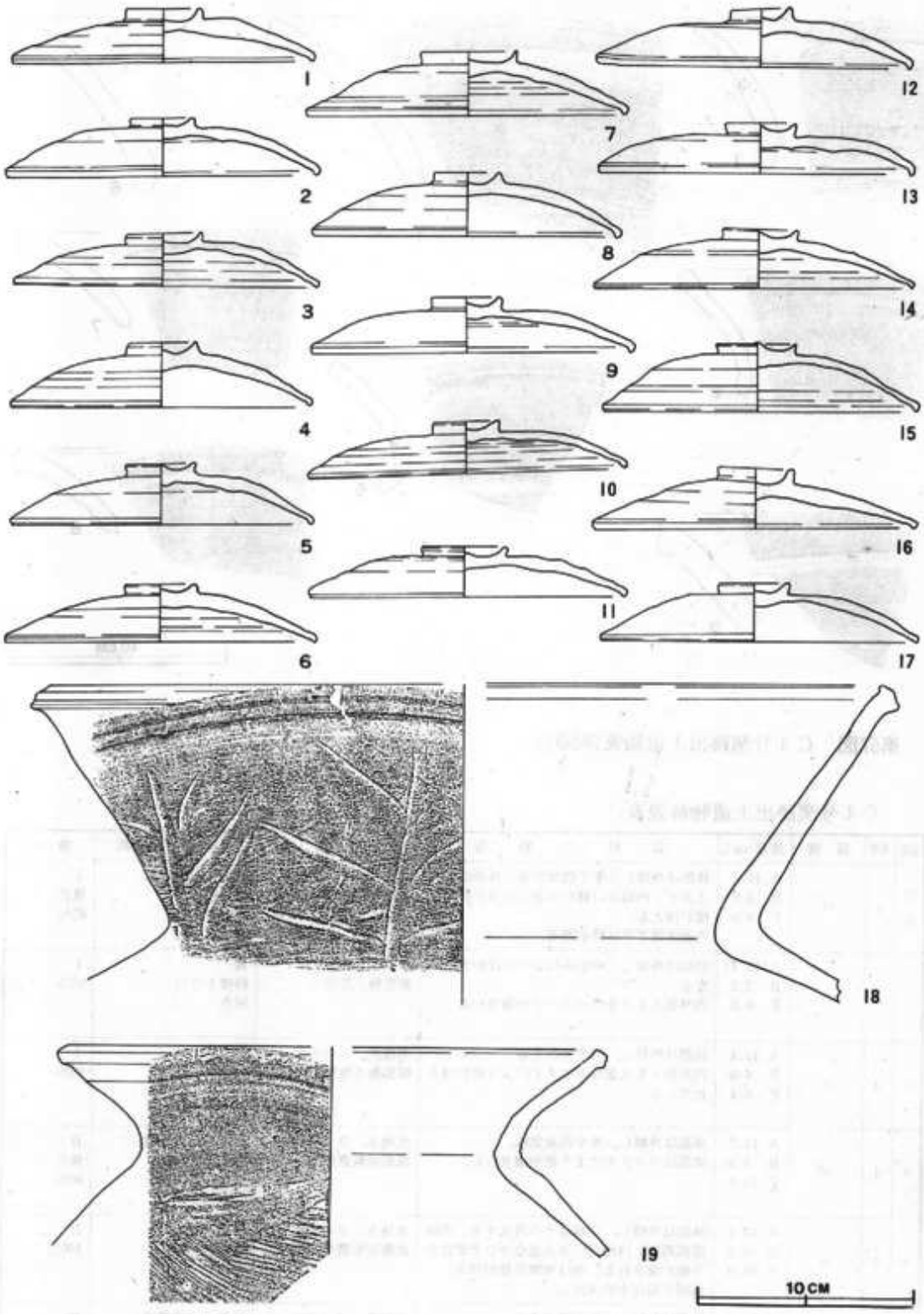
第53図　C 4 号窯跡出土遺物実測図(3)



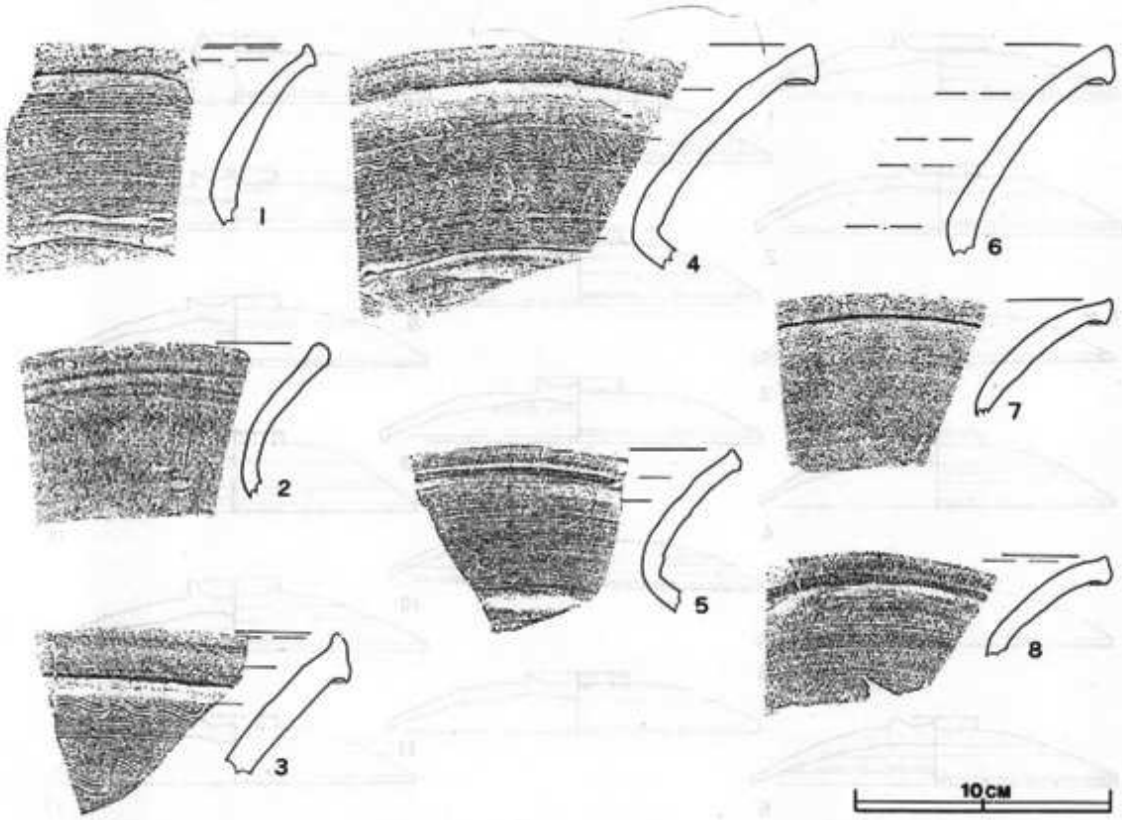
第54図　C 4 号窯跡出土遺物実測図(4)



第55図　C 4 号窯跡出土遺物実測図(5)



第56図　C４号窯跡出土遺物実測図(6)



第57図　C４号窯跡出土遺物実測図(7)

C４号窯跡出土遺物解説表

図版	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
51 (1)	1	坏	A 15.3 B 4.0 F 9.8	体部は外傾し，やや内反する。外面は体部上半が，内面は口縁が入念にヨコナデされ稜が消える。 内面体部下半は稜が顕著。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 黒褐色	I 焼台 85%
〃	2	〃	A(12.4) B 3.2 F 8.0	体部は外傾し，ゆがみにより口径が大きくなる。 内外面とも入念にヨコナデが施される。	水挽き，ヨコナデ 底部静止篦削り	良 砂礫を含む 灰色	I 65%
〃	3	〃	A 12.4 B 4.0 F 9.4	体部は外傾し，やや外反する。 内外面とも入念なヨコナデにより稜が消されている。	水挽き，ヨコナデ 底部静止篦削り	良 砂礫を含む 灰色	I 90%
〃	4	〃	A 14.7 B 4.3 F 10.2	体部は外傾し，やや内反気味。 体部はヨコナデにより稜が消される。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	II 焼台 80%
〃	5	〃	A 14.3 B 4.3 F 10.0	体部は外傾し，口縁はやや外反する。内面底部周囲と口縁付近は入念なヨコナデにより稜が消される。他は明瞭な稜が残る。 体部下端はやや突出。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 橙色	II 100%
〃	6	〃	A 14.4 B 4.3 F 10.0	体部は外傾し，やや内反する。 内外面ともヨコナデが施される。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 黄灰色	II 焼台 98%

51 (1)	7	坏	A 14.3 B 4.5 F 9.0	体部は外傾し，上半が内反。体部下端がやや突出するため，ゆるいS字状の立ち上がりである。内面体部下半を除き，入念にヨコナデされる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 黄灰色	II 焼台 80%
〃	8	〃	A(13.0) B 4.4 F 9.6	体部は外傾し，やや外反。内面は全体にヨコナデが施され，外面は篦ナデBによる沈線が8周する。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 体部外面回転篦ナデB	不良 砂礫を含む 外 褐灰色 内 灰白色	II 60%
〃	9	〃	A 13.5 B 4.0 F 9.5	体部は外傾し，やや内反気味。中段がやや肥厚する。 ヨコナデは内外面とも入念。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む	II 焼台 60%
〃	10	〃	A 13.9 B 4.2 F 9.0	体部は外傾し，口縁はやや外反する。内面体部下半は稜が残る。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 黄灰色	II 焼台 65%
〃	11	〃	A(11.8) B 4.2 F 7.3	体部は外傾し，内反気味に立ち上がる。口縁はやや外反する。体部内外面とも，入念なナデが施される。体部下半は横方向の篦削り。	水挽き，ヨコナデ 底部 体部下半 内面底部周辺 静止篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	II 70%
52 (2)	1	〃	A 14.7 B 4.5 F 11.4	体部は外傾し，上半が内反する。ヨコナデは外面のみが入念である。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 褐灰色	II 焼台 85%
〃	2	〃	A 14.0 B 4.9 F 10.9	体部は外傾して立ち上がる。体部の外面下半及び内面は稜が顕著。ゆがみあり。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 暗オリーブ灰色	II 焼台 85%
〃	3	〃	A(13.2) B 4.5 F 7.9	体部は外傾する。中段がふくらみ，口縁はやや外反する。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 体部下端回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	II 焼台 50%
〃	4	〃	A 14.6 B 4.3 F 10.6	体部は外傾し，口縁はやや内反する。体部の外面と内面上半はヨコナデによって稜を消されている。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 黒褐色	II 焼台 75%
〃	5	〃	A 13.8 B 4.6 F 9.8	体部は外傾し，内反気味。口縁はやや外反。体部下端はやや突出。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 褐灰色	II 焼台 65%
〃	6	〃	A 14.5 B 4.0 F 9.7	体部は外傾する。口縁直下がやや肥厚し，口縁は鋭く突き出す。体部下端はやや突出し稜を成す。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 黒褐色	II 85%
〃	7	〃	A 14.5 B 4.3 F 10.5	体部は外傾し，口縁付近はやや内反気味。内面と外面口縁付近にヨコナデ。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 黒褐色	III 焼台 65%
〃	8	〃	A 13.3 B 4.5 F 9.6	体部は外傾し，やや外反する。内面は全体に入念なヨコナデが施され，外面は篦ナデBによる沈線が8周する。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 体部外面回転篦ナデB	不良 砂礫を含む 灰白色	III 75%
〃	9	〃	A 12.4 B 4.2 F 9.0	体部は外傾し，やや内反気味。体部下端は突出し，稜となる。内面は工具を用いてヨコナデを施している。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	III 90%
〃	10	〃	A(13.0) B 4.5 F 7.1	体部は外傾し，やや内反気味に立ち上がる。内面は入念にヨコナデが施されるが，外面の稜は顕著。体部下端はやや突出。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	III 60%
〃	11	〃	A(13.0) B 4.5 F 9.6	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。内外面とも磨滅が著しい。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	III 50%

53 (3)	1	坏	A 13.9 B 4.7 F 9.9	体部は外傾し，やや外反する。内外面とも篦ナデB後，ヨコナデが施され，明瞭な稜が残る。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	III 90%
〃	2	〃	A 14.3 B 5.0 F 8.1	体部は外傾し，中段がやや肥厚する。外面は稜が顕著。体部下端はやや突出する。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	III 70%
〃	3	〃	A(15.1) B 4.2 F(10.0)	体部は大きく外傾する。内面は入念にナデが施され，稜は全く消される。	水挽き，ヨコナデ 底部内面ナデ 底部回転篦切り	不良 砂礫を含む 灰白色	III 50%
〃	4	〃	A(13.6) B 4.3 F (9.4)	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。内外面とも鋭かい稜があり，体部下端がやや突出する。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	III 50%
〃	5	〃	A 16.7 B 7.1 F 8.7	体部は外傾する。体部下端はやや丸味をおびる。体部内面は篦ナデBによる沈線が周回する。 底部は付着物により不明。	水挽き，ヨコナデ 体部内面回転篦ナデB	良 砂礫を含む 灰色	III 95%
〃	6	〃	A(14.0) B 4.4 F 9.2	体部は外傾する。内外面とも明瞭なロクロによる稜が残る。口縁付近は内外面とも入念にナデが施される。体部下端がやや突出する。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	III 65%
〃	7	〃	A 13.6 B 4.3 F 9.7	体部は外傾する。体部外面は篦ナデBによる沈線が6条周回する。内面はヨコナデによって稜が消されている。	水挽き，ヨコナデ 体部外面回転篦ナデB 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	III 70%
〃	8	〃	A 13.5 B 4.4 F 8.9	体部は外傾する。内面のヨコナデは入念。外面は稜が明瞭に残り体部下端はやや突出する。全体にていねいなつくりである。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む にぶい橙色	III 100%
〃	9	〃	A 13.5 B 4.3 F 9.6	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。体部外面は稜が顕著。内面のナデには工具が用いられている。 摩滅が著しい。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	III 80%
〃	10	〃	A 11.2 B 3.7 F 7.9	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。内外面とも入念なヨコナデが施される。体部下半には篦ナデBによる沈線が3周する。	水挽き，ヨコナデ 底　部 底部周囲 } 回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	III 100%
〃	11	〃	A 11.0 B 3.8 F 6.4	体部は外傾し，上半がやや肥厚する。内外面ともヨコナデが施され，内面は特に入念である。 小ぶり。	水挽き，ヨコナデ 底　部 底部周囲 } 回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	III 100%
54 (4)	1	〃	A 14.3 B 4.8 F 9.2	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。内面ヨコナデは入念。外面は篦ナデB後ヨコナデを施し稜が目立つ。体部下端はやや突出。	水挽き，ヨコナデ 体部外面回転篦ナデB 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 外　灰白色 内　淡黄色	III 100%
〃	2	〃	A(14.4) B 4.4 F 8.4	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。内面のナデは入念。底部切り離し面は突出する。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り	良（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	III 75%
〃	3	〃	A(10.8) B 3.7 F 7.0	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。内面は入念にヨコナデが施される。 小ぶり。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰黄色	III 65%
〃	4	〃	A 10.2 B 4.0 F 7.3	体部は外傾し，口縁はやや外反気味。内面のヨコナデは入念。底部周囲に篦削りが施され，体部との境界はシャープな稜を成す。 小ぶり。	水挽き，ヨコナデ 底　部 底部周囲 } 回転篦削り	やや不良 砂礫を含む 灰色 （内面底部灰白色）	III 90%
〃	5	〃	A 11.0 B 4.0 F 7.0	体部は外傾し，やや外反する。体部下端は篦調整され，丸味をおびる。 小ぶり。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部回転篦削り	良 砂礫を含む オリーブ灰色	III 65%

54 (4)	6	坏	A 10.5 B 4.2 F 6.8	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。内外面とも入念にヨコナデが施される。小ぶり。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	III 75%
〃	7	〃	A(10.7) B 3.1 F 7.2	体部は外傾し，口縁はやや外反。内面底部周囲には篦ナデBによる凹線が3周する。ゆがみあり。小ぶりである。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部回転篦削り 内面底部周囲回転篦ナデB	良 砂礫を含む 灰色	III 50%
〃	8	〃	A 10.2 B 3.8 F 7.2	体部は外傾し，口縁はやや外反する。底部中央がやや突出する。体部内面のナデは入念に施され，後は全く消されている。内面底部周囲に篦ナデBによる沈線が数条周回する。小ぶり。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	III 90%
〃	9	〃	A 14.0 B 4.4 F 9.8	体部は外傾し，口縁はやや外反する。内外面とも篦ナデB後ヨコナデ。外面は沈線が5周する。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 体部回転篦ナデB	不良 砂礫を含む 灰白色	III 75%
〃	10	〃	A 10.3 B 3.9 F 6.9	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。内面は入念にヨコナデが施され稜が消されている。小ぶり。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰色	III 55%
〃	11	〃	A 10.0 B 3.9 F 7.4	体部は外傾し，やや外反気味に立ち上がる。内面は入念なヨコナデ。小ぶりである。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 外 浅黄色 内 にぶい黄色	III 65%
〃	12	〃	A 13.4 B 4.7 F 10.1	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。ヨコナデは内外面とも入念であるが，体部には稜が残る。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 浅黄橙色	III 70%
55 (5)	1	盌	A 14.5 B 2.7 H 3.5 I 0.7	つまみはbiii類。天井部篦削り端がやや張り，明瞭な稜を成す。端折が小さい。内外面に付着物。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	良好（二次焼成） 砂礫を含む 暗灰色	I 65%
〃	2	〃	A 13.3 B 3.0 H 3.8 I 0.6	つまみはbiii類。つまみ接合部が高く，口縁へなだらかに下がる。 端折外面を篦ナデBにより調整	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合 端折外面回転篦ナデB	良好（二次焼成） 砂礫を含む 黄灰色	I 焼台 85%
〃	3	〃	A(13.1) B 2.8 H 3.3 I 0.5	つまみはbii類。天井部は平坦で篦削り端から丸味をもって口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 灰白色	II 50%
〃	4	〃	A 14.3 B 3.2 H 2.8 I 0.6	つまみはbiii類。天井が高く肩は丸味を有して，大きな傾斜で口縁へ下がる。端折は小さく断面三角形。つまみ接合時にドベを塗布した痕が明瞭に判別できる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂粒を含む 橙色	II 100%
〃	5	〃	A 15.1 B 3.0 H 3.5 I 0.6	つまみはbii類。天井は全体に丸味を有しなだらかに口縁へ下がる。 端折内側は工具により調整。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 淡黄色	II 50%
〃	6	〃	A 15.0 B 2.3 H 2.9 I 0.4	つまみはbiii類。 天井部は全体に扁平でなだらかに口縁へ下がる。端折内側は工具により調整される。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 浅黄橙色	II 80%
〃	7	〃	A(15.4) B 2.3 H 3.3 I 0.5	つまみはbii類。 天井部中央が平坦で丸味をもって口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 浅黄橙色	III 90%
〃	8	〃	A 15.2 B 2.1 H 3.6 I 0.8	つまみはbii類。天井部から丸味をもって口縁へ下がる。端折は断面三角形を呈し，外縁は丸味をおびる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 灰白色	III 100%
〃	9	〃	A 15.2 B 3.5 H 3.3 I 0.9	つまみはbii類。天井部が高く大きな傾斜で口縁へ下がる。端折は小さい。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 灰白色	III 70%

55 (5)	10	蓋	A 15.6 B 2.2 H 3.8 I 0.6	つまみはb'ii類。天井部が低く全体に扁平である。磨滅が著しい。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 灰白色	III 80%
〃	11	〃	A 15.2 B 3.0 H 3.7 I 0.6	つまみはb'ii類。天井は丸味を有し，なだらかに口縁へ下がる。端折内側は工具により調整。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 灰白色	III 70%
〃	12	〃	A(15.2) B 2.65 H 2.7 I 0.5	つまみはb'ii類。天井から口縁へなだらかに下がる。端折は先端がやや丸味をおびる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 灰白色	III 80%
〃	13	〃	A 16.4 B 2.6 H 3.6 I 0.6	つまみはb'iii類。天井部は肩が張り大きな傾斜で下がり，口縁は水平になる。端折はやや大きい。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 灰白色	III 70%
〃	14	〃	A 14.8 B 2.1 H 3.2 I 0.4	つまみはb'ii類。天井部が低く全体に扁平である。端折はやや内傾気味。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 灰白色	III 85%
〃	15	〃	A 14.9 B 2.5 H 3.7 I 0.5	つまみはb'ii類。天井部はつまみ接合部が最も高くなだらかなスロープで口縁へ下がる。端折は小さい。全体に磨滅。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 灰白色	III 95%
〃	16	〃	A 15.0 B 3.3 H 3.8 I 1.0	つまみはb i類。天井部はなだらかなカーブで口縁へ下がる。端折内側は工具により調整。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 灰白色	III 65%
〃	17	〃	A(15.0) B 2.9 H 3.3 I 0.5	つまみはb'i類。篦削り端部がやや張る。端折は小さい。磨滅が著しい。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 灰白色	III 50%
〃	18	〃	A 14.9 B 2.7 H 3.4 I 0.6	つまみはb'ii類。天井から口縁へなだらかに下がる。端折は小さく断面三角形。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む にぶい黄橙色	III 100%
〃	19	〃	A 14.9 B 2.0 H 3.4 I 0.5	つまみはb'ii類。つまみ接合部は蓋の中心からずれている。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む にぶい黄橙色	III 85%
〃	20	〃	A 14.9 B 3.0 H 3.4 I 0.6	つまみはb'ii類。天井が高く大きな傾斜で口縁へ下がる。篦削り端部はやや張って明瞭な稜を成す。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂粒を含む 灰白色	III 70%
〃	21	〃	A 14.9 B 2.7 H 3.3 I 0.6	つまみはb i類。天井が高く，大きな傾斜で口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 灰白色	III 75%
〃	22	〃	A 14.9 B 2.8 H 2.9 I 0.6	つまみはb ii類。天井部から口縁まで全体に丸味をもつ。口縁付近は薄手で端折も小さい。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 灰白色	III 85%
〃	23	〃	A 15.0 B 2.9 H 3.9 I 0.6	つまみはb'i類。天井部は肩が張り，なだらかに口縁へ下がる。端折は小さい。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 灰白色	III 98%
〃	24	〃	A 14.8 B 2.9 H 3.4 I 0.7	つまみはb'iii類。天井はやや高く大きな傾斜で口縁へ下がる。端折は小さい。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 灰白色	III 80%
〃	25	〃	A 15.0 B 2.6 H 3.3 I 0.5	つまみはb'ii類。天井部からなだらかに口縁へ下がる。端折は目立たない。篦削り端には石ズリの痕が1周する。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 灰白色	III 75%

56 (6)	1	壺	A 13.9 B 2.5 H 3.6 I 0.6	つまみはb'Ⅲ類。天井部の篦削り部にゆがみがあり，一方が高くなる。 端折は小さい。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 浅黄色	Ⅲ 80%
〃	2	〃	A(14.3) B 2.7 H 3.1 I 0.5	つまみはb'Ⅱ類。天井部はやや高く，大きく傾斜して口縁へ下がる。端折先端はやや丸味をおびる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 灰白色	Ⅲ 70%
〃	3	〃	A 13.9 B 2.6 H 3.5 I 0.6	つまみはb'Ⅲ類。天井から口縁へ丸味をもって下がる。端折は小さい。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 灰白色	Ⅲ 75%
〃	4	〃	A 13.7 B 3.0 H 3.4 I 0.6	つまみはb'Ⅱ類。天井篦削りの端部から丸味をもって口縁へ下がる。端折は断面三角形であるが先端はやや丸い。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 灰白色	Ⅲ 75%
〃	5	〃	A 13.8 B 2.8 H 3.3 I 0.6	つまみはbⅡ類。篦削り端がやや張るが全体に丸味を有する。端折は小さい。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 灰白色	Ⅲ 75%
〃	6	〃	A(14.4) B 2.7 H 3.4 I 0.6	つまみはb'Ⅱ類。天井部はつまみ接合部が最も高く，なだらかに口縁へ下がる。 端折内側は篦ナデBにより調整	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 灰白色	Ⅲ 90%
〃	7	〃	A 14.6 B 3.0 H 4.4 I 0.6	つまみはb'Ⅱ類。天井から大きな傾斜で口縁へ下がる。天井篦削り部は大きな石ズリ痕が3周する。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 浅黄橙色	Ⅲ 98%
〃	8	〃	A(14.0) B 3.0 H 3.2 I 0.6	つまみはb'Ⅱ類。篦削り端部から大きな傾斜で口縁へ下がる。端折は断面三角形で外側が丸味を有する。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 灰白色	Ⅲ 70%
〃	9	〃	A 14.7 B 2.6 H 3.3 I 0.7	つまみはb'Ⅱ類。天井部は篦削り部がほぼ平坦で同端部から丸味をもって口縁へ下がる	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 灰白色	Ⅲ 75%
〃	10	〃	A 14.5 B 2.5 H 3.1 I 0.6	つまみはb'Ⅱ類。天井部は全体に扁平で，篦削り端部は丸味を帯びる	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 灰白色	Ⅲ 70%
〃	11	〃	A 14.6 B 2.5 H 4.0 I 0.5	つまみはbⅡ類。天井部は肩がやや張り口縁へなだらかに下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 灰白色	Ⅲ 90%
〃	12	〃	A 14.5 B 2.8 H 2.9 I 0.6	つまみはb'Ⅱ類。全体に扁平で天井から口縁への下がり方もなだらか。端折内側は工具により調整。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 灰白色	Ⅲ 75%
〃	13	〃	A 14.4 B 2.4 H 3.3 I 0.6	つまみはb'Ⅱ類。天井部は平坦で篦削り端部から丸味をもって口縁へ下がる。端折内側は工具により調整。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 灰白色	Ⅲ 80%
〃	14	〃	A 14.6 B 2.8 H 3.5 I 0.5	つまみはb'Ⅱ類。天井が高く全体に丸味を有する。口縁はやや起き上がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 灰白色	Ⅲ 75%
〃	15	〃	A 14.5 B 3.2 H 3.7 I 0.5	つまみはbⅠ類。天井が高く，篦削り端部は丸味を有し，大きな傾斜で口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 灰白色	Ⅲ 95%
〃	16	〃	A 14.7 B 2.9 H 3.5 I 0.7	つまみはb'Ⅲ類。天井部は篦削り部にゆがみが見られ片側が高い。端折が小さい。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 灰白色	Ⅲ 95%

56 (6)	17	壺	A 14.5 B 2.8 H 3.2 I 0.5	つまみはbII類。端折は小さい。内外面とも磨滅が著しい。	水挽き，ヨコナデ 犬井部回転箆削り つまみ接合	不良 砂礫を含む 灰白色	III 95%
〃	18	甕	A(38.4) J 14.7	頸部は外傾し，口縁は断面が玉珠状を呈する。口縁内側に浅い凹線が1周する。頸部外面には草木文が施される。	巻き上げ，ヨコナデ 頸部接合	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	I 焼台
〃	19	〃	A(24.4) J 9.6	頸部は強く外傾し口縁は単純。胴部に叩き目。	巻き上げ，叩き 頸部ヨコナデ	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	I 焼台 頸部½
57 (7)	1	〃	J 7.2	頸部は外傾・外反し，口縁は単純。内面付着物。	巻き上げ，ヨコナデ	良好（二次焼成） 砂礫を含む 暗緑灰色	I 焼台
〃	2	〃	J 6.2	頸部は外反し，口縁は単純で丸味を有する。内面自然釉。	巻き上げ，ヨコナデ	良好（二次焼成） 砂礫を含む 暗緑灰色	I 焼台
〃	3	〃	J 5.6	外傾する口縁付近の破片。口縁は上下が突出。頸部に波状文。	巻き上げ，ヨコナデ	良 砂礫を含む 外 黒 色 内 黄灰色	II
〃	4	〃	J 8.8	強く外傾・外反する頸部の破片で，口縁は単純。外面に波状文，内面自然釉。	巻き上げ，ヨコナデ	良好（二次焼成） 砂礫を含む 暗緑灰色	II 焼台
〃	5	〃	J 5.5	頸部は，外傾・外反し，口縁は比較的単純。口巻内側に浅い凹線が認められる。	巻き上げ，ヨコナデ	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰白色	II
〃	6	〃	J 8.3	外傾・外反する頸部で，口縁は単純な折り返し風。	巻き上げ，箆ナデA	良好（二次焼成） 砂礫を含む 暗緑灰色	II 焼台
〃	7	〃	J 4.6	外傾・外反する頸部で，口縁は単純。内面付着物。	巻き上げ，ヨコナデ	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	I 焼台
〃	8	〃	J 4.0	強く外反する頸部で，口縁は単純。	巻き上げ，ヨコナデ	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	焚口

(5) C５号窯跡（第58図　PL21・22・25～28）

① 構　造

地下式無段登窯の構造を有し，主軸はN－71°－Eを示す。焚口は，C３号窯跡確認時に一部を切り取られた。そのため全長は不明であるが，残存部で6.2mを測る。幅は燃焼室で1.5m，焼成室で1.7mを測る。両室の境界付近でくびれており，1.3mの幅を有する。

ベースは明瞭な傾斜変換点を有さず，中央付近で11°，奥壁手前で24°を測る。全体に青灰色を呈するが，崩れやすい。Ⅱ次ベースは，天井の崩落と整形を経て形成されたもので，奥壁手前の部分を除き，青灰色を呈する。炭化物が全体を覆っていたが，その理由については不明である。Ⅲ次ベースは，天井・壁のブロックが厚く堆積する層の上面にある。Ⅱ次ベース面との差は，奥壁手前の部分で40cmを測る。ベース面は，焼成が十分に行われなかった（失敗した？）ことをうかがわせる，粒状または砂状の緑灰色層上面に多量の遺物が見られ，すべて十分に焼き締まっていなかった。奥に至って傾斜を増し，27°を測る。Ⅳ次ベースは，10cm内外の厚みを有する天井崩落によるブロック層上にあり，傾斜等はⅢ次ベースと同様である。青灰色を呈する。Ⅴ次（最終）ベースは，Ⅲ次ベースと同様に厚い天井崩落によるブロック層上にある。全体に緑灰色を呈し，焼成がうまく行かなかったことをうかがわせる。上面が粒状・砂状を呈することもⅢ次ベースと類似する。新しいベースは，後述するようにⅠ次ベースの煙道を奥壁として用い，しかもⅠ次ベースよりも上位に設けられる。このため，窯跡が斜面に立地するという性質上，焚口・燃焼室が奥壁に向かって移動している。つまり新しいベースは初期のベースよりも短い。

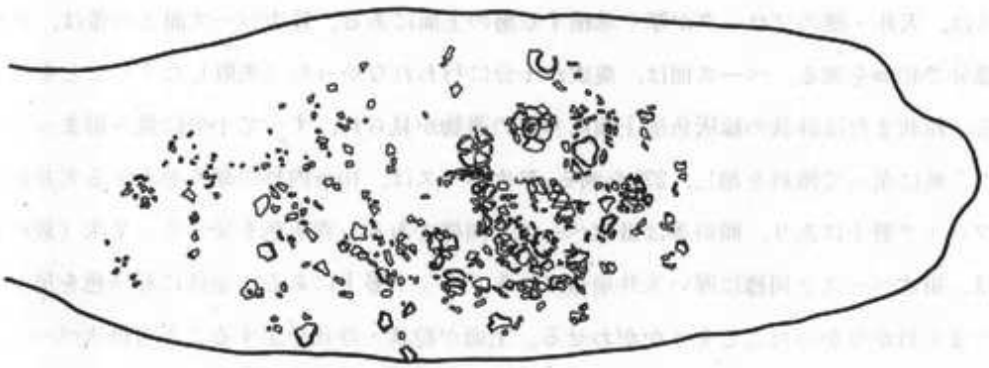
壁は階段状を呈する。これはC４号窯跡の項でも述べたように，新しいベースは幅が広くなることを意味する。最終ベースの壁はかなり内傾する。各ベースの壁とも本来は同様の状況であったと思われる。燃焼室左右の壁は，掘り方の壁にスサ入り粘土を貼り，その上に須恵器の破片・瓦を，さらにその上をスサ入り粘土を貼って覆うという木葉下遺跡では特異な構築法がなされていた。これは，Ⅳ次またはⅤ次ベース焼成時のものと思われる。この特異な構築法がなされた理由については，焚口がC３号窯跡壁のやや奥方に位置し，C３号窯跡の崩壊によって土壌が崩れやすかったこと，または周囲の地山が縦方向に亀裂が入りやすい地質であると見られることの２点が考えられる。「縦方向の亀裂」は，最終ベースの調査中に壁の外側に数本の亀裂が入り，崩れてしまったことから判断したものである。この時は，さらに調査を進めるにあたり，この性質を考慮して表土からの掘り込み範囲をさらに拡張することを余儀なくされた。また，Ⅳ次ベース左右の壁は，燃焼室に近い部分がスサ入り粘土を用いて補修されていた。

奥壁は，奥方向に半円形の凹みを有し，垂直に近い角度で1.6mほど立ち上がる。半円形の凹みは煙道の一部を成した痕跡であろう。Ⅰ次ベースではこの凹みが認められず，Ⅱ次～Ⅴ次ベースに顕著である。これは，Ⅰ次ベースの煙道が，ベース修復に伴う上方向へのベースの移動により

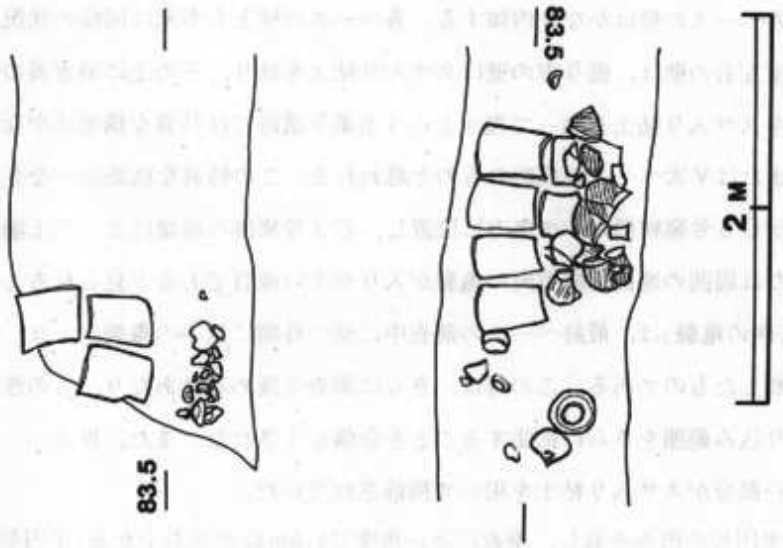
新しいベースの奥壁として再利用されたことを意味する。

天井は残存しないが，断面はカマボコ型を呈したものと思われる。

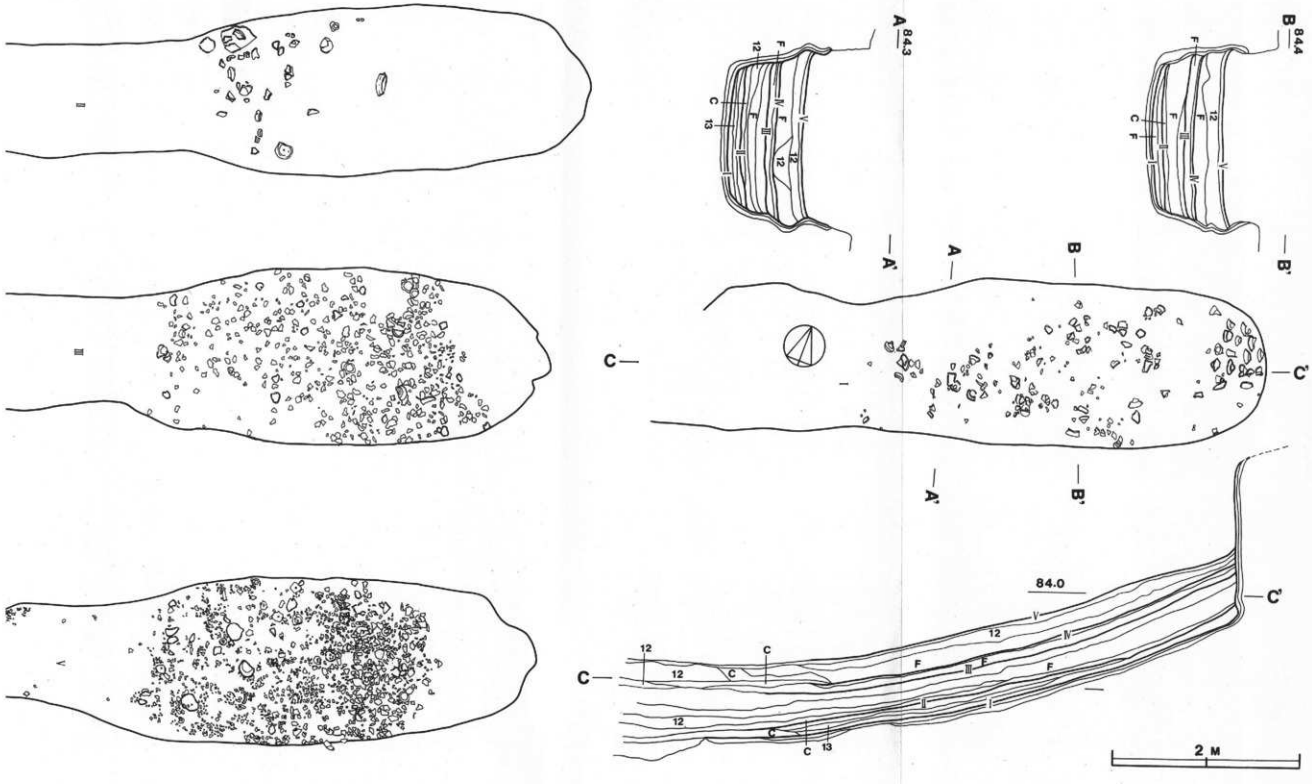
遺物は，ベース毎に特色がある。Ⅰ次ベース奥では坏・盤による置台群が見られ，陶鈴１点も出土した。Ⅳ次ベースでは，遺物がベース下方左側に集積されていた。Ⅲ次ベースとⅤ次ベースでは大量の遺物が見られた。特にⅤ次ベースは焼成途中に天井崩落が生じてそのまま放棄されたためか，おびただしい量の遺物が出土している。



第59図　Ｃ５号窯跡最終ベース遺物出土状況（第１回取り上げ後の様子）



第60図　Ｃ５号窯跡焚口実測図



第58図　C５号窯跡実測図

② 遺物（61－1～75－3）

坏（61－1～65－14）

遺構の項で述べたように，焚口の両側壁中から多量の須恵器片が出土している。南（右）側壁中から出土した破片と，北（左）側壁中から出土した破片が接合されている（64－10）ことから，両側壁中から出土した坏を一括して取り扱うことには問題は無い。一方，分類の結果には，ベース上から出土したグループとの間に差を認めることができない。したがって，C1・C4両窯跡出土遺物で試みたグループ間の比較は，ここでは行わない。

B₁Ⅰ類（62－1～3・11，63－7，64－1・10，65－3・10）

体部外面の稜が顕著である坏（62－2，64－1，65－3）が見られるが，回転篦ナデBは用いられていない。62－2を除き，口縁が外反する。

B₁Ⅱ類（61－1・3・10，62－4・6・7・9）

61－1・3は，小ぶりの坏である。3の体部外面には，回転篦ナデBが施される。これは，61－4とともに本窯跡では特異な例と言える。大ぶりの坏では，61－10を除き，体部外面の稜が明瞭に認められるが，いずれも水挽き痕である。口縁で外反する例が多い（61－1・10，62－6・7・9）。

B₁Ⅲ類（61－5・11，62－5・10，63－2～6・9・11，64－2・4・5・8・9・11，65－1・2・4～7・9・11・12・14）

本窯跡出土坏の大部分を占めるのが，本類である。大ぶりの坏は，口縁または体部中段で外反するものが多い。底部と体部を隔てる面は，篦切りや篦削りによって小さくなり，C₂群に近いものも見られる。

体部の稜は明瞭なものが多いが，ヨコナデによって消されているもの（62－10，63－5・6）もある。小ぶりの坏では，体部上半の稜が消される。

B₂Ⅱ類（61－2・4）

いずれも，小ぶりである。2は，体部下端に工具があてられている。4は，体部に回転篦ナデBが施される。口縁は，いずれもやや外反する。この2点は，61－1・3とともに，重ね焼きされていたものである。

B₂Ⅱ類（62－8）

体部外面の稜が顕著で，口縁が外反する。

B₂Ⅲ類（61－6）

体部外面の稜は極めて明瞭である。底部は，全体にわたって，ていねいな静止篦削り調整がなされている。

C_1II類（64－7）

本窯跡最終ベースの製品では，唯一の坏である。底部中央が，大きく凹んでいる。これは，水挽き時の痕であり，ロクロが3回転してから，水平に挽き出している。

C_2I類（61－7）

体部は，外傾し直線的に立ち上がる。口縁はやや外反。内面全体を口縁外側をヨコナデ調整している。底部の内面に篦記号が見られる。

C_2III類（61－8・9，63－1・8・10，64－3・6，65－8・13）

体部の稜が明瞭であるもの（61－8・10，63－10，65－8・13）と，そうでないもの（63－8，64－3・6）がある。底部は，切り離し後中心部付近を静止篦削り調整している。体部の立ち上がりはおおむね直線的で，口縁が外反する。64－6は体部中段がふくらんでおり，62－11とともに特異な形態を示している。

高台付坏（66－1～68－6）

66－1～3は，焼台として使用されていたものである。66－5・7，67－1・5は，いずれも最終ベースの焼台として使用されたもので，66－5・7は小ぶりである。この6個体は，いずれも高台底が磨滅し，一時期にせよ実際に使用されたものであると判断される。高台は外傾し，先端は丸味を有するもの（66－1，67－1・5）と平なもの（66－2・3・5・7）がある。

66－4・6・8～11，67－2～4・6～11，68－1～6は，すべて最終ベースの製品である。高台は外傾し，先端は丸味を有するものが多い。体部は外傾し，口縁は外反する。ヨコナデ調整されており，稜はほとんど認められないか，または，不明瞭なものである。高台内部は，すべて回転篦削りによって整形され，平坦である。

蓋（68－7～69－20）

本窯跡出土の蓋は，69－13を除きc群のつまみが付く。また，器形や整形技法の特徴等を見ると，一部には天井部の篦削り部周縁に弱い稜を認めることができるものを含むが，すべてC_1III類に属するものと見ることができる。そこで，ここでは全体の特徴を簡単に述べるにとどめる。

68－8，69－10は，いずれも口径が極めて大きい。68－8は，大型高台付坏の蓋であると思われる。66－1に示した高台付坏は，口径は68－8よりもやや大きいが，おそらくこのような大型品とセットになるものであろう。69－10は，68－8よりも口径が大きい。しかし，同じベースから出土した高盤と比較すると，口径はかなり小さい。また，盤と比較してもかなり小さいものである。最終ベースの遺物を100パーセント復原し得なかったので，この蓋とセットになる器種については，不明とせざるを得ない。

盤（70－1～72－5）

71－3～5，72－2・3は，最終ベースの製品である。72－1も最終ベースから出土したが，焼台と考えられる。72－4も，同様である。底部は，やや丸底である。72－5は，焚口南側壁に貼り付けられていたもので，底部は丸味を有し，高台よりも下がるという初期の特徴が観察される。

70－1～3は，いずれもⅠ次ベース奥壁付近の焼台として使用されていたものである。70－4・5，71－1・2は，Ⅰ次・Ⅱ次両ベースの焚口付近から発見されたものである。やはり，焼台として使用されたものであろう。これら7点も，底部の状況は初期の特徴を残している。

高盤（73－1～74　5）

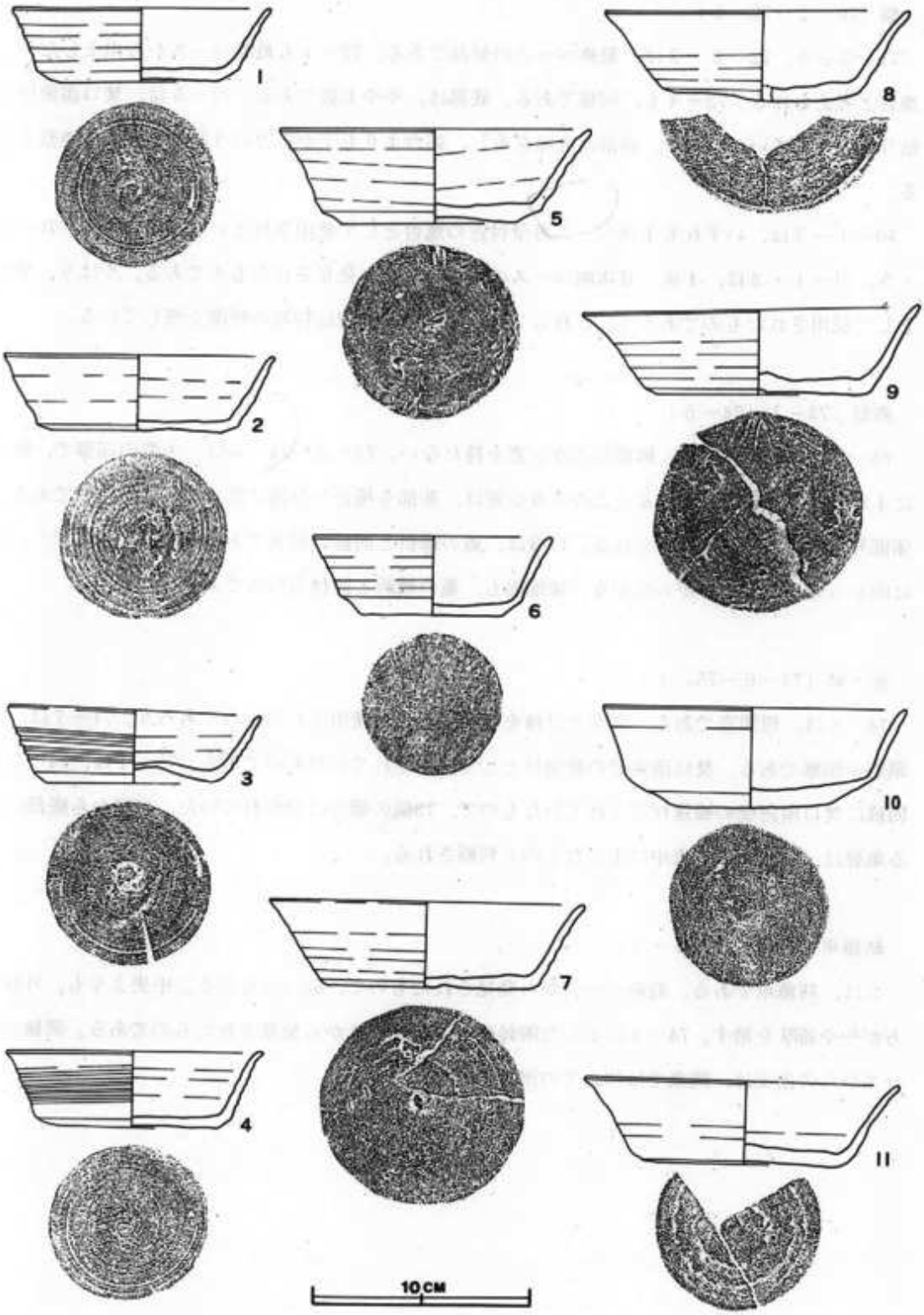
73－1は小型のもので，脚部にスカシ窓を持たない。73－2～74－5は，大型の高盤で，脚部に4か所のスカシ窓を有する。このスカシ窓は，杯部を接合した後に箆で切られたものである。体部外面は明瞭な稜が認められる。口縁は，蓋の端折と同様の形状である。脚部は円錐形で，斜に向かってカーブしながら広がる。接地面も，蓋の端折と同様の形状である。

壺・鉢（74－6～75－1）

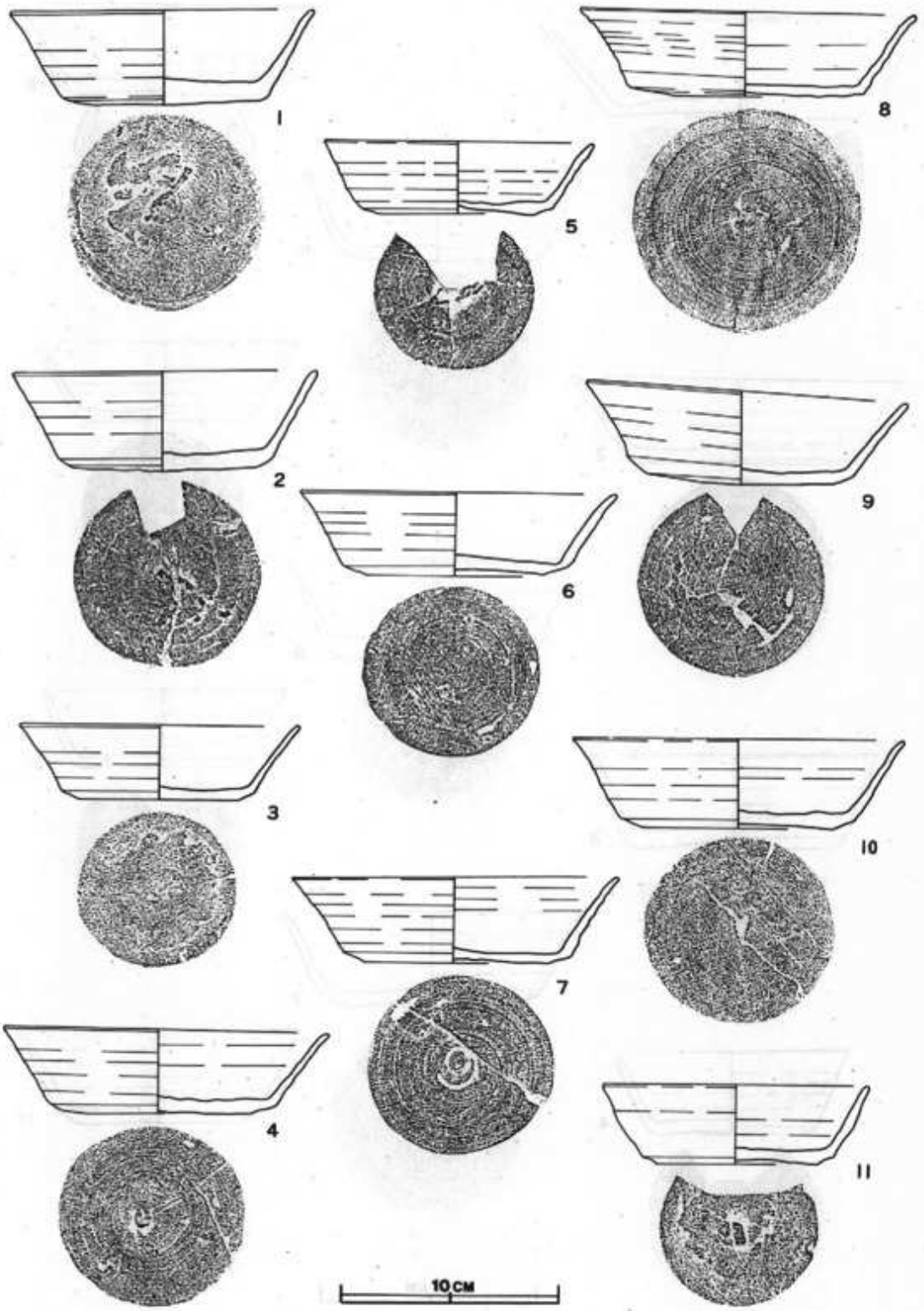
74－6は，短頸壺である。高台と口縁を欠く。焼台に使用されたものであろう。74－7は，長頸壺の頸部である。焚口南側壁の補強材として使用されていたものである。75－1は，74－7と同様に焚口南側壁の補強材とされていたもので，13個の破片に分かれていた。口縁から底部に至る亀裂は，この鉢の焼成中に生じたものと判断される。

紡錘車・陶鈴（75－2・3）

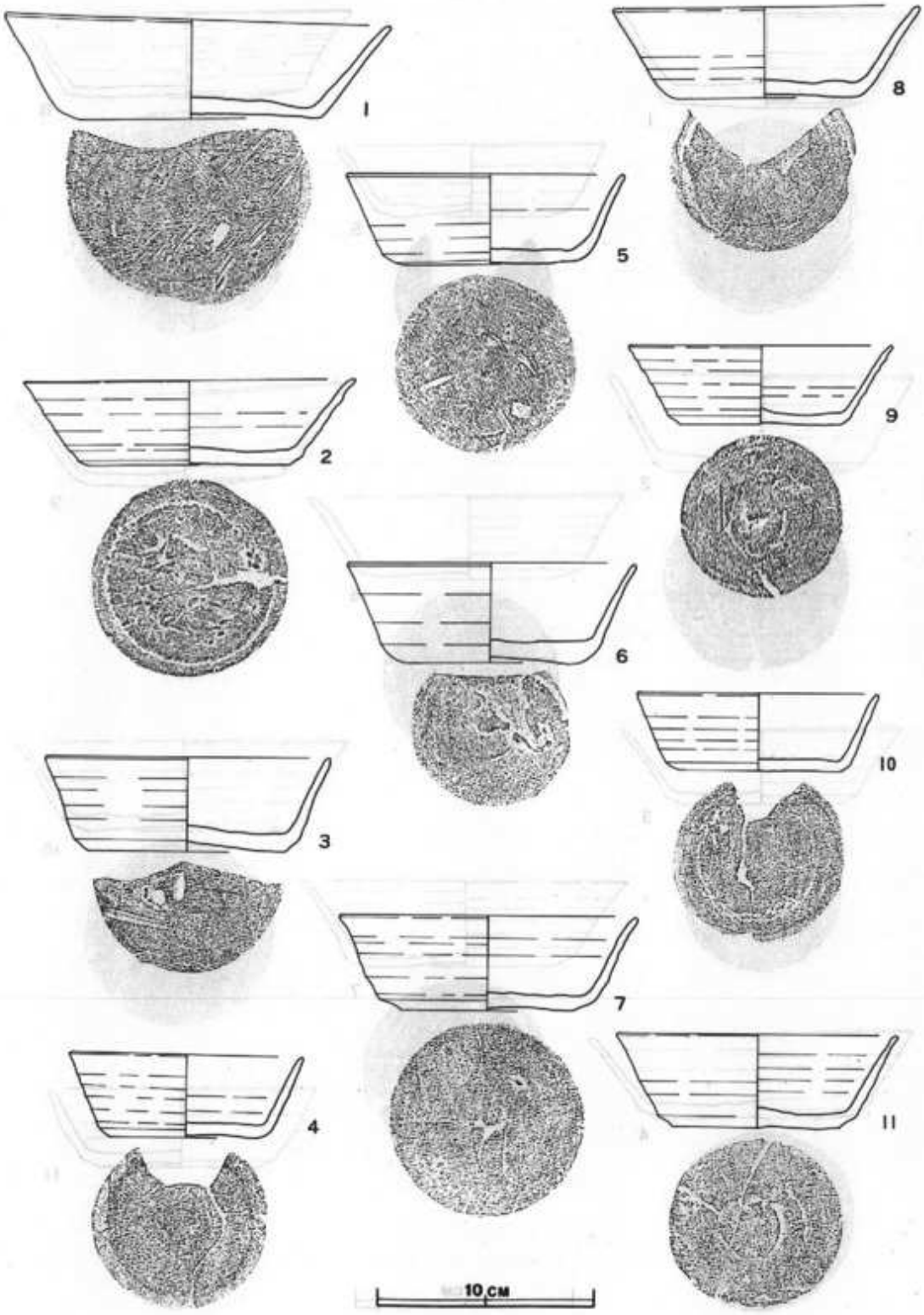
2は，紡錘車である。最終ベースから発見されたもので，52.6gを測る。中央よりも，外縁の方がやや器厚を増す。74－3に示した陶鈴は，Ⅰ次ベースから発見されたものである。窯跡のベースからの出土は，関東では初めての例である。



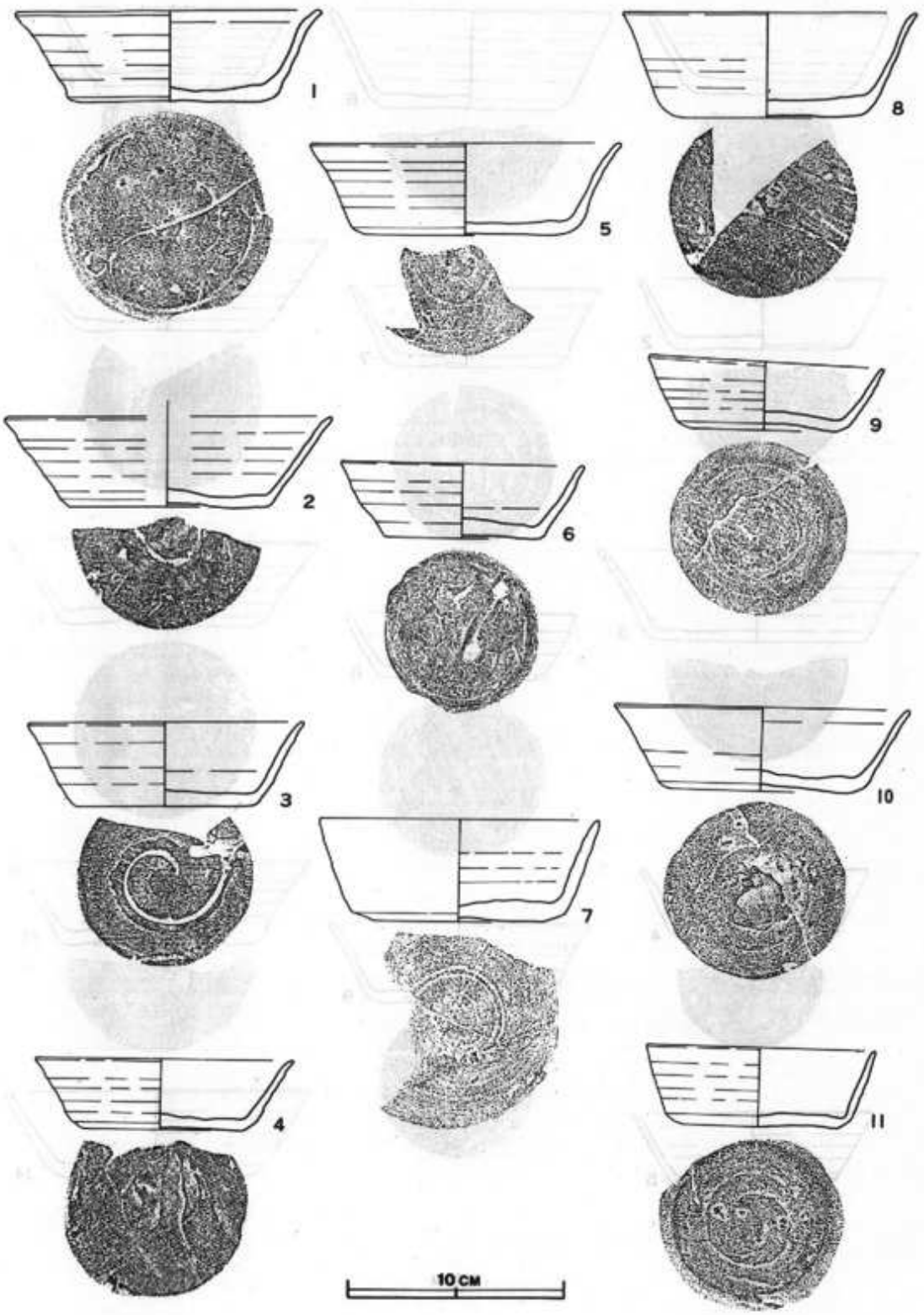
第61図　C５号窯跡出土遺物実測図(1)



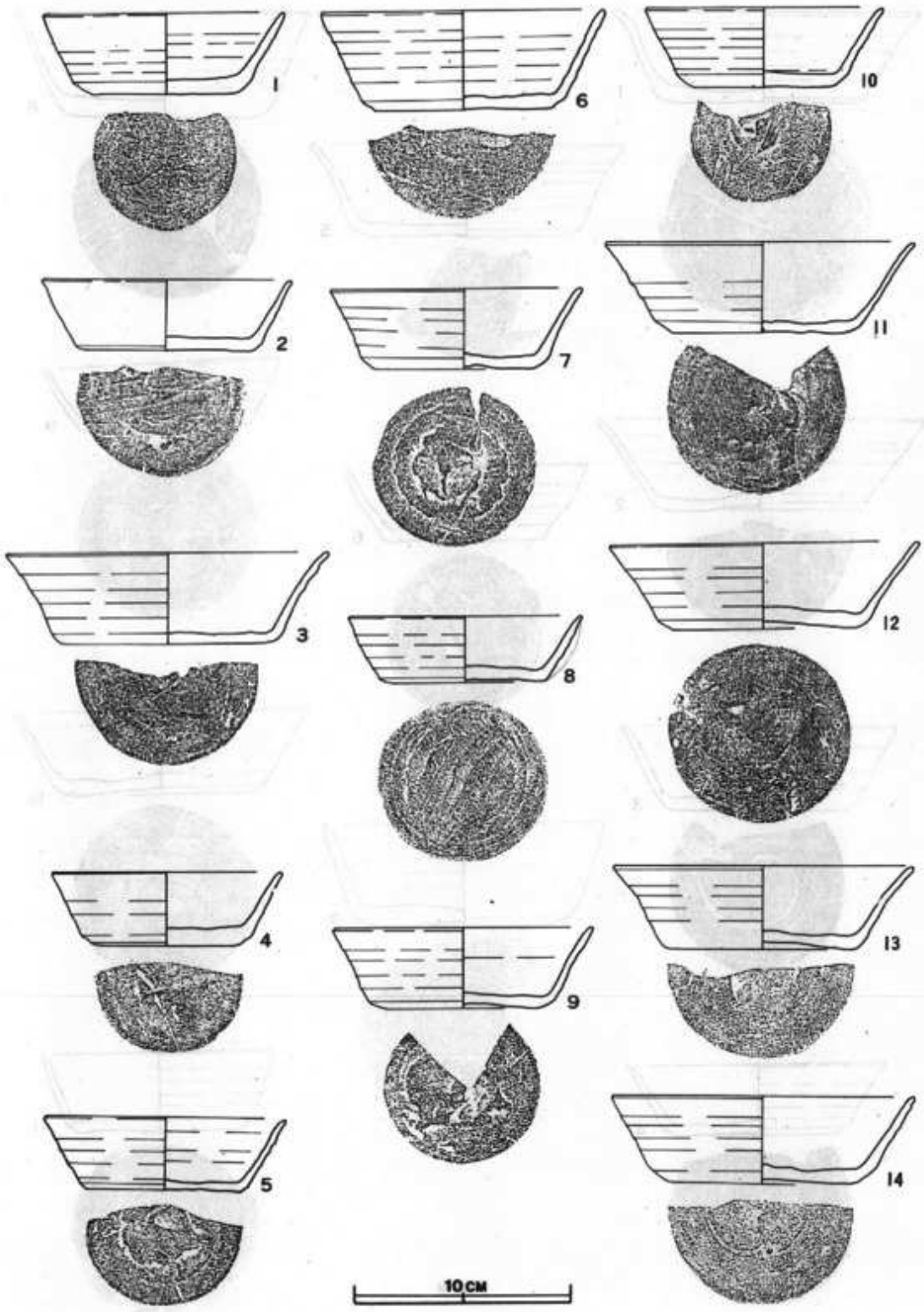
第62図　C５号窯跡出土遺物実測図(2)



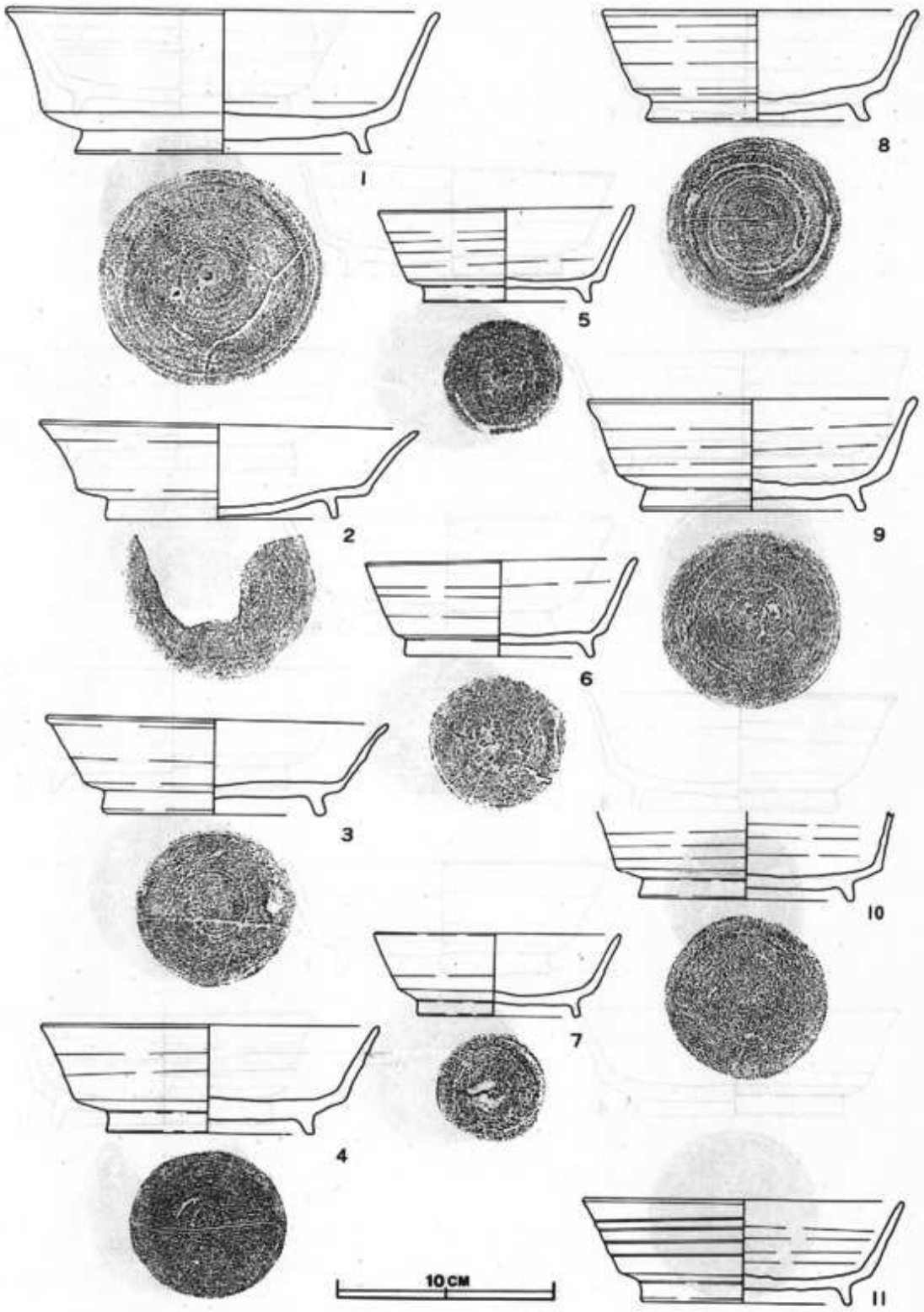
第63図　C５号窯跡出土遺物実測図(3)



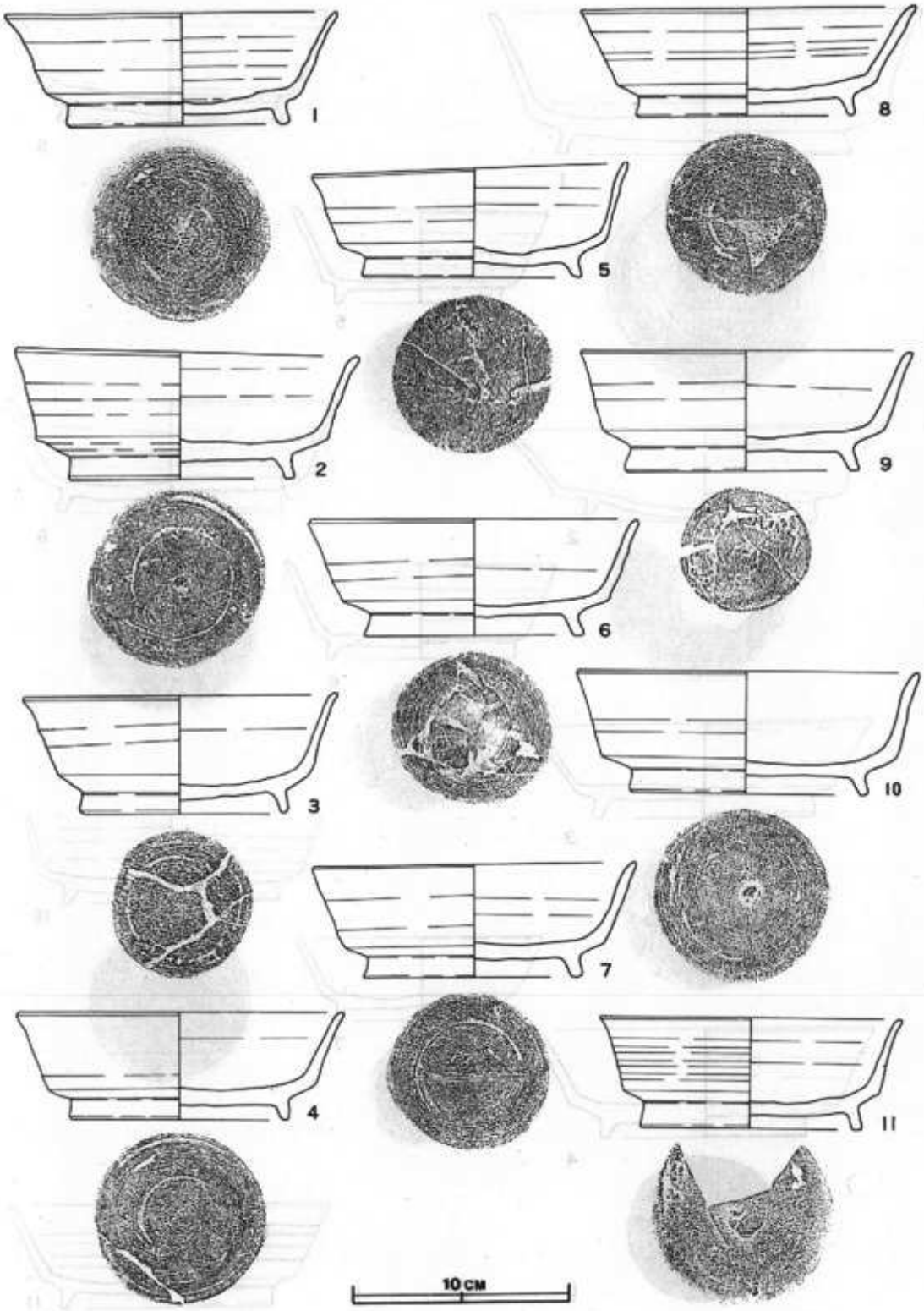
第64図　C５号窯跡出土遺物実測図(4)



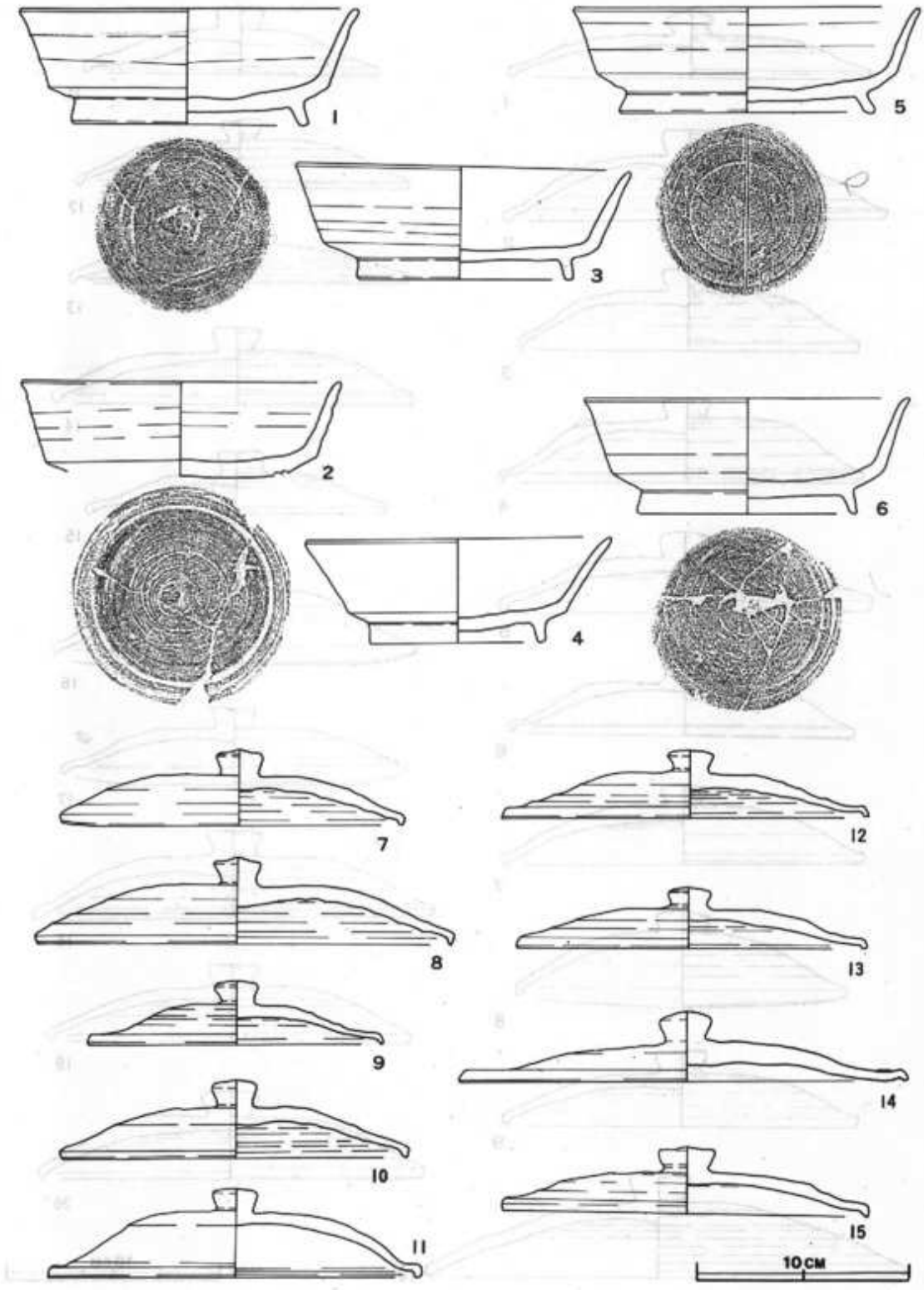
第65図　C 5 号竈跡出土遺物実測図(5)



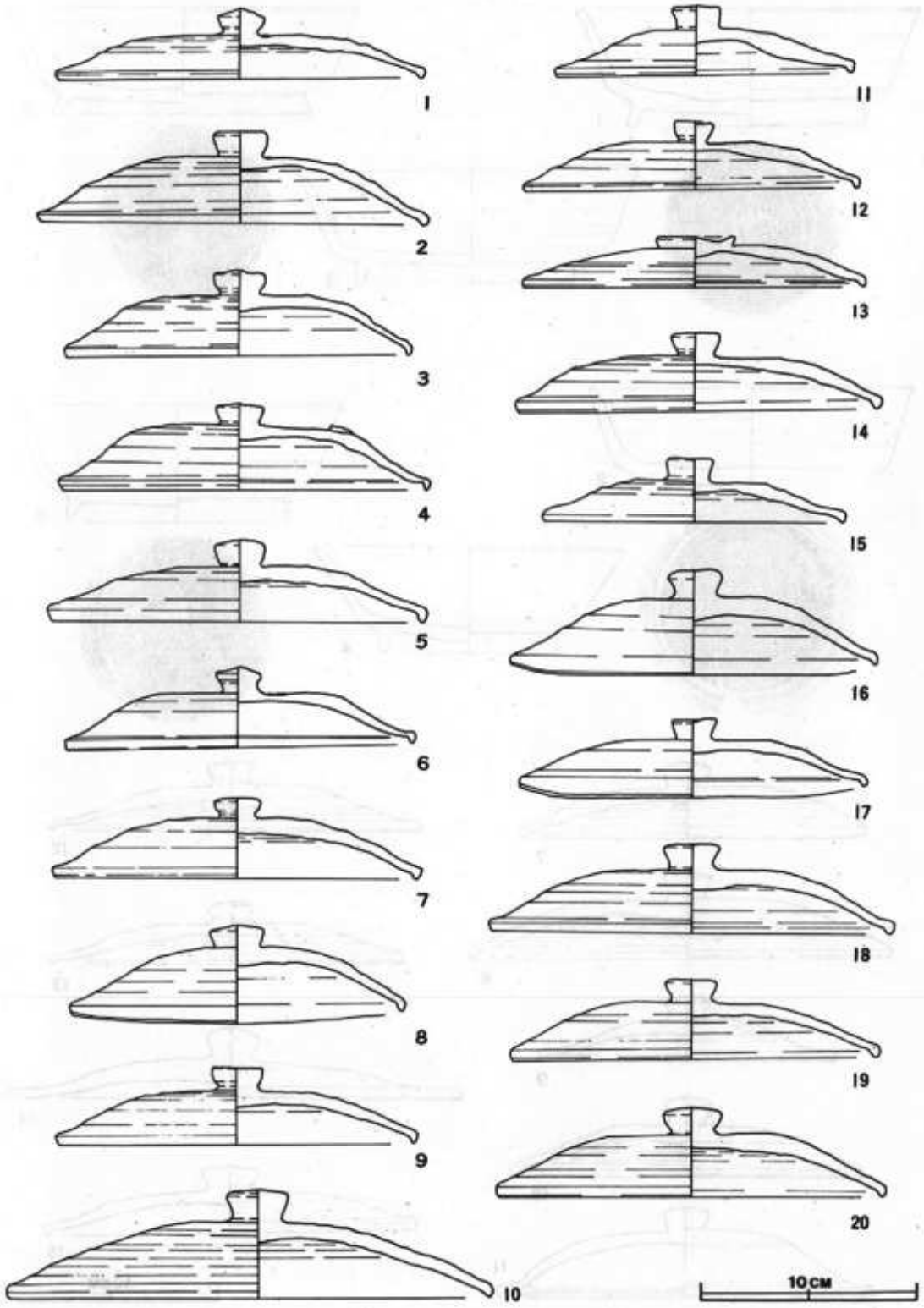
第66図　C５号窯跡出土遺物実測図(6)



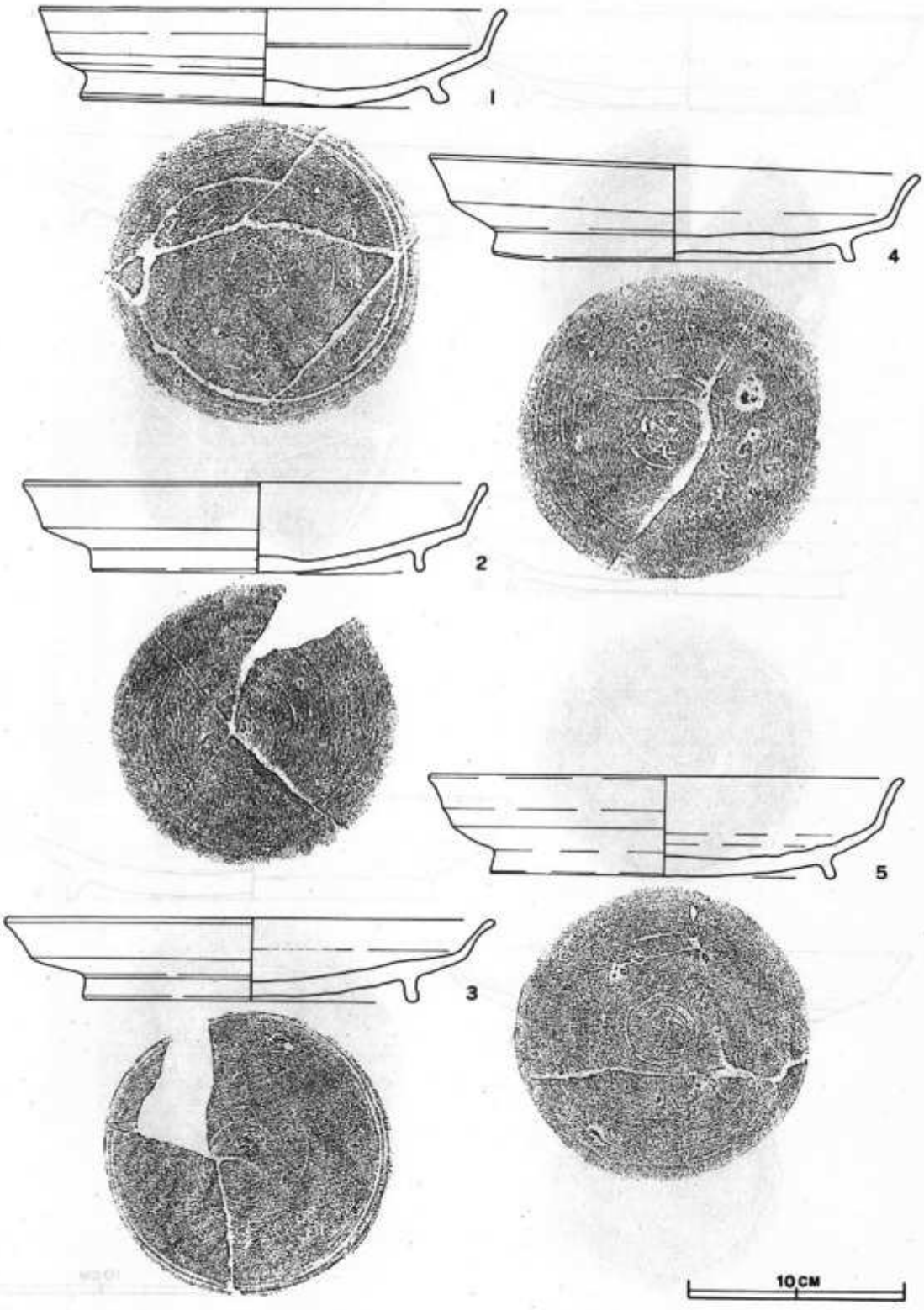
第67図　C５号窯跡出土遺物実測図(7)



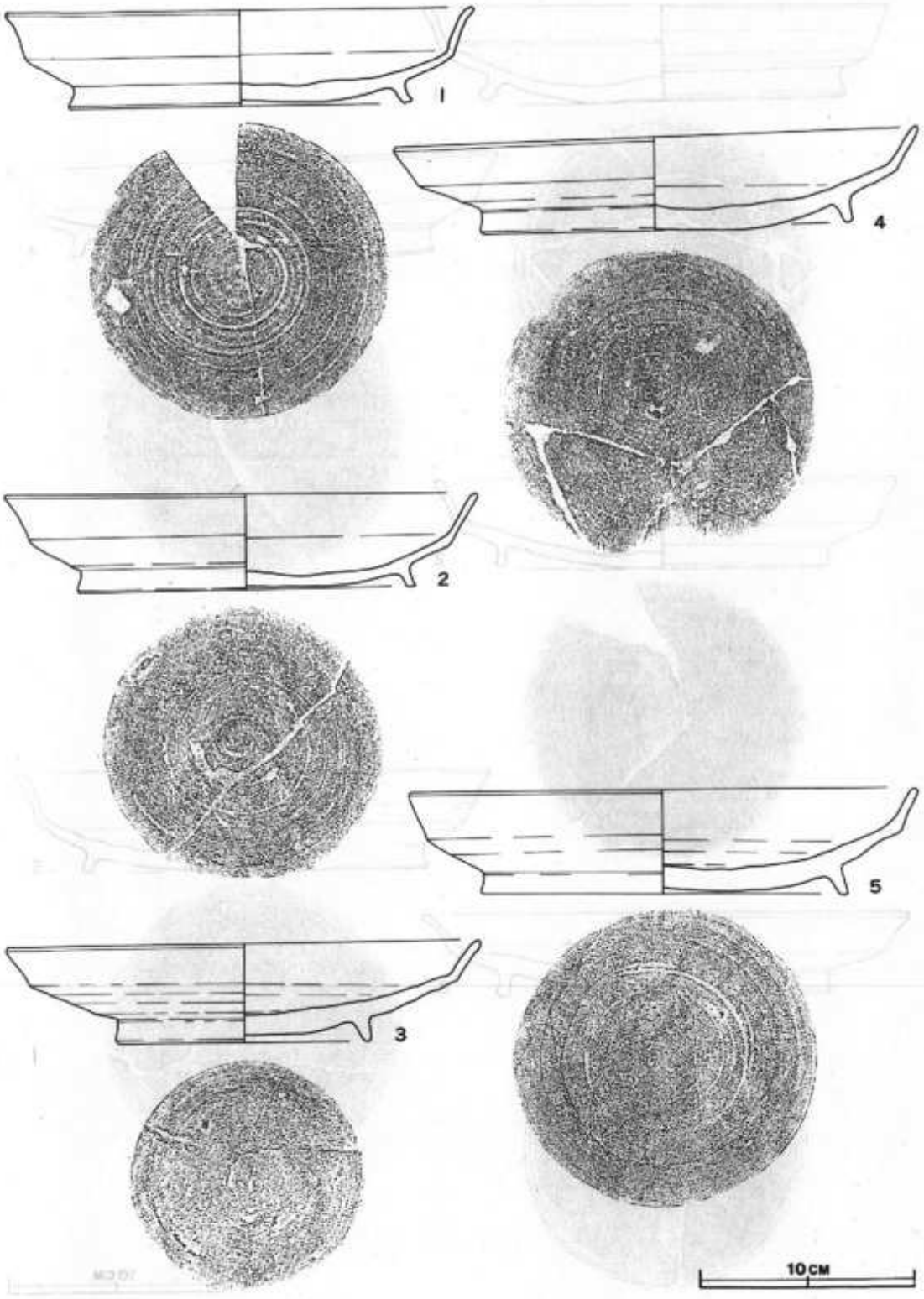
第68図　C５号窯跡出土遺物実測図(8)



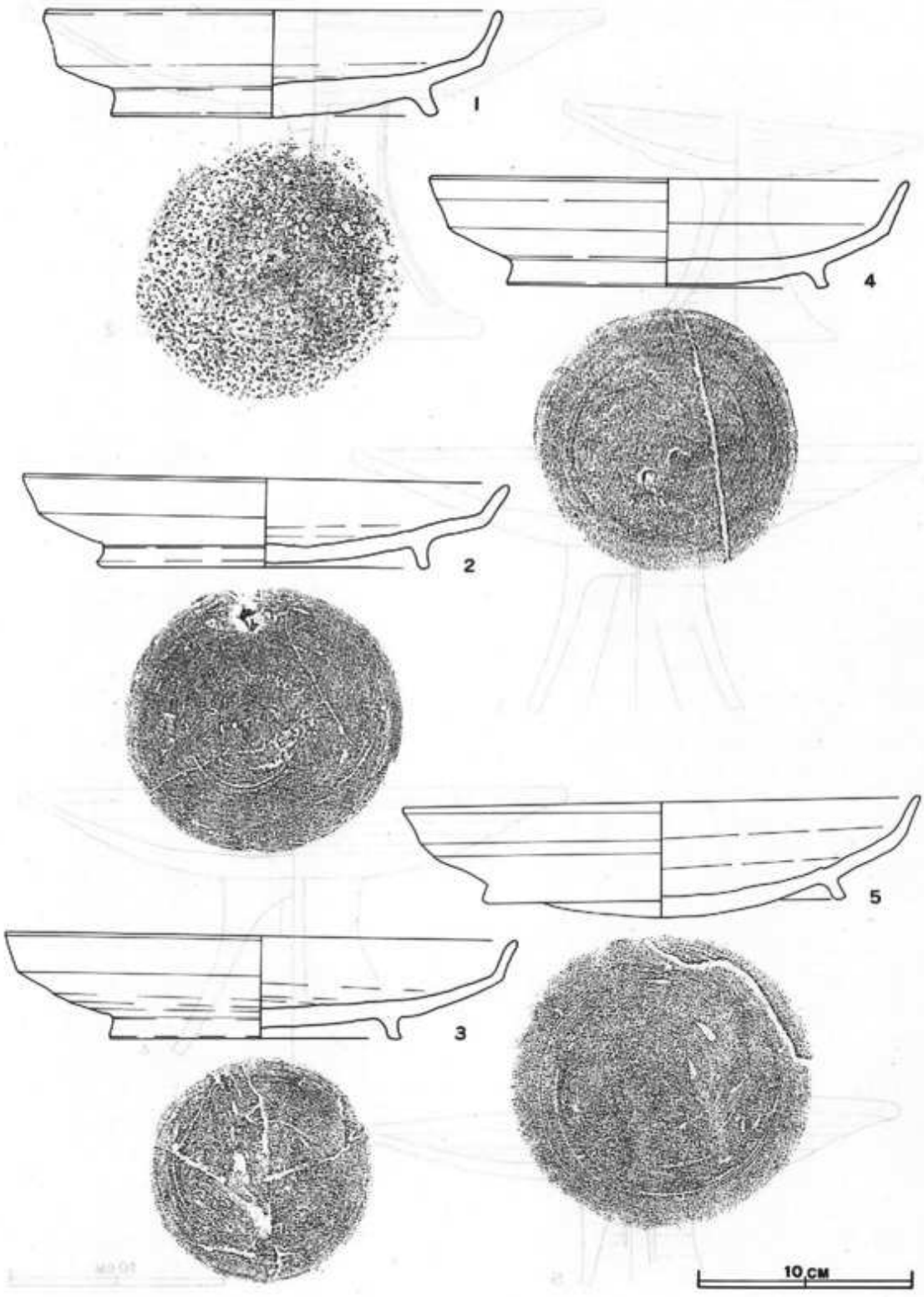
第69図　C５号竈跡出土遺物実測図(9)



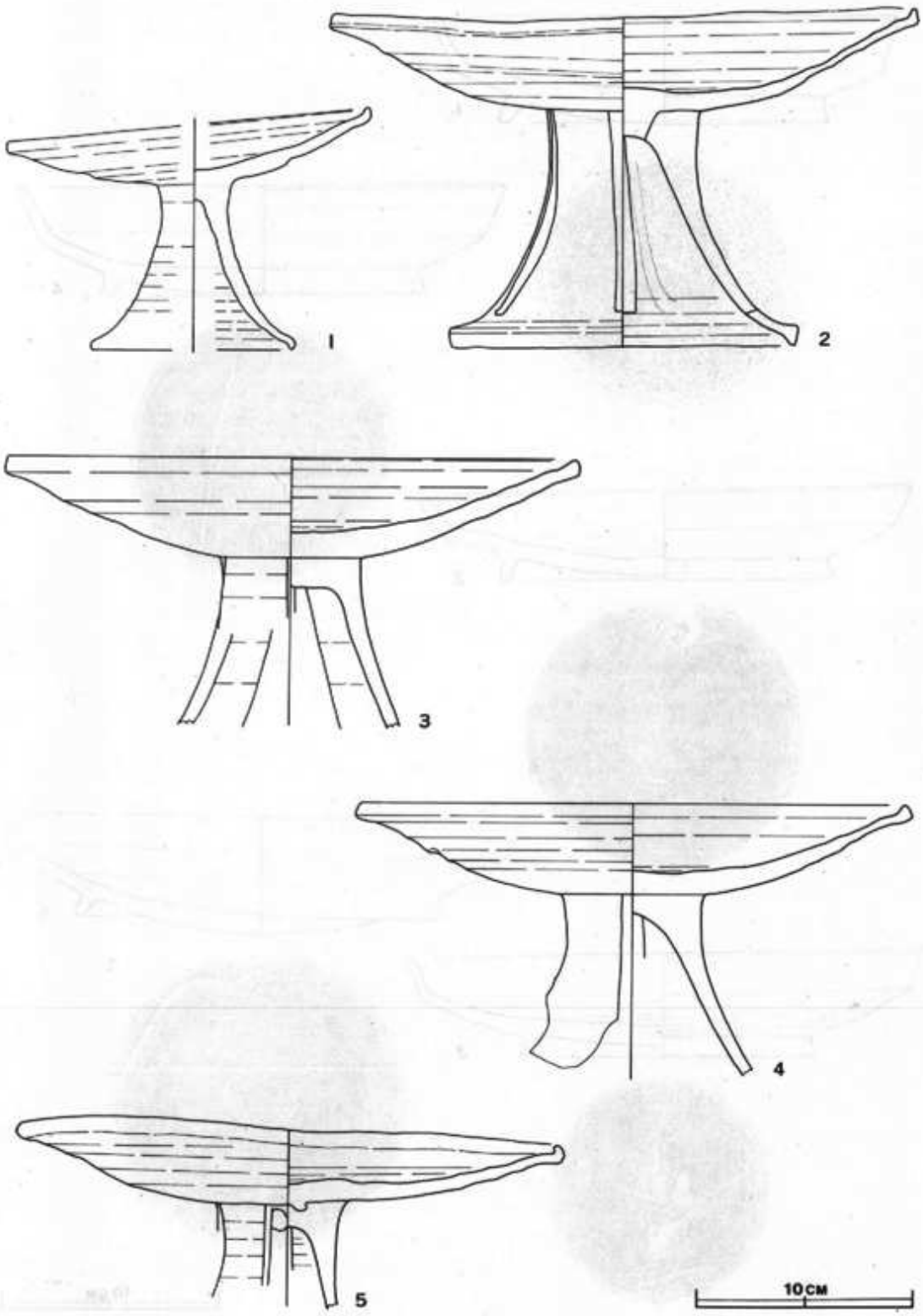
第70図　C５号竈跡出土遺物実測図(10)



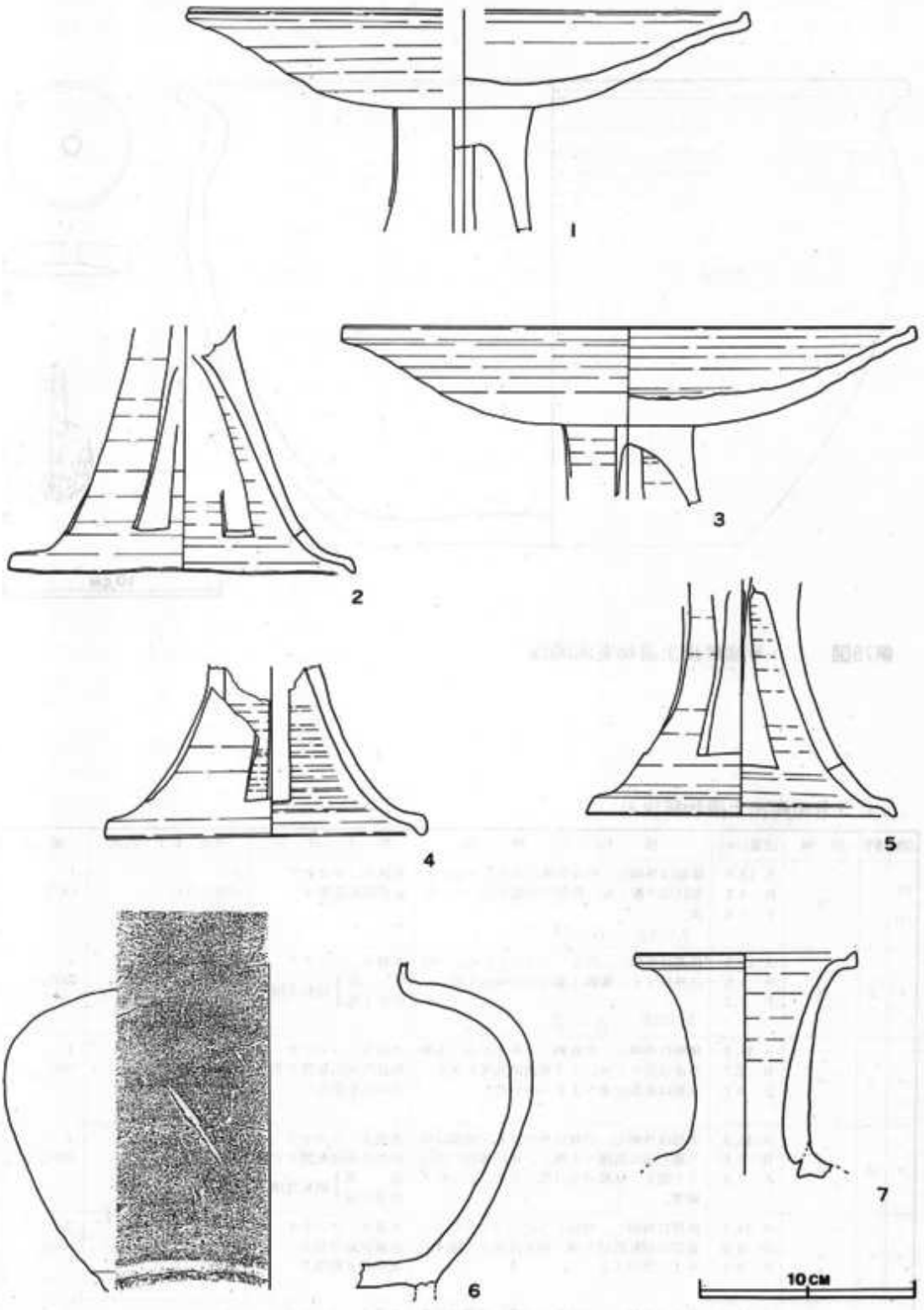
第71図　C５号窯跡出土遺物実測図(11)



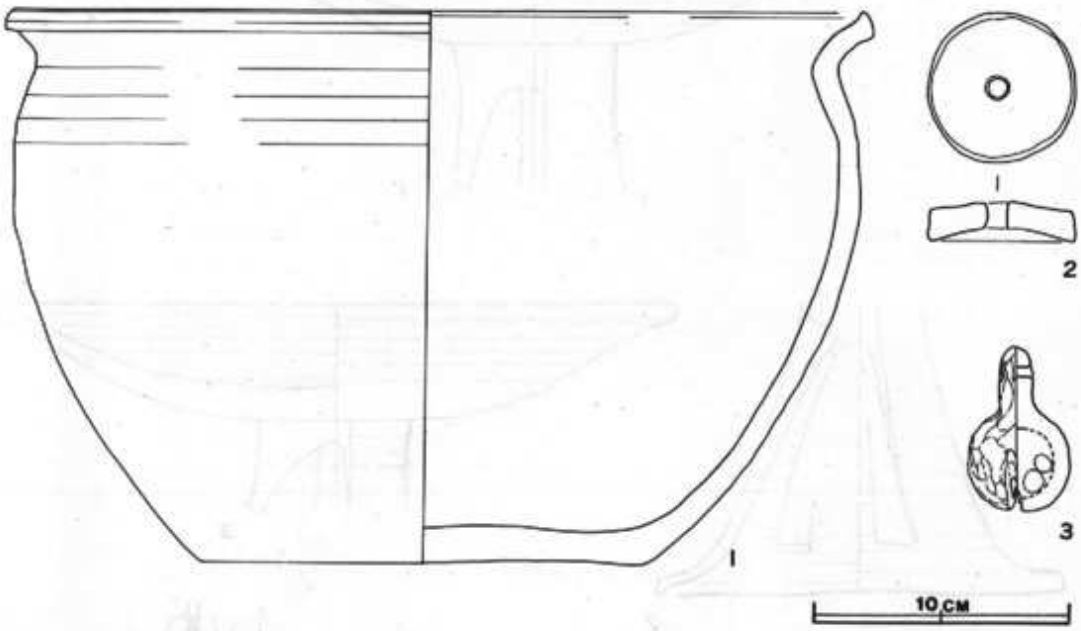
第72図　C５号窯跡出土遺物実測図(12)



第73図　Ｃ５号窯跡出土遺物実測図(13)



第74図　C５号窯跡出土遺物実測図(14)



第75図　C５号窯跡出土遺物実測図(15)

C５号窯跡出土遺物解説表

図版	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
61 (1)	1	坏	A 12.0 B 4.5 F 7.8	体部は外傾し，外反気味に立ち上がる。底部は切り離し面に箆削りが施され，やや突出。 h=38，b=65	水挽き，ヨコナデ 底部回転箆削り	良 砂礫を含む 灰色	I 100%
〃	2	〃	A 12.5 B 3.5 F 7.3	体部は外傾し，内反して立ち上がる。口縁は外反する。体部下端はやや突出する。 h=28　b=58	水挽き，ヨコナデ 底部，体部下端：回転箆削り	良 砂礫を含む 灰色	I 100%
〃	3	〃	A 11.8 B 3.7 F 7.7	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。体部外面は箆ナデBにより装飾的効果を出す。底部は亀裂が走り上方へゆがむ。	水挽き，ヨコナデ 体部外面回転箆ナデB 底部回転箆削り	良 砂礫を含む 灰色	I 100%
〃	4	〃	A 11.9 B 3.6 F 7.8	体部は外傾し，口縁は外反する。底部は切り離し面に箆削りを施し，更に周囲に箆削りを施す。体部外面は箆ナデBにより稜が顕著。	水挽き，ヨコナデ 体部外面回転箆ナデB 底部，体部下端：回転箆削り	良 砂礫を含む 灰色	I 100%
〃	5	〃	A 14.5 B 4.3 F 8.1	体部は外傾し，外反しながら立ち上がる。底部は回転箆切り後，静止箆削りを施すのみで，突出する。	水挽き，ヨコナデ 底部回転箆切り 底部静止箆削り	良 砂礫を含む 灰色	I 100%
〃	6	〃	A 11.9 B 3.8 F 6.7	体部は外傾し，やや外反する。体部外面下半は稜が顕著。底部はやや突出。箆記号あり。	水挽き，ヨコナデ 底部静止箆削り	良 砂礫を含む 灰色	I 97%

61 (1)	7	坏	A 14.4 B 4.0 F 9.5	体部は外傾し，口縁はやや外反する。外面体部下半は稜が顕著。内面底部に篦記号。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り	やや不良 砂礫を含む 灰色	I 95%
〃	8	〃	A 14.0 B 4.2 F 9.0	体部は外傾し口縁はやや外反。外面体部下半は稜が顕著である。外面に自然釉・付着物が多い。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 底部一部静止篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	I 焼台 85%
〃	9	〃	A 15.5 B 4.2 F 9.3	体部は外傾して立ち上がり口縁はやや外反する。 外面体部下半は稜が明瞭。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部静止篦削り	良 砂礫を含む 緑灰色	I 70%
〃	10	〃	A(14.0) B 4.7 F 7.4	体部はやや外傾し外反する。底部はやや突出する 外面は全体に自斑。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	I 70%
〃	11	〃	A(14.5) B 4.9 F 9.4	体部は外傾し，やや外反する。底部周囲がはみ出し二重に見える。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部ナデ	良好（二次焼成） 砂礫を含む 青灰色	I 焼台 60%
62 (2)	1	〃	A(14.0) B 4.4 F 8.8	体部は外傾し，口縁はやや外反，外面体部下半は稜が明瞭。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 青灰色	I 焼台 60%
〃	2	〃	A(14.0) B 4.7 F 8.7	体部は外傾し，やや外反気味に立ち上がる。体部外面下半は稜が顕著。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り	不良 砂礫を含む 緑灰色	I 55%
〃	3	〃	A(12.8) B 3.5 F 7.2	体部は外傾し，やや外反する。底部は切り離し面がやや突出。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	II 焼台 60%
〃	4	〃	A 15.0 B 4.1 F 8.5	体部は外傾し，口縁はやや外反気味。底部はやや突出。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色	II 焚口 95%
〃	5	〃	A 12.2 B 3.5 F 7.2	体部は外傾し，口縁はやや外反気味。体部外面下半は稜が明瞭であり底部はやや突出する。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部回転篦削り 底部一部静止篦削り	良 砂礫を含む 灰色	II 65%
〃	6	〃	A 14.5 B 3.9 F 8.0	体部は外傾し，やや外反。底部は切り離し面に篦削りを施し，やや突出。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色	II 焚口 100%
〃	7	〃	A 14.8 B 4.1 F 8.5	体部は外傾し，やや外反する。外面体部下半は稜が顕著。底部はやや突出。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	II 80%
〃	8	〃	A 15.4 B 3.9 F 10.7	体部は強く外傾し外反する。体部外面は稜が顕著である。底部は中央付近に篦切り痕を残す。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	II 100%
〃	9	〃	A 14.8 B 4.8 F 8.5	体部は外傾し，やや外反する。外面体部下半は稜が明瞭。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色	II 焚口 90%
〃	10	〃	A 15.1 B 4.2 F 8.8	体部は外傾し，口縁は外反する。外面体部下半の稜は明瞭である。底部はやや突出。	水挽き，ヨコナデ 底部静止篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	II 70%
〃	11	〃	A(12.1) B 3.7 F 7.4	体部は外傾し，やや内反気味。口縁は外反。体部中央が外方へふくらむ。底部はやや突出。篦記号あり。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	II 焚口 焼台(?) 55%

63 (3)	1	坏	A(17.7) B 4.9 F 12.0	体部は外傾しやや外反気味。外面体部自然釉。内面付着物。底部箆記号あり。	水挽き，ヨコナデ 底部静止箆削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰白色	II 焼台(？) 60%
〃	2	〃	A 15.1 B 4.0 F 9.3	体部は外傾し口縁はやや外反。内面全体及び体部外面上半は，ヨコナデにより稜が消え，体部外面下半はかなり明瞭に稜が残る。	水挽き，ヨコナデ 底部回転箆切り 底部一部静止箆削り	不良 砂礫を含む 灰白色	III 70%
〃	3	〃	A(13.0) B 3.4 F (9.2)	体部は外傾し，口縁はやや外反。	水挽き，ヨコナデ 底部回転箆切り 底部静止箆削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 暗灰色	III 焼台 50%
〃	4	〃	A 10.6 B 4.0 F 6.8	体部はやや外傾し直線的に立ち上がる。外面体部下半は稜が明瞭。	水挽き，ヨコナデ 底部回転箆切り 底部一部ヨコナデ 底部外周ナデ	不良 砂礫を含む 灰白色	III 70%
〃	5	〃	A 12.8 B 4.3 F 8.7	体部は外傾し，口縁はやや外反する。	水挽き，ヨコナデ 底部回転箆切り 底部静止箆削り	不良 砂礫を含む 灰白色	IV 60%
〃	6	〃	A 13.3 B 4.7 F 8.5	体部は外傾し，口縁はやや外反気味。	水挽き，ヨコナデ 底部回転箆切り 底部静止箆削り	不良 砂礫を含む 灰白色	IV 60%
〃	7	〃	A(13.6) B 4.5 F 8.0	体部は外傾し，口縁はやや外反。底部はやや突出。	水挽き，ヨコナデ 底部回転箆切り	不良 砂礫を含む 灰白色	IV 60%
〃	8	〃	A 13.9 B 4.2 F 8.4	体部は外傾し，口縁はやや外反。	水挽き，ヨコナデ 底部回転箆切り 底部静止箆削り	不良 砂礫を含む 灰白色	IV 55%
〃	9	〃	A(12.0) B 3.7 F 7.5	体部は外傾し，口縁はやや外反。体部外面下半は稜が顕著。	水挽き，ヨコナデ 底部回転箆切り 底部一部静止箆削り	不良 砂礫を含む 灰白色	IV 55%
〃	10	〃	A(11.0) B 3.7 F 7.4	体部は外傾し直線的に立ち上がる。体部外面下半は稜が明瞭。	水挽き，ヨコナデ 底部回転箆切り 底部一部静止箆削り	不良 砂礫を含む 灰白色	IV 50%
〃	11	〃	A 12.8 B 4.4 F 7.7	体部は外傾し，口縁はやや外反。底部は回転切り離しのままで，切り離し面はやや突出。	水挽き，ヨコナデ 底部回転箆切り	不良 砂礫を含む 灰白色	IV 50%
64 (4)	1	〃	A 14.0 B 4.3 F 9.6	体部は外傾し，口縁は外反する。体部外面は稜が顕著。	水挽き，ヨコナデ 底部回転箆切り	良 砂礫を含む 灰色	IV 80%
〃	2	〃	A(15.0) B 4.3 F 9.2	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。体部外面下半は稜が顕著。	水挽き，ヨコナデ 底部静止箆削り	不良 砂礫を含む 灰白色	IV 45%
〃	3	〃	A(12.6) B 4.0 F 8.2	体部は外傾し，口縁はやや外反する。体部と底部の境界が明瞭。	水挽き，ヨコナデ 底部回転箆切り	不良 砂礫を含む 灰白色	IV 50%
〃	4	〃	A(11.8) B 3.4 F 7.5	体部は外傾し，口縁はやや外反。体部下端は稜が明瞭。	水挽き，ヨコナデ 底部回転箆切り	不良 砂礫を含む 灰白色	IV 50%
〃	5	〃	A 14.2 B 4.3 F (9.4)	体部は外傾し，外面は自然釉が見られ稜が顕著。	水挽き，ヨコナデ 底部回転箆切り	良 砂礫を含む 灰白色	IV 50%

64 (4)	6	坏	A 11.1 B 3.5 F 7.3	体部は外傾し，やや内反気味。口縁はやや外反。体部中央がややふくらむ。底部はやや突出気味である。	水挽き，ヨコナデ 底部ヨコナデ 一部静止篦削り	不良 砂礫を含む オリーブ灰色	V 75%
〃	7	〃	A 13.0 B 4.7 F 7.9	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。内面底部中央は水挽きの際の回みが3重の渦巻状に残る。底部篦記号。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 外 オリーブ黒色 内 浅黄色	V 65%
〃	8	〃	A(13.5) B 4.9 F 8.6	体部は外傾し口縁はやや外反。磨滅。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 底部一部静止篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	V 50%
〃	9	〃	A 10.7 B 3.5 F 6.5	体部は外傾し直線的に立ち上がる。底部は切り離し痕が明瞭。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	やや不良 砂礫を含む 灰色	焚口南壁 95%
〃	10	〃	A 13.7 B 4.0 F 8.5	体部は外傾し，口縁は外反，体部外面下半は稜が明瞭。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰白色	焚口南壁 北壁 90%
〃	11	〃	A(10.4) B 3.7 F 7.2	体部はやや外傾し直線的に立ち上がる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り	良 砂礫を含む 灰白色	焚口南壁 60%
65 (5)	1	〃	A 11.0 B 3.8 F 5.7	体部は外傾する。体部外面下半は，稜が明瞭である。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部一部静止篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	焚口南壁 60%
〃	2	〃	A 11.4 B 3.3 F 8.0	体部は外傾し，やや内反する。口縁は外反気味。底部周囲は篦切りの際にはみ出した粘土が体部下端との間に1条の凹線を形成し二重底部に見える。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部静止篦削り	良 砂礫を含む 灰色	焚口南壁 50%
〃	3	〃	A 15.0 B 4.3 F 9.6	体部は外傾し，外反しながら立ち上がる。体部外面は稜が顕著。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り	良 砂礫を含む 暗緑灰色	焚口南壁 50%
〃	4	〃	A(10.6) B 3.5 F 7.0	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。底部は切り離しの際にはみ出した粘土により二重底部に見える。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部静止篦削り	不良 砂礫を含む 明緑灰色	焚口南壁 50%
〃	5	〃	A(10.9) B 3.4 F 7.2	体部は外傾し，口縁は外反気味。体部外面下半は稜が顕著。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部静止篦削り	やや不良 砂礫を含む 灰白色	焚口南壁 50%
〃	6	〃	A(13.0) B 4.6 F (8.2)	体部は外傾し，直線的に立ち上がる。底部はやや突出気味。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部一部静止篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	焚口南壁 50%
〃	7	〃	A 11.6 B 3.8 F 8.5	体部は外傾し，やや外反気味。体部下半は稜が顕著。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部一部静止篦削り	良 砂礫を含む 青灰色	焚口南壁 75%
〃	8	〃	A 10.2 B 3.1 F 7.4	体部は外傾し，やや内反する。口縁は外反。外面体部下半は稜が明瞭。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部静止篦削り	良 砂礫を含む 灰色	焚口南壁 70%
〃	9	〃	A(11.8) B 3.8 F 7.2	体部は外傾し，やや外反する。体部下半は稜が顕著。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り	不良 砂礫を含む 灰白色	焚口南壁 65%
〃	10	〃	A(10.7) B 3.7 F (6.5)	体部は外傾し，やや外反して立ち上がる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部静止篦削り	やや不良 砂礫を含む 明オリーブ灰色	焚口南壁 60%

65 (5)	11	坏	A 14.3 B 4.2 F 8.4	体部は外傾し，外反気味に立ち上がる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部静止篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	焚口北壁 60%
〃	12	〃	A(14.3) B 4.0 F 8.2	体部は外傾し，やや外反する。全体に磨滅。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部一部静止篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	焚口北壁 60%
〃	13	〃	A(13.8) B 3.9 F 8.6	体部は外傾し，外反する。底部はやや上げ底風。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部静止篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	焚口北壁 50%
〃	14	〃	A(14.0) B 4.1 F 8.8	体部は外傾し直線的に立ち上がる。口縁は外反気味。体部外面は稜が顕著。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部一部静止篦削り	やや不良 砂礫を含む 緑灰色	焚口北壁 50%
66 (6)	1	高台付坏	A(20.0) B 6.8 E 13.6	体部は外傾し，口縁は外反。高台は外方へ開き，先端が外へ突出する。高台内底部はやや下がる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	良好（二次焼成） 砂礫を含む 青灰色	I 焼台 70%
〃	2	〃	A 17.6 B 4.7 E 10.8	体部は外傾し，外反する。高台はやや外方へ開き，先端が丸味をおびる。高台内底部はやや下がる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	I 焼台 65%
〃	3	〃	A 15.8 B 4.6 E 10.3	体部は外傾し口縁は外反する。高台は外方へ開き先端が丸味をもって外方へ突出。篦記号あり。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	II 焼台 70%
〃	4	〃	A 15.7 B 5.1 E 9.6	体部は外傾し，口縁はやや外反する。高台はやや外方へ開く。篦記号あり。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	不良 砂礫を含む 外 にぶい黄褐色 内 にぶい黄色	V 95%
〃	5	〃	A 11.9 B 4.3 E 7.7	体部は外傾し直線的に立ち上がる。高台内底部はほぼ水平である。高台はやや外方へ開き先端は外方へ突出。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部回転篦削り 高台接合	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	V 焼台 70%
〃	6	〃	A 12.5 B 4.6 E 8.7	体部は外傾し直線的に立ち上がる。高台は外方へ開き，高台内底部はほぼ水平。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	不良 砂礫を含む 黄灰色	V 65%
〃	7	〃	A 11.3 B 4.0 E 7.5	体部は外傾し直線的に立ち上がる。高台内底部は水平に近い。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部回転篦削り 高台接合	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	V 焼台 98%
〃	8	〃	A 14.4 B 5.1 E 10.4	体部は外傾し口縁はやや外反する。高台内底部はやや下がり，高台は外方へ開く。篦記号あり。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	不良 砂礫を含む 灰白色	V 90%
〃	9	〃	A 15.2 B 5.2 E 10.3	体部は外傾し，口縁は外反する。高台は外方に開く。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	不良 砂礫を含む 灰色	V 50%
〃	10	〃	E 10.0 J 4.2	高台はやや外方へ開き，先端が丸く厚味を減ずる。体部は直線的に立ち上がる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	不良 砂礫を含む 灰白色	V 50%
〃	11	〃	A 14.8 B 4.8 E 9.7	体部は外傾し口縁はやや外反する。体部外面は，篦ナデBにより数段の筋が認められる。高台はやや外方へ開く。	水挽き，ヨコナデ 体部回転篦ナデB 底部回転篦削り 高台接合	不良 砂礫を含む 黄灰色	V 75%
67 (7)	1	〃	A 15.4 B 5.3 E 10.3	体部は外傾し口縁は外反する。高台内底部はやや下がり，高台はやや外方へ開く。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	良 砂礫を含む 灰色	V 80%

67 (7)	2	高台付坏	A 16.0 B 5.9 E 10.5	体部は外傾し，口縁は外反する。体部下端はやや突出。高台内底部はほぼ水平であり高台はやや外方に開く。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	不良 砂礫を含む 灰色	V 75%
〃	3	〃	A 14.7 B 5.1 E 9.3	体部は外傾し，口縁はやや外反。高台はやや外方へ開く。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	不良 砂礫を含む 外 黄褐色 内 暗灰黄色	V 75%
〃	4	〃	A 15.2 B 5.1 E 10.2	体部は外傾し口縁はやや外反。高台はやや外方へ開く。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	不良 砂礫を含む 外 灰色 内 灰オリーブ色	V 75%
〃	5	〃	A 14.6 B 5.1 E 10.1	体部はやや外傾し，口縁は外反する。高台は外方へ開く。篦記号あり。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	良 砂礫を含む 灰色	V 75%
〃	6	〃	A 15.2 B 5.5 E 10.0	体部は外傾し，口縁はやや外反する。高台内底部はほぼ水平であり高台は外方へ開く。篦記号あり。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	不良 砂礫を含む 外 にぶい黄橙色 内 浅黄色	V 75%
〃	7	〃	A 14.9 B 5.4 E 10.0	体部は外傾し，口縁は外反。高台はやや外方へ開く。高台内底部はほぼ水平。底部篦記号あり。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	不良 砂礫を含む 灰白色	V 75%
〃	8	〃	A(15.6) B 5.1 E 10.0	体部は外傾し，口縁はやや外反気味。高台はやや外方へ開く。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	不良 砂礫を含む 外 黄灰色 内 灰白色	V 65%
〃	9	〃	A 15.3 B 5.7 E 10.7	体部は外傾し，口縁はやや外反する。高台内底部はほぼ水平。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部回転篦削り 底部一部ヨコナデ 高台接合	不良 砂礫を含む 外 灰白色 内 黄灰色	V 65%
〃	10	〃	A(15.8) B 5.7 E 10.9	体部はやや外傾し外反する。高台内底部はほぼ水平で，中央に切り離しの際の痕が小さく残る。高台はやや外方へ開く。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	不良 砂礫を含む 灰白色	V 60%
〃	11	〃	A(14.1) B 5.2 E 10.2	体部は外傾し，外反する。高台はやや外方へ開く。底部篦記号あり。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	不良 砂礫を含む 外 明黄褐色 内 浅黄色	V 60%
68 (8)	1	〃	A 15.9 B 5.6 E 10.5	体部は外傾し口縁は外反，高台接合部は内外ともやや凹む。高台は外方へ開く。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	不良 砂礫を含む 灰白色	V 97%
〃	2	〃	A 15.1 J 4.5	体部は外傾し，口縁はやや外反する。高台を欠くが接合部の径は10.4cmを測る。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	不良 砂礫を含む 灰色を基調とする	V 95%
〃	3	〃	A 15.7 B 5.5 E 9.9	体部は外傾し，口縁はやや外反。高台はほとんど直立する。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	不良 砂礫を含む 灰白色を基調とする	V 60%
〃	4	〃	A(14.3) B 4.9 E 8.1	体部は外傾し直線的に立ち上がる。高台は，ほぼ直立。底部篦記号あり。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	不良 砂礫を含む 灰褐色	V 50%
〃	5	〃	A(16.5) B 5.0 E 11.9	体部は外傾し，口縁はやや外反する。高台は外方へ開く。底部篦記号あり。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	不良 砂礫を含む 灰白色	V 60%
〃	6	〃	A 15.3 B 5.5 E(10.2)	体部は外傾し，口縁は外反する。高台内底部はほぼ水平であり，高台は外方へ開く。底部篦記号。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰黄褐色	V 50%

68 (8)	7	蓋	A 16.9 B 3.6 H 2.2 I 1.3	つまみはc i類。天井は篦削り部が広く，なだらかに口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰色	I 100%
〃	8	〃	A 14.5 B 4.05 H 2.1 I 1.2	つまみはc i類。天井が高く円錐台様の形態である。口径に比してつまみが小さい。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰色	I 90%
〃	9	〃	A 13.9 B 3.0 H 2.1 I 1.1	つまみはc ii類。つまみ接合部が凹む。天井は高く，丸味をもって口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰白色	I 焼白(？) 70%
〃	10	〃	A 16.1 B 3.7 H 2.1 I 1.2	つまみはc ii類。天井はやや高く，なだらかに口縁へ下がる。端折外面に篦ナデB	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り 端折部回転篦ナデB	不良 砂礫を含む 灰色	I 60%
〃	11	〃	A 17.4 B 4.2 H 2.1 I 0.9	つまみはc ii類。天井が高く，大きな傾斜で口縁へ下がる。端折内側は篦ナデB	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り 端折内側回転篦ナデB	良 砂礫を含む オリーブ黒色	II 95%
〃	12	〃	A 17.2 B 3.2 H 2.1 I 0.9	つまみはc ii類。天井はやや高く丸味をもって口縁へ下がる。口縁はやや起き上がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰色	II 90%
〃	13	〃	A 16.5 B 2.9 H 2.1 I 0.9	つまみはc ii類。篦削り部が広い。天井が低く傾斜もなだらかである。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰白色	II 65%
〃	14	〃	A(21.0) B 3.3 H 2.3 I 1.4	つまみはc i類。全体に扁平で口縁はゆがみのため起き上っている。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰色	II 50%
〃	15	〃	A(17.0) B 3.1 H 2.5 I 1.2	つまみはc i類。天井篦削り部と水挽き部の境界は段を成す。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	V 50%
69 (9)	1	〃	A(16.8) B 3.3 H 2.2 I 1.3	つまみはc i類。天井篦削り部（ナデが施される）と水挽き部の境界は段を成す。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り 後ヨコナデ	不良 砂礫を含む 淡黄色	V 60%
〃	2	〃	A(18.0) B 4.2 H 2.5 I 1.0	つまみはc ii類。天井が高く丸味をもって口縁へ下がる。つまみ接合部はやや凹む。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 黄灰色	V 60%
〃	3	〃	A 16.0 B 4.0 H 2.3 I 1.2	つまみはc ii類。天井が高く，大きく傾斜して口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む にぶい黄橙色	V 60%
〃	4	〃	A 16.9 B 4.3 H 2.2 I 1.1	つまみはc i類。天井部が極めて高く，大きな傾斜で口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 黄灰色	V 60%
〃	5	〃	A(18.3) B 3.8 H 2.3 I 1.3	つまみはc ii類。天井が高く，なだらかに口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り 後ヨコナデ	不良 砂礫を含む 灰白色	V 50%
〃	6	〃	A 16.0 B 3.8 H 2.1 I 1.3	つまみはc i類。天井が高く，つまみ接合部周囲が凹み大きな傾斜で口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 青灰色	V 70%
〃	7	〃	A(16.9) B 3.7 H 2.2 I 0.9	つまみはc ii類。天井がやや高く，丸味をもって口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む にぶい黄橙色	V 70%

69 (9)	8	蓋	A(15.3) B 4.6 H 2.5 I 1.1	つまみはc i類。天井が高く丸味をもって口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰色	V 65%
〃	9	〃	A(16.7) B 3.6 H 2.4 I 1.1	つまみはc ii類。天井はやや高めでなだらかに口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り 後ヨコナデ	不良 砂礫を含む 灰黄色	V 65%
〃	10	〃	A(22.6) B 5.1 H 2.7 I 1.6	つまみはc i類。天井が高くなだらかに口縁へ下がる。大型。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	V 65%
〃	11	〃	A 13.7 B 3.2 H 2.1 I 1.1	つまみはc ii類。天井篦削り部は平坦で口縁との間に段を成す。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 浅黄橙色	V 85%
〃	12	〃	A 15.4 B 3.2 H 1.8 I 1.1	つまみはc iii類。天井から丸味をもって口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 黄灰色	V 80%
〃	13	〃	A 15.5 B 2.3 H 3.6 I 0.6	つまみはb ii類。全体に扁平である。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	V 75%
〃	14	〃	A 16.6 B 3.7 H 2.1 I 1.2	つまみはc ii類。天井は高く平坦。丸味をもって口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 灰白色	V 75%
〃	15	〃	A 13.8 B 3.0 H 2.1 I 1.2	つまみはc iii類。天井から丸味をもって口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 褐灰色	V 75%
〃	16	〃	A(18.9) B 4.9 H 2.5 I 1.4	つまみはc ii類。天井は高く，大きな傾斜で口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰オリーブ色	焚口 80%
〃	17	〃	A 16.0 B 3.7 H 2.1 I 1.0	つまみはc iii類。つまみ接合部は接合時の整形によりやや凹む。天井は高い。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 灰色	焚口 70%
〃	18	〃	A(18.4) B 4.1 H 2.6 I 1.2	つまみはc ii類。天井が高く丸味をもって口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	やや不良 砂礫を含む 明緑灰色	焚口 70%
〃	19	〃	A(16.7) B 3.7 H 2.3 I 1.1	つまみはc ii類。天井は高くなだらかに口縁へ下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	良 砂礫を含む 青灰色	焚口 55%
〃	20	〃	A(17.8) B 4.2 H 2.8 I 1.2	つまみはc ii類。天井が高く口縁へなだらかに下がる。	水挽き，ヨコナデ 天井部回転篦削り	不良 砂礫を含む 外 灰白色 内 淡黄色	焚口 55%
70 (10)	1	壺	A 21.5 B 4.6 E 16.9	体部はやや外傾し外反する。内面体部下端には篦ナデBが施され，折目が強調される。高台は外方へ開く。底部は大きく下がり，中央は扁平。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦切り 底部回転篦削り 高台接合	不良 砂礫を含む 灰白色	I 95%
〃	2	〃	A 21.4 B 4.4 E 15.4	体部はやや外反。高台はほぼ直立し，底部は下がる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	良好（二次焼成） 砂礫を含む 青灰色	I 80%
〃	3	〃	A 22.7 B 3.9 E 15.3	体部は外傾し外反する。高台は外方へ開き底部は下がる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	良 砂礫を含む 青灰色	I 65%

70 09	4	盤	A 22.5 B 5.0 E 16.7	体部は外反。高台は外方へ開き，底部は下がる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	良好（二次焼成） 砂礫を含む 青灰色	II焚口 焼台 95%
〃	5	〃	A 21.7 B 4.7 E 16.0	口縁は外反する。高台は外方へ開き先端は外方へ突出し鋭い。底部は下がる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	良好（二次焼成） 砂礫を含む 青灰色．	II焚口 焼台 85%
71 01	1	〃	A 21.7 B 4.6 E 16.0	口縁は外反。高台は外方へ開き底部に下がる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	II焚口 焼台 85%
〃	2	〃	A 22.1 B 4.5 E 15.7	高台は外方へ開き底部は下がる。底部篦記号あり。	水挽きヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	良好（二次焼成） 砂礫を含む 青灰色	II焚口 85%
〃	3	〃	A 22.2 B 4.6 E 12.0	高台は外方へ開き高台内側の底部は下がる。体部はやや外反。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	不良 砂礫を含む 灰黄褐色	V 65%
〃	4	〃	A 24.4 B 4.7 E 17.2	高台は外方へ開く。底部は下がる。一部は高台よりも低くなる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	不良 砂礫を含む 暗灰黄色	V 75%
〃	5	〃	A 23.8 B 4.9 E 17.1	底部は低く高台は外方へ開く。体部はやや外反。底部篦記号。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	不良 砂礫を含む 明黄褐色	V 70%
72 02	1	〃	A 21.4 B 5.0 E 15.2	体部の傾きは小さい。高台は外方へ開き底部は高台底と同じ程度まで低い。外面自然釉。	水挽き，ヨコナデ 高台接合	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰色	V 焼台(？) 90%
〃	2	〃	A 22.9 B 4.4 E 15.1	高台は外方へ開き，先端がやや突出する。底部はやや下がる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	不良 砂礫を含む 暗灰黄色	V 70%
〃	3	〃	A 24.1 B 5.1 E 14.0	高台は外方へ開き，底部はやや下がる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	不良 砂礫を含む 灰黄褐色	V 70%
〃	4	〃	A(22.4) B 5.1 E 15.0	体部の傾きは，やや小さく，直線的に立ち上がる。高台は外方へ開き底部は下がる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	不良 砂礫を含む にぶい橙色	焚口 75%
〃	5	〃	A 24.2 B 5.7 E 16.9	体部下端は2段に曲がって底部に移行。高台は外方へ開き，底部は大きく下がる。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	良（一部不良） 砂礫を含む 明オリーブ灰色	焚口南壁 95%
73 03	1	盛盤	A(19.8) B 11.2 D 3.5 F 9.5	受部は浅い皿状。口縁及び底部接地面は小さな端折。脚部はなめらかなカーブで立ち上がる。	水挽き，ヨコナデ 受部底部回転篦削り 脚部接合	不良 砂礫を含む にぶい赤褐色を基調とする	V 40%
〃	2	〃	A 26.8 B 15.6 D 7.1 F 15.8	受部は浅いスリバチ状。口縁及び底部接地面は端折。脚の立ち上がりはなめらかなカーブを描く。	水挽き，ヨコナデ 受部底部回転篦削り 脚部接合 スカシ窓は篦切り	不良 砂礫を含む 受部　にぶい橙色 脚部　灰褐色・灰白色	V 70%
〃	3	〃	A(26.3) D 5.6 J 12.3	受部は極く浅い皿状。口縁は小さな端折。	水挽き，ヨコナデ 受部底部回転篦削り スカシ窓は篦切り	不良 砂礫を含む 受部　灰褐色 脚部　にぶい橙色	V 30%
〃	4	〃	A 25.2 D 6.7 J 12.6	受部は浅い皿状。口縁は端折。脚の立ち上がりはなめらかなカーブを描く。	水挽き，ヨコナデ 受部底部回転篦削り 脚部接合 スカシ窓は篦切り	不良 砂礫を含む 受部　灰褐色 脚部　にぶい橙色	V 50%

73 (13)	5	高　盤	A 24.8 D 6.2 J 8.4	受部は浅い皿状。口縁は端折で内側にオーバーハングする。端折基部は篦ナデBによって整形。	水挽き，ヨコナデ 受部底部回転篦削り 脚部スカシ窓は篦切り 口縁内側回転篦ナデB	不良 砂礫を含む にぶい褐色	V 50%
74 (14)	1	〃	A 25.8 D 6.5 J 10.1	受部は浅いスリバチ状。口縁は小さな端折。	水挽き，ヨコナデ 受部底部回転篦削り 脚部接合 スカシ窓は篦切り	不良 砂礫を含む 受部外灰褐色 受部内にぶい橙色	V 30%
〃	2	〃	A(26.6) D 6.2 J 8.2	受部は浅いスリバチ状。口縁は小さな端折。	水挽き，ヨコナデ 受部底部回転篦削り 脚部接合 スカシ窓は篦切り	不良 砂礫を含む 受部外橙色 受部内にぶい赤褐色 脚部淡赤橙色	V 40%
〃	3	高盤脚部	D(5.6) F 15.9 J 11.7	底部接地面は端折。脚の立ち上がりは直線的。	水挽き，ヨコナデ スカシ窓は篦切り	不良 砂礫を含む 灰褐色	V 脚部のみ
〃	4	〃	F 14.8 J 8.1	底部接地面は，厚手の端折。脚の立ち上がりはなめらかなカーブを描く。	水挽き，ヨコナデ スカシ窓は篦切り	不良 砂礫を含む 赤灰色 にぶい橙色	V 脚部のみ
〃	5	〃	D(5.2) F 10.7 J 13.9	底部接地面付近は端折。脚の立ち上がりはなめらかな弧状を成し，上端はややオーバーハングする。	水挽き，ヨコナデ スカシ窓は篦切り	不良 砂礫を含む 灰白色 褐灰色	V 脚部のみ
〃	6	短頸壺	J(15.1) K(24.4)	胴部は肩が張る。頸部は接合ではなく挽き出されたもので非常に薄い。高台を欠くが接合部径は15.3cmを測る。 胴部下端は回転篦削り。	水挽き，ヨコナデ 底部回転篦削り 高台接合	良好（二次焼成） 砂礫を含む 灰白色	II 40%
〃	7	長頸壺	A 10.2 J 10.5	頸部は水平に張り出し，口唇は端折状を成す。内外面とも入念にヨコナデ調整される。	水挽き，ヨコナデ 頸部接合	良 砂礫を含む 灰白色	焚口南壁 頸部のみ
75 (15)	1	大　鉢	A 33.3 B 21.6 F 17.2 K 33.2	頸部は外反し口縁は上端が突出する。胴部外面には平行線の叩き目が明瞭に認められる。内外面とも自然釉がかかる。	巻き上げ，叩き 頸部ヨコナデ	良好（一部二次焼成） 砂礫を含む 灰色	焚口南壁 90%
〃	2	紡錘車	F 5.9 重さ 52.5g	外側が厚い笠状で，中央の穴は中心からややずれる。	指ナデ	不良 砂礫を含む 灰色	V 100%
〃	3	陶　鈴	B 6.4	球状部分はややいびつ。蓋又は棒状のものがあてられた痕跡が見られる。つまみの横断面は楕円形を呈しその長径方向は鈴の切れ目の方向とずれている。玉は黒曜質のものと石（計2個）。	篦調整後指ナデ 切れ目は篦切り	良 砂礫を含む 灰色	I 100%

(6) 灰　原

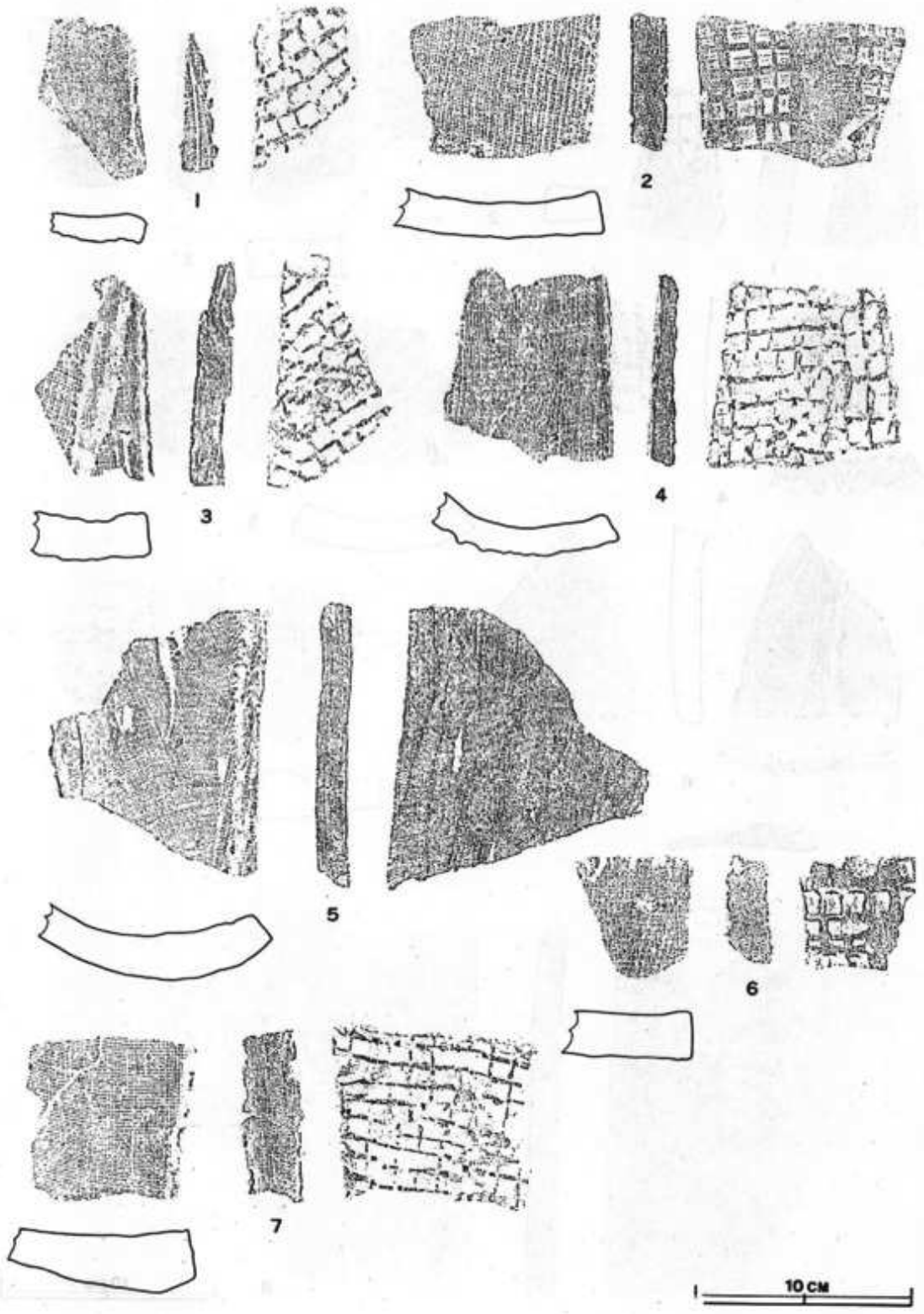
本地点の灰原は，Ｃ１号・Ｃ２号両窯跡によるものと，Ｃ３号・Ｃ４号両窯跡によるもの及びＣ５号窯跡によるものが考えられる。これらの中で，Ｃ５号窯跡によるものは削平されてしまっている。したがって前二者に関してその確認を試みたが，いずれも後世の攪乱等により満足な結果を得なかった。ここではＣ１号・Ｃ２号両窯跡の灰原調査の結果を記す。

確認は，Ｃ１号窯跡の主軸線を延長したトレンチと，それに直交するトレンチによって行った。この中で，Ｃ１号窯跡の主軸線を延長したトレンチは，後に同窯跡の溝と重っていることがわかった。陸田造成工事による攪乱は溝にまでは達していない。トレンチの交点付近から多量の遺物が出土し，円面硯もその中に含まれる。溝底はこの付近から急激に下降する。さらに湧水が見られたため，溝の末端を確認することはできなかった。あるいは，この交点付近が溝の先端であるかも知れない。Ｃ２号窯跡の溝は，焚口付近は削平されたため全く不明であるが，その先端の部分については陸田造成工事の影響を免がれた溝底部が確認できた。先端付近は，支谷入口に向かって屈曲する。しかし，これも湧水により追究出来なかった。灰層は，殆んど検出できなかった。現在の湧水点以下の面に堆積しているのかも知れない。念のため支谷入口に近い地点を掘り下げたが，灰層は検出できなかった。この掘り込みの深さは１ｍ内外であるが，上述した湧水点以下の調査は調査エリア・期間の問題もあり不可能であった。

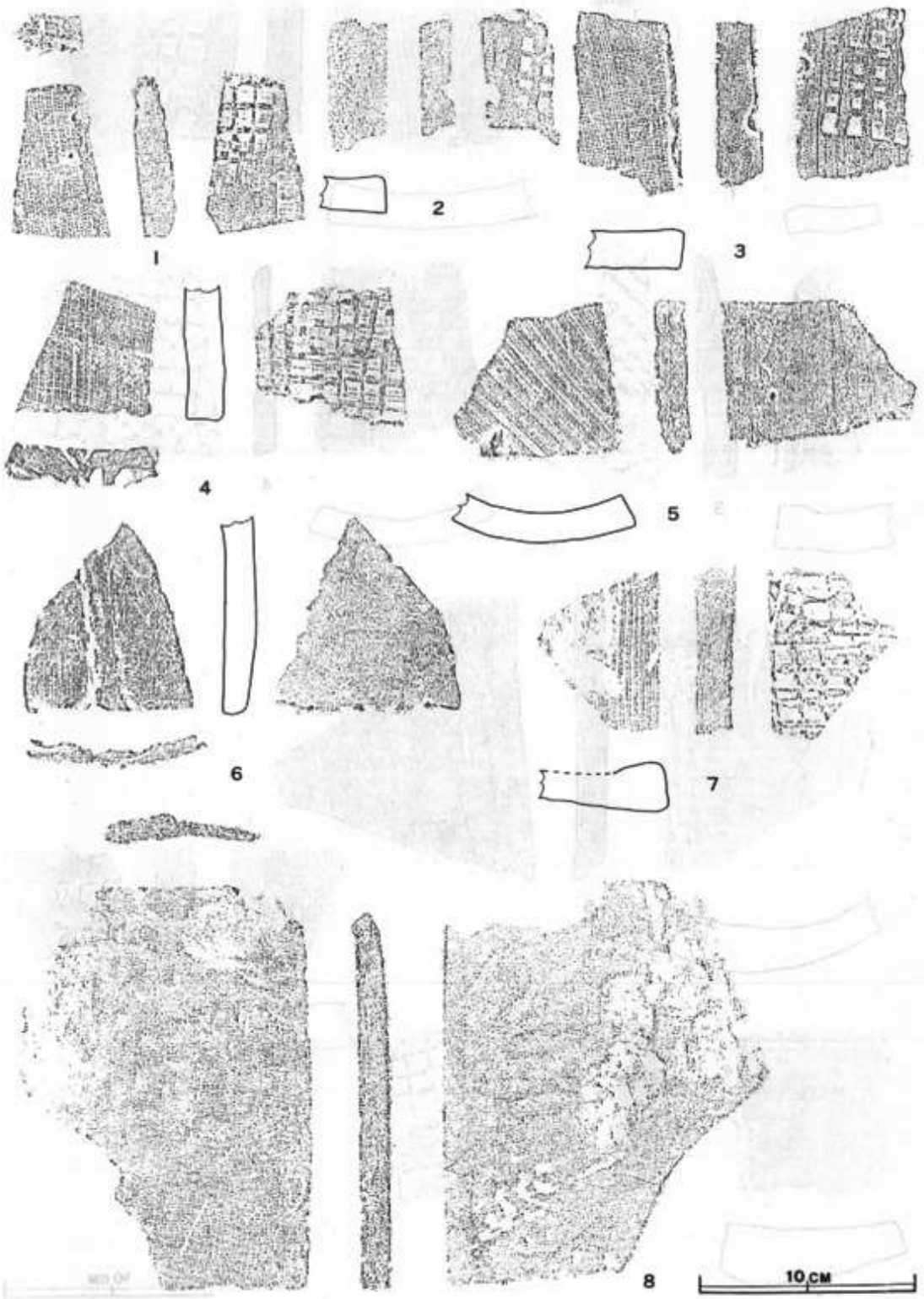
第４節　Ｄ 地 点（ＰＬ29）

本地点は，高取山北東斜面に刻まれた，支谷の西側斜面である。支谷の規模は，Ａ・Ｂ・Ｃ各地点の小支谷と比較して大きめである。谷底は，湿地であり，支谷開口部は水田となっている。斜面の傾斜は，他の３地点よりも強い。

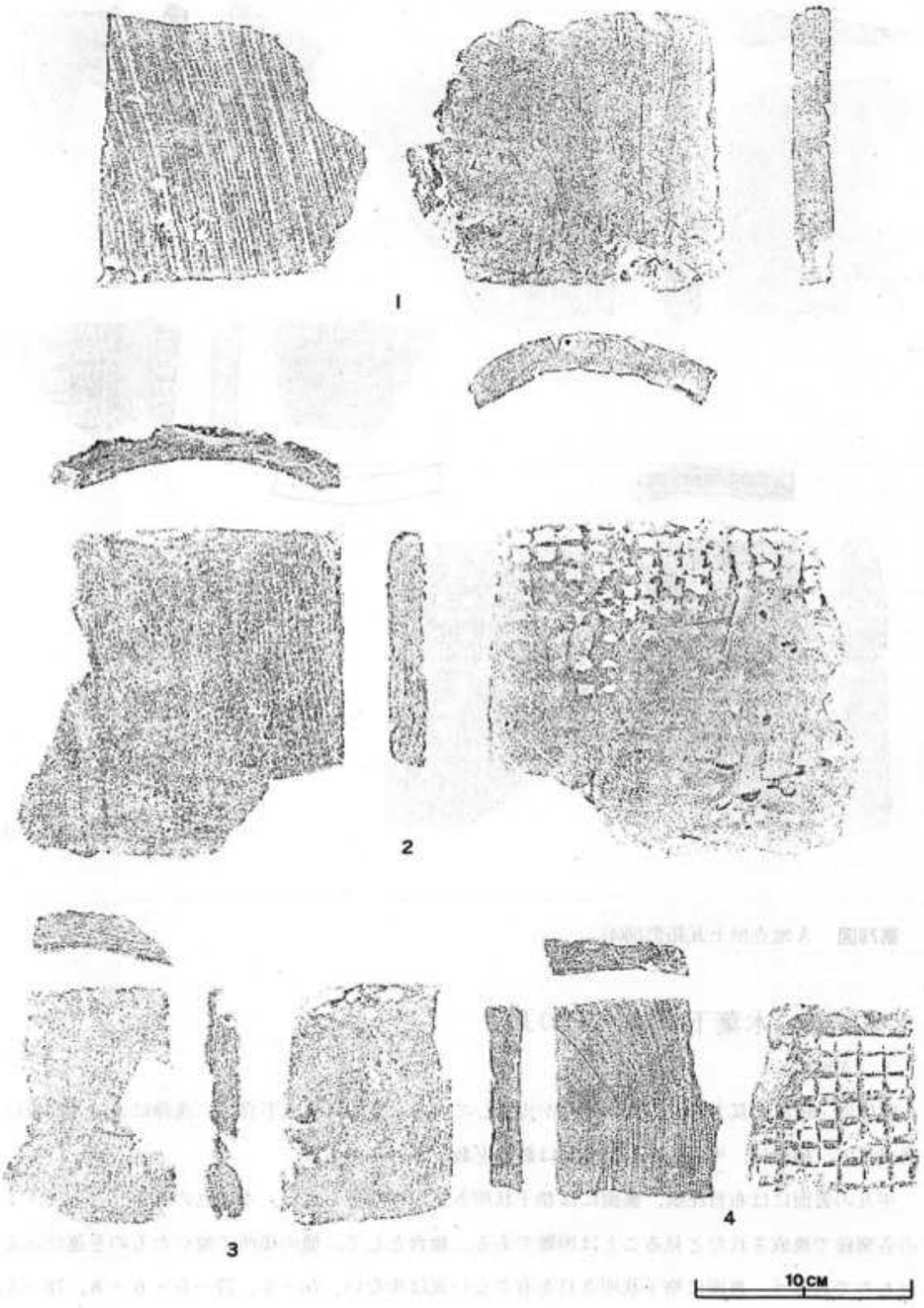
地点の中央付近と，その南東側及び北西側に凹地が認められ，その下方には平坦な部分が確認できた。そこで，これらを中心にトレンチを入れ，窯跡の確認を試みたが，４基の炭窯跡を検出したのみであった。



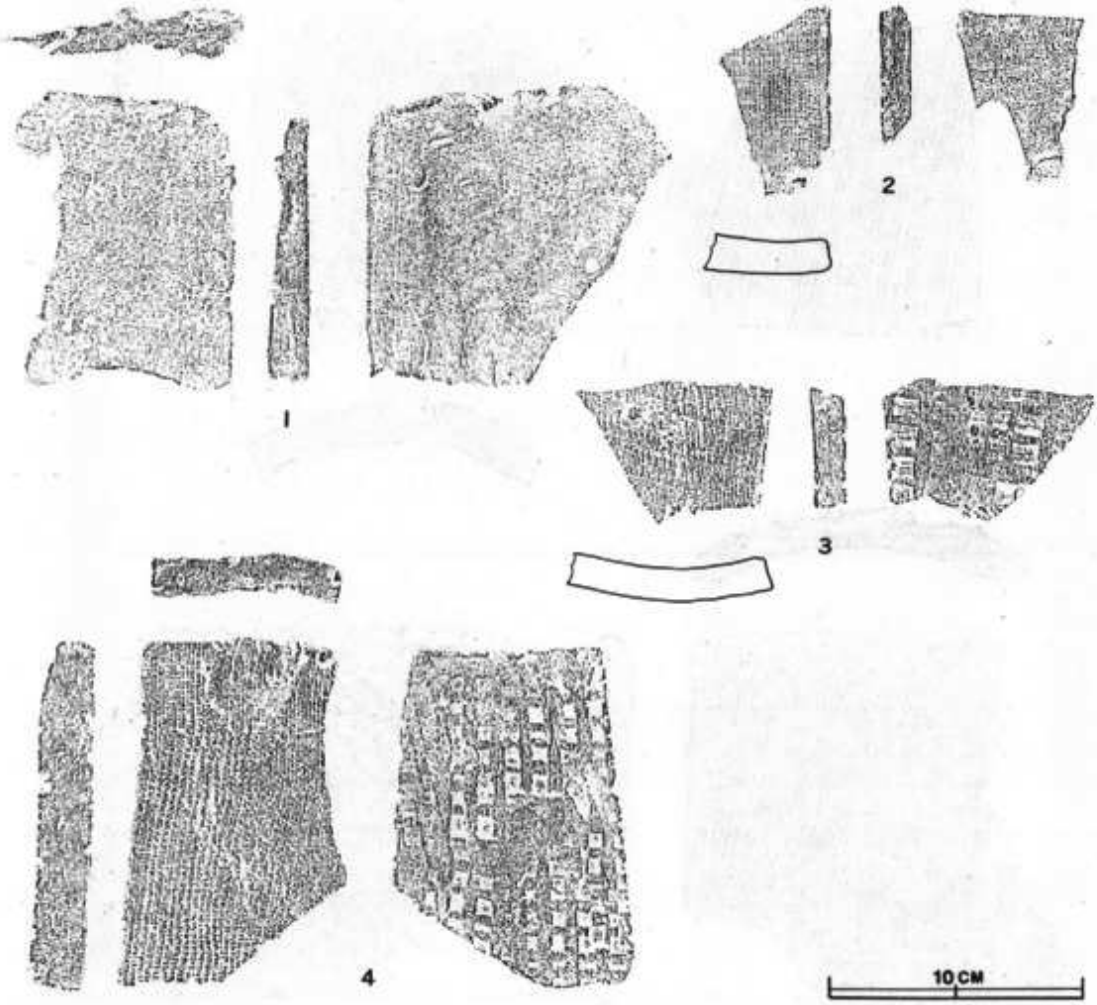
第76図　A地点出土瓦拓影図(1)



第77図　A地点出土瓦拓影図(2)



第78図　A地点出土瓦拓影図(3)



第79図　A地点出土瓦拓影図(4)

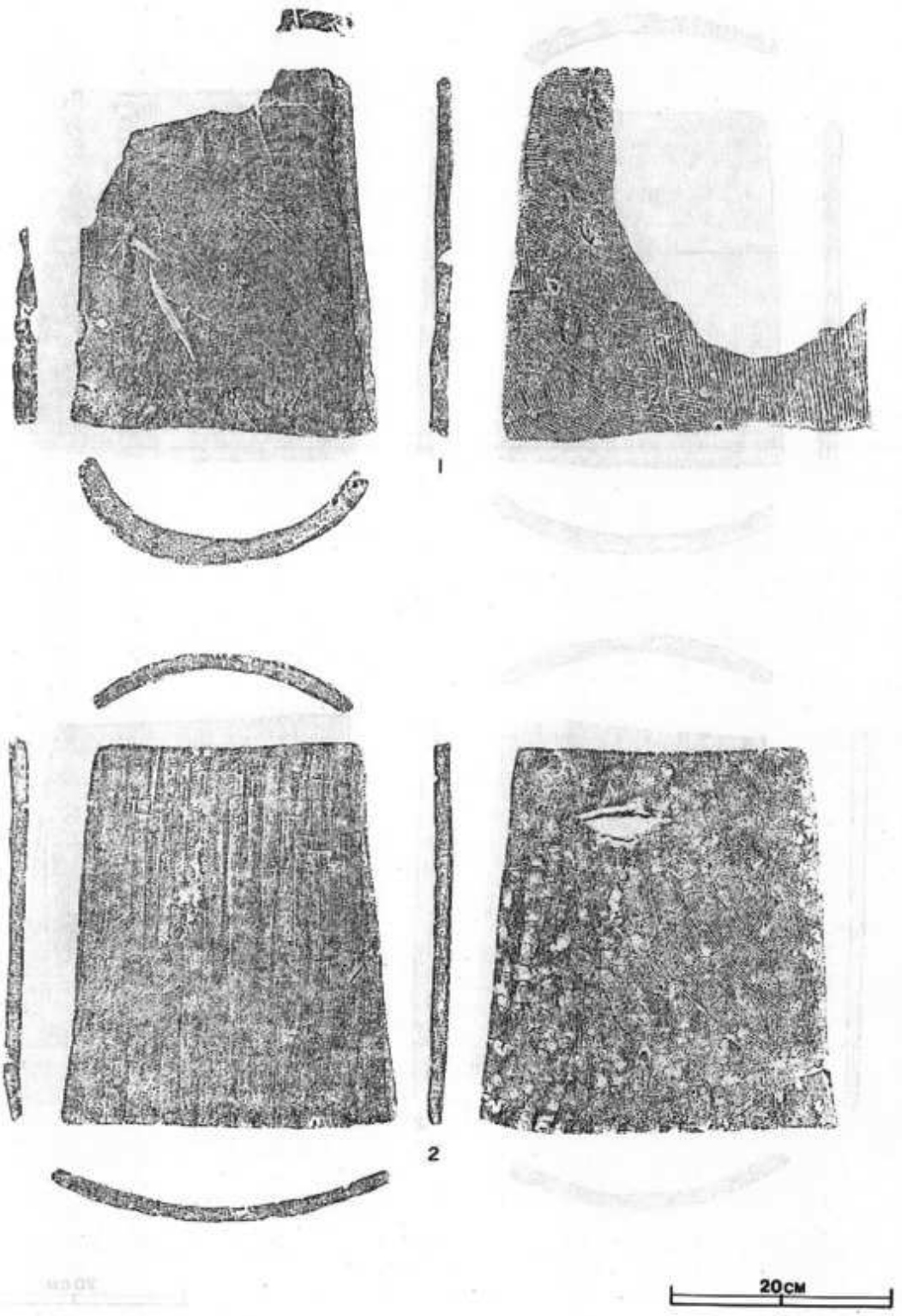
第5節　木葉下遺跡出土の瓦

1　A地点

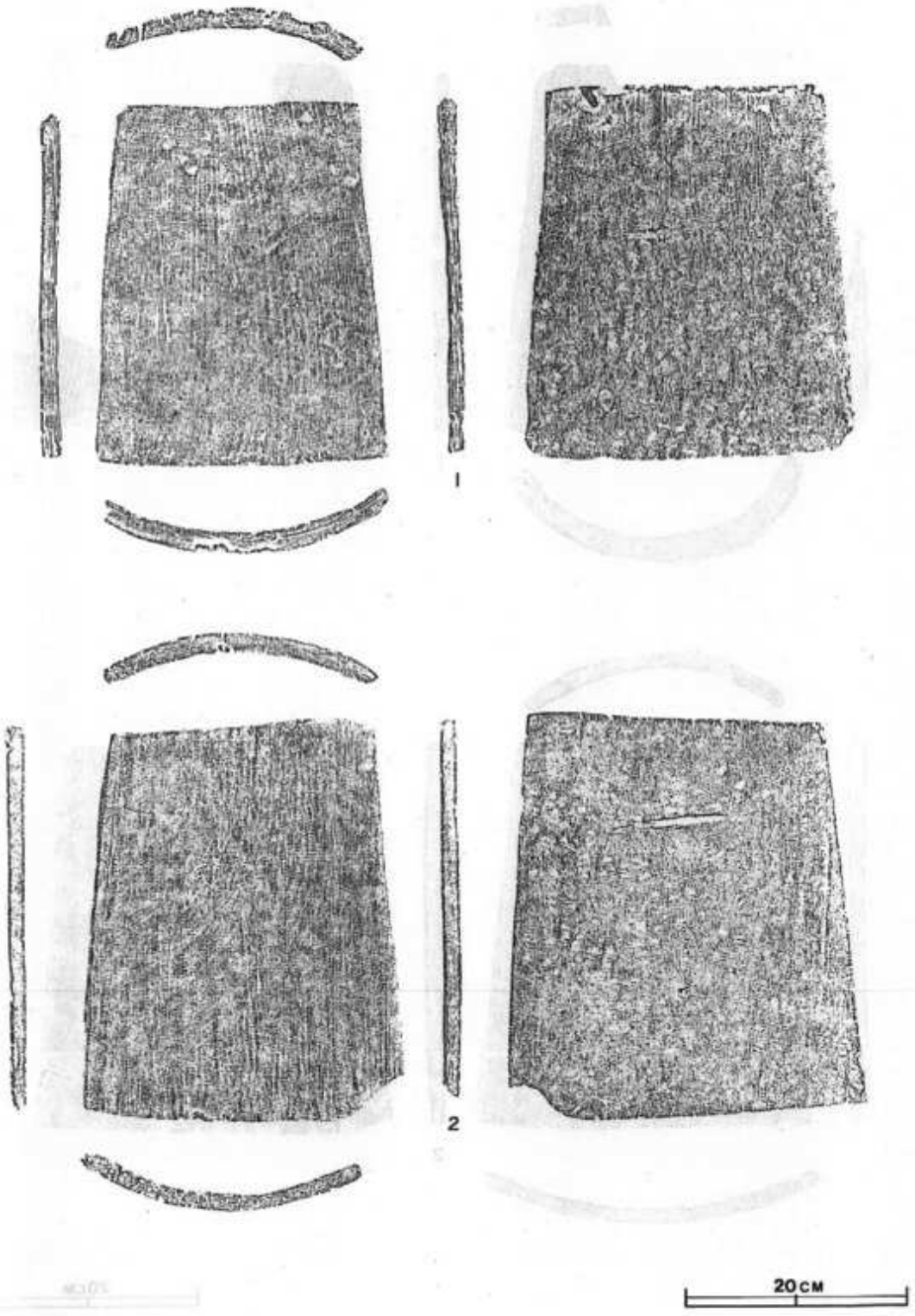
窯体内・灰原の双方から，瓦の破片が出土している。多くは焼成不良で，洗浄によって簡単に磨滅する。種類は，平瓦が多く，丸瓦は数点を数えるのみである。

平瓦の表面には布目圧痕，裏面には格子状叩き目が多く見られる。本地点の瓦が，A1～A4の各窯跡で焼成されたと見ることは困難である。焼台として，他の場所で焼いたものを運び込んだものであろう。裏面に格子状叩き目を有さない瓦は少ない。76－5，77－5・6・8，78－3，79－1・2がある。篦・指によるナデ調整を施している。

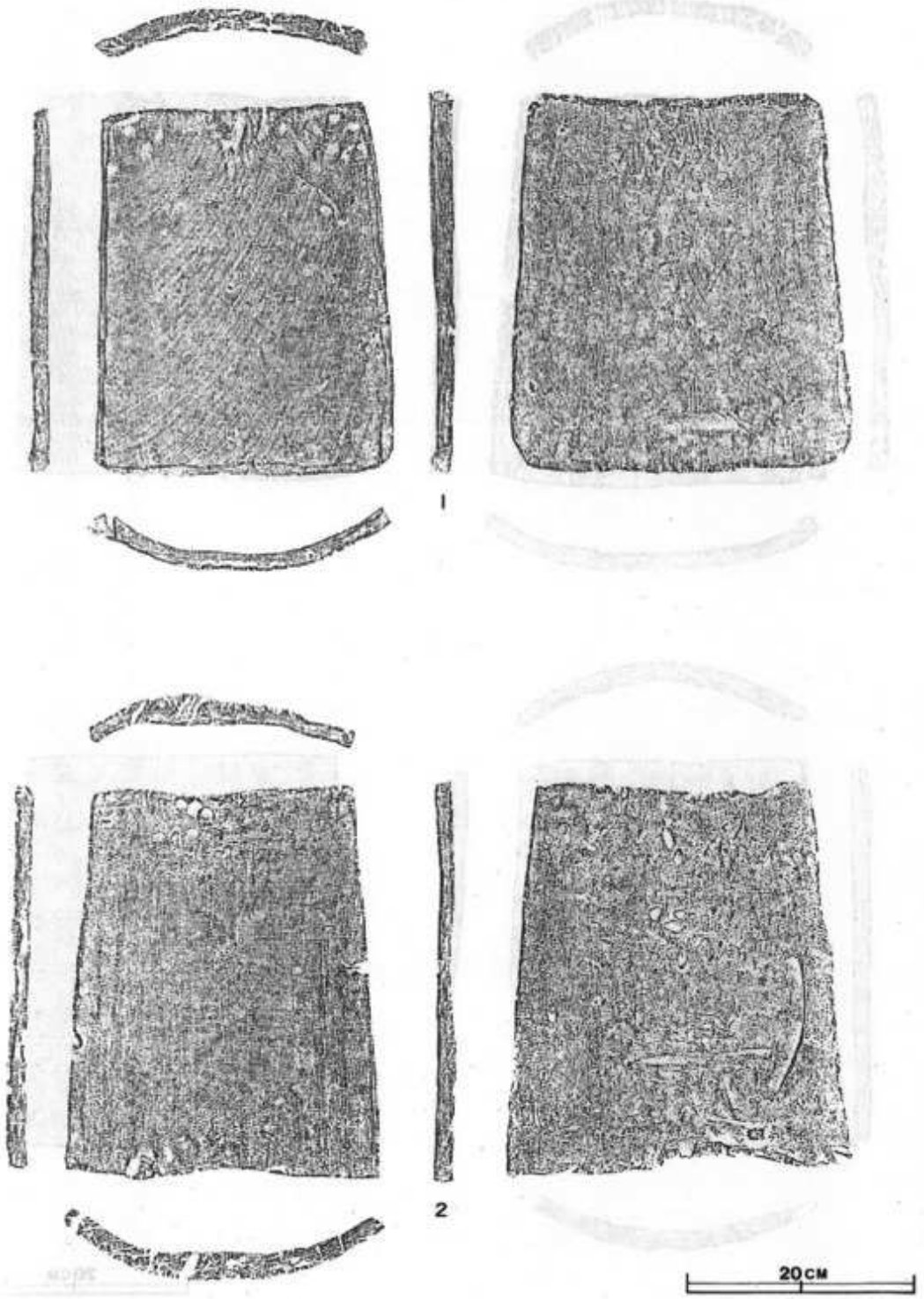
78－1は，丸瓦である。裏面に桶枠痕が見られる。



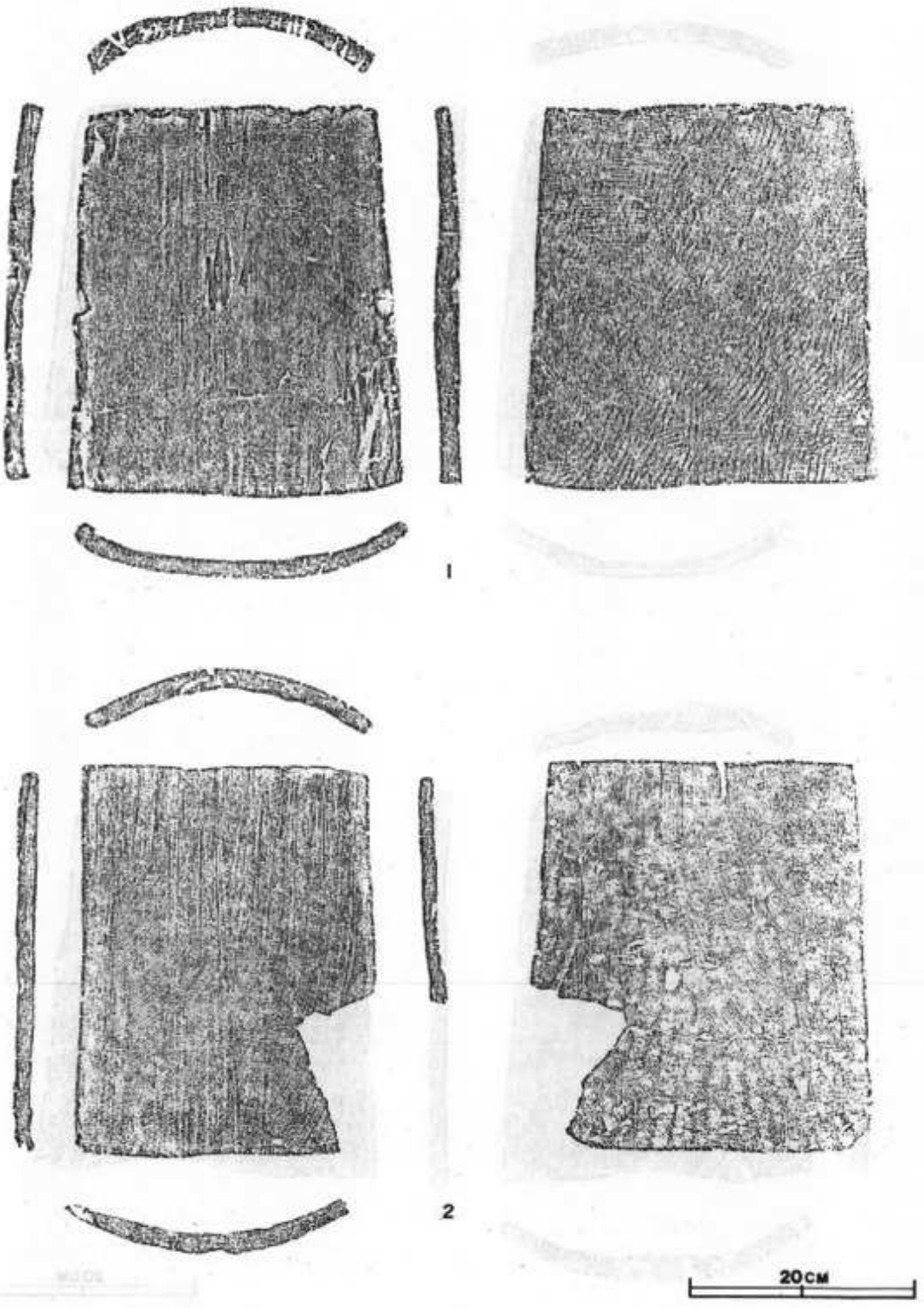
第80図　C５号窯跡出土瓦拓影図(1)



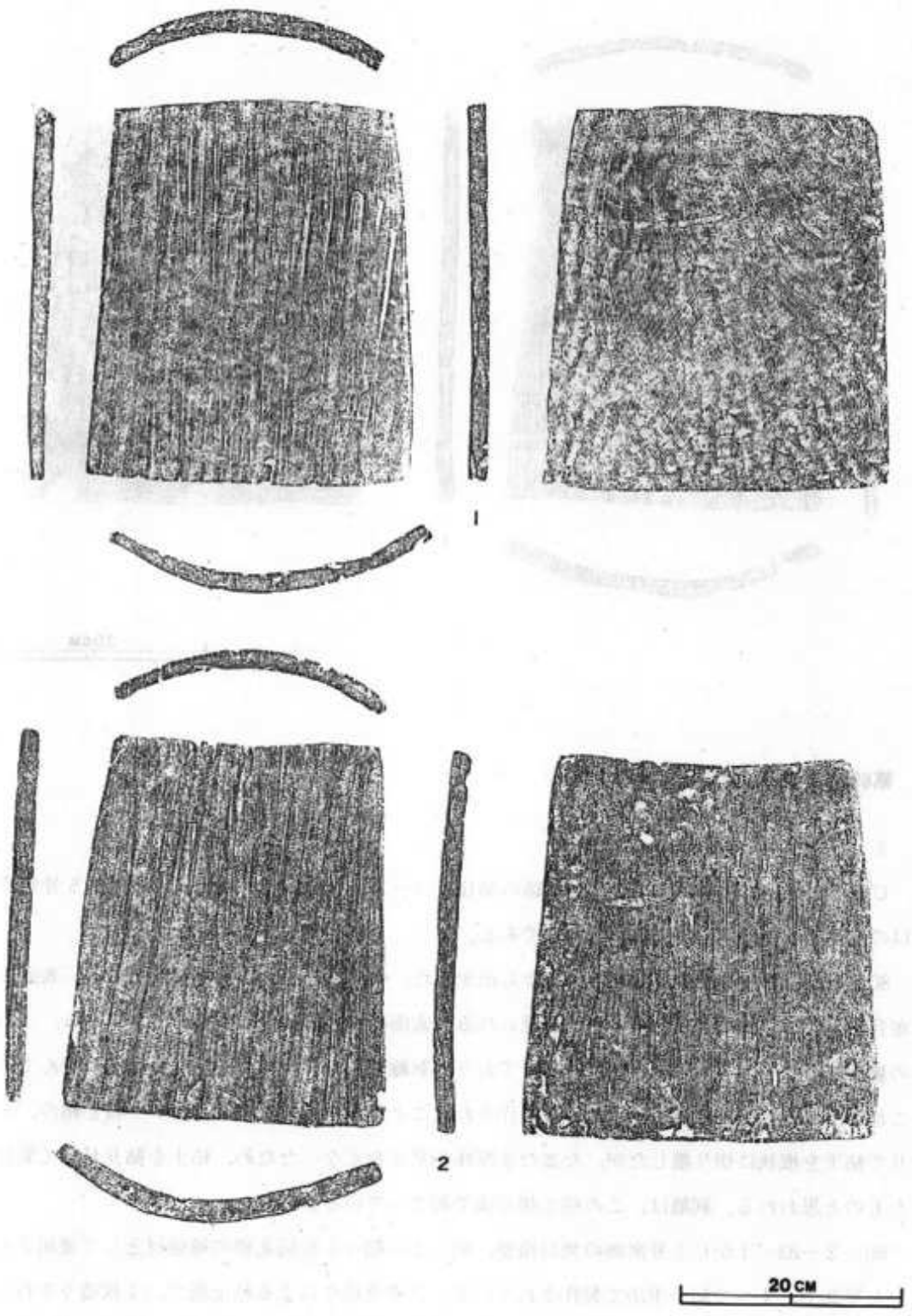
第81図　C５号窯跡出土瓦拓影図(2)



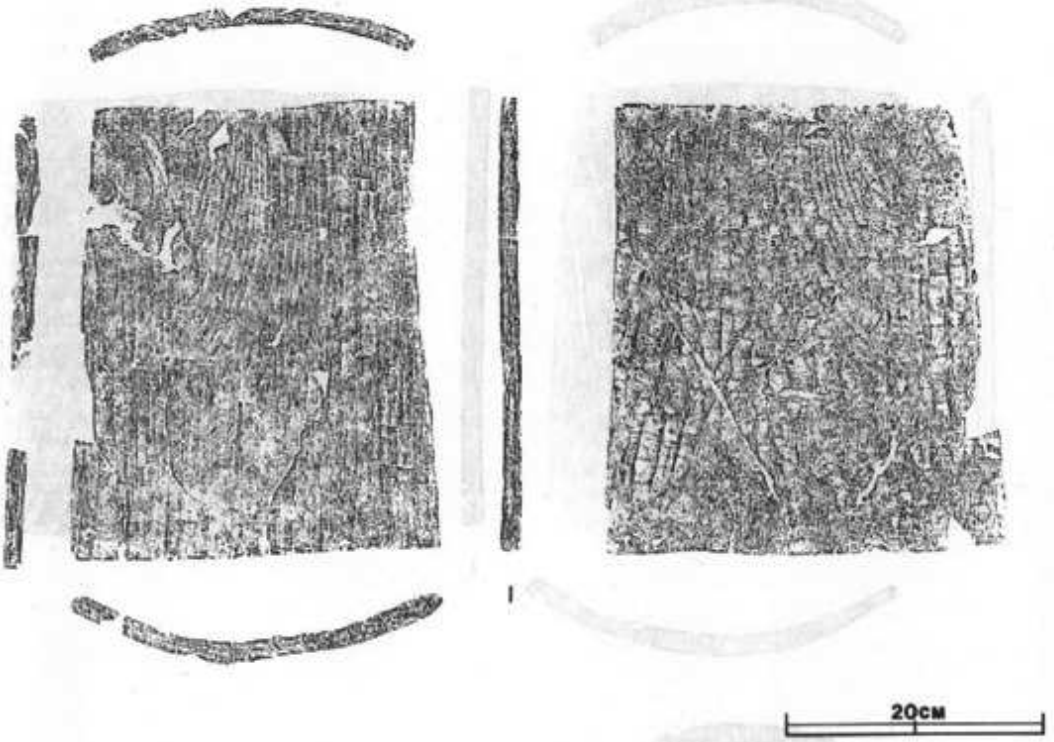
第82図　C５号窯跡出土瓦拓影図(3)



第83図　C５号窯跡出土瓦拓影図(4)



第84図　C５号窯跡出土瓦拓影図(5)



第85図　C５号窯跡出土瓦拓影図(6)

2　C地点

C地点から出土した瓦は，C５号窯跡の第II次ベースから出土した平瓦１点及びC５号窯跡焚口の補強材に使用された平瓦10点のみである。

80－１は，C５号窯跡第II次ベースから出土した。やや反りが強いが，平瓦である。表面には布目圧痕が，裏面には平行線叩き目が見られる。表面の右辺肩が箆で面取りされている。この瓦の裏面は，中央から右肩にかけて剝がれており，剝離面には弧状の沈線が同一方向に並んでいる。これは，この瓦が，１枚造りによって製作されたことを示すものである。タタラ板を積み，糸切りで粘土を板状に切り離したが，たまたま厚味が足りなくなったため，粘土を貼り足して製作したものと思われる。剝離は，この粘土接合面で起こっている。

80－２～83－１がC５号窯跡の焚口南壁，83－２～85－１が同北壁の補強材として使用されていた平瓦で，すべて同一手法で製作されている。タタラ造りによる粘土板で，１枚造りを行っている。表面・裏面ともに，静止糸切り痕が見られる。表面には布目圧痕中に桶枠痕が見られ，裏面では指頭痕が目に付く。84－２は，平行線叩き目が見られる。

第4章　ま　と　め

第1節　遺　　構

1　構造

今回調査された11基の須恵窯跡中，構造を解明・推定し得たのは，Ａ２号・Ａ３号両窯跡を除く９基である。この中で，半地下式の構造を有するのはＡ１号窯跡のみで，残る８基はすべて地下式である。しかし，Ａ１号窯跡は，奥壁付近が失われているため，明瞭ではないが窯体の半分（焚口側）が半地下式，半分（奥壁側）が地下式になっていると思われ，完全な意味での半地下式ではない。これは，窯を築く場所が支谷左右の傾斜地の裾部に限られていても，焚口を設ける位置が必ずしも一定ではないことによるものである。焚口の位置を斜面と谷底の境界，すなわち本文中で用いた傾斜変換点を基準にして言うと，斜面の中腹であると裾部であるとを問わず，傾斜変換点よりも上位に位置するもの，傾斜変換点に位置するもの及び傾斜変換点よりも下位つまり谷底に設けられているものがある。11基の窯跡を各類に分けると次のようになる。Ｃ地点においては，谷底が人為的に広げられているため，推定によって分類する。

傾斜変換点よりも上位……Ｂ２号・Ｃ４号・Ｃ５号

傾斜変換点……Ａ２号・Ａ３号・Ｂ１号・Ｃ１号・Ｃ２号・Ｃ３号

谷底……Ａ１号・Ａ４号

前二者は，例外なく地下式である。谷底に焚口を設けた窯の場合は，焚口を設ける位置と傾斜変換点との距離が問題になる。焚口が傾斜変換点から大きく離れ，両者の間に焼成室として利用できるスペースが存在すれば，つまり，谷底に焼成室の一部がかかれば，その部分の犬井を補強せざるを得ないことは明らかであり，部分的であっても半地下式の構造を有することになる。この焚口を設ける場所の問題は，窯業に携わる工人集団の技術的な問題と，同時に窯跡の築かれた時期の問題をともに包含するものであると思われる。しかしながら，現時点ではこれらの問題に対して断定し得るだけの資料を欠いているため，問題を提起するだけにしたい。

一方，前二者について考えると，同一グループ中には窯体の構造が近似するものが無い。最初のグループのＢ２号と，二番目のグループのＢ１号はほぼ同じ構造を有した窯であることは，遺構の項で述べたことである。同様にＣ３号とＣ４号，Ｃ５号とＣ２号の構造は極めて良く似たものであり，特にＣ３号とＣ４号はほとんど同一の構造と言っても過言ではない。先述した焚口の位置の問題よりも，ここに述べた全体的な構造の問題が各窯跡相互の時期を判断するうえでは，より重要な問題であり，同時に重要な手がかりであると考えられる。

以上に述べた観点に沿って判断すれば，11基の窯跡は次のようなグループに分けることができ

る。

○Ⅰ類　A１号（断面カマボコ型。ベースは焚口側の水平部分と奥の傾斜部分から成る。燃焼室は，ほぼ垂直に掘り込まれる。燃焼室と焼成室は，ほぼ同じ幅を有している。）

○Ⅱ類　B１号・B２号（断面カマボコ型。ベースは，スロープと奥の階段部分から成る。燃焼室は狭く，壁はほぼ垂直。）

○Ⅲ類　C１号（断面カマボコ型。ベースはスロープ状で，周囲の排水溝は，窯外へ延びる。燃焼室は狭く，ほぼ垂直に掘り込まれる。）

○Ⅳ類　C３号・C４号（焚口から奥に向かって徐々に幅を広げ，焼成室に至って左右の壁は平行になる。掘り込みは垂直。ベースは徐々に傾斜を強める。）

○Ⅴ類　C２号・C５号（断面カマボコ型。ベースはスロープ状。燃焼室は狭く，壁はやや外傾する。奥壁からほぼ垂直に煙道が立ち上がる。）

不明　A２号・A３号・A４号

同一類に分類された窯跡は，互いに同時または極めて接近した時期に築かれ，操業していたものと考えて差支えないであろう。各グループの前後関係は，遺物を見て判断せざるを得ず，次項で述べる。

以上，各窯跡の構造について総括的に述べた。次に各部分についてまとめてみたい。

① 焚口・燃焼室

奥に向かって徐々に広がりを増す。開口部が八の字型に広がるのはA１号窯跡のみで，A４号窯跡にもその傾向が認められる。燃焼室の壁はやや外傾するのが通例で，A１号・A４号両窯跡のように垂直に掘り込まれる例は少ない。A４号窯跡の場合は，燃焼室床がU字状であり，壁上部に至って垂直になる。したがって，この点ではA１号窯跡と同一型式ではない。

② 焼成室・天井

焼成室左右の側壁は，内傾しながら立ち上がる。天井が残存したのはB２号・C２号両窯跡のみであり，天井の高さが測定できたのはB２号だけで，剥落した部分を考慮に入れると，推定で60cm内外を測る。他の窯跡も，B２号と大差無いものと推定される。

ベースはスロープ状を呈するものが多く，B地点の２基だけが階段状である。分炎柱などの施設は一切設けられていない。スロープ状のベースの場合，天井・壁のブロックや蓋・坏・盤の破片を利用して焼台が設けられる。C５号窯跡のⅠ次ベース奥で見られた焼台群は，盤の破片を伏せて並べたものである。C４号窯跡では坏の破片が，C５号窯跡のⅡ次ベースでは盤の破片が焼台に再利用されていた。いずれも，ベース中段から焚口付近まで崩れ落ちていた。これに対し，

Ｂ１号・Ｂ２号両窯跡の場合には，焼台を設ける手間を省く意味で（窯体を掘り抜きながら階段を設ける手間を度外視すれば）合理的である。遺構の項で述べたように階段が一定の大きさを有していたことは，焼成された器の大きさを推定することもできよう。

ベースの修復は全面的に行われるのが通例で，部分的な修復は少ない。Ｂ地点の２基の窯跡で見られたような，あるいはＡ１号窯跡で見られたような焚口側半分程度の修復の場合は，スロープの低い方だけを埋めてベースとして再利用するものである。全面的なベース修復としては，Ｂ１号・Ｂ２号両窯跡の最終ベースの形成と，Ｃ２号・Ｃ３号・Ｃ４号・Ｃ５号各窯跡に如実に見られるベースと天井・壁崩落ブロック層が互層を成す事実を挙げることができる。このことから，ベース修復と天井の修復・整形のパターンとして，次の形式が考えられる。

築窯→焼成→崩落→修復・整形→焼成→崩落→修復・整形→……放棄

Ａ４号・Ｃ１号・Ｃ２号各窯跡に見られた部分的な青灰色層の厚味の増大は，窯出しの際にベース表面が砂状化して掻き出されたこと（人為的理由）が考えられるが，窯出しの作業に伴って焚口付近に流れ出したこと（自然的理由）も原因の一つとして考えることができる。

③　奥壁・煙道部

奥壁は，焼成室から延びた左右の壁が丸味をもってまとまることによって形成されている。ベースからの立ち上がりは，多くの場合垂直である。煙道はＢ２号・Ｃ５号両窯跡を除き，崩れたり削平されていた。Ｂ２号窯跡の場合，煙道の位置が窯体の中心線からずれており，煙道自体も上半が左に曲がっていた。Ｂ２号窯跡の場合に見られた煙道のズレ・屈曲は例外的なものと思われ，奥壁から推定したＢ１号・Ｃ２号・Ｃ５号各窯跡の煙道は窯体の中心線を通り，ほぼ垂直に立ち上がる。特に，Ｃ５号窯跡では明瞭である。

奥壁と煙道は必ずしも連続せず，Ｂ地点では煙道下端よりも大きくえぐり込まれた状態で奥壁が形成されている。Ｃ５号窯跡でも，Ｂ地点ほどではないが，奥壁はややえぐり込まれている。Ｃ２号では奥壁と煙道が直接結び付いており，木葉下遺跡ではむしろ少ない例である。

煙道が残ったＢ２号・Ｃ５号両窯跡では，いずれも煙道開口部のすぐ横に炭化物が堆積しているのが認められた（無論これは，表土下のことである）。この炭化物の性格について，調査中から様々な論議を重ねたが，明解な結論を出すには至らなかった。焼成中に煙道から立ち昇った炎によって周囲の草が焼けたものに由来すると考える説，または，焼成終了時に煙道を塞いだものが焼けたとする説がある。

2　操業

各窯跡について，操業時期（季節）や操業期間を明確にすることは出来ない。ここでは，調査

を通じて明らかにできたことを述べることにとどめる。

○焼成

Ｃ３号窯跡の燃焼室の床上で発見された炭化材が,「あぶり」の段階の燃料として利用されたものであると考えられることは前に述べたとおりである。現在の窯焚きの理論と当時の技術との間には，大きな違いがあるとは考えられず，むしろ現在とほとんど同じ水準にあったと考えた方が妥当である。

Ｃ３号窯跡で発見された炭化材と同じ程度の大きさの炭化材が，Ｂ２号・Ｃ１号窯跡でも確認されているが，いずれも炭化材層の中位にある。焼成途中で燃焼速度の遅い丸太を燃料として使用するとは考えられず，さらに焼成途中で再び「あぶり」を行うこともあり得ない。この事実は，連続操業の可能性を示していると言える。同一ベースに対してであるかどうかは不明だが，複数回の焼成が，行われたと見られる。前回に行った焼成時の炭化材の上に,「あぶり」に用いた炭化材が見られ，さらにその上に「攻め焚き」の際の炭化材が堆積したわけである。ここに言う２回の焼成の時間的なズレがどの程度のものであるか，残念ながら不明である。両方の炭化材の間に，薄い粘土状の土層が見られる場合と，そうでない場合があり，前者の場合にはかなりの時間的な差が考えられる。

○　複数の窯跡での同時操業について

Ｂ地点の２基の窯跡は，灰原に間層が認められないことから，同時に築かれたと見て差支えない。とすれば，この２基の窯跡は同時（全く同時という意味ではなく，交互操業を含めた意味での同時である）に操業されていたと見るのが妥当である。Ｃ３号・Ｃ４号両窯跡も，おそらく同様であったと推定される。Ａ地点の４基の窯跡も，やはりこの点を考慮する必要があろう。

しかしながら，この「同時」や「交互」の内容については，それが推定の域を出ていないだけに，なお多くの問題を残している。この問題の解明には，新たな研究の進展を待たねばならない。

○　生産量（Ｃ５号窯跡最終ベースの場合）

１回の操業で生産された須恵器の数量がどの程度であったかについては，残念ながら明確にできなかった。Ｃ５号窯跡の最終ベースでは焼成中に崩落が起こったため，１回の操業での窯詰めの状態が復原できるものと考えられたが，遺物は焼成不良のため磨滅が著しく，100パーセント接合することはできなかった。また，実測・取り上げ作業中に遺物が移動しており，窯詰め時の配置を復原することも困難であった。ここでは，復原し得た須恵器の個体数を器種別に示すこととする。

坏……1

高台付坏……34

蓋……76

盤……9

高盤……23（大型18・小型5）

第2節　遺　　物

3地点から出土した須恵器の中で，圧倒的に多いのは坏蓋と坏身である。この2種は，すべての窯跡から出土している。一方，盤についてみると，製品が見られるのはC5号窯跡のみであり，C2号窯跡からは焼台として使用されたものが出土している。ここでは，これら3種の須恵器を中心として，前節で述べた形態の近似するB地点・C地点の窯跡のグループ相互の前後関係について，検討を進める。

1　出土遺物による，C地点の窯跡の分類

C地点の各窯跡を，出土遺物によって分類してみたい。

坏の中で特徴があるのは，体部が直線的で外面に回転篦ナデBによる強い稜を有するものである。C1号・C3号・C4号各窯跡に，この坏が見られる。蓋では，扁平つまみ（a・a'・b・b'各群）と径が小さく高いつまみ（c群）の別がある。c群のつまみを有する蓋を，明らかに窯跡に伴う状態で出土したのは，C1号・C2号・C5号各窯跡である。

以上の観点から，C地点の窯跡は次の3グループに分かれる。

① C3号・C4号窯跡（体部外面に強い稜を有する坏が見られる）

② C2号・C5号窯跡（c群のつまみを有する蓋と盤が見られる）

③ C1号窯跡（①の坏と②の蓋が見られる）

この分類結果は，窯跡の構造による分類の結果と一致し，C3号・C4号窯跡とC2号・C5号窯跡の中間にC1号窯跡が位置付けられることを示している。

次に，坏の法量によって検討を進める。第86図は口径（A）と器高（B），第87図は口径と底径（F），第88図は第86図と第87図の比をそれぞれグラフに示したものである。個体数の差やゆがみによる不正確さを考慮して，分布の中心（点が集中している部分）で判断する。第86図から第88図まで，順を追って検討することとする。

○第86図の検討

Ｃ１号窯跡の坏は器高はＣ３号・Ｃ４号窯跡と同じ区域に分布するが，口経は小さい。しかしＣ２号窯跡の坏とは，両方ともほぼ等しい。一方，Ｃ５窯跡は器高はＣ１号窯跡よりも小さいが，口径は大きい。同様の比較を試みることにより，次のグループに分けることができる。

- Ｃ３号・Ｃ４号窯跡
- Ｃ１号・Ｃ２号窯跡
- Ｃ５号窯跡

○第87図の検討

Ｃ１号窯跡は，底径はＣ５号窯跡よりも大きく，Ｃ２号・Ｃ３号・Ｃ４号各窯跡と同じである。Ｃ２号窯跡とＣ３号・Ｃ４号窯跡の分布は，ほぼ同じ区域にある。この結果，次のグループに分けることができる。

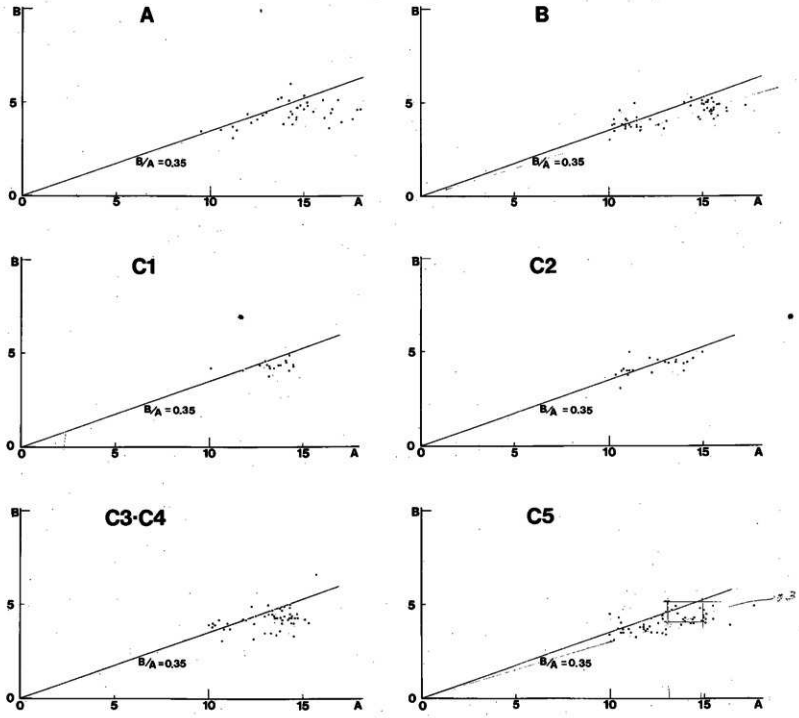
- Ｃ１号・Ｃ２号・Ｃ３号・Ｃ４号窯跡
- Ｃ５号窯跡

○第88図の検討

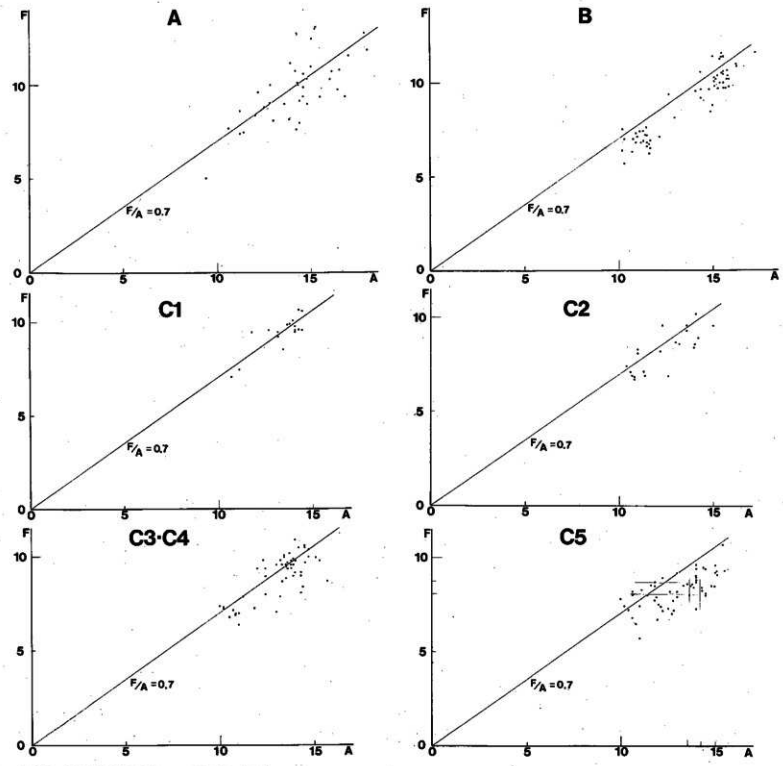
各々のグラフを見ると，点の集中する区域がずれている。Ｃ３号・Ｃ４号窯跡とＣ５号窯跡の差が最も大きく，Ｃ１号・Ｃ２号窯跡は両者の中間にある。この結果，次のグループに分かれる。

- Ｃ３号・Ｃ４号窯跡
- Ｃ１号・Ｃ２号窯跡
- Ｃ５号窯跡

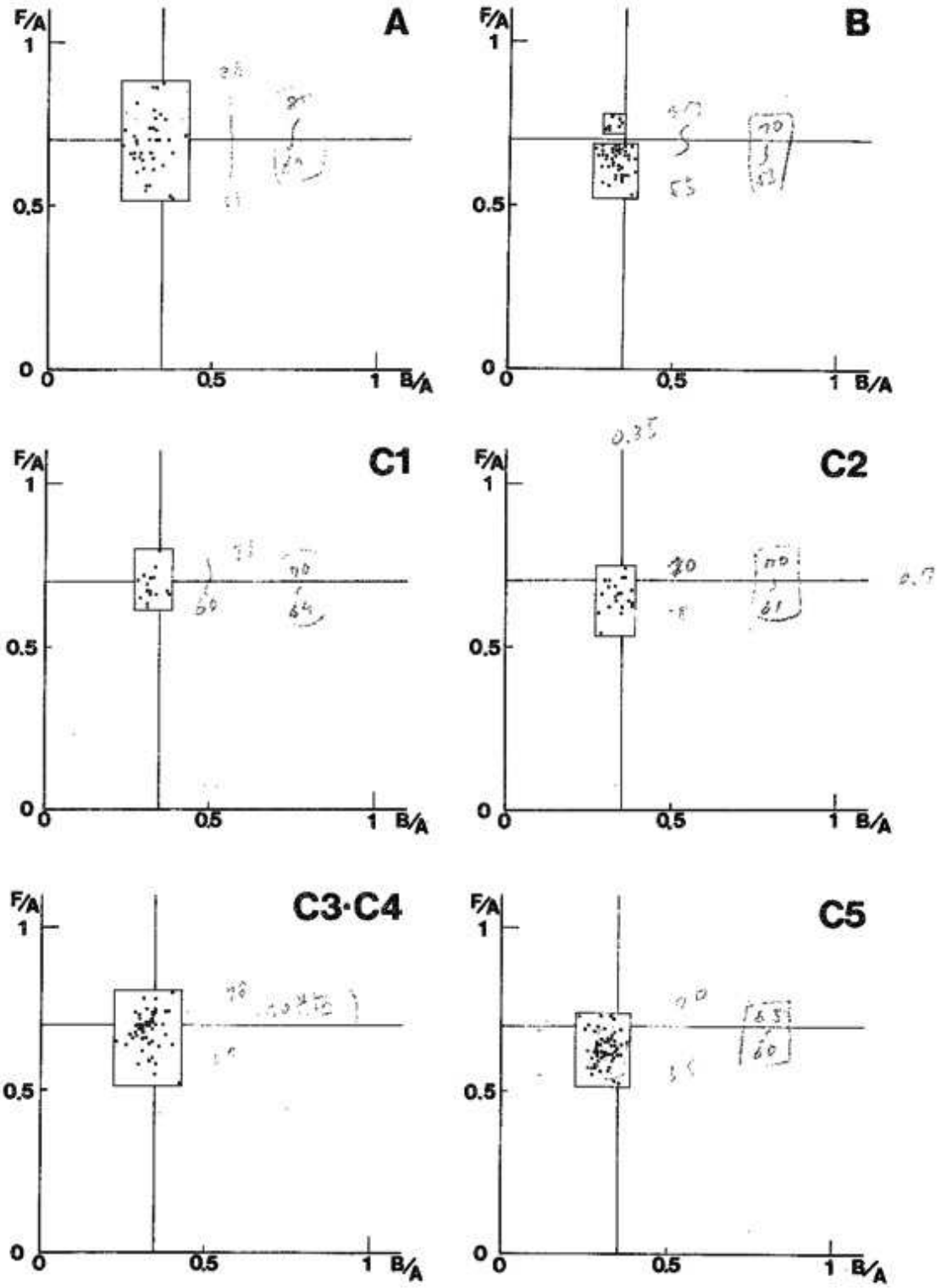
Ｃ３号・Ｃ４号両窯跡をどのグラフでも一緒に扱ったのは，構造・遺物両面から考えて両者に差が認められず，Ｂ１号・Ｂ２号両窯跡と同様に同時築窯・同時操業と見られるからである。一方，Ｃ１号窯跡とＣ２号窯跡，Ｃ２号窯跡とＣ５号窯跡が，分類基準によって同一グループに分かれ，Ｃ１号窯跡とＣ２号窯跡ではそれが見られない。Ｃ１号窯跡とＣ５号窯跡の坏分類の結果も，同様である。（各窯跡の遺物の項参照）



第86図 坏法量分布図（A…口径，B…器高）



第87図　坏法量分布図（A…口径，F…底径）



第88図　坏法量比分布図

2　坏による，B地点とC地点の比較・検討

B地点出土の坏は，法量で比較した場合，C地点のどの窯よりも大きい。また，出土遺物の項で明らかなように，B地点の坏には技法上新しいと思われるC₂群に属するものが見られない。法量比のグラフを見ると，B地点の坏は二つのグループに分かれ，一部がグラフの上位つまり，底径が大きいものであることを示している。グラフ下位にあるグループは，小ぶりの坏を中心とする。これらの結果を総合的に判断して，B地点の操業時期はC地点のすべての窯跡に先行するものとして，差支えないであろう。

B地点がC地点に先行して操業していたとすれば，坏法量の比較から，坏法量の変遷を考慮しなければならない。少なくとも，B地点からC地点への移行は，坏の法量を減少させた時期にあったと考えられる。一方，C地点内部での推移は複雑である。C３号・C４号窯跡は，明らかにC５号窯跡よりも先行するが，坏の法量（特に口径）は小さい。つまり，C３号・C４号窯跡からC５号窯跡への移行期は，坏の法量を増大させる時期にあることを示していると考えられる。C地点の法量比の検討結果は，先述したとおりである。その結果にB地点のグラフを加えて検討することにより，法量比変化と法量比変化の傾向を読みとることができる。

法量変化の傾向は，減少（B地点からC地点への移行）と増大（C３号・C４号窯跡からC５号窯跡への移行）がくり返されたことを示す。一方，坏法量比の変化は，一貫してF/A値(口径に対する底径の割合）を減少させていると考えられる。この点から，B地点の坏法量比のグラフの上位(F/A値大)に見られるグループは，C地点のそれと比べるとより古い形態ということになる。また，C１号・C２号窯跡の法量比がC３号・C４号窯跡とC５号窯跡の中間に位置することは，操業の順序を示すものと考えられる。

3　蓋・盤による，B地点とC地点の比較・検討

蓋・盤についてB地点とC地点を比較するとき，最初に目につくのはつまみの形態（c群）と盤の有無である。いずれも，B地点では全く見られない。特に盤の有無は，その出現期の位置付けの問題を含み，重要なものとしなければならない。

○蓋による比較・検討

各窯跡の遺物の項に見られるように，B群の蓋はB地点で出土を見ているが，C地点ではC３号窯跡に見られるだけである。この二つを比較すると，B地点では明らかに意図的に整形されたものであり，C３号窯跡の蓋よりも端折が大きい。C３号窯跡の蓋の場合には，端折を作り出さずに口縁に工具をあてることによって端折〝状〟に見えるようにしたに過ぎない。技法的には，B地点よりも退化しているといえる。

B地点に見られる端折の形態は，A地点で見られた「かえり」と端折の中間形態と見ることができる。「かえり」の消滅期に1段階を設け，A群（「かえり」を有する段階）からB群（「く」の字状口縁の段階）を経てC群（端折の段階）に至ると考えるわけである。2番目の段階の技法が一部で存続したのが，B群とC群の混在の原因であり，C3号・C4号窯跡の時期に至ってほぼその終末を迎えたと思われる。

一方，つまみの分類結果も，B地点とC地点の間に違いが見られることを示している。B地点にはa群のつまみが見られ，c群のつまみは1点も無い。しかし，C地点ではa群のつまみが見られず，c群のつまみが見られるようになる。a群のつまみは，いわゆる宝珠形を呈するものを基礎としたものであり，定説から言えば古い時期のものである。この事実も，B地点がC地点よりも先行するものであることを示している。

○盤による比較・検討

B地点には盤が全く見られず，C地点においてもC1号・C3号・C4号窯跡には盤が見られないことは，先述のとおりである。少なくとも，これらの盤を欠く窯跡がこの地方における盤の出現期以前のものであると判断することができる。

C2号窯跡・C5号窯跡双方から出土した盤を比較しても，器形・技法ともに大きな違いを認めることができない。おそらく，同時期のものであろう。また，盤の底部は丸底を呈しており，特にC5号窯跡の焚口南側壁に貼り付けられていたものは，高台よりも大きく突き出していた。この底部の特徴は，古い時期の盤の特徴と一致する。また，底部以外の器形的特徴も，これらの盤が古い時期のものであることを示している。このことから，この盤は当地方における盤の出現直後のものと判断できる。

4　遺物から見たB地点・C地点の変遷

以上に述べた結果を総合すると，B地点とC地点の各窯跡は，次のように変遷したと思われる。

B1号・B2号窯跡

↓

C3号・C4号窯跡

↓

C1号窯跡

↓

C2号窯跡

↓

C５号窯跡

各グループ間の時期的な差がどの程度のものであるかは不明であり，また，必ずしも一定したものではないであろう。たとえば，Ｂ１号・Ｂ２号窯跡とＣ３号・Ｃ４号窯跡の間はかなりの差が考えられ，Ｃ２号窯跡とＣ５号窯跡はかなり近接した時期のものであると思われる。

この変遷に伴う，坏・蓋の器形，技法上の変化をまとめてみたい。

坏

器形的には，平底の増加を挙げることができる。分類で言えば，Ａ群の坏が見られるのはＢ地点だけであり，徐々にＣ$_2$群の割合が増加する。Ｃ５号窯跡の坏では，土とりによる面の大部分が底部の篦削りによって失われており，Ｃ$_2$群に極めて近い形状を呈していた。これをＣ$_2$群に含めれば，この傾向はさらに強まる。

法量では，増減のくり返しを指摘できる。Ｂ１号・Ｂ２号窯跡からＣ３号・Ｃ４号窯跡へ減少の傾向をたどり，Ｃ１号窯跡・Ｃ２号窯跡・Ｃ５号窯跡へと増加に転じている。ただ，Ｃ３号・Ｃ４号窯跡が極小期にあるとは断定できず，同時にＢ１号・Ｂ２号窯跡とＣ５号窯跡がそれぞれ極大期にあるとすることもできないのは当然である。一方，法量比では，底径の減少傾向がある。この傾向は，Ｂ地点の２基の窯跡からＣ５号窯跡まで，一貫した傾向であると見られる。ここで注意しなければならないのは，Ｂ地点の小ぶりの坏である。この小ぶりの坏は，土とりの面に回転篦削りを加えることにより，底径が減少している。また，回転篦削りを施さなくても，土とり面の存在により底径は小さな値を示す。Ｂ地点の法量比の分布が，Ｆ／Ａ値の小さい部分に集中しているのはこのためである。底部の回転篦削りによって土とり面を減少または消滅させれば，同一法量を有した坏であっても底径が増大する。したがって，小ぶりの坏の場合には，法量比を単純に論ずることはできない。前述した「平底の増加（Ｃ$_2$群の増加）」とは，この土とり面の減少・消滅の傾向と言い直すこともできる。

底部の整形では，回転篦削りの減少と，回転篦切りのままのもの及び静止篦削りの増加がある。静止篦削りの場合は，全面整形から部分整形へ移行する。Ｃ５号窯跡出土の坏は，中心部のみに静止篦削りが施されるだけである。坏底部の切り離しに回転糸切り技法が用いられるのは，Ｃ５号窯跡以降の時期である。

蓋

先述のように，端折への移行が完成し，口縁がひさし状に突出する器形は，Ｂ地点で終わる。この時期までに出現した端折の形状は，やや大きめのものから断面三角形の小さなものまでさまざまであるが，次第に断面三角形または先端がやや丸味をおびる小さなものが定着する。天井部

の整形は，篦削り範囲周縁の稜が消滅する方向へ発展する。

つまみでは，a群の消滅とc群の増加がある。a群はB地点まで見られるが，C3号・C4号窯跡の時期には消滅する。一方，c群はC1号窯跡で出現し，C5号窯跡では大勢を占めるに至る。

第3節　木葉下遺跡の年代観

前節で検討を加えなかったが，A地点の古い部分が木葉下遺跡では最も早い時期のものである。坏蓋内面の「かえり」の有無によって，7世紀と8世紀に分けるのが一般的な見方であるが，7世紀末に生産されたものが8世紀に入ると同時にすべて消滅するということは考えられず，同時に技術的なものも何らかの形で影響を残すはずである。7世紀と8世紀の分け方は，その遺物が生産された時期を示すものであり，最後に使用された時期を示すものではない。A地点における「かえり」を有する蓋の出土は，この意味においてのみ理解され得る。製品と見られるものはほとんど無く，焼台として使用されたものと見るのが妥当であると思われる。とすれば，A地点の上限は8世紀に求めなければならない。しかも，「く」の字状の口縁を「かえり」直後に置けば，「かえり」の影響から脱する時期と見るのが妥当であると思われる。具体的には，8世紀の第1四半期の後半から第2四半期の前半と見られる。

木葉下遺跡の年代観

年　代	地点・窯跡
700	
725	・A地点の古い部分 ・B1号・B2号窯跡
750	・C3号・C4号窯跡 ・C1号窯跡
775	・C2号窯跡
800	・C5号窯跡

一方，木葉下遺跡の下限は，C5号窯跡によって求められる。この窯跡から出土する盤が，出現期またはその直後のものと見られることは，8世紀後半に時期を求められることを示している。しかし，遺物から受ける全体的な印象から言えば，この窯跡の操業は8世紀から9世紀にまたがるものと見られ，両世紀の境界線上に位置付けるのが妥当であると思われる。

以上の結果に，前節の検討結果を当てはめると，木葉下遺跡の操業年代は表のようになる。

第4節　流　　通

谷津・木葉下両地区に分布する古窯跡群から，どの地域に須恵器が供給されたのかについて考えてみよう。

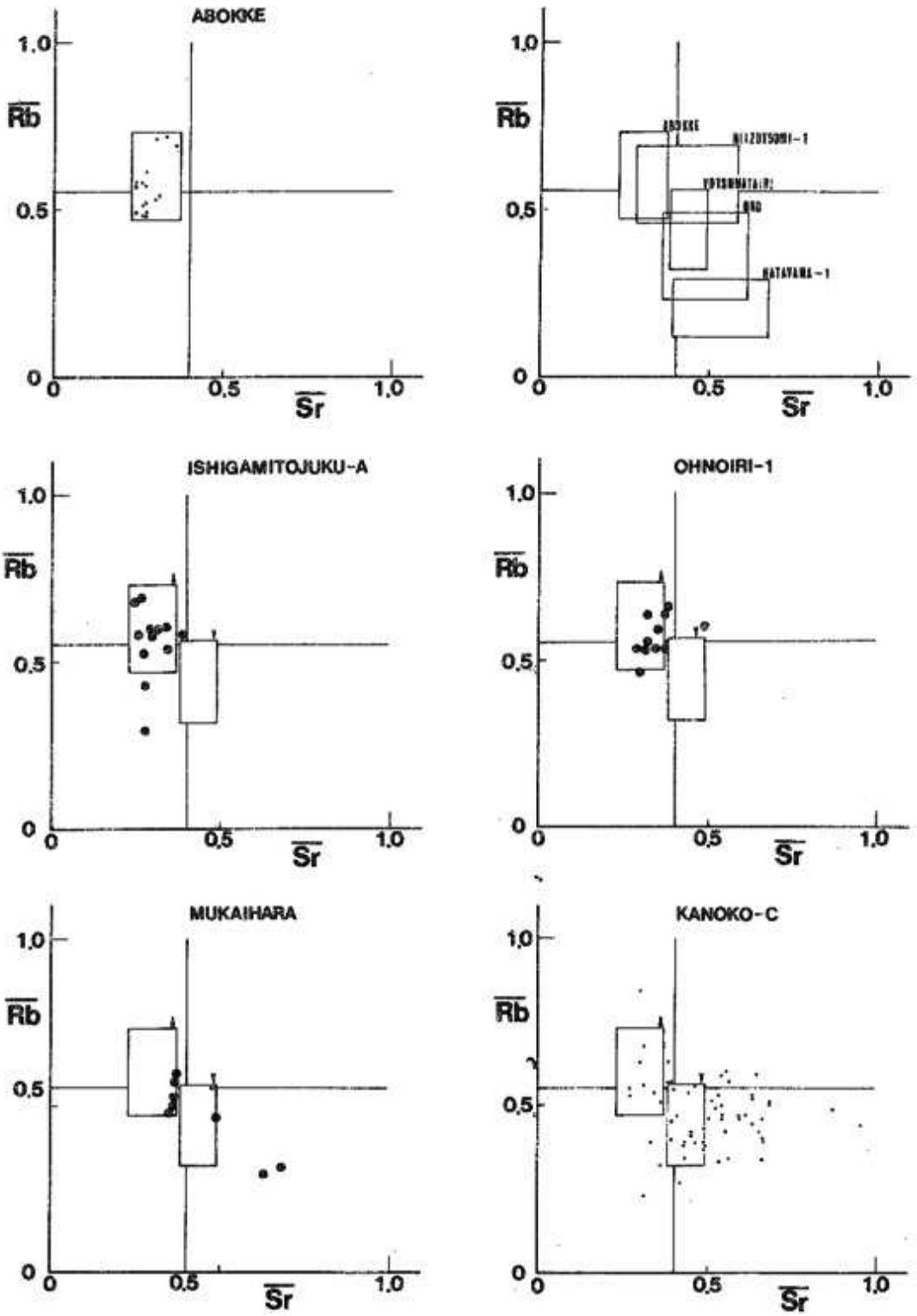
木葉下周辺の窯跡から須恵器が供給されたことが科学的に解明されている遺跡は，石神外宿A遺跡（那珂郡東海村）・大野人1号墳（水戸市）・向井原遺跡（水戸市）・鹿の子C遺跡（石岡市）がある。これは，奈良教育大学の三辻利一教授による胎土分析（蛍光X線分析）の結果判明したものである。この中で，大野人1号墳・石神外宿A遺跡では，大半が木葉下窯跡群から供給されたものであり，向井原遺跡は半分強が同様のものとされる。鹿の子C遺跡では一部のみである。なお，この分析結果は時期を考慮したものではないので，今回調査した11基の窯跡と結び付くものではない。このほかの遺跡では，台渡廃寺跡（水戸市）が考えられる。

第89図は，三辻氏による分析結果のグラフである。左上に木葉下，右上に県内5窯跡群出土須恵器のRb·Sr分布状態を領域で示してある。他の4グラフは，窯跡以外の遺跡から出土した須恵器の分析結果で，木葉下（A）と四又入（Y）のRb·Sr分布領域が同時に示されている。

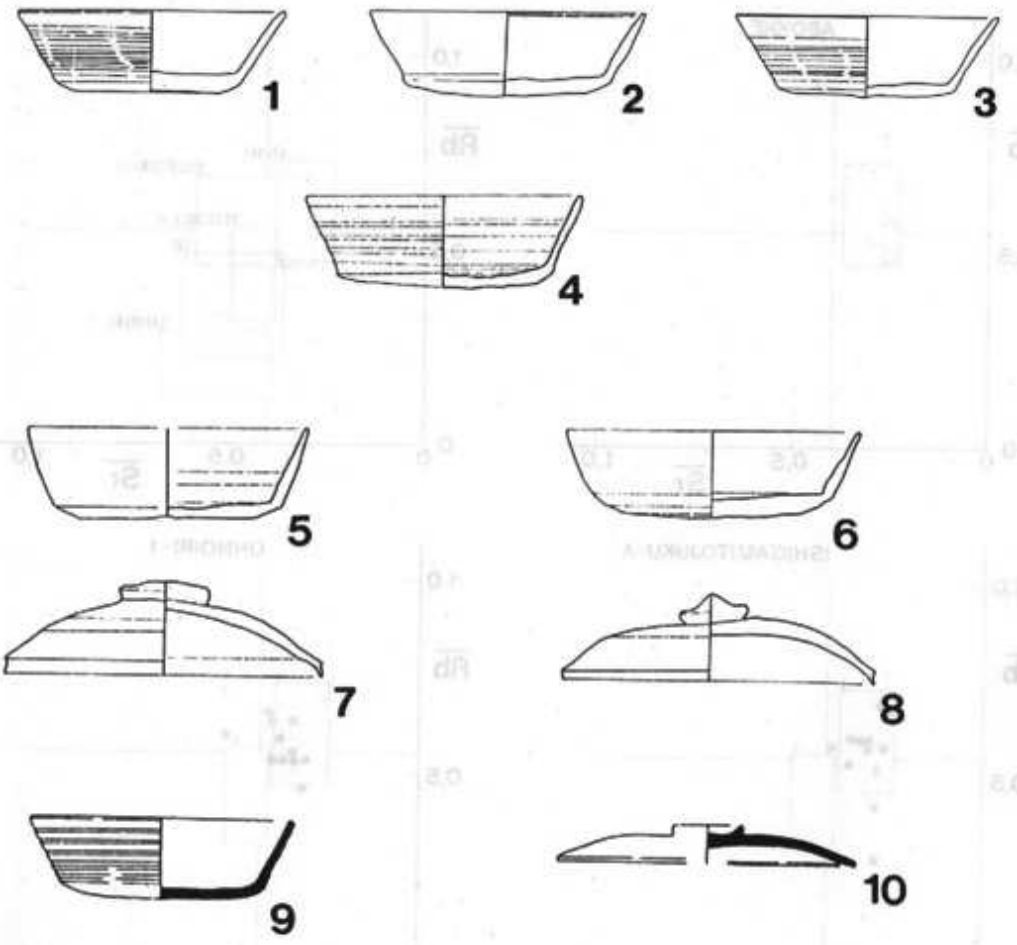
次に，今回調査した窯跡と同時期と思われる例を挙げてみよう。これは，報告書に掲載された実測図から判断したものである。各報告書から，実測図を転載する（第90図）。

- 原の寺瓦窯跡（勝田市　勝田市教育委員会　1980）（第89図－1～3）
  この3点は，C5号窯跡第1次ベース出土の坏と，細部の特徴が一致する。特に2は，第60図－2に近似する。
- 大塚新地遺跡（水戸市　茨城県教育財団　1981）（第89図－4）
  体部外面に見られる回転篦ナデBは，C3号・C4号窯跡及びC1号窯跡に見られる特徴であり，この3基の中のいずれかで焼成されたものである可能性がある。
- 松原遺跡（水戸市　茨城県教育財団　1981）（第89図－5～8）
  坏2点・蓋2点を示した。いずれも，A地点の古い部分に近似する。
- 砂川遺跡（水戸市　茨城県教育財団　1982）（第89図－9・10）
  坏蓋・坏身のいずれも，C3号・C4号窯跡の特徴を有する。おそらく，このいずれかの窯跡で生産されたものであろう。

以上に述べたすべての供給先を総合的に判断すると，木葉下周辺の窯跡群が須恵器を供給した範囲は，久慈川以南に限られ，特に水戸周辺に集中していることがわかる。鹿の子C遺跡はその性質上特殊なものと考えられるから，主たる供給先としては当時の那賀郡内及びその周辺として差



第89図　Rb－Sr分布図（三辻利一教授による）



第90図　各遺跡出土須恵器実測図

支えないと思われる。すなわち，木葉下周辺の窯跡群は，郡内に須恵器を供給するのを主な目的としたものであり，今回調査した11基の窯跡も，この枠内にあるものと判断される。しかし，当時の那賀郡と茨城郡の境界である現在の東茨城・西茨城両郡における調査・報告例がほとんど無いため，この供給範囲の確定は今後の研究の進展に待たなければならない。